～バカとテストと霊能者～

餅っち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
～バカとテストと霊能者～

【Ｎコード】
Ｎ８３７３Ｏ

【作者名】
餅っち

【あらすじ】
以前ある世界での生活を経験したオリ主がバカテスの世界にて生活しているお話でっす。
その上に主人公はチートと言えるくせに卑怯な手段や、悪辣な手法をとることに躊躇と言うものがほとんどありません。
多大な地雷要素や駄文と言える文章なので、読む際はご注意を。

1話　始まりの状況確認（前書き）

地雷、駄作要素を過分に含みます。
この分に嫌な予感がした方は、ブラウザバックでお戻りくださいませ。

1話　始まりの状況確認

第一問　以下の問いに答えなさい

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路　瑞希の答え

『問題点：マグネシウムは炎にかけると酸素と激しく反応する為危険であると言う点。

合金の例：ジュラルミン』

教師のコメント

流石です。合金なので【鉄】では駄目と言う引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っ掛かりませんでしたね。

土屋　康太の答え

『問題点：ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題ではありません。

吉井　明久の答え
『合金の例：未来合金（凄く強い！）』

教師のコメント
　凄く強いと言われても。

東城　和人の答え
『問題点：マグネシウムは即席の閃光弾の材料にも使える上に警察に追われた際の時間稼ぎにも使えるので非常に便利である。
合金の例：阿呆合金』

教師のコメント
　後で職員室に来て西村先生の前でどういうことか説明するように。

～バカとテストと霊能者～

～第１話　始まりの状況確認～

今年の春、俺【東城　和人】は文月学園の2年生となった。
この学園はかなりの特徴があり、学年が上がる際の振り分け試験の成績でクラスが選別されると言うところだろう、クラスはA～Fクラスまでありクラスごとに設備が設定されていて、Aの設備が一番良くFは最下層と言える設備を持っているのである。

まあ、俺が行くべき教室と言うのは決まったようなものであるなぜなら。

「振り分け試験の前日に、風邪をこじらせて入院してしまうなんてな、ついてないよなぁ」

そう、一番大事な試験の前に俺は風邪をこじらせて入院すると言う羽目になったのだ、体調管理も実力の内というこの学園長の基本方針により補習などもなくクラスは決定されるので、俺のクラスは自動的に最低のFクラスとなったのは、確定的なのである。

「はぁ、体調管理の不行き届きで最低クラスになったと知ったら、あの人達激怒するだろうな」

おれ自身は、この最低クラスになったことに文句などない、逆に体調管理も実力の内という学園長の言葉は頷けるものがあるし、納

得も出来る。
だけど、今はもう会えないけれど、俺の学力や色々な事鍛えてくれた人達がいたのだ。

文字通り色々な人たちで、説明するにはかなりの時間と文字数を裂かねばならないのだが、あえてここで少しだけ語れば、俺は以前に大体１３歳くらいの頃に平行世界に移動した経験があったのだ。
そこの人、文句はあるだろうが今は聞いてくれ、その世界では普通に神とか魔族とか悪霊とか悪魔とかが存在する世界で、それらを退治したりするゴーストスイーパーなんてのが国家資格として認められている世界だったんだし。
その際に学力をジークさんに鍛えられたので、俺ははっきり言って自身こそないのだが、彼曰く大学院生レベルの学力に鍛え上げた、と言っていたのだから、ちょっと半信半疑である。

無論転移したときは驚いたさ、こっちでは否定されているオカルトが完全に肯定されている世界だったんだしな、でも、最初に拾ってくれたのが唐巣神父という底抜けの善人な人でよかったと、思っているのだけれど経済的な理由で美神さんの所に移されてからは、まあ、なんというか横島さんに巻き込まれて俺も一緒にシバかれたりしたのは、勘弁して欲しかったな。
でも、楽しい1年間と言えたし様々な経験を詰めて俺自身も大きく成長できたって言う自負もある（その代わりにアシュタロスと一度真正面からのガチンコバトルなんていう、それなんてオーバーキル？　なんて出来事もあった）けど、もしもこのことをジークさんに知られたら間違いなく軍人フォームでここに突貫してくるのは間違いないな。

「あのスパルタは…　マジで勘弁」

少々虚ろな目でそう呟いた俺の姿は、傍目にも不気味だったと思うのだけれど、まあ、仕方がない。
あの厳格でハートマン軍曹ばりのジークフリード少尉による、洗脳ともいる勉強会だったんだしな。

あれだけはもう二度と経験したくないもののトップだが、美神さんからの折檻も同時にランクインしてるんだよなぁ、俺って美神さんには何もしてないし、逆に横島さんに巻き込まれた事の方が圧倒的に多かったし。
それに横島さんに巻き込まれて警察に追いかけられたり、月にまで行かされた事もあったしなぁ、今から良く考えてみると良く俺って生きてるよな？　普通だったら死んでるだろ。

そんなことを道路の片隅で体育座りをして、呟いていたのだった。

この時の姿を誰にも見られなかったのは、間違いなく僥倖といえるだろうな。

まあ、こんな精神状態から復帰した俺は学校へと足を進めていった。

そして見えてくる学び舎、旧校舎と新校舎の設備の違いが外観からも分るくらいの設備の違いの凄まじさは存在しており、俺は校門に立つ一人の教師に声を掛けられるのだった。

「遅刻だ、東城」

「おはようございます、西村先生、ちょっと寝坊してしまいまして」

「相変わらず、マイペースというかなんと言うかだな、お前は」

「あははは、すいません」

俺にドスのきいた声を掛けてきたのは西村　宗一といって、この文月学園の生活指導教師である。浅黒い肌と趣味のトライアスロンで生徒からは【鉄人】という渾名で親しまれている教師である。
まあ、普段は学力を隠して生活している俺はわざと珍回答を行って提出することがあり、その度に何かとお世話になっている先生でもある。

溜息をつきながら俺に注意をするような言葉を投げかけてくる西村先生だが、不意に懐に手を入れて俺の名前が書かれた一つの白い封筒を出してくる。

「クラスの結果が書かれた封筒ですか」

「ああ、すまないがこの学園の基本方針は」

「体調管理も実力の内、ですよね？　まあ、体調管理が出来ていなかった俺が一番悪いんですからね、結果はわかってますよ」

白い封筒を受け取った後、西村先生は少しだけすまなさそうにそう言って来るが、俺は別に気にはならなかった。
当日に体調管理が出来ていなかった自分が一番悪いんだからな、一応は封筒の中に入っている紙を取り出すと、そこにはFクラスの文字が書いてあったのだった。

「まあ、今年一年間は勉学に励み、来年に上のクラスを目指すことだな、何も問題行動を起こさずに」

「分ってますよ、それじゃあ、行きますね西村先生」

「ああ」

そういって俺は校舎の中へと歩き出し、俺の最低クラスでの生活という幕が上がるのだった。

途中でAクラスの設備の豪華さに少しだけ呆気にとられはしたものの、俺はついにFクラスに到着したが、まさか横島さんの部屋以上に劣悪な環境があるとは、と考えずにはいられなかった。
何しろ扉からして紙が剥がれようとしている障子に、壊れたEクラスのものを流用したと思えるクラス表示、更には廊下側の窓にさえビニールやセロファンと思われるようなもので補強した跡がある部分。

はっきり言おう、最初に思ったのは【何この廃屋】だったのだからな、こんなことを思っても誰も責められないと思う。
何しろ完璧に廃屋レベルといえる環境だったのだから、これで中はどれだけ悲惨なんだろう、と考えつつも俺は教室へと入る扉を開くのだった。

「すいません遅刻しました」

「ん、まだこのクラスになった奴がいたのか、とりあえずどっか適当な所に座ってくれ」

「ん、あんたは？」

「ああ、俺はこのクラスの代表の坂本　雄二だ、先生が来ないからなとりあえず前に立って先生の代わりをしていたのさ」

「そうか、ありがとよ、後、俺の名前は東城　和人だ」

「そうか、まあ、よろしく頼む」

「ああ」

俺が教室に入ったとき、その教壇の所には身長が高くいやに目つきが鋭い男が立っていた。

てっきり先生がいると思っていた俺は、少し呆気に取られていた様子を見せたのだが、俺の様子を見た彼、坂本は事情を説明して空いている席に適当に座ることを勧めてきた。

坂本が名前を言ってきたので、軽く俺も名乗り返した後、社交辞令とも呼べる言葉を交わして俺は空いている席を少しだけ探して、手っ取り早い場所に向かった。

まあとりあえず坂本の言うとおりに空いていた席に座る、その前には女子にしか見えない男子が座っており、俺は特殊な方法で人を判断しているからこいつが男だって分るが、もしも女装させたら間違いなく女に見られるだろうな、と考えていたらその前の奴から話しかけてきた。

「初めましてというべきかのう、ワシは木下　秀吉じゃ、よろしく頼む」

「こちらこそはじめまして、だな、俺の名前は東城　和人だ、よろしくな木下」

「うむ、よろしく頼むぞい」

木下　秀吉と名乗った少年から自己紹介をされた俺は、礼儀でもあるので名乗り返して、彼の方が握手を求めるように手を出してきたので、握り返して応えた。

俺と握手を交わした木下は、まさに華が咲いたと言わんばかりの笑みを浮かべるのだが、やはり外見のみを見れば、こいつは女にしか見えんな…　まあ、こんな外見でコンプレックスを持っているかもしれないし、黙っているしよう。

それから少しの間、木下と談笑していると扉が開く音が聞こえ。

「すいません、少し遅れちゃいました♪」

「早く座れ、この蛆虫野郎」

男子生徒の少し気持ちの悪い声と、坂本の罵倒が聞こえたのだっ

た。

その声が聞こえて来た所を見れば、なんと言うか黙っていて目つきもまじめな顔をすれば、かなりの整った顔立ちと言える少年と言えるのだが、なんだろうかバカと言うか横島さんに似た空気を放っていると言うか、横島さんは煩悩だがこいつはそれに加えて更に、うん、なんかバカっぽいオーラを放っていると言うか。

存在概念がバカと固定されたある意味決定的な人間と言うか、そんな感じがする。

と言うか初対面の人間を場かとかそういう風に扱うのは、失礼にもほどがあるのだが、こんな人間は始めて見たからしょうがない。

まさかこちらの世界に帰ってきてから、横島さんを超えるような人間を見る事になろうとは、きっとこいつは煩悩とかだけで色々な事をこれからやらかしていくのかね、とか考えながら、黙って坂本と話し始めたその少年を観察していたのだった。

まあ、何があろうとも俺はこいつらと関わることなんてないだろうし。

「雄二じゃないか、何やってんの？」

「先生が遅れているみたいだからな、代わりに教壇に上がってみただけさ」

「先生の変わりって、雄二が？　なんで？」

「一応このクラスの最高成績者だからな」

「ああ、そうだ」

観察するような視線を感じ取ったのか、一瞬だけ坂本が俺に対して怪訝な視線を向けてきたので、自然を装い逸らしたが予想外に坂本は切れるらしい。

まあ、今の視線で俺がどういう意図を持ってみていたなんて分らないだろうからな、だけど吉井と坂本は仲が良いようだな、基本的に相手に対して遠慮と言うものがないし信頼と言うか信用しあっている様子も見せている。

向こう側での横島さんと雪乃丞さんの関係みたいなものだろうな、などと考えていると坂本の口元がニヤリと言う表現が適切な様子で、口の端を吊り上げる。

それを聞くと吉井の顔も綻んでいた事から、こいつら何か企んでやがるな、と俺にこんな考えを抱かせた上に、霊感が嫌な予感を感じ取り警報を鳴らし始めたために、僅かに顔を顰めてしまうのであった。

「んむ？　どうしたのじゃ、東城？」

「いんや、なんでもないぞ木下、ただ単に腐った畳の座り心地と綿の入っていない座布団というコラボが、な」

「まあ確かに、あまり良い環境とはいえぬのぅ……　仕方がないことであろうが」

「まぁな」

顔を顰めた所を木下に見られたために彼が疑問を浮かべて、俺に声を掛けてくるのだがとっさに誤魔化すために、床に敷かれた腐った畳と綿がほとんど入っていない座布団のことを出していた。

溜息を付きながらも木下はその言葉に同意を示して、頷いていた。

それから少しの間談笑していた俺と木下だが、更に会話を続けようとした俺たちの耳に覇気のない声が聞こえてきた。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

その声を辿ってみると、そこには寝癖のついた髪をそのままにして、ヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、いかにもと言うか冴えない風体のオッサンがそこに立っていたのだから。

「では、席についてくださいＨＲを始めたいと思いますので」

「はい、分りました」

「うーっす」

教壇に着いた冴えないおっさんはクラス全体を見渡してそういった後、吉井と坂本は適当な席へと着席していく。

その２人が着席し、他の連中も同じ様に座ったのを確認すると、再び口を開いた。

「えー、おはようございます。私が二年Ｆ組の担任福原　慎です。よろしくお願いします」

そういって冴えないお、福原先生は自身の名前を書こうとしたのか、黒板へと向き直るのだがすぐにこちらを向いた。
ちょっと待て、チョークさえ支給されてないのか、ドンだけ劣悪なんだよ。

俺は口元が僅かに引き攣るのを感じつつも、再び口を開いた福原先生の言葉を聞いていた。

「さて皆さん、全員に卓袱台と座布団は支給されてますか？　不備があるのでしたら申し出てください」

教室に所狭しと座っている生徒を見渡して、発言している福原先生だが、こんな斬新な教室では不備がないはずはなく。すぐにあちらこちらから手が上がり始めた。

「センセー俺の座布団に綿が入ってないです！」

「あー、はい、そうですね我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の足が折れています」

「木工用ボンドが支給されていますので、休み時間にでも自分で直してください」

「センセ、窓が割れてて隙間風が入ってきて寒いです」

「分りました。後でビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

酷すぎる。

これらの会話を聞いた俺の感想だった。

それに教室を見渡せば、我が物顔で巣を張っている蜘蛛の姿にひび割れている壁は落書きもされており、無事な部分を探す方が一苦労といった有様。

その上に教室全体からかび臭い匂いがしており、床に敷き詰められている古く中には腐っている物さえある畳が一番の原因であるのは、いうまでもない状況、はっきりと口元が引き攣るのを自覚しながら堪えていた俺に追い討ちを書けるような言葉が、福原先生から放たれた。

「必要なものがあれば、極力自分たちで調達してください」

これには完全に頭を抱えて蹲りたい衝動を覚えた。あのガメツイ美神除霊事務所であっても、普通の除霊を行うのであれば道具の支

給は問題なく行われていたのに、ここでは極力自力調達とはな、だけど裏を返せば自分たちで調達したものであれば設備の入れ替えも独自に可能とも取れる言葉だな、まあ、明日辺りにでも余っている座布団でも持ってくるか。

「それでは自己紹介でも始めましょうか。そうですね、では、廊下側の人からお願いします」

そんな俺の心境など無視された形で、福原先生はＨＲを進行していく。

廊下側の前の席に座っていた者達はそつなく自己紹介を行っていき、木下も同じ様に無難な自己紹介を行っていた。

次は俺の番か、と思い立ち上がると極力目立たないようにかつ、印象に残らないように自己紹介を始めた。

「東城　和人だ、部活は何も入ってない、趣味は読書と音楽鑑賞だ、まあこれからよろしく頼む」

無難に終わらせた俺は着席して、それからも続いた自己紹介を聞き流していたのだが、そこにトンでもない言葉が聞こえてきた。

「――――――――　です。趣味は吉井　明久を殴ることです☆」

ピンポイントであり尚且つ恐ろしい趣味だな、とか考えながら恐ろしい発言をした女子を見てみれば、まあ、そこそこの美少女が其処にいて吉井の奴ににこやかに手を振っていたのだが、吉井は顔を真っ青にして体を震わせていた。
無理もないあんなことを聞かされて平然としていられるのは、横島さんくらいだろうし、まあ、平気と言うわけではなかったんだろうけど。

それからもつつがなく自己紹介は進んでいくかと思われたが、すぐにそれは裏切られることとなる。

「えーと、吉井　明久です。気軽にダーリンとでも読んでくださいね♪」

『ダァァーリィ～ン！！』

「――――　失礼、忘れてください。とにかくよろしくお願いします」

野太い男共の気持ち悪い大合唱、直接向けられた訳ではない俺も少し気持ち悪くなったと言うのに、吉井は顔を青ざめさせて座って

いた。
自業自得だろ、と俺は思いつつも、これからはこんな戯けた事が起きないことを祈っていた。
それからは何事もなく無難な自己紹介が続いて行き、いい加減に眠気を感じ始めたくらいに突然扉が開かれて、息を切らしている女子生徒が入ってきた。

「あの、遅れて、すい、ません……」

『えっ？』

彼女の姿を見た瞬間教室にいる全員から驚いたような声が上がる。
それはそうだろう俺自身も声にこそ出していなかったが、驚いていたんだしな。
彼女の姿を確認した教室が、にわかに騒がしくなる中でただ一人平然としていた福原先生が、彼女の姿を認めて声を掛ける。

「ちょうど良かったです。今自己紹介を行っているところなので、姫路さんもお願いします」

「は、はい！あ、あの、姫路　瑞希と言います、よろしくお願いします」

クラスのほぼ全員からの視線に体を縮こませるようにして自己紹介をする、少女の姿。
彼女はかなりのレベルでの美少女であり、横島さんがいれば間違いなくナンパに走るようなチチとシリにフトモモの持ち主なのだが、未だに教室が俄かに騒がしく、彼女への視線が向けられているが理由は間違いなく彼女の容姿関連ではないだろう。

「はい！質問があります！」

「あ、は、はい！な、なんですか！？」

「どうしてここに居るんですか？」

登校し自己紹介を済ませるなりいきなり自分に向けられる質問の声に、姫路は一度体をビクリと震わせて、質問してきた男子生徒の声に彼女は応える。
それから男子生徒の口から飛び出したのは、聞き様によってと言うかまんま失礼な内容なのだが、これはこのクラス全員の総意とも言うべきものであろう。

何しろ彼女の成績は上位のＴＯＰ５に位置するものであり、間違いなくＡクラスに入っていなければおかしい人間なのである。入学して最初のテストで学年二位という成績を残し、人目も引くその容

姿と相まって彼女の名前は広く校内に知れ渡っていたのだから。
この二学年に在籍する文月学園の生徒は、間違いなく彼女はＡクラスに入っており。間違っても最底辺のクラスであるここには居ないはずだ、と考えるのが普通だろうし。

「え、と……　そ、その……」

質問が向けられてからより強まった自身への視線に、姫路は緊張するように体を強張らせながらも、口を開いて答えを言っていた。

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして……」

彼女からの言葉を聞いてＦクラス中に、ああ成る程、といった納得の声や雰囲気が伝播していく。
冒頭で説明したがこの学園は体調不良で試験中に退席した場合でも、得点は０点扱いとなり、自動的に最低クラスへと振り分けられることとなるのだ。
だが、ここで彼女の言葉を聞いた連中が何かを言い始めた。

『そういえば俺も熱（の問題）が出たせいでＦクラスに』

『ああ、科学だろ？　あれ難しかったよなぁ』

『俺は弟が事故にあったって聞いて、全力を出せなくて』

『黙れ一人っ子』

『俺は前日の夜に彼女がおねだりして寝かせてくれなくてなぁ』

『今世紀一番の大嘘をありがとうよ』

どうしよう、阿呆しかいない。

俺は現通とは分っていても頭痛を堪える様にこめかみに指を当てて、これら阿呆どもの言葉を聞き流そうと努力していた。

「で、ではっ、皆さん！よろしくお願いします！！」

それからぺこりと一礼して彼女は逃げるように吉井と坂本２人の隣に着席し、残りの人間の自己紹介が再開される。

再び訪れる退屈な時間、俺は持って来ていたラノベに偽装した漫画本でも見ようかと思い出そうとした時に声が聞こえた。

「ねえ、雄二！半分は、残りの半分は！？」

吉井だった、この短時間で彼らの性格はある程度把握できたから、大体の状況は分る。大方、坂本が吉井に何かを言ってその中に吉井が疑問に思うことがあって、それに坂本が応えないとか、そんな所だろう。

だが、さして静かともいえないが、それでもある程度の静寂に包まれていた教室でこんな大声を出せばどうなるか、分かりきったことでもある。

「はいはい。そこの人達、静かにしてくださいね」

「あ、すいませ」

吉井の謝罪は最後まで言われることはなかった。何故ならば教卓を叩いて注意した福原先生だが、突如、その教卓が粗大ゴミと化したのだから。

ここまで酷いのか、と思っていると、すぐに我に返った福原先生は気まずそうに言葉を発する。

「え～……　替えを持ってきますので、少し待っていてください」

そう早口で言った後、足早に教室を後にして行った。
改めてこのクラスのあまりの酷さを思い知る結果となったな。

「う、うむぅ……」

木下の奴も苦笑いを浮かべようとして失敗しているようだ、対する俺も似たような表情をしているだろう。

だが、そんな中で坂本と吉井の二人が教室から出て行くのが見えた。
何を企んでいるのやらと言いたいが、俺に関係などないだろうし別に良いか、と、俺はこの時軽く考えていたのだった。

それから福原先生が変わりの教卓（それでもぼろなのは変わりないのだが）を持ってきてから、気を取り直して自己紹介の続きが行われる。
須川という男子が終わり、残りは坂本のみとなる。

「坂本君、君が自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

福原先生に呼ばれた後、坂本はゆっくりと立ち上がって前に出て行く。
その姿は目はタカのように細められており、全身から何か真剣な事を伝えようとするかのようなオーラが漂っていた。

「坂本君はFクラスの代表でしたよね？」

福原先生からの問いかけに鷹揚に頷く坂本だが、この際底辺クラ

スの代表というのは普通に考えれば何の自慢にもならず、逆に恥と捉えられかねないだろうが、坂本の表情にはそういった色は浮かんでおらず、普通の反応とは正反対の絶対の自信に満ち溢れていた。

どこからこんな自信が来るのやら、と、少しだけ呆れるようにして坂本を見ていたのだが、教卓についた坂本は俺達の方を振り向いた。

「Fクラス代表の坂本　雄二だ。俺のことは代表とでも坂本とでも好きなように呼んでくれ」

最底辺クラスの中で一番成績が良かったという存在、他のクラスから見れば五十歩百歩といった存在の彼は、全員が今の言葉を聞いていたのを確認した後、一度頷いて再び口を開く。

「さて、皆に一つ聞きたい」

そういって間を持たせる坂本、俺は表情にこそ出さなかったが内心で感心していた。

彼の言葉の発し方は間の取り方が上手く、利き手に言葉を聞かせる為の意識を向かせるのがかなりできるようだった。

そんな彼の言葉につられたのか、全員が坂本へとその意識を集中させていたが、彼の視線はこの教室の設備へと移っていく。
それに合わせて彼に視線を向けていた生徒たちも同様に、彼の視線の先を辿っていく。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

どうやらこの教室にある設備の全てを見渡しているようだ、
これらを順番に眺めて行った後、坂本はもう一度全員を見渡す。

「Aクラスは冷暖房完備の上に、座席はリクライニングシートらしいが――――――」

一度目を閉じて一呼吸置いてから、坂本は告げる。

「――――　不満はないか？」

『大有りじゃあっ！！』

二年Ｆ組生徒の魂の叫びであった。
まあ、かく言う俺自身も設備自体には不満があるので、先程の叫びには参加してしまった。

「だろう？　俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を持っている」

『そうだそうだ！』

『いくら学費が安いからといって、この設備はあんまりだ！改善を要求する！！』

『そもそもＡクラスだって同じ学費だろ！？　差が大きすぎる！！』

堰を切ったように溢れ出てくる不満の声、これらを坂本は静かに聴いていた。

「そうだろう、みんなの意見は尤もたるものだ、そこで」

このように不満を噴出させる級友達の反応に満足したのか、坂本は自信に満ち溢れた顔を全員に向けて、その顔に不敵とも言える笑みを浮かべて。

「これは代表としての提案だが――――――――」

あえてそこで言葉を切り、八重歯を見せた野生的な笑みを浮かべて、彼は残りの言葉を発した。

「――――　我がFクラスはAクラスに対して、試験召喚戦争を仕掛ける！！」

非常に勢いの良い声で戦争の引き金を引く言葉を言い切った代表の姿に、俺はさっきまで感じていた霊感はこれだったのか、という確信とこいつらとは間違いなく長い付き合いになる。ということが容易に考え付いてしまい、非常に暗鬱とした気分になるのであった。

向こう側でこれでもかといわんばかりに、騒がしい日常を過ごしていたから、こちら側くらい、せめて学校生活くらい平穏に過ごしたかったんだが、学費が安いという理由でここに入ったのが、そもそもの運の尽きかもしれないなぁ。

溜息をついてこのまま帰ってから、不貞寝したい衝動に駆られつつも、俺はこの場に留まり話を聞く体勢に入るのであった。

1話　始まりの状況確認（後書き）

～あとがき～

とりあえず第1話です。

私はこの一人称でＳＳを書くのが始めてですので、色々とおかしい表現とかがあるかと思いますが、もしもあれば突っ込んでくださいませ。

あと、この作品はクロスＳＳものであり、主人公がかつて過ごしていたアノ世界の住人たちも後半部で極一部ではありますが、登場予定です。

我ながら盛大な地雷ＳＳを書いてしまったなぁ、とか考えながらも彼がアノ世界で過ごしてきた経験を生かして、試験召喚戦争をどう戦っていくのか、それを楽しみにしていただけたら幸いです。

後、向こう側は話の流れがほとんどまったくといってよいくらいに変わっていません、重要なところでは早々に彼は退場したり誘き出されたりしていたので、ごく一部の部分を除いて主人公たちと一緒にいながら関わっていない、という器用な状況を作り出していますので。

では今回はこの辺で、このような地雷ＳＳに付き合っていただき、ありがとうございます。

2話　危機回避の昼休み

第二問　以下の意味を持つ諺を答えなさい

『（1）得意なことでも失敗してしまうこと』
『（2）悪いことがあった上に、更に悪いことが重なること』

姫路　瑞希の答え
『（1）弘法も筆の誤り』
『（2）泣きっ面に蜂』

教師のコメント
　正解です。他にも（1）ならば『河童の川流れ』や『サルも木から落ちる』、（2）であれば『弱り目に祟り目』、『踏んだり蹴ったり』などがありますね。

土屋　康太の答え
『（1）弘法の川流れ』

教師のコメント
　シュールな光景ですね。

吉井　明久の答え
『（2）泣きっ面蹴ったり』

教師のコメント
君は鬼ですか。

東城　和人の答え
『（1）河童を川に突き落とす』
『（2）泣きっ面に美神　令子』

教師のコメント
（1）ですが君は吉井君と同レベルの鬼ですか？　後、（2）については個人的な私怨が混じっているようですが、君はこの女性に何かされたのですか？

～バカとテストと霊能者～
～第２話　危機回避の昼休み～

坂本が放った言葉はすぐさま教室全体を駆け巡っていった。

Aクラスへの宣戦布告と試験召喚戦争への参加、それだけこの話題が現実味に乏しく、更には勝ち目のない戦争である。

無論のこと教室のあちらこちらから、悲鳴に似た声が上がる。

『勝てるわけがない！』

『これ以上設備が落ちるなんて嫌だ』

『姫路さんさえいてくれれば、何もいらない！』

若干おかしいのが混じっていたが、クラス全体の雰囲気はこの種

の声に包まれていた。

それもそうだろう、それだけＡクラスとＦクラスの戦力差というのは、絶望的な開きがあるのだから。

文月学園は試験召喚戦争のほかに、もう一つ特徴的なテストの方法を導入している。

それは点数制限のないテストの存在である。これは制限時間内であれば本人の学力に応じて多量の点数の取得を可能としており、試験召喚戦争と言うものがあるこの学園にはお誂え向きといえるテストなのだ、召喚獣自体がこのテスト結果そのものに左右される為に学力が高ければ高いほど、低ければ低いほどその力は如実に現れる。

無論のこと成績優秀者しかいないＡクラスが相手となる為に、Ｆクラス程度では４人がかりで挑んでもＡクラスの生徒１人に敗れ去るということが容易に考えられるのだ、このことを一番理解しているのは俺達生徒でもあり、最低クラスにいる連中は肌で知っているのだから。

相変わらず悲鳴に似た声が聞こえる中、坂本の声が響く。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が必ず勝利へと導いてやる」

坂本のよく通る声で放たれたそれは、クラスの中を通っていく、最初この言葉を聞いた連中は静かになるのだが、すぐさま騒がしくなる。

当然だ、圧倒的な戦力差を知りながら、そう宣言したのだから。

『何を馬鹿な事を』

『出来るわけがないだろう』

『勝てる根拠はあるのかよ』

『姫路さん、愛してるぅ』

また若干おかしいのが混じっていたが、再び生徒たちの間から否定的な意見が次々と飛び出してくる。

当然だ、どう考えた所で勝てるような勝負ではなく、負ける事は確実としかいえない戦いを強いられるかもしれないのだから。

「根拠ならあるさ、このクラスには試験召喚戦争でAクラスに勝てる要素が揃っている」

はっきりと自信を持って言い切った坂本の言葉、この言葉を聞いたクラスの連中は更にざわめく。

当然だ、最低のクラスが最高のクラスに勝てる要素がある？　こんなことを聞いても普通は冗談にしか聞こえないだろうしな。

生徒たちのざわめきを無視して坂本は、更に言葉を重ねた

「それを今から説明してやる」

再びその顔に不敵な笑みを浮かべて、壇上から教室の床に座る全員を見下ろす坂本。

だが、そんな俺の視界には先程から、床に顔を押し付けて何かを覗いている阿呆の姿が映っていたのだが、無視することに決めた。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いていないで前に来い」

「……　！！（ブンブンブン）」

「は、はわ！！」

あれは確か、土屋だったか？　そいつに坂本は呼びかけるのだが、その言葉の内容もトンでもないものであるのは言うまでもなかった。

まさかとは思ったが、本当にスカートを覗いていたとは、ただし己自身がやっていたことを認めずに否定という時点で、横島さんとは仲良くはなれないだろうな、とぼんやりと考えていた。あの人は

自分のやったことは正々堂々と認めて、周囲の女性たちから折檻を受けるような人だったし。

そんな己自身の下心を必死で否定していた土屋は、自身がスカートを覗いていたという証拠を手で隠しながら、教壇へと到着すると坂本は口を開いた。

「土屋　康太。こいつがアノ有名な寡黙なる性識者（ムッツリーニ）だ」

「……！！（ブンブン）」

ほう、奴がアノ有名なムッツリーニかやっと見つけたぞ、近い内に奴が経営している【ムッツリ商会】に接触するか、こちらに帰ってくるときに美神さんの所で金塊とか宝石とか精霊石とか除霊道具とかの一式というか、それらを大量にパクって来たからな。

美神さんは俺をシバくという執念でこっちに来るかもしれないから、その時が来たら横島さんを買収できる為のカードを用意できる協力な奴だ。接触し良き友人関係と顧客としての関係を築くのは必須だな。

だがやはり俺でさえも知っていたムッツリーニの名は、今ここにいる男子たちの間に畏敬の念を齎すと同時に、漏れ出てくる声も彼らの心の内を表したものでもあった。

『ムッツリーニ、だと……？』

『バカな、奴がそうだというのか……？』

『だが、見ろよ、あの覗きの明確な証拠を隠そうとしているぞ……』

『ああ、ムッツリの名に相応しい勇姿だ……』

正直に言おう明確な証拠である畳の跡を隠そうとしている彼の姿からは、間抜けな雰囲気しか伝わってこないということを。

最後まで例え人にはバレバレであろうとも下心は隠し続ける。それが奴、ムッツリーニという一人の漢の生き様というわけか。異名は伊達や酔狂で名乗っているのではなく、信念を持って名乗っているというわけか。

気に入ったよ、ムッツリーニ是非ともお前とは協力関係を築きたいものだ。

「???」

だが、姫路が何も分っていなさそうなのはちょっとあれだな、こいつ成績は良いが天然なのか？　まあ、どっちにしても俺が気にすることじゃないな。

「姫路のことは説明しなくとも良いだろう、皆その力のことは知っているだろうしな」

「え？　わ、私ですか！？」

「ああ、うちの主戦力の一人だ、期待している」

確かに実際の戦闘状態に入れば、彼女は最有力の主力だな、その力も説明するまでもないくらいに強力なものだ。

だが坂本、今一瞬だが俺に対して意味ありげな視線を向けたが、今のはどういう意味だ？　お前はまさか俺の本来の学力を知っているのか？　まさかな。

『そうだ、俺たちには姫路さんがいるんだったな！』

『彼女がいれば怖いものは何もない』

『ああ、彼女ならばＡクラスとも互角に戦える』

『姫路さんさえいてくれたら、ここも天国だ！』

また変なのが混じっていたが、このクラスじゃこんなことを気に

してたら身が持たんな。
これらの言葉を聞いた坂本は更に、俺の前に座る木下へと視線を映し。

「木下　秀吉だっている」

そう俺は話す前から話だけは聞いていた、演劇部のホープとも呼ばれるこいつの事を、だが木下は成績では、まあ、残念！（かなり古いか？）といえるような奴だったはずだが、坂本に秘策でもあるのかね。
まあ、こいつの事を聞いたクラスの連中からも声が出て来るんだがな。

『おお……！』

『あいつ確か木下　優子の……』

「当然だが俺も全力を尽くす！」

『坂本って、なんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本の奴は小学生の頃は、神童とかよばれてなかったか？』

『じゃあ、振り分け試験のときは姫路さんと同じく体調不良だった

のか』

『ということはAクラスレベルが2人もいるってことかよ！！』

士気は鰻上りとも言うべきくらいに上がっており、既に最高潮といえる状態となっている。

だが、そんな坂本から水をさすような言葉が発せられるのは、俺も予想できなかった。

「それに……　吉井　明久だっている」

空気が、凍った。

そういえるくらいに痛々しい沈黙が教室内に充満していく。

あいつって凄い奴なのかね、と俺は考えながらクラスの連中の再起動を待つのであった。

それから数秒ほど経ったときに、クラスの連中は再起動を始める。

「ちょっと雄二！僕はオチ扱い！？　それにどうしてそこで僕の名前を出すのさ！！こうなるって事は簡単に予想出来たでしょ！？」

『誰だ？　吉井　明久って』

『シラネ、どっかのバカの名前じゃね』

「ほら、せっかく最高潮になっていた士気に翳りが見え始めたって言うかそこぉ！！僕のことを知ってて発言しただろう！？」

良い具合にオチ要員となった吉井、坂本も良い性格をしているな。使えねぇ奴と言わんばかりに吉井を睨んでいるが、まあ１００％弄

くって楽しんでいるだけだろ？　お前。
目の前で始まった愉快な寸劇に口元が笑み歪むのが抑えられない、いや、大声で笑い出さない俺の精神力が評価されても良いくらいだな、こりゃ。

「こいつのことをみんなが知らないのは無理もない、こいつは【観察処分者】だからな」

「観察処分者って、バカの代名詞じゃなかったか？　坂本」

「ってそこぉ！！東城君！聞こえてるって言うか、雄二にそんな質問を投げかける前に初対面の僕に対して失礼だと思わないのかぃ！？」

「全然」

「そうだ、バカの代名詞だが、東城お前も良い性格してるな」

「肯定するなぁ！！バカ雄二ぃ！」

「褒めるなよ、坂本」

「そっちもだ！！東城君！！

俺はクラスメイトAとしてこっそりと言ったつもりだったが、はっきりと吉井の奴がこっちを向いて言い返してきた。

まあ、吉井の言葉を聞いても良心が揺らぐというか、こいつ自身が纏っているオーラというか、霊力の質自体がバカを現しているので、吉井に対する暴言など全然、気にもならなかったが坂本は俺を見ながら、ニヤリとした笑みを浮かべていたので俺もそれに同じ笑みで応えていた。

どうやら坂本とも気が合いそうだ。

とは言えども去年噂にだけは聞いた観察処分者か、確か学校内で一番バカなことをしでかした生徒に付けられる処分であり。

召喚獣を使った雑用を教師から任命されるというものだったな、確か物理干渉能力の能力が与えられる代わりに、召喚獣の受けたダメージや疲労といったフィードバックがあったはずだ。

なんだよ……　使えねえ能力だよなぁ、おいそれと召喚もできないし。

どうやら姫路は知らなかったようで、坂本へと質問しているのを横目で見ながら。

俺は観察処分者について知ったクラスメイトたちの言葉を聞いていた。

『おいおい【観察処分者】って事は、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ？』

『だよな。ということは戦闘時に軽々しく召喚が出来ない奴が一人いるってことになるぞ？』

ということになる。召喚獣が受けたダメージは召喚者本人のダメージとして還元され、倒されでもしたら目も当てられない状況になるってことだ。

もう既に士気は最底辺に近いのだが、坂本は更に追い討ちを掛けていた。

「気にするな、いてもいなくても同じ雑魚だしな」

「って雄二ぃ！！そこは僕のフォローをすべきところだろう！？」

「皆、もう一つ聞いてくれ！このクラスにはもう一人Ａクラスに匹敵する奴がいる」

「ってええ！そんな人がいるの？　雄二」

坂本に食い下がる吉井とそんな吉井を軽くいなす坂本、対照的な彼らの姿なのだが、坂本が言った言葉に今までの怒りを忘れて問いかけを行う吉井の姿に、俺は流石にこいつの頭を疑ってしまった。

いや、話題を転換されて即効で怒りを忘れるって、お前自分でバカと主張したようなものだぞ。そう大声で言いたい衝動を抑えながら俺は坂本の言葉を待った。

「それはお前だ、東城」

「坂本、どうして俺をAクラスレベルだと判断しているんだ？」

「お前こそ、何時まで隠しているつもりだ？　それにんな反応を示した時点で自分で言ったようなもんだろ」

「ちょ、ちょっと東城、落ち着きなって、坂本も東城をなに煽ってんのよ！」

これ以上ないくらいに静かになった教室、無理もないな。俺と坂本が全力で殺気というか怒気の飛ばし合いを行っているんだ。

この教室は今一般人にとってはかなり居心地の悪い空間になっているに違いない、こんな俺たちを泡を食ったように島田（だったっけ？）が制止しようとするが俺たちは聞こえちゃいない様子で、飛ばし合いを行っている。

「フン、去年の一学期中間テストの結果を俺が知らないとでも思ったか？」

「チッ、やっぱり気づいてやがったか、今日会ったばかりだが理論でいろいろを話す言葉を組み立てるお前のことだ、俺がどうして学力を隠している、なんて結論に至ったのかを説明してくれるんだろうな？」

ここでようやく俺と坂本は殺気と怒気といえるような重圧を同時に消していた。
周囲のクラスメイトたちはあからさまに安堵の表情を浮かべていたが、知ったことじゃないな。

そう俺は去年の一学期中間テストで誤って学年1位という順位を取ってしまったのだ、中間点くらいの順位で目立たぬように学園生活を満喫しよう、などと考えていた俺の唯一の汚点とも言える出来事だ。
それから後は無難な順位を維持していたのだが、こいつは間違いなく。

「ああ説明するとも、お前は1位を取ったあのテストから、ずっと総合点で１６００点をきっちりと維持していたからな、いいヒントだったよ……　お前さ肝心な時にうっかりを連発する、とか言われたことはないか？」

「ぐ……」

しまった、とか、俺の阿呆！とか、言いたいことは一杯あるのだが、今の俺はやるせなさに包まれていた。
何しろ自分で坂本の奴にヒントを与えていた、と気が付かされたのだから。

と、そんな俺の耳にクラスの連中の声が聞こえてくる。

『おいおい、去年の一学期中間でＡクラスの霧島を下したのは東城なのかよ！』

『マジかよ！ってことはこのクラスにはＡクラス代表を倒せる奴がいるってことじゃないか！？』

『やべぇぞ、こりゃマジで勝てるぞ！！』

クソッ！好き勝手言いやがって、と考える俺の心境を無視して坂本は悪どい笑みを浮かべていた。

「さて俺たちの最大の主力の確認は済んだ！！皆、この境遇は大いに不満だろう！！」

『当然だ！！』

「ならば全員筆を取れ！出陣の準備だ！！」

『おおーー！！』

「俺たちに必要なのは卓袱台なんぞではない！Ａクラスのシステム

デスクだ！！」

『うおおおおーーーーー！！』

「お、おー……」

坂本の野郎！俺を無視して進めやがった！！畜生、俺は目立たずに、この学校を卒業して中堅どころの企業に就職した後、この霊能力を駆使した副業で小銭を稼ぎながらのんびりと生きるっていう計画があるというのに！！まあ良いさ、坂本がせっかく鬱憤晴らしで切る状況を作ってくれたんだ、利用しない手はないよなぁ。

気が変わったよ坂本、俺も本気で行かせて貰うがお前への復讐もきっちりと果たさせてもらうぜ、元とは言えども俺も美神除霊事務所の一員だった男だ、あそこの流儀、思い知れ！

そんなことを吉井と坂本がバカなやり取りをしている横で俺は考えているのだった。

「騙されたぁ！！」

そういって見るからにボロボロな姿で戻ってきたのは、吉井だった。

どうやら早速戦争を仕掛けるクラスへと宣戦布告を行ってきたらしいな。

まあ俺には関係ないから適当な場所で昼飯にするかね、と俺は考えて自作の弁当を手に教室を出ようとする俺の肩に何者かの手が掛けられる。

「これから試召戦争でのミーティングだ、お前にも参加してもらうぜ、東城」

「わぁったよ、その手を離せ、坂本」

「分れば良いさ、おい明久、それに康太たちも行くぞ！」

坂本に先導されるように、俺たちは屋上へと歩いていった。
それまで少々薄暗いとも言えた旧校舎であった為に、太陽の光のまぶしさに姫路のスカートを凝視しているムッツリーニ以外が目を細めている。

まずは坂本がフェンス前の段差に腰を下ろしたのを手始めに、各々が好きな場所に適当に腰掛けると、話は始まった。

「明久、Ｄクラスへの宣戦布告はしてきたな？」

「一応、今日の午後に開戦予定だって伝えてきたけど」

「それじゃ、先にお昼ご飯ってところね？」

「ああ」

腰を下ろした後、吉井と坂本は開戦予定について話ており、それに島田が昼飯のことを持ち出してきたので、各々が弁当やパンといった昼飯を出し始める。

「それとだ、明久、今日くらいはまともな昼飯を用意したんだろうな？」

「そういうこと言うんならさ、パンくらいはおごってほしいんだけど……」

「え？　吉井君、お昼ご飯を食べない人なんですか？」

呆れているような坂本の言葉に返した吉井に俺は疑問を持つのだが、先に姫路によって吉井へと質問が行われていた。

まあ、どんな状況でも横島さんみたいな状況じゃないだろうとタカを括っていた俺は、ここから放たれた言葉に文字通り度肝を抜かれることになる。

「いや。一応は食べてるよ」

「お前のあれは食べているといえるのか？」

先程俺を煽っていたときとは違い、哀れみすら含まれた坂本の声、それは俺に疑問を抱かせるのには十分であった。

ここにきて俺はまだわかっていなかったのだ、吉井　明久という人間のバカさ加減を。

「お前の主食って、水と塩だけだろう」
「ハァっ！！？　それって本当かよ！坂本」
「本当だ」
「２人とも失礼だよ、僕は砂糖だって食べてるさ！！」

俺はこの時本当に眩暈に襲われた、まさか本当にこんな食生活をしている奴が居るとは、思いもよらなかったからだ。

「あの、吉井くん、それは食べてるって言いませんよ？」
「舐めるが表現としては、正解じゃろうな」

まあ、優しい目をした木下と姫路の言葉にも吉井は応えた様子はないんだが、つい言葉が出て来てしまう。

「おいおい、吉井……　お前の食生活って、前バイトしていた所にいた時給２５５円の一人暮らしの高校生の先輩よりも酷いじゃないか？　あの人でもまだまともな物を食べてたぞ？」

「いや、ちょっと待て！！時給２５５円ってなんだ！？　そっちの方が俺としては驚きだぞ！！」

「ふ、普通に労働基準法違反じゃぞ！？」

「そ、そうですよ！流石にそれは」

俺の言葉に吉井の食生活の印象は吹き飛ばされたのか、慌てて詰め寄ってくる坂本に、木下と姫路だが、実際にいたんだよ。

「居たぞ、オーナーがどうしてそんな条件で雇った詳しい経緯は知らんけど、お前以上にしっかりとした生活はしてたよな、光熱費関連は支払いがたまには漏れることがあっても基本きっちり払ってたし、その上できっちりと食費まで計算してから趣味に金を使ってたからな」

「……」

「明久の完敗じゃの」

「ああ、んな薄給でどうやって生活出来てたのかは分らんが、間違いなく明久の完敗だ」

ぶっちゃけると横島さんのことだが、今考えてもどうやって生活していたのか、俺も謎だと考えてしまう。というか、あの世界で俺知り合った男性たちは一人を除いて、何で生活出来ていたのかが分らん。

唐巣先生も儲けがないのに協会を維持出来ていたし、雪乃丞さんもいつ稼いでいるのかすら分らんし。ピートさんも唐巣先生と同じ理由だしなぁ、本当にあの人達どうやって生活していたんだろうな。

ぐうの音も出ない吉井にフォローする気もない坂本に木下、流石に島田と姫路も苦笑いを浮かべており、フォローしようにも出来ないようである。

唯一ムッツリーニだけは分らんが。

「まあ、お前の場合は仕送りは十分でも、それを趣味に全て使い込んでいるんだろう？　バカの印だぞ」

「で、でも、その人だって両親からの仕送りが十分だったんじゃないの？」

「阿呆、あの人は両親とは仲がよかったけどな、本人が両親の方針に反対して仕送りを千円にされたんだよ、だから命綱は時給２５５円の給料分だけだったのさ」

「なるほどな東城、というか明久、お前もその先輩を見習え、そんな状態で生活出来ていた方だ、実際に話を聞いて倹約のコツとか聞いてみたいな」

「そうじゃのう、将来一人暮らしの際に役に立つじゃろうて」

「うん、私も聞いてみたいわね」

「す、凄い人ですね」

どうやら坂本の中で横島さんは尊敬に値する人物と見られたようだ、それに姫路や島田に木下達も坂本と同様のようだな、だけど本人を見れば幻滅すること請け合いだな、全員の予想を斜め下にぶっちぎるだろうし。あの人は。

まあ、面倒だから言わんし本人とも世界自体が違うから会えるわけないがね、まあちょっと真実を混ぜた嘘をついておくか。

「まあ、俺自身そこを辞めたのが数年前だからな、それに辞めて連絡を取ってないからどこに就職したかは知らん、聞いた話だと海外とかどっか遠い所に行ったとか聞いたな」

「そうか、それは残念と言った所かね」

「うむ」

俺の言葉にあからさまに残念そうな顔をしているのは木下と坂本だった、本気であの人に会いたいと思ったのかよお前ら、知らないって幸せだな。

と考えながらも、俺は弁当をかき込むのだった。

だが、和やかに進むと思われた昼食の時間は、とある一人の少女の言葉で終わるのだった。

「あの、吉井君、もしも良かったら私がお弁当を作ってきましょうか？」

「ゑ？」

横島さんのことを聞いて如何に自分がバカであるか、生活無能力

者であるのかを俺と姫路以外から更に駄目だしされて、本気で落ち込んでいた吉井に姫路がそんな言葉を掛けていた。
というか、吉井よお前は予想外のことがあると脳に変調をきたすのか？　今も言語回路が変になってたみたいだし。

「ほ、本当に良いの？　塩と砂糖以外のものを食べるなんて久しぶりだよ！」

「明久……」

「お主と言う奴は……」

「吉井……」

さっきの話を聞いた後、姫路の話を聞き渡りに船といわんばかりに飛びついた吉井の反応には、坂本と木下に島田も呆れを隠せないようだ。
まあ、確かに呆れを隠せないだろうな、自分以上に劣悪な環境でまともに生活出来ていた人を知っていながら、それを改めずに姫路の優しさに縋ろうというのだからな。

それが吉井の良い所なのかもしれないけどな、大方、吉井の家族も横島さんと同じ様にまともに生活で来ていなかったら、雷が落ちるのは言うまでもないことだろうし、いずれは落ちるそれを楽しみにさせてもらうとしようかね。

「はい。明日のお昼でよろしければ、ですけど」
「全然構わないよ！！やったぁ！楽しみだなぁ！」

無邪気に喜ぶ吉井と、それを見て微笑む姫路の姿は完全に二人の世界に入り込んでいるようであった。
姫路はやっぱり吉井に思いを寄せているのか、んで、吉井は鈍いから気がついていない、と。

向こうでの横島さんと彼に思いを寄せていた女性たちを見ているようだなぁ、なんて俺はのんきに見ていたが、不意に島田が棘のある一言を吉井に対して言っていた。

「……ふーん。瑞希って優しいのね、吉井だけにお弁当を作ってくるなんて」
「あ、いえ！そ、その皆さんにも作ってきますよ！！」
「っ！？」

この言葉を聞いた瞬間、俺の背筋にこれまでにない悪寒が走った！！なんだ！これは！あの時、美神さんがやられた時よりも激しい

ぞ！？　ま、まさか姫路は殺人シェフなのか！？　くっ、まずは俺の安全だけは確実に確保せねば。

そう俺は考えて、他の連中が肯定といえる言葉を言う中で言葉を発する。

「姫路、ここにいる全員に作って来ると言っていたが、俺は明日も自分の分は自分で用意するからな、別に俺の分は用意しなくて大丈夫だ」

「な、何を言っているのさ！東城君！美少女の手作りお弁当だよ！喜ばなきゃ男じゃないよ！？」

「そ、そうですよ！遠慮しなくて大丈夫です、一人分も大勢作るのも一緒ですから、大した手間じゃありません」

よ、吉井に姫路ぃ！貴様ら！だがここで負けてはならない！！負ければ俺は死ぬ！

「あーと姫路、厚意はありがたいんだけどな、俺、料理を習った師匠がいてその人から、自分の分の料理は全て自分で作りなさい、一食でも作らなかったらその分腕が落ちるから絶対に三食作るように！との言いつけがあるんだ、だから、本当にありがたいけど俺の分は大丈夫だから、ごめんな」

「そういう事情があったんですね、分かりました、そういったことでしたら大丈夫です」

「ああ、すまない」

ここまで来てようやく悪寒が治まったことから、俺の危機は脱したのだろうが、それでも軽い悪寒はする間違いない、明日、この場所で誰かが犠牲となるのは確実だな。

ただ本当に姫路が殺人料理人だということだけは、確認しないとまずいな、今回は回避できたが次回から回避できるとは思えん。

「姫路」

「はい、なんでしょうか？　東城君」

「酢の物を作るときに、使う調味料を答えてくれ」

「え、どうし「いいから」は、はい」

俺の問いかけに姫路だけではなく、全員が疑問符を浮かべているが、俺は気にすることはなく姫路に対して強引に問いかけに答えるように言っていた。

彼女からの返答は俺の予想をぶっちぎった、トンでもないモノだ

った。

「酢酸とアンモニアです！」

「「「「「「……」」」」」」

空気が完全に凍り付き罅が入った、そうとしか思えない空間となりいち早く復活した坂本と、吉井が目で問いかけてくる。

『『貴様、まさか知っていたのか！？』』

『知らんというか、嫌な予感がしただけだ！！』

他の連中は復活できておらず姫路が疑問符を浮かべる中、俺と坂本達は今日会ったばかりだと言うのに、アイコンタクトを習得するという貴重な体験をするのであった。

明日は必ず逃げ切ってやる！俺は密かにそんな誓いを立てるのであった。

2話　危機回避の昼休み（後書き）

まさかの瑞希必殺料理人オリ主回避フラグ、だけど逃げられないという罠が待ち受けるのは織り込み済みです。

今回で、試召戦争の本当の直前まで行くつもりだったのですが、ここで切った方がよいと判断し、こうなりました。

まあ、次回でDクラスを責める際の作戦とかの事が出てきますし、試召戦争に突入します。

主人公がどんな活躍をするのか、雄二に対して用意している復讐とはどんなものなのか、これらを楽しみにお待ちくださいませ。

では今回はこの辺で。

3話　試召戦争開戦と終戦

第三問　以下の英文を訳しなさい

［Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｂｏｏｋｓｈｅｌｆ　ｔｈａｔ　ｍｙ　ｇｒａｎｄｍｏｔｈｅｒ　ｈａｄ　ｕｓｅｄ　ｒｅｇｕｌａｒｌｙ．］

姫路　瑞希の答え

［これは私の祖母が愛用していた本棚です。］

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋　康太の答え

［これは　　］

教師のコメント

訳せたのは　Ｔｈｉｓ　だけですか。

吉井　明久の答え

［☆●◆▽Γ♪※×］

教師のコメント
　出来れば地球上の言語で。

東城　和人の答え
［これは本棚に宿っている付喪神と、それと親しい祖母です］

教師のコメント
　問題の英文を無視して、勝手に変な文章を作らないように。

～バカとテストと霊能者～
～第３話　試召戦争開戦と終戦～

先程の姫路の必殺料理人暴露によって凍りついた屋上だが、一度坂本が大きく咳払いをして空気を変える。

「とりあえず、話が大きく、そう、大き過ぎるくらいに逸れたが、試召戦争の話題に戻るとしよう」

この坂本の言葉を聞いた他の連中も、ようやく現世への復帰を果たしたようである。

全員先程の姫路の言葉のショックから立ち直れてはいないようであるが、とりあえず問題を先送りにして置こうという意思が全員の間に垣間見える。

「そうじゃったの、雄二。それと気になっていたんじゃが、どうしてDクラスを攻めるのじゃ？　段階を踏むというならEクラスじゃろうし、勝負に出るというのならAクラスじゃろう？」

へえ、坂本の奴はDクラスに対して宣戦布告をするように指示したのか、まあ常識的に考えれば木下の言う通りで間違いはない。
それがあくまで俺達が通常のFクラスの常識で考えるということならばな。

「そういえば、そうですよね」

「まあな。当然考えがあってのことだ」

そう今俺たちがいるこのFクラスは通常のFクラスではない、そこを考えれば簡単に考えは出てくる。

「どんな考えですか？」

「とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単なものだ、戦うまでもない相手だしな」

「え、でも僕たちよりはクラスも点数も上だよ？」

まあ、吉井や姫路達の反応が妥当な戦といったところか、確かに振り分け試験の時には連中はＦクラスの連中よりは良い点を取っていただろうが。

「確かに点数自体は上だが、まあ、今のＦクラスが保有する戦力は通常のものじゃないからな坂本、お前はそこを基点に考えて攻めるクラスを考えたんだろう？」

「やっぱ東城は見抜いていたか、ああそうだ去年までのＦクラスの戦力では、試召戦争さえやるのもふざけているとしか思われない状態だが、現在のＦクラスの戦力は明らかに違う。明久オマエの周りにいる連中を見てみろ」

「えーっと……」

俺が坂本の考えを一発で見抜いたこと自体に奴は驚きを示すことはなく、逆にこれくらい気付いていなければお前は期待外れだ、と言わんばかりの態度だった。

坂本の掌の上で踊らされたようで癪な気分にもなるが、まあ良いさ。

吉井の奴が坂本の言葉を聞いた後、全員の顔をゆっくりと見渡し

ていき、再び坂本へと視線を移した。

「美少女2人と馬鹿が2人と嫌味なイケメンが1人とムッツリが1人いるね」

「誰が美少女だと！？」

「ええ！？　雄二が美少女に反応するの！？」

「……　（ポッ）」

「ムッツリーニまで！？」

どうしよう、こいつらバカだ！まあ、吉井の言葉が少し意表を付かれたと言うのがあるんだがな、それに悪乗りするってどうよ？
俺は突っ込む気すらうせてしまっていたんだが、それと吉井、嫌味なイケメンって俺のことか？　だったら後でカクゴシテオケヨ？
正直に言ってくれたお礼をするからな。

「ッ！？」

「まあまあ落ち着くのじゃ、代表にムッツリーニよ、んむ？　明久？　どうしたのじゃ？」

「い、いや、なんでもないよ！？　秀吉！」

どうやら俺の思惑に気づいたと言うか本能で察したらしいな、だが、後できちんとしてやるから楽しみに待ってろ。

突っ込む気が失せていた俺の代わりに、木下がこの場をまとめて正常な話題へと修正しようとしていた。ふむ、やはり木下の奴が良心と言う意味でのストッパーなようだ。

苦労しているんだろうな。

「そ、そうだな」

「と言うか僕は話題を元に戻す前に、どうして美少女に2人が反応したのか聞きたいんだけど？」

「ま、ようするにだな」

コホンという咳払いの後の説明する坂本、吉井の奴は華麗に無視か。

「姫路がなにも問題がなく、東城を本気の状態で引っ張り出せた今、例え真正面から挑んでも余裕でＥクラスになんぞ勝てるんだよ、Ａ

クラスが目標となる以上はEクラスと戦ったとしても、時間と点数を悪戯に浪費するだけで意味のないことなのさ」

「？　それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

「厳しいとまではいかんが、やはり不確定要素はどこにでもあるからな、確実に勝てるって言う保障は出来ないな」

「だったらさ、最初からAクラスに挑むのが普通じゃないの？」

わざと回りくどく説明している坂本の声に、吉井の奴は少し苛立っている様子を見せているな。

「吉井、お前の目的がなんなのかは知らんが、坂本はとりあえずEクラスを打倒して、これからの景気づけと士気の更なる向上のためにDクラスの打倒を行いたいんだろう。どうやら坂本は打倒Aクラスの作戦を行う際の必要な足場にもしたいんだろうしな」

「大体は正解だ、東城、やっぱお前がこのクラスに来てくれて良かったよ、Aクラスにでも居てそこの代表と手を組んで俺たちの前に立ち塞がられたら、勝てる気がしないな」

「あ、あの！！」

作戦のことに関して発言した俺の言葉を聞き、多分と言うか確実にこいつにしては珍しく素直に人を褒めて、こちら側に居ることを喜んでいるような発言を坂本はしていた。
これがどれほど珍しいかは吉井や木下達が少し驚いている表情をしているから、分ってしまう。

それに俺は鼻を不機嫌そうに鳴らして応えるが、そこに割り込むような形で姫路が珍しく大声を上げてきた。

「ん、どうした姫路？」

「えっと、吉井君と坂本君に東城君は前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

「いや、話し合っていたのは俺と明久だ、東城には今までそんな話は一度もしてはいない、ただ、そうだなついさっき、明久の奴に姫路の為に試召戦――――」

「それはそうと！！」

姫路の疑問に応える坂本の言葉の中に面白そうなことがあったから、聞く体勢に入ったが吉井の奴を抑えておくべきだったか。
次回からは吉井の動きには注視しておくとしよう、面白いことを坂本が言い始めたら俺が吉井を押さえ込む役割に回るかね。

「さっきの話だけど、Ｄクラスに負けちゃったら何も意味がないよ」

「負けるわけがないだろうが」

不安げと言うか、自信がまったくないように行っている吉井の言葉を全て否定するように、坂本は力強い言葉を放ちながら、吉井の不安なども笑い飛ばしていた。

「ここにいるお前らが協力してくれるなら、確実に勝てる」

更に力強くなっていく坂本の言葉、これを聞いている全員の表情に覇気と呼べるものが漲って行き、表情もそれぞれ引き締まったものへとなっていく。

なんて言ってる俺もどこか懐かしい感覚に包まれていた、あの日々、皆がいた世界で毎日のように経験していたあの感覚。

「いいか、お前ら。ウチのクラスは――――――最強だ」

横島さんや皆に説得されて自分の世界に帰ってきて、面白くもな

いどこかセピア色と呼べる毎日だったが、ようやく今ここで俺は【俺自身としてこの世界に還ってこれた】のかもしれない。
やっと見つけられるかもしれない、俺自身が本当にやりたいことが、横島さん達が何で俺をこの世界に戻す為にあんなに色々してくれたのか、その全ての理由が。だからこそ俺は混ざる。

この昂ぶっている連中の中に。

「いいわね！面白そうじゃない！！」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引き摺り落としてやるかのう」

「……（グッ）」

「が、頑張ります！」

「一度ああ言った以上、言葉は違えんさ、やってやるさ、坂本」

打倒Aクラス。

この一つの目的のために仲間と呼べる連中と一緒に戦う。
俺は久しぶりに感じている心の昂ぶりを表面は抑えながら、作戦を説明し始めた坂本の言葉に他の連中と一緒に耳を傾けていた。

そんなこんなで、試召戦争が始まり廊下が騒がしくなった午後の時間。

「それでは回復試験を開始します」

俺はというと姫路と一緒に点数回復試験を受けていた。
なぜかというか、それは試召戦争のルールや召喚獣に関係することになるんだが、それは原作のアニメを見るかライトノベル版を読んでくれ。
変な電波があったな？　というか向こう側ではもっと凄い事ばっ

かりだったし気にするだけ無駄か。

まあ平たく言うと召喚獣の強さは試験を受けた際の点数によって違ってくるのだが、俺と姫路は振り分け試験を受けていないという状態で無得点状態なのだ。

無論のことこのままでは戦いようがなく、開戦と同時に坂本によって俺と姫路はここに押し込まれたのだった。

だが、ここで俺の本来の学力を曝け出せば、次のクラスとの戦闘時に警戒されて不利に働くので、全教科をそこそこの点数で抑えて出撃しようと考えながら問題を解いていく中で、校内放送の呼び出し音が聞こえた。

《連絡いたします》

《船越先生、船越先生》

ん？　この声は確か、須川、だったっけ？　奴め何をする気だ？

《吉井明久君が体育館裏で待っています》

ブッ！！

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

正直に言おう、俺はこの時、爆笑することを堪えるので精一杯だった。

船越教諭は非常に危険な先生である。婚期を逃し焦りに焦るあまりに生徒に対して単位を盾に交際を迫るような女傑であるので、俺の中では危険度ランクはＡクラスレベルだ、今年は彼女が担任をつとめる教科があったので、もしも声を掛けてきたらどう回避したものか、と考えていたのだが吉井のやつが率先して犠牲となったようだな。

だが隣に座る姫路は問題を解くことに夢中なのか、まったく気が付いていないのが救いかね。恐らくは百面相といえる表情で問題を解いている俺を、学年主任の高橋教諭は胡乱げな目を向けてくるのだが、既にこの時点で全教科一定の点数は獲得できていた俺は自分から終了を宣言し、教室へと向かっていった。

「須川ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

なんていう吉井の叫び声が俺の方にも聞こえてきた。

今も必死で笑いを堪えながらも俺は教室へと向かってのんびりと歩いていくのだった。

ボロくちょっと力を込めただけで壊れそうなFクラスの扉を開けると、ニヤニヤと気持ちの悪い笑みを浮かべている坂本の姿がそこにあった。

「よう東城、テストはどうだった？」

「中々の点数は取れたさ心配はいらんよ、それとあの放送だが」

俺を確認するまで気持ちの悪い笑みを浮かべていた坂本だが、俺を見つけるとすぐに表情を引き締めて問いかけてくる。

坂本の問いに俺は軽く返しつつも、あの【勇者吉井　明久降臨！】としかいえない放送について聞いていた。これを確認するとき俺の

方にも坂本と似た笑みは浮かんでいたに違いない。
口元が吊り上るのを自覚していたのだから。

「無論俺が策を出して須川に指示した」

「シャアァァァァッ！！」

「ほう、中々良い一撃だし、狙いも良いな」

俺と姫路は全教科無得点状態だったから、別室でのテストだったのだが、こいつらは教室でテストを受けていたらしい。
少々誇らしげに坂本が発言した瞬間、何かを聞こうとしていた吉井が懐から包丁を取り出して、コンパクトに尚且つ鋭い踏み込みと共に坂本の肝臓へと突きたてるために打ち込んでいた。

俺はこの一撃を見てあるものを思い出した、そう嫉妬と女性関係での怒りに狂った横島さん並の鋭い一撃だ、中々に良い一撃を放つ吉井に俺は少し感心しつつも、今の奴にとっては鬼門と言うべき言葉を思いついていた。

「あ、船越先生、吉井に用事ですか？」

この俺の言葉を聞いた瞬間からの吉井の動きは横島さんとほぼ同じくらいに理不尽で、尚且つ、凄まじいものであった。

流れを言えば、吉井俺の言葉を一瞬で認識、降り抜こうとしていた体制は慣性の法則などの物理法則を全て無視して急停止、その直後予備動作全く無しの片足飛びで掃除用具前に着地後一瞬で掃除用具入れの中へｉｎ、久しぶりに見たぞ、あの理不尽運動をな。

向こうでは主に横島さんや美神さんだけではなく、おキヌ姉ちゃんも軽くやっていた動きなんだが、本来人間と言うか、この地球上に存在する生命体では能力を使わないと出来ないはずの動きなんだが、こいつ、霊能関係の才能を持っているのかね、横島さんは才能に目覚める前にも同じ様な動きをこなしていたしな、今度気が向いたら調べてみよう。

「さてバカは放って置いて、決着を付けに行くとしようか」

「そうじゃの、そろそろ下校する生徒たちも多くなってきたようだしの、頃合じゃろうて、東城は十分に点数補充が出来たのかの？」

「ああ問題はないさ、Ｄクラス近衛部隊全員を相手取っても十分な点数は確保してきたからな」

「それでは次のクラスとの戦いにおいて、東城が必要以上に警戒されることになるのではないのかの？」

「ああ、それはそれで良いのさ、秀吉」

点数を十分に取ってきたという俺の言葉に、秀吉は疑問を浮かべるのだが、坂本の言葉に更に疑問は深くなっている様子を見せていた。

まあ坂本の考えは読めていた上に、奴からの指示もあったしな俺は例えDクラスの近衛部隊全員が相手でも、余裕で戦死させられる点数を確保しているんだからな。

「俺の狙いはDクラス戦より後のことだ、この戦いでFクラスよりは点数が良いだけの東城が、圧倒的な強さでDクラス近衛部隊をねじ伏せれば、他のクラスは俺たちの戦闘時に東城以外にも点数の高い者がいるんじゃないかっていう、疑心暗鬼を持たせることに狙いがあるのさ」

「じゃが、それでは連中も点数を上げようと躍起になるぞい、そこはどうするというのじゃ？」

「いや木下、これが数ヶ月後の話であればそういえるだろうが、今は良くて数日くらいしか間が空かんからな、どうやろうとも点数を上げるには時間が足りん、その状態でそんな疑心暗鬼を抱かせれば、本隊の戦力低下と通常部隊への戦力増強に繋がるから、俺と姫路による高得点者各個撃破のチャンスが生まれるわけだ」

「なるほどのぅ……」

恐らくというか俺の言ったことが坂本の考えの全てとは言えんが、

ほぼ正解に近いだろう。
間違いなく高得点を確保できる姫路であればともかくとして、俺にはまだ坂本としては不確定要素が多い、だからDクラス戦で俺の力を完全に見定めて、これからの戦いの道筋を立てるのだろう。

「ああ、概ね東城の言う通りになるな、俺たちの中に姫路並みの高得点者が更に隠れているとなれば、相手クラスの高得点者各個撃破の大きなチャンスを作れるし、また相手にそれ関係でのハッタリも行うことが出来るからな」

「まあ、俺のことはこれ以上は良いだろうさ、坂本」

俺の言葉を補足と言うか完全に肯定するように言った坂本の言葉を聞き、木下は完全に納得した様子を見せる。

だが、何時までも教室で喋っているわけには行かないだろう。そういった意味を込めて坂本へと言葉を投げかけると、坂本は一度頷いた後、少々演技の掛かった仕草を取り教室に残っている連中に声を掛けた。

「そうだな、それじゃあ、Dクラス代表の首級を取りにいくぞ！！」

「……（グッ！）」

『おうっ！！』

大声を張り上げる坂本に応えるFクラスの生き残り全員、ぞろぞろと教室を後にする中で、坂本は入り口で立ち止まると、掃除用具入れの中にいるであろう吉井に声を掛けていた。

「明久、東城の言った船越先生が来たってのは……　嘘だ」

それから坂本は迷いなく教室を後にするが、後ろから凄い音が聞こえ。

「逃すかぁ！！雄二ぃ！！」

という吉井の声も聞こえたんだが、つくづくあいつって坂本に踊らされてるよなぁ。

なんて俺は苦笑いと共に考えているのだった。

戦場に到着した俺は暫く様子を見ていたのだが、状況はようやく動きを見せた。

「援護に来た！もう大丈夫だ！！皆落ち着いて取り囲まれないように動くんだ！」

そうだＤクラス代表を含めた本隊が動いたのだ、連中は戦場に到着すると同時に半分はＦクラス代表である坂本を討ち取る為に動き始め、残りはＤクラスの生き残りの援護と救援を行っていた。

ここでいつの間にか到着していた吉井が、代表の平賀に挑もうとするのだが、無論のこと近衛部隊に阻まれる。

これだよ俺が狙っていたのは、彼氏クンなどと去年俺とクラスメイトだった玉野に言われている吉井のところへと俺は動いていた。

「その勝負、待ってもらおうか？」

「え？」

「キミは去年、私と一緒のクラスだった東城くん？　どうしてここにいるの？　Ｃクラスとは逆の方向だよ」

驚きながらも安堵の色を浮かべた顔の吉井と、驚きと困惑を同時に浮かべる玉野に平賀の姿、２人は俺を完全にＣクラス所属と考えていたようだな。

まあ、良いやとっとと終わらせよう。

「Ｆクラス東城　和人、Ｄクラス玉野　美紀に対して現代国語で勝負を挑む！！」

「え！？」

驚愕の表情を浮かべる玉野を無視して俺の召喚獣が現実世界に顕現する。青い外套で全身が覆われて下半身を黒のスラックスを穿いて、上半身は軽装鎧を身に纏って武器は神通棍を持った、全体的に俺をデフォルメした感じの召喚獣が現れた。

それと同時にクラスと、それぞれの点数が表示される。

『Ｆクラス　東城　和人ＶＳＤクラス　玉野　美紀
現代国語　　３０９点ＶＳ１１２点』

『はぁっ！？』

驚愕の声は敵と味方の両方から出てきた、まあ、無理もないだろうＣクラス程度の点数と思われていた俺が、実際にはＡクラス並みの点数だったのだから。
未だに驚愕から立ち直れずに硬直している玉野、だが、その硬直こそが命取りだ！！

「Ｄクラス近衛部隊の一人、玉野　美紀、討ち取ったり！！」

「戦死者は補習！！」

「に、西村先生！？　や、やだよ！！東城君の、東城くんの裏切り者ぉー！！」

まあ、硬直が解けていようが俺とあんたの点数差では一瞬だっただろうが、美神除霊事務所の流儀『たとえ自分が圧倒的優位でも全

力で叩き潰す！』を実行したに過ぎないからな。

だが、裏切り者ってなんだ？　玉野、俺はお前と何も関係のないクラスメイトだったはずなんだが、それよりも周囲にいる生徒たち男子と女子を問わずに俺に対する目が冷たいのが、ちょっと気になる。

「東城君、玉野さんって言ったけ、あの娘に何かしたの？」

「いや、彼女とは去年のクラスメイトなだけだった筈だが……　というよりも、俺は今日ここで顔を見るまで忘れてたし」

「和人！美紀にあんたは何をしたって言うのよ！？　試験召喚！！」

「はぁっ！？　というか、佐々木！？」

気のせいと思いたいが、吉井の目も周囲の生徒達と同じく冷たい。

奴に彼女との関係を説明していたら、この文月学園Ｄクラス所属の女子生徒であり俺の幼馴染である。見た目はクール系といえる美少女で、腰まで届くストレートの青い髪と黒の瞳を持っているのが特徴の佐々木　明日香が出てくる。小学校を卒業するまでは仲が良かったがとある理由で、中学に入ってからは奴と疎遠になっていたが去年一緒のクラスになってからは何度か話したりしていた。

ただ、佐々木の目が怖すぎるのは気のせいであろうか、それも玉野を傷つけたと言う意味の怖さではなく、気の所為か、浮気者をというか浮気した夫を見るような光を感じる。

なんでだろう、俺はあいつと付き合ってなんていないのだが。

佐々木は召喚獣を呼び出したものの、俺の召喚獣は未だに３００点を維持できており、佐々木の方は１２０点近い点数しか持っていない。

下手に動いたら自身が一瞬で消し飛ぶとあいつは分かっているようで、睨み合いの状態が続く、俺はこの状態を続けるのは時間の無駄と判断し神通棍を展開した瞬間に聞こえた言葉に度肝を抜かれた。

「やっぱり、あれは神通棍じゃない、どうなっているのよ、こっちにはＧＳ美神の漫画なんてなかったのに」

俺はこの瞬間心臓を鷲掴みにされたような感覚に陥る、何しろただの幼馴染だとばかり思っていた佐々木が、神通棍の存在を知っていたのだから。

彼女自身は小声で言っていたから、聞こえていないと思っていたのだろうが、あちらの世界で生きるか死ぬかと言うような経験を幾度もなく繰り返してきた俺には聞こえてしまった。

彼女は確かにゴーストスイーパー美神と言っていた、漫画なんてなかったとか言っていたが、あの世界のことは漫画の世界だったとでも言うのだろうか？　ふざけるな！！と言いたい衝動が俺の頭に湧き上がる。

俺は、あの世界で様々な人や魔族に神族たちに出会い悲しいことや嬉しい事、時には凄まじいくらいに悔しい思いをしたあの経験そ

のものが作り物だったというのか！？　思わずこの感情は怒気と言う形を取りながら僅かに（後で調べたら、本当に僅かで本来ならば誰も気付けないくらいの微量だった、吉井の奴は本当に才能があることが発覚した）霊力放出されてしまったようで、俺の横にいた吉井が俺の方をギョッとしたように見てくる。

「と、東城くん？　どうしたの？」

「っ、いや、なんでもない、吉井」

吉井の言葉に俺は平静を取り戻して、改めて佐々木を見据えて戦いを始めようとした時、その声が聞こえてきた。

『Dクラス代表、平賀　源二！討ち死に！！』

その瞬間上がるFクラスの勝鬨の声とDクラスの悲鳴、これを聞いた吉井は俺の隣で思わずといったように叫び声を上げていて、目の前にいる佐々木はまるで【知っていた】ように平然として、どこか分りきっていた結果を見るように周囲の生徒たちを見ていた。

俺はそんな彼女の様子を見て、疑問と違和感しか浮かばない彼女と俺は幼馴染で小さい頃から一緒に居たのだが、こういった様子を浮かべるのは初めて目にするのだから。

「佐々木」

「あ、和人、私達のクラス負けちゃったね」

舌を少しだけ出して、悔しがることも負けたことに憤ることもなく、軽い調子でそう言って来る佐々木の姿、この時俺の違和感は少しだけわかった気がする。

こいつは何らかの方法でこの結果を【知っていた】のではないか？　と、俺は佐々木と疎遠になる前まではよくてCクラス底辺部にやっとと言う学力しかなかったし、姫路の存在は坂本の意向によりギリギリまでトップシークレットの扱いだ、あのムッツリーニが情報操作関連を行っていたから、情報が漏れたとかはありえない

あいつ自身がそんな事態になれば破滅と言う、綱渡りの人生を歩んでいることだから、特に情報操作に関してムッツリーニは疑うべくもなく白だろう。

それ以外のFクラスの連中については論外だ、普段の生活態度で他所のクラスに中の良い連中がいたとしても、普段が普段なだけに信じてもらえないだろうし、何より連中の言葉には驚くほど説得力と言うものがない。

だからこそ、俺は知っていたのではないかと言う結論に達したのだが、まあ気にすることはないだろうな、彼女とは今はクラス自体が違うからな。

話すことはほとんどないだろうし。

そんなことを俺は考えながら、横目で再び坂本へ包丁を突き立てようとして、坂本にシバかれている吉井を眺めているのだった。

それから戦争後の後処理はと言うとクラス設備の交換はなく、坂本がDクラスにとある条件を飲ませることで終了した。

まあ、それはBクラスに設置してある室外機の破壊だったのだが、坂本の次のクラスと最終的にAクラスに攻め込む際の交渉の材料の一つになるだろうな。

そんなことを考えながら校門を通り抜けようとしたとき、一つの人影を発見する。

「あ、やっと来たわね和人」

「佐々木？　玉野を待っているのか？」

「ハァ、貴方を待ってたの、和人、聞きたいこともあるし」

校門に寄りかかっていたのは先ほどまで試召戦争の相手だった、Dクラスにいる我が幼馴染の佐々木だった。

俺を見つけて微笑を浮かべた彼女だが、俺の言葉になぜか呆れを強く浮かべた表情で溜息を吐かれる。って、何故だ？　まあ、その後に続いた言葉を聞けば納得は出来る。

疑問符を浮かべた俺だが、すぐに佐々木が横に並んで歩き始めたので帰り道を一緒に歩き始める。

「ねえ」

「なんだ？」

「貴方と一緒に帰るって、何年ぶりかなって思って」

何が嬉しいのか、佐々木は凄く上機嫌と言うべき様子で俺の横でニコニコと微笑んでいた。
確かに考えれば俺と佐々木はよく一緒に居た、それこそ朝の登校時から夕方の下校まで、中学に入った頃くらいまで俺はこいつとは隣同士だったから、よく登下校を一緒にしたものだし、僅かなものだったけどお小遣いを持ち寄って帰り道の駄菓子屋で買い食いもしたし、帰ってからは一緒にゲームをしたりしたが、時には悪さをして佐々木の母親に俺まで怒られた思い出。
セピア色に染まろうとしている懐かしい思い出たち、だけど向こう側に飛ばされて不安と絶望で一杯だった俺を支え続けてくれた思い出のことが、俺の頭の中を一瞬で駆け抜けた。

「大体、４年ぶりだろうな」

「うん、大体、それくらいだね、あと、さ、お父さんとお母さんがたまには晩御飯を食べに来なさいって、この前も言ってたよ」

「そう、だな……　お前のご両親には小さい頃から世話になってきたからな、今度でも顔を見せるよ」

「……　うん」

感情を見せないようにあえて淡白に俺は佐々木の言葉に答えていた。そうじゃないと俺は誰かに依存してしまいそうだったから。
向こう側で横島さんが最愛の方を失って心に深い傷を負ったのも、

元はといえば俺があの人達ならば大丈夫、俺が時間稼ぎに専念すれば横島さんが必ず何とかしてくれる、なんていう根拠のない想いとも依存とも言うべき感情に流された結果だったのだから。
その結果、横島さんは心に言えない深い傷を負い、俺自身も後悔という感情を抱いてしまう結果になってしまった。

俺の両親は両名とも健在であったが横島さんや佐々木の両親とは大きく違い、放任主義を超えた完全な育児放棄者といえる状態だったのだ、両親はそれぞれの仕事と付き合いを優先して子供である俺には全く見向きもしない。だから小さい頃から俺は佐々木の両親に人としての大切なことや、常識などを学んできたのだから。
その上に食事まで佐々木の両親にはお世話になってしまうことになった、何しろ小学生の頃から、家に帰ればカ〇リーメ〇トやカップラーメンがテーブルの上に置かれているだけの、そんな晩御飯だったのだから。

はっきり言って、俺は横島さんや佐々木のご両親が羨ましかった、彼らは自分自身の子供を優先に考えていたし、どんな状況でも子供が優先という人達だったのだから。

だからこそ、自身の両親の異質さと反面教師とも呼べるあの人達を知ることが出来たのは、素直に感謝できる。

「で・も！和人って何時の間にあんな点数を取れるくらい、頭が良くなってたの？　吃驚したわよ」

「ん？　まあ、文月学園に入ろうと考えた時からだな、試召戦争に巻き込まれた時にある意味での切り札になるからな、必死で勉強し

たさ」

「ふ～ん、そうなんだ」

この質問には、どうやって答えたものかと相当に迷うものだった。まさか、ジークさんのことを言っても信じてもらえないのは確実だろうし、だからこそ俺は当たり障りのない内容を返すことで誤魔化そうとしていた。

だが、佐々木は信じていないのは明白といえる表情で俺を見ていた。恐らくは彼女は確信しているのかもしれない、俺が別な世界に一度行っていることを。

「俺はここから駅にいかなくちゃならないから、ここまでだな佐々木」

「待って！和人！」

だけど俺は久しぶりに佐々木と2人一緒に帰ること、それが嬉しかったのかもしれない。

実際に俺の心は弾んでいたのだから。

俺の現在の家はこの街の郊外の寂れた場所にある一つの一軒家とも言うべき家なのだ。駅から出る電車に３０分ほど揺られて帰る事

になる場所にある。
　これ以上佐々木と一緒に居たら、俺はまた誰かに今度は幼馴染の佐々木に依存してしまう、そう考えた俺は急いで彼女と別れようと駅への道を急ごうとするのだが、彼女から返ってきたのは悲鳴とも叫び声とも懇願とも取れるような声だった。

「ねぇ、前も聞いたけど……　どうして、私の事、名前で呼んでくれないの？」

「……」

　今振り返れば佐々木が、いや、明日香が泣きそうな表情を浮かべているだろう。俺は長年一緒にいた幼馴染として、そんなことを思い浮かべられることが簡単な位置にいた。
　佐々木との事に関しては小学生の卒業時にあった出来事が原因となって苗字で呼ぶようにしていたのだが、それが彼女を俺の予想以上に傷つけていたのかもしれない。

　だけど俺は向こう側で決めていた、異性を名前で呼ぶという行為は己自身が好きになった人以外にはしないということと、たとえ同性であっても名前で呼ぶのは俺自身が依存することはない、と判断した人だけだ。
　などということを、だからこそ俺は言わないといけない。己自身のけじめをつけるために、これで彼女に嫌われることも構わないと、思いながら。

「俺は……　決めたんだ、誰かを特に異性を名前で呼ぶときは、好きになって、愛する人だけにしようって……　でも俺は、今はいろいろな事に対して決着をつけようとしている最中だからさ、誰かのことを名前で呼ぶとか、考えられないんだ、だから、もう少しだけ待ってて欲しい」

「ッ！？　う、うん、分った……　待ってるし、信じてるから！」

「？」

何でだろう？　俺は選択肢を間違えたような奇妙な感覚を感じていた、俺の言葉に対して顔を真っ赤にした佐々木は、そのままで自分の家の方角へと凄い勢いで走っていって、この場に俺が取り残される形になってしまう。

俺はこの佐々木の様子に疑問符を浮かべていたのだが、気を取り直して自宅へと帰るために駅の構内へと入って行くのであった。

3話　試召戦争開戦と終戦（後書き）

今回で試召戦争Ｄクラス編は終了です！いきなり幼馴染なんていう、存在の登場で少々恐ろしさを感じているのですが、まあ、そこは地雷系ＳＳの宿命として、納得していただけたら、ありがたいです（苦笑）

次回はＢクラス編となりますが、ここからようやくＧＳ美神側のアイテムが登場し始めます！！どのアイテムが登場するかは、お楽しみに！というべきところでしょうが、何か登場させて欲しいＧＳ美神のアイテムがあれば遠慮なく書き込んでください。

でもエクトプラズムスーツにヘンゲリンαは登場するのは確実なので、これ以外でお願いします。

4話　自宅の秘密行為と危険な昼休み

第四問　以下の問いに答えなさい

『（1）４　ｓｉｎ　ｘ　＋　３　ｃｏｓ　３ｘ＝２　の方程式、かつ第一象限に存在するＸの値を一つ答えなさい。

（2）ｓｉｎ（Ａ＋Ｂ）と等しい式を現すのは次のどれか、？～？の中から選びなさい。

？ｓｉｎＡ＋ｃｏｓＢ　　？ｓｉｎＡ－ｃｏｓＢ

？ｓｉｎＡ　ｃｏｓＢ　　？ｓｉｎＡ　ｃｏｓＢ＋ｃｏｓＡ　ｓｉｎＢ　』

姫路　瑞希の答え

『（1）Ｘ＝π／６

（2）？』

教師のコメント

そうですね。角度を『　。』ではなく『π』で書いてありますし、完璧です。

東城　和人の答え

『（1）Ｘ＝π／６

（2）？　　理数系の問題はふざけても面白みがない問題多いか

ら嫌いです』

教師のコメント

やればきちんと正解できるのですから。ふざけないようにしましょう。

土屋　康太の答え

『（1）X＝およそ3』

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちも分りますが、これでは解答に近くても点数は上げられません。

吉井　明久の答え

『（2）およそ？』

教師のコメント

先生は今までたくさんの生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

須川　亮の答え

『（2）およそ？』

教師のコメント

まさかもう一人いたとは……　およそをつけなければ正解だったんですから、次は選択問題で余計な言葉はつけないようにしましょう。

～バカとテストと霊能者～

～第４話　自宅の秘密行為と危険な昼休み～

駅で他の学校帰りの生徒たちやサラリーマンの方々と共に電車を下りると、ちょうどバス停に来ていたバスに乗り込んで自宅の方へと向かう。
ここから４０分近くもの間バスに揺られなければならないので、いつも暇つぶしとして持ってきているＰＳＰの電源を入れてゲームをしていた。

それから暫くして俺が降りる停留所の近くに来ていた事を示したアナウンスが流れたので、電源を落として降りる準備を整えていた。

ついに停留所についてバスから降りた俺の周囲に広がっていたのは、昔ながらの田舎の田園風景であり。少なくとも文月学園周辺のような近代的な光景は、この周囲に広がってはいなかった。

俺は迷うこともなく一つの道を歩いていく、今俺が歩いているこの道はバスが走っていた道路から少し横道に逸れて歩いた所にあり、アスファルトではなく石で道が作られていることからも分る通りに、かなりの年月を経たものである。
暫く１０分くらい歩いてきた俺の目の前には、立派なつくりの武家屋敷と呼べる屋敷が存在していた。

そうだこれは俺がこっちに帰ってきてから除霊した物件であり、こちらでは強力と言える悪霊が取り付いていたので、安くで買い叩いた物件だったのだ、その際に佐々木のご両親からは買うことを猛反対された、といった経緯があったのだが、それは今は関係ないから省かせてもらう。

つまり俺はこんな物件をかなり安い値が買えた訳だ、大体の相場としては千万円くらいとか言っていたが、俺に売ってきた業者は百万で良いとか、あからさま過ぎるだろう。
何しろリフォームやら引越しの代金に加えて、税金諸々まで含めて百万とか、どんだけこの物件に苦しめられていたのかが、分るってものだな。

まあ、俺が問題なく住めて居るって知った時からちょっかいを出してきたが、元美神除霊事務所所員の力、ナメンナ、といえる状況にしてやった。
だけどこの時に『寄付』として俺がこの会社に幹部一人に山吹色に光るお菓子を渡したうえに、俺の心がたっぷりと篭った見るもの全てが顔を蒼くするラブレターを送ったし。

今ではこの会社とは良き付き合いをしているな、他の霊的不良物件があれば、特別料金で除霊してあげるよと言ったから、偶に彼らから仕事が舞い込むから、俺の生活費はここで稼いでいたりする。

なんて事を考えながら、俺は立派なつくりの正門を通り自宅へと入っていくが、ここにも俺お手製の結界が至る所に展開されていたりする。各所に悪霊封じの結界とそれを補助する結界に隠蔽の効果を持つ結界に、侵入者察知の結界に泥棒避けや悪意を持ったものを寄せ付けない結界が多種多様に張られているのだが、結界同士が干渉し効果が無くならない様に配置するのには、中々に苦労させられた。

「ただいま」

玄関を開けた俺の目の前には箒に人間の細い腕が生えた、そんな不思議なものがいた。実はこれ向こう側にいた魔法使いの魔鈴という人から貰ったもので、月に一度だけ一定の霊力を供給すれば、家事全般をやってくれると言う非常に便利な箒である。

まあこんな外見の所為で本来ならば、周囲の人には見せられないのだが、一度だけご近所さんに見られてしまったことがあるのだが、何故かご近所さんからは、真逆の反応を見せられ、羨ましがられたのだから世の中全く分らない。

何故だ、ここの人たちはまともだと、信じていたのに！！

俺の言葉にシュタッと片手を上げて挨拶をする箒、こいつは何故か俺が帰ってくる時間が正確に分るらしく、帰ってきた時には玄関のところで俺を待っているのだ、彼？（彼女かもしれんが）に俺の上着を渡しながら、俺は既に沸かされているであろう風呂へと歩いていっていた。

因みに後ろではテキパキと俺の上着の皺を取って、ハンガーに掛けている箒の姿があり、この家の日常の姿がそこにあった。

俺好みのちょうど良い湯加減の風呂にたっぷりと時間を掛けて入った後、脱衣所のかごの中にあった俺の服は全て洗濯機の中に入っており、こいつがこれから干してくれるのである。
先程家事全般をこいつがやってくれている、と言っていたが炊事だけは俺がやることになっている。

なぜならば。

「俺の料理の師匠になった後の魔鈴さん、怖かったなぁ」

と言うことなのである。色々あって俺の料理の師匠となってくれた魔鈴さんだが、可愛らしい外見とは裏腹に指導には一切手を抜かない熱血で、スパルタな人だという事を俺は思い知ることになった。
あの時のことは、正直にいって思い出したくない、思い出そうとしただけの今でさえ体が恐怖で勝手に震えてくるのだから、どうしてあの世界の女性と言うのは理不尽な強さに満ち溢れていたんだろ

うな。

と言うことを考えていた、だが俺はこの後思い知り続けることになる。この世界の女性も理不尽な強さを持っているのだということを。

まあそんなことは頭の奥へと押しやって、俺は今日は和食を作ろうと考えていた。冷蔵庫の中に入っていたのは筞が採ってきたのか、タラの芽とか既にアク抜き等の下拵えが済んでいる筍にぜんまいとワラビ、後は数日前から冷凍している近くの川で釣って来たヤマメが数匹あった。

「山菜が豊富だしこれを少し天ぷらにして、後の残りは明日にでも使うとしようかね、ヤマメは単純に一匹を塩焼きにして試しに他の山菜と一緒に煮付けにしてみるか。後は豆腐も残ってるしこれで味噌汁もいけるな」

そうと決まれば俺の行動は早かった。

効率よくそれぞれの材料を使う分だけ冷蔵庫から取り出して、調理を始めていった。

まあ、何にしろ俺は楽しいんだろうな料理と言う行為が、自覚してはいても抑えられない鼻歌を歌って作業を行う俺に合わせるように、鼻歌のリズムに乗りながら食卓の用意をしている筞を俺は横目で一瞥していた。

それから俺の食事のシーンは一切をカットさせて貰う。一人しかいない食卓の光景など見たくはないだろう？　それが大きな理由だ。

まあそれは置いといて食事が終わった後の俺の日課は神通棍を含めた除霊道具の整備、補修と各地点の結界関連の修繕と点検、これらについては異常のあると思われる部分を調べるだけなので時間はさほど掛からない。

それらが終わった後に1時間ほど自身の修練の時間に当てて、これから就寝までの大体3時間が俺の自由時間といえる時間だった。

貴重な俺の趣味の時間、この時間俺はなにをして過ごすかと言えば、学校の宿題などを早めに終わらせた後、時間がまだあればネットサーフィンやゲームに興じ、時間がなければ勉強の復習関連を行う形でいつもは過ごしている。

それらも終わった午前零時が俺の就寝時間でもある。
まあ、この直後に依頼が来たりして叩き起こされたりする事もあるが、概ねこの時間帯に毎日寝ている。

そんなことを考えながら俺は睡魔に身を任せて、意識を沈めるのだった。

翌朝、準備を終えた俺は登校している生徒たちに混じってＦクラスを目指していた。
相変わらずの格差社会とも言うべきクラス群を横目に通り抜けて、俺は自身のクラスに着いていた。

「おっす、坂本」

「おう東城、お前って結構早い方なんだな」

昨日戦争を行ったので点数補充のテストがこれからあるのだろう、坂本の奴もクラスの連中に混じって英語の教科書を開いていた。
軽い挨拶を交わした後、俺は鞄を自分の卓袱台において坂本の所へと歩いてく。

「ここまで連中が大人しくて尚且つ、勉強に励んでいると言うことは、お前の狙いも他の連中に説明したみたいだな？」

「ああ設備に関してとか、きちんと説明したからな問題はないぞ」

昨日までとは違いＦクラスの連中の表情には、真剣さが若干（この時点で連中の人間性も分る）浮かんだ様子で試験前の悪あがきの勉強に励んでいるから、自分たちの戦力次第によってクラスの設備

が良くなると思っているようだ。
まあ、一番の理由は坂本を認めているってことだろう、間違いなく昨日の勝利は坂本がいなければありえなかった。だからこそ代表がまだ上を狙って動こうとしているのに、自分たちが下で満足するわけには行かないと言う感じにでも自分たちを納得させたのかね。

「おはよー」

そんなことを話していると、吉井の声が聞こえて来たが、登校時間ギリギリのタイミングだな。いつもこうなのだろうか？
だが坂本よ一瞬だけ見せたお前のニヤリ、と言う表情はあれだな、今日の一時間目の教師のことを考えたな。

そんなことを俺と坂本が考えていることなど、知る由もなく吉井の奴はこちらへと、暢気に歩いてくる。

「おう明久、いつもどおりに時間ギリギリだな」

「おはよ雄二、東城君」

「ああ、おはよ、吉井」

こっちに歩いてくる吉井に俺と坂本は片手を上げて挨拶すると、鞄を自分の卓袱台の上において、俺と坂本が行った会話を始めているのを眺めた後、坂本は不意に吉井に尋ねていた。

「そんなことより、お前は良いのか？　明久」

「昨日の後始末だ」

こんなことを会話の途中で言われた吉井は、何のことなのか分っていない様子であり、心の底から疑問に思っていると言わんばかりの表情で考え込んでいた。だが、頼むから坂本、そのニヤニヤした表情は止めてくれ、キモイ。

「いや、いくら僕でも、生爪をはがされるってわかっててて行動はしないよ」

「単に忘れているのか？　というよりもおまえ自身が本当にバカなだけなのか」

「いや東城君、バカってどういうことさ！？」

「明久の場合、東城の言うとおり両方なだけだろ」

「ちょっと待てバカ雄二「吉井！！」ごべ！！」

少し考え込んでから思いつたのがそれなのかよ、と俺は呆れながら吉井に答えを返すと、奴は俺の言葉の中身について問いただそうとしている。

だが、坂本からも肯定する言葉が返ってきたので、吉井はそっちにも顔を向けて噛み付くのだが、その言葉が続くことはなかった。

何故ならば島田の奴が吉井の横面にグーを叩き込んだからだ、彼女の背後からは般若とも呼べるオーラが漂っており、島田が完全に怒っているのは明白であった。

「し、島田さん……　おはよう」

「おはようじゃないわよ！」

滅茶苦茶キレている島田、このキレ具合は凄いぞ、吉井の奴はこいつになにをしたんだか、向こうで美神さんの下着を横島さんと共謀し盗んでから、厄珍のオッサンと物々交換したことがばれた時の美神さんレベルだな。

いきなりの拳を喰らった吉井は今や島田の足元に倒れこんでおり、その吉井は島田を下から見上げる形なのだが、島田の奴は自分のスカートの中身が見えそうなのに気にならないのかね？　まあ、こいつも吉井に想いを寄せているみたいだし気にならないのだろう。

まあ、そんな恋する乙女と言える彼女も今は怒れる修羅と言える存在、体をワナワナと震わせて地獄のそこから漂ってくるような声で、彼女は昨日の出来事を語っていた。

「アンタ、昨日ウチを見捨てただけに飽き足らず、消火器の悪戯と窓を割った犯人に仕立て上げたわね……！」

吉井の奴が昨日島田に何をしたのかがここで全て氷解した、そんなことをされたら普通は怒るだろう、というか怒らない方が不思議だ。

「おかげで彼女にしたくない女子ランキングが上がっちゃったじゃない！！」

おや、まだ上がる余地が島田にあったのか？　去年見たときには確かＴＯＰ１０に入ってて順位は、ご

「東城？　アンタ変な事考えてないかしら？」

「イエ、ベツニ？」

い、いかん、俺の考えていたことを察知したのか島田が俺に怒りを向けてくる。トラウマともなっているこのオーラを受けた俺は片言で返してしまったのだが、島田はまったく納得なんてしてはいないだろう。
ジト〜　と言う視線で俺を見ているのだが、すぐにそれを放して吉井に君の悪いくらいに『良い笑顔』を浮かべて向き直っていた。

「まあ、それは置いといて、まあ、本来ならアンタに制裁しとくんだけど、アンタにはもう罰が下ってるしね許してあげる」

「うんさっきから、鼻血が止まらないんだ」

「いや。そうじゃなくて」

吉井の奴はまだ思い出せていなかったのだろうか？　ここまでくれば思い出せそうというか普通は思い出しているはずなんだが。
こんな、思い出せていない吉井の反応に大満足なのか、島田は心の底から嬉しそうに吉井に対して死刑宣告を告げる。

「今日の一時間目の数学のテストの、監督の先生は船越先生なんだって」

聞いた瞬間、吉井は再びあの理不尽運動を展開、扉を一瞬で開けて疾風の如き速さで廊下を駆け抜けていった。

午前の四教科全てが終わり、昼休みの時間、それぞれが思い思いに卓袱台に突っ伏したりなど、している中で吉井の奴は本当に疲れ切った様子で卓袱台に突っ伏していた。

それはそうだと言えるだろう、何しろようやく結婚できると思い込んでいる船越教諭に吉井は追い掛けられたんだし。

理不尽運動を行っている吉井の動きを性格に見極めて奴を追い詰めていく船越教諭の姿は、まさに驚異的と呼ぶ他になく吉井はなす術もなく彼女によって追い詰められている様子であった。

まあ、近所の独身の３９歳のお兄さんを紹介することで事無きを得たらしいが、

「よし！昼飯を食いにいくぞ！今日はカツ丼とカレーにラーメンとチャーハンにでもすっかな！！」

勢いよく立ち上がり意気揚々と学食へと向かおうとする坂本、その表情にはどこか冷や汗すらも浮かんでいるのは、気のせいではないだろう。

そうだ、昼休みになったと言うことは姫路の弁当が待っていると言うことを意味しているのだから、坂本の言葉にこのことを思い出したのか木下に、ムッツリーニと島田の奴の顔が面白いくらいに青褪めていく。

「ッ！？　吉井達は学食に行くのよね！？　だったら一緒して良いかしら？」

「そ、そうじゃの！ワシらもお主達と一緒に学食に行くぞ！！」

「……　ッ（コクコク！）」

少し裏返っていると言える声で島田は大きめの声で、坂本に一緒

に行く事を言っており。木下も追従して必死の訴えとも取れる言葉を発していた。
ムッツリーニは首が取れるのではないか？　とも言えるような様子で頷いており、いそいそと教室を出ようと必死になっている様子であった。

ここまで来ても吉井の奴は、まだ思い出せていないと言うか忘れてるんだろうな、あれは疑問符を大量に浮かべた表情をしているし。
だが、ついにここまで恥ずかしそうに黙っていて、何時言い出そうかタイミングが分らなかったのであろう、モジモジとしていた姫路がついに口を開いた。そう、今の奴らにとっては死刑宣告にも等しい言葉を。

「あ、あの！皆さん、今日は昨日約束した……」

「ハッ！」

吉井の奴は今、思い出したのであろう。他の連中と同じ様に顔を青く染め、他の連中は逃走に失敗したことを悟ったのか、まるでも何も戦争に負けた敗残兵の如き雰囲気を放ち始める。
いまや顔を真っ赤にして得に吉井に食べてもらいたかったんだろう、その吉井の方を瞳をウルウルさせてみていた。

一昔前に流行ったチワワが出てくるあのＣＭの光景にそっくりだな、と考えていた俺は一人教室を出て静かな所で飯を食おうと、弁当の入った鞄を持って一人教室後にしようとする。

「……　何のつもりだ？　島田にムッツリーニに木下」
「逃がすと思っているのかしら？」
「一人だけ助かろうという考えは、捨てて貰うとしようかの」
「……　逃がさん……！」

だが、俺の両肩を島田とムッツリーニが掴んでいたから、これ以上の行動は阻まれてしまった。
というか島田の握力は一体なんなんだ？　霊力で身体強化を施したはずの俺の肩がミシミシいっているぞ、ムッツリーニと木下の目にも本気の光が見え隠れするから、逃げるのは不可能か。
などと考えた俺は舌打ちをしたい想いを堪えて、何気に坂本がジュースを買ってくるといって離脱したのを、島田が追いかけたのを皮切りに屋上へと以降とした瞬間、校内放送の呼び出し音が鳴り響いた。

『連絡いたします。２年Ｆ組の東城　和人君、福原先生がお呼びです。至急職員室に来てください』
「あ、福原先生のお呼びか、じゃあ行かないとまずいな、離してく

れムッツリーニ」

「……　仕方がない」

「ぐむ、貴重な戦力が」

しぶしぶと言った様子で俺を離すムッツリーニ、そんな俺の姿を木下がジトーとした視線でこちらを見ているのだが、そんな彼らを無視して俺は教室を急いで後にした。

福原先生に呼び出された用件としては、まあ大した事ではなくちょっとした世間話程度の用件で、何故呼び出されたのかが分らなかったのだが、俺はそんなこんなで着いた屋上へと続く扉を開けた。

そこにあった光景は。

倒れ付しているムッツリーニと木下、少しヤバそうな痙攣をしている坂本に、戦慄の表情を浮かべて慄いている吉井と島田に、何も分っていない様子でオロオロしている姫路。

「なんていうカオスだよ、おい」

「あ、東城君、戻ったんだね！？」

屋上に付いた俺の姿を見て駆け寄ってきたのは吉井だが、奴の右手には箸が握られており、その先には姫路が作ったと思われるタコさんウインナーが！！

これを確認した瞬間俺は、こちらの口へと真っ直ぐに手を伸ばしてくる吉井の右手首を掴み、ウインナーが奴の口の中に入るように返し技を放っていた。

「ー！！☆★♪わぁせ！！」

口に入り飲み込むかどうかと言う瞬間に吉井の上げた奇声は、あまりにも凄まじいものだったと記しておこう。

「よ、吉井君！？」

吉井の奴まで倒れて痙攣している光景を見た姫路は、慌ててこちらへと駆け寄ってくる。

だが吉井の奴はそんな姫路を安心させようとしているようで、足が大笑いしているにも拘らずに立ち上がると、親指を一つ立てていた。

どうやらとっても美味しかったよ、とか言いたいのだろうが、傍から見ているとこのサインは俺たちに対して毒物だったよ、とか言っているようでもある。

「東城、福原先生との話は終わったの？」

「ん？　ああ、ついさっきな、それに今回の昼休みで、また試召戦争の打ち合わせもやるだろうし、教室にさっき弁当を取りに行ってからこっちに来たって訳さ」

「ふーん、でもいくら福原先生とは言えども早かったわね……　今日のあんたのお弁当ってそれ？」

「まあな、たいした事でもなかったからちょっと話を聞いたら解放されたよ、確かに弁当だけど、お前は一口も食べてないんだろ？」

「うん、そうだけど？」

「まあ、昨日姫路の話を聞いて嫌な予感はしていたからな、少し多めに作っていたのさ」

未だに少し様子がおかしい吉井を介抱している姫路を尻目に、俺に近付いてきた島田は、俺が手に持っている包みを少し疑問に思っている様子であった。

俺が手に持っているのは明らかにお重とも言える様な包みであり、二段重ねタイプだから明らかに一人分の弁当の量ではない。

まあ、昨日の話を聞いていた俺は誰かが犠牲になれば、誰かは食べられないと言うのは明白だったので、多少であるが多めに作ってきていたのだった。

だが島田は俺がこんな事をしたというのが少々以外だったのか、目をパチクリさせて吃驚した様子を見せていた。

だけど俺はそんな様子を見せた島田を、その場に置いて行く形で倒れ付している坂本達へと歩いていき、姫路に聞こえないように声を掛ける。

「坂本、無事か？」

「な、なんとか、な」

全然大丈夫じゃないだろう、俺はそう言いたい気持ちを必死で抑えて坂本からの答えを聞き、奴の口に白い二粒の錠剤を入れて、予め買ってきていたペットボトルの水で無理矢理流し込む。

「な、何しやがる」

「落ち着け、人体の中に入った薬物を中和する薬だ、後数十秒もすればマシになる」

「何？　何でそんなものを？　まあ、良いさすまんな助かった、東城」

「良いって事よ」

今坂本に俺が無理矢理飲ませたのは、向こう側に存在した道具屋【厄珍堂】にて販売されていたもので、原理は知らないがこの薬を飲めば体内に入った有毒な薬物を中和してくれる。という便利道具の一つである。

同様に木下とムッツリーニにも飲ませたのだが、こいつらは坂本とは違って少量だったのか、数秒後には俺に礼を言って起き上がりすっかり回復した様子を見せていた。

だが、俺はこいつらに箱を見られないように細心の注意を払っていた、なぜなら箱には【薬事法違反品】と堂々と書かれているのだし。

「ぼ、僕にも……　それを……」

「姫路に島田、吉井の介抱を頼んだぞ」

何か死体が物を言ってきたが俺はそれを完全に流し、それと親しい2人の方へと蹴り出していた。
2人が嬉々として吉井の介抱を始めたので、無視して俺の弁当を広げる。

「よし、んじゃ、飯にするとしようか」

「待て東城、これは誰が作ったんだ？」

「立派なお弁当じゃぞ」

「……　美味そう」

弁当の蓋を開けたと同時に坂本が驚いたように声を掛けてくる。
それに続くようにして木下と、ムッツリーニも声を合わせて賞賛の声を上げてくるのだが、そんなに良いものなのかね？　一段目の半分は俵の形をしてのりを巻いただけのシンプルなおにぎりと、残

りの半分はおにぎり用ふりかけを混ぜ込んだふりかけおにぎりが入っていた。
続いて上の2段目には各種類の春の山菜の天ぷらに煮物と、ほうれん草の白和えにカブの酢漬けなど各種和食系で纏めたおかずがギッシリと詰まっていたからな。

「俺だぞ、それと今現在の状況を予測していたからな、お前らの分も含んで作ってきている、良ければ食ってくれ、口に合うかは分らんが」

「良いのか？」

「ああ、それに昨日の試召戦争の戦勝祝いも兼ねて作って来たからな、食ってくれなきゃ困るさ」

「それでは遠慮なく頂くとしようかの」

「……　期待している」

坂本の問いかけに答えてからの俺の言葉は本心から出てきていた。
久しぶりに楽しい時間を過ごさせてくれた礼も入っていたのだが、まあ、そこまで言う必要はないか。
そんな俺の言葉を聞いた3人は先に姫路が配っていたのだろう、割り箸と紙の皿を持ってそれぞれが食べたいおかずを取り口にした。

「美味い！！」

「ふむ、確かに坂本の言うとおり、美味じゃ」

「……（ハグハグ）」

目を見開いていった坂本を皮切りに、木下も同様の賛辞を述べてくれた。ムッツリーニは、まあ夢中で食べているあの様子を見たら、分るけどな。

「ちょ、ちょっと！あんたたち！なに先に食べてるのよ、ウチと瑞希もまだお昼を食べてないのよ！？」

「落ち着け島田に姫路、まだ量はあるから」

どうやら吉井の奴が落ち着いたらしく、こちらが飯を食っていると知った島田が血相を変えてやってくる。

そんな彼女達に俺は皿と箸を渡してから、賑やかな昼食が行われるのだったが。

「うう、美味しい、く、悔しい……　女としてのプライドが……！」

「東城くんの料理、凄くおいしいです！でも！負けられません！！」

『いや素直に負けを認めて、まともなレシピを一度だけでも確認してください！！』

姫路が更に間違った方向でやる気を出す場面もあったのだが、概ね今度の昼食は穏やかに過ぎて言ったのだろうな。

次の瞬間全員で考えたことは、恐らく一致していると思う。

「と、東城君お願いします、僕にもあの薬を……　か、カロリーの摂取機会が……！」

などと偶に雑音も入ったのだが、吉井貴様、自業自得と言う言葉の意味を辞典で調べてから出直して来い。

それから少しして俺の弁当の中身も無くなり、全員分としては少々足りなかったので、購買に坂本が走り惣菜パンを食べ足りない連中から貰った金で買ってきて、それも全員が食べ終えた。

「ちくしょう！ちくしょう！ちくしょう……！！僕のカロリー！」

などと目の幅一杯の涙を流しているバカがいたのだが、全員が軽く流して話題は今日の試召戦争になる。

「そういえば坂本、次の相手はＢクラスで良いのよね？」

「ああ」

「坂本よ、そのことは昨日のＤクラス戦の時から分っておったのじゃが、なぜそんな回りくどい手を打つのじゃ？」

未だに落ち込んでいる吉井を無視して、全員が参加している話し合いなのだが、木下の疑問の声に他の連中の表情も疑問の色を浮かべる。

坂本はこのことに気が付いているのだろうが、黙って一度頷いた後、俺たち全員を見渡して口を開いていた。

「ハッキリと言うが、どんなに優れた作戦を立てたとしてもＡクラスに勝つのは、無理だ」

そして彼の口から放たれる戦闘前からの、実質的な敗北宣言とも取れる言葉。

これを聞いても他の連中には驚きと言った表情はなく、逆に納得の色を浮かべるものさえいた。

確かに現在のＦクラスの戦力では、まともな方法では勝利はないと言うよりも勝つことなど不可能であろう、俺は全力を出せば代表である霧島を倒すことも可能なのだが、彼女を倒すまでの状況が問題で、実質的に俺一人でＡクラス全員を相手にした後、消耗した状態で勝てるとは思えないと言うよりも、倒されるまでに１０人以上を道ずれにできれば御の字だろうし限界だ。

その上に姫路に至ってはＡクラスのトップレベル程度の実力でし

かない、確かにかなりの人数を倒せるであろうが、それだけだ。数人を倒して消耗した所で間違いなく俺と同じように数の暴力に屈することになるな。

俺と姫路が倒れた後は、成績で圧倒的に勝るAクラスがFクラスの生徒を蹂躙して終了だ。

「ん？　それでは坂本よ、ワシらの目標はBクラスの設備が最終目標となるように聞こえるのじゃが？」

「いいや、最終目標に変化はない、Aクラスをやるのは変わらんさ」

「坂本、さっきアンタが言っていた事とは違うじゃない、そこはどうなのよ？」

木下の言葉に答えた坂本であるが、島田の疑問も尤もであろう。

さっきは事実上の敗北宣言を堂々と行っていて、今は最終目標が敗北すると言っていたAクラスなのだから。

「確かにクラス単位で、全員で総力戦を挑めば勝ち目など存在しないからな。たから、一騎打ちに持ち込むつもりなのさ」

「……　一騎打ちに？　どうやって持ち込む？」

「そのためのＢクラスとの戦争だ、Ａクラスとの交渉の際の道具になって貰うつもりだからな」

ここまで言われれば、既にピンと来ていた。他の連中も同様だろう、吉井を除いた全員が、納得した表情をしているのだから。

「おい明久、試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備がどうなるか、知ってるな？」

「うぇ！？　も、もちろんさ！！」

（吉井くん、負けたら設備のランクを一つ落とされちゃうんですよ）

「設備のランクを落とされるんだ！！」

知らなかったろ、お前って奴はよ。

俺はこの場で溜息を付きたい気持ちを抑えて、そう考えていた。

姫路が助け舟を出さなかったらどう答えていたんだ？　お前は。

坂本もこれに気が付いているのは確実で、呆れを隠そうとしている様子など微塵もなかった。

「……　そうだなBクラスが負けたらCクラスの設備に落とされるわけだ」

「そうだよね、常識の範疇だね」

「ちなみに、上位クラスが下位クラスに負けた場合はどうなる？」

「ただ悔しい」

「東城ナイフか何かくれ」

「ほらよ」

「って、ちょっと！東城君！？　バタフライナイフを雄二に渡してどうするのさ！！」

姫路の助け舟の辺りから大体予想はしていたが、あまりにも酷い解答に俺は坂本にバタフライナイフを渡していた。

吉井は慌てた様子で坂本を見ていたが、お前は昨日の平賀の言葉を聞いていたのかよ、と言いたい気持ちで心の中は一杯だった。

「吉井くん、相手クラスと設備を入れ替えられてしまうんですよ」

再び吉井へと姫路のフォローが入るのだが、良い奴、というか人

が良いのか好きになった奴だから特別なのか、どうにも判断に迷う所だが、島田の奴も同じ様な所があるから、前者なのかねぇ。

「……　まあ良い、ＢクラスならＣクラスの設備に落とされるわけだ」

「つまりウチと負けたクラスは最低の設備と入れ替えられるわけだね」

「ああ。そのシステム関連を利用して交渉を行う」

「交渉、ですか？」

坂本の奴も吉井に対する呆れなど、隠そうともしていないのは明白で、俺や木下は溜息を隠そうとしていたのだが、坂本は思いっきり溜息を吐きながら吉井に対して言葉を変え呈したのだが。

ここでようやく吉井も坂本の言いたいことが分るとは、というか基本的なルールくらいきちんと把握して置けよ、と言いたくなる気持ちを必死で抑えて俺は黙って聞いていた。

「ああＢクラスを倒したら、設備を入れ替えずにＡクラスに宣戦布告、もしくはそれに近い状況を作り出してもらう」

「妥当な狙いと言うところだろうな坂本、設備を入れ替えないとい

う所が注目のところだ、連中としてはFクラスの設備に入れ替わることはなく、Aクラスに負けてもCクラスの設備に入れ替わるだけだ、それにBの代表はあの根本だ、負けてその条件を出したら、喜んでクラスの連中は食いついてくるさ」

坂本の狙いなど、とっくに読めていた俺は続けて発言するのだが、奴は俺の言葉を聞いて少し怪訝な表情を見せていた。

「ん？　東城、Bクラスの代表が根本ってのは本当か？」

「ああ、というかお前という者が把握してなかったのか？　坂本」

俺は坂本の言葉には流石に疑問と言うか、何故、と言う感情しか抱けなかった。

「いや、お前に言われるまで知らなかったぞ、というか、あれがマジでBクラス代表かよ」

「間違いはない、俺自身でも確認は取ったからな、この情報は確実だな」

「東城よ、根本と言うのは【あの】根本かの？」

「ああ」

俺の言葉を聞いてから坂本達が、対策やどういった人間かを話し始めたのだが、俺は一人思い出していた。奴に去年言われたことを。

ここで俺の言った根本という人物について説明する必要がある。本名は根本　恭二という名前だが、学校中にはこいつの悪行と言う悪行を示した噂が流れている。曰く『球技大会で相手チームに一服持った』『喧嘩に刃物を当然装備』と言った類のものである。

俺自身卑怯な手段に悪辣な手法を否定する気はない、向こう側ではその悪辣な手法で俺たちは、何度も死線を潜り抜けてきて、生き残って来たのだから、だからこそ俺は奴の勝つ為に講じる手段には賛同できる面もあるが、去年あいつと一度だけ話す機会があった時から、俺はあいつの手段だけは否定することに決めた。

悪辣な手段に卑怯な作戦、これらは相手によって自分も蹂躙される覚悟のある者だけが許されるものだ、美神さんも横島さんも口では、自分たちにんな覚悟なんてあるわけない！！なんていっていたけど実際に彼らは強い覚悟を持って手段を講じていた、だからこそあいつに去年言われた一言だけは許せない。

『あ？　やられた時の覚悟だって？　あるわけないだろバカじゃねぇか？　俺を敗れる奴なんているわけないし、逆に馬鹿をこの俺が相手してやってるんだから、感謝して欲しいものだよな』

この時に俺は決めた、言葉だけ聞けば美神さんが言っていたことにも通じそうだが、奴に覚悟なんぞまったくない。それどころか自信が敗れるはずはないと思い込んで、周囲を駒程度に見て蔑んでいるあの腐りきった瞳。

根本、お前に教えてやるよ。この世にはもっと悪辣で卑怯な手段があるって事を、そして驕り切ったお前は自分よりも悪辣な奴はいないと言う考えしかないだろうな、じゃあ思い知らせてやるよ。

本当に悪辣で卑怯な手段ってのはなんなのか、と言うことをな。

などと考えていた俺であるが、何時の間にやらBクラスへの使者という話題になっていたようで、坂本と吉井が心理戦を兼ねたじゃんけんで、脅しとしか言えない方法で勝利を収めた坂本の命令によって、吉井はBクラスへと走っていくのを眺めていた。

4話　自宅の秘密行為と危険な昼休み（後書き）

次回、本家ＧＳ美神張りの卑怯で悪辣な手段のオンパレードとなります。

根本はただのクズですが、同じく悪辣と言える美神さんたちとは比べるべくもありません、史上最強といえる美神さんに鍛えられた彼の戦術とはなんなのか、ご期待いただけたら幸いです。

さて、次回も張り切って執筆しておりますが、筆が進む進む……そして主人公と交友関係を持っている原作キャラが更に登場しますよ、男性キャラとしか今はいえませんが彼も裏で活躍してくれる話になっております。

ただ、こういった手段では意外ともいえる人物なので、反響が（あればの話ですけど）怖いです。

5話　卑怯者と悪辣者（前書き）

注意！今回は視点の変更部分があります！！

5話　卑怯者と悪辣者

第五問　以下の文章の（　）に正しい文章を入れなさい。

『光は波であって、（　）である。』

姫路　瑞希の答え
『粒子』

教師のコメント
よく出来ました。

土屋　康太の答え
『寄せては返すもの』

教師のコメント
君の回答はいつも先生の度肝を抜いてくれます。

吉井　明久の答え
『勇者の武器』

教師のコメント
私もＲＰＧは大好きです。

東城　和人の答え
『成仏への道』

教師のコメント
　何を成仏させると言うのですか？

～バカとテストと霊能者～
～第５話　卑怯者と悪辣者～

昼休みはとっくに終わって、午後の試験も終了後、吉井の奴がＢクラスへの使者としていった後、俺は男子トイレの個室に入る。
それから携帯を取り出して、ある一つの番号にコールする。数度のコールの後、奴は電話口に出てきた。

『どうしたんだい？　君の方から電話してくるなんて珍しいじゃないか、和人？』

「復習中だったか？　利光」

それはＡクラス所属の【久保　利光】と言う一人の男子生徒だった。
奴と俺は中学時代に知り合って、それから良き友人とも親友とも呼べる間柄であり、この世界で唯一、俺の事情を完璧に知る人物でもある。

まあ、俺の事情を奴に知られた時の話など、また後で語ればよいとして今は何も言わないが。奴の昼休みの過ごし方など、今までの付き合いで知っていたからどうしても俺は気遣う言葉を言っていた。

『いや、ちょうど終わった所だし気にすることはないよ、それで、久しぶりに悪企みのお誘いかぃ？』

「ああ、まあな、利光お前は根本のことを覚えているか？」

『……　ああ、去年に僕の一番の親友である君と、愛しい人である吉井君をバカにしたあの男か、彼がどうかしたのかぃ？』

「……　今日俺たちＦクラスはＢクラスに対して試召戦争の宣戦布告をした」

『へえ』

一瞬息を呑む音が聞こえ、利光は怒りを堪えるような様子を見せた後、平静を努めている様子を見せていたが、怒りを隠し切れていない様子を見せていた。

だが利光よ、お前があの娘に振られてから俺は、お前の幸せを望んでいるんだが同性愛だけは、勘弁して欲しいんだがなぁ。

などと、思考が横道に逸れそうだったが、気を取り直して俺は利光の言葉に答えていた。

『これが君からの悪企みのお誘いと言うことであれば話は簡単だね、

根本　恭二に対して情報戦を仕掛ける、と言う意味で良いのかい？』

「本当にお前の頭の回転が速くて助かるよ、利光、まあ、ある程度の情報を流してさえくれれば、後は俺たちのほうで何とかするというか、俺が、あいつに引導を渡すから、これから伝えることで充分さ」

『そうか、それにしても根本君も不運なものだね、より悪辣な人間である君に、目を付けられたんだし』

「そんなことはどうでも良いだろう、利光」

『まあね、それじゃあ後であの男を陥れる為のことを伝えてくれよ？　僕の愛しい吉井君と大親友の和人の２人のために、全力を尽くすからね』

こういうときに思考が早く、頭の出来の良い奴は助かる。

俺の企みと本当の狙いを知り、無条件で協力してくれる強力な参謀だ。

だが、やはり見返りもないことには全力の具合も違うだろうし、奴にはアメの存在もチラつかせて置くか。

「ああ、恩に着るよ利光、詳しいことは今日の放課後にでもメールするから、確認を頼むな、後、成功したら……」

『？　成功したら、何だい？』

「吉井と2人っきりとはいかないが、俺とお前に吉井の3人で出かける予定を必ず取り付けよう」

『絶対に成功させるよ』

「そ、そうか……」

こうかはばつぐんだ！！どこからか、そんなナレーションが聞こえてきそうなくらいの利光の返事を聞き、俺は若干の嫌な予感を感じつつも吉井に対して心の内で手を合わせて、今日の放課後に送るメールの内容を考えた後、個室を後にするのだった。

無論、今日の放課後に学園全体に準備する為の、とあるものの事も考えつつであるがな。

次の日に登校した私が見たのは、学園全体を覆う認識阻害を主としていると思われる結界だった。
誰が張ったのだろうかと考えて、一瞬体が強張るのだけど軽く見た感じでは認識阻害系のみのもので、攻撃性の強いものは張られていない様子だった。

私にはある事情でそういった結界関連が効かないし感知できるので、それに気が付くことができた。
私の周囲では根本　恭二の悪い噂が下級生と上級生の間で流れているのだけど、同級生の間では流れていない所か、その噂に気が付いていない、という明らかにおかしい状態となっていたのだから。

根本　恭二　この男の名前は学年を問わずに悪名が轟いていて、吉井くん以上に名前の知られている生徒でもあり、恨みもたくさん買っている生徒。
だからだろうか、彼の噂は、特に、悪いものはすぐに広まると言う傾向があるから、今日の昼休みまでには2年以外の生徒たちの間を通り抜けていくだろう。

「この結界を張った人の狙いは、そこかな？」

実を言うと私はこの結界を張った人物はほとんど断定できていたし、狙いもおぼろげながら理解できていた。

結界を張ったのは私の幼馴染で、多分ＧＳ美神の世界にいっていた経験を持っているんだろう人、東城　和人だと思う、私達のクラスとの戦争の際に（第３話を参照してね）彼の召喚獣は神通棍を持っていたし、彼にだけ聞こえるように言った私の言葉を聞いた彼の表情には、驚愕と怒りに似た感情がありありと浮かんでいたから、まず間違いないでしょうね。

「でも、ここまでのことを彼一人で出来るなんて思えない、結界を彼が展開している間に情報戦を仕掛けた参謀がいるってことか」

私と彼の繋がりは中学に入るまでの事で、ちょうど中学に入って１ヵ月後に彼はいきなり引越しと転校を行ったのだ。
多分その頃くらいに彼はＧＳ美神の世界から帰ってきたんでしょうね、こちらでは一瞬も経っていない様に調整して帰ってくることも、あちらの神と魔の最高指導者たちが手を貸していたのだとすると、不可能なことじゃないでしょうし。

それ以来、私と彼の関係は疎遠なものとなる。当時引っ越した先は分っていたけど遠すぎておいそれと行けない場所にあったことも、災いしていたし。

「でも、あの人の参謀役か、誰なんだろう？」

そうだから私は彼の中学時代の交友関係など分らないままなのだ、ここ文月学園で再会して色々と話したりとかし始めたんだけど、彼の中学時代の友人というのが久保君くらいしか分らなかったし、彼は生真面目な所があるから、こういったことを彼が仕出かそうとすれば、間違いなく窘める様な人だろうから、候補からは外れるけど、でも。

「羨ましいなぁ……　和人と一緒にバカをやれて、私もＦクラスに行きたかったなぁ」

ここまでの私の言動などを疑問に思っていた人達に、私の正体を明かそうと思う。

私は実はテンプレ系転生者なんです！！っていっても信じてもらえないよね、それにこんなことを現実でいえば警察に通報された後、間違いなく精神病院の患者となるだろうし。

私の前世というのは今とは比べるべくもない、不幸の連続といって良い人生だったな、まずは生涯病弱で病院の外に出たことなんてほとんどないし、一歩も歩けずにベットの上で一日を過ごしていたこともざらだった。ただ、家はお金持ちだったようなのでＶＩＰ待遇といえる病室にいて、好きな漫画とかゲームとかを言えば買ってきてもらえる環境でもあった。

だけど、あの世界での私の両親は酷いものだった。娘の見舞いに

は来ないし、誕生日でもプレゼントは愚かメッセージさえも寄越さないし、偶に調子が良くなって一時帰宅を許されたとしても本当の邪魔者を見る目つきで私を見てくる始末。
彼らにとって、私という存在は心の底から邪魔な存在だったのだろう、当時の私には上と下に男の兄弟がいたのだけど、彼らに両親の興味は移っていて私には欠片の興味さえ抱いていない様子だったんだし。
そんなこんなで、私はネットさえ整えられた病室で色々なゲームや漫画を入手して、それらの中にある物語を支えにして生きていたのだった。

まあ１６歳の誕生日に、お世話になった看護師さんとか先生たちに泣きながら看取られて、死んだんだけどね。

だけど、生前支えにしていたものの中には無論【バカとテストと召喚獣】とか【ＧＳ美神極楽大作戦！】だとかあって、変り種としては同人ゲームの【東方】っていうシューティングゲームもあったのだけど、今浮かべた内の２つは私の周囲にあるわよね？　まさか東方も、とか？　まさかね。

でも私にはこの世界で、絶対にＦクラスに最下位になって周囲の評判を落とすことができない状態になった。

「私がＦクラスに行ったら父さんと母さんに、迷惑が掛かるかもしれないし」

そう、この世界の両親が気になるから私は全力で試験に挑んだのだ、今の両親は向こう側の私を邪魔者扱いしていた2人とは違って、無限の愛情を注いで育ててくれたからだ。
向こう側とは違ってお金はあまりない普通の家庭だったけど、私の欲しかったものが、ここにはあった、暖かい食事にそれを一緒に囲む両親と普段の生活では元気に走り回れて、お隣の男の子とは幼馴染って言う王道な関係にさえなれていて、幸せの絶頂期といえる状態にあった私は、欲しかったものが与えられすぎて調子に乗ったのかもしれない。

和人が頼れるのは私だけしかいないんだって、そういう風に勘違いをいつの間にかあの当時はしていたんだから。

「父さんと母さんの言うこともっとよく聞いて、和人の心の声に耳を傾けていたら、もっと違ったのかなぁ」

和人は向こう側の私とは病弱じゃないとかの違いがあるけど、両親や家庭環境があまりにも似すぎていたから。
邪魔者を見る、ううん私のあの2人とは違ってあれは憎んでさえいる目を和人に向けているご両親の姿、あの人達に何があったのか、そんなことなんて知る由もないけど私はいつの間にか、和人に手を差し伸べていた。

それで彼を助けた気になっていたんだと思う、彼も一緒に暖かい場所にいて私と一緒に笑っている姿を見て、彼は救われたんだ、なんていう見当違いな感情を私は抱いていたんだし、最低だったなあ

の頃の私、私たちの家にいてから自分の家に帰った後、彼がどう思うのかも考えずに無責任ともいえる身勝手さで彼を無理矢理家に連れ込んでいたんだし。

でも私は世話を焼いているうちにいつの間にか彼の事が好きになっていることに気が付いていた。だけどこの想いを両親に見抜かれた後、言われた言葉だけは私の中に残ってる。

『明日香、彼の事を考えるのなら、もっと彼の心の声に、聞こえない声に耳を傾けてみなさい』

『明日香ちゃん、今のままの貴女じゃぁ、彼とは結ばれないわよ、あの子の目を正面から見て何度か話してみて』

多分2人は遠からず私達の関係が今の状況になることを見越していたのかもしれない。

だからこそ、私に対してこの言葉を言っていたんだろう。

実際に文月学園で再会した和人は、別人とも言えるくらいの物静かな性格になっていた上に、私の事を名前では絶対に呼んでくれなかったから。

この時に私はようやく気が付いた、自分自身の過ちに、転生して向こう側と合わせた年齢こそ三十近くになるけど、私の人生経験は和人が経験したものよりも拙いものだったのだから。

だからこそ、私は間違いを犯してしまったんだと確信してしまう、

中学時代に遠い所に和人が言ったとしても、私は和人に会いに行くべきだったんだ、私が先に言った理由なんてただの後付でしかない。
だって、私は遠いからといって彼の所を訪ねようとはしないで、彼から訪ねてくるのを待っていたのだから、本当は私から彼の所に行かなくちゃならなかったんだ、私が本当に彼の事を好きならば、私が積極的にならなくちゃいけなかったんだ。

そんなことを考えながら、私は自分が所属しているDクラスの扉を開けて、クラスメイトたちに挨拶をしていた、いつの間にか自分の心を隠す技だけは成長したんだな、とか考えながら。

ついに始まったBクラスとの戦い。
いつも通りに坂本の演説に力を得た、といわんばかりのFクラスの連中に最後の言葉を放つ坂本の姿。

「よし、行って来い！！狙いはシステムデスクだ！！」

『サー！イエッサー！！』

坂本の言葉に対して、まるでも何も軍隊仕込みとも言うべき返事とクラスメイトの姿を見ていた俺は、少し遅れて教室を後にした。

『いたぞＢクラスだ！！』

『高橋先生を連れているぞ！！』

『生かして帰すなー！！』

既に俺が到着した時には各所で乱戦とも言うべき状況が展開されていた。

辺り一面に総合科目のフィールドが展開されており、各人が召喚した召喚獣と、それぞれの点数が当たりにごった返すように表示されていた。

『Ｂクラス　野中　長男　ＶＳ　Ｆクラス　近藤　吉宗
総合　１９４３点　ＶＳ　７９４点』

『Ｂクラス　金田一　祐子　ＶＳ　Ｆクラス　武藤　啓太
数学　１５９点　　ＶＳ　６９点』

『Ｂクラス　里井　真由子　ＶＳ　Ｆクラス　君島　博
物理　１５２点　　ＶＳ　７７点』

やはり、強さの桁が違いすぎるな、圧倒的過ぎる。
Ｆクラスの第一陣が目の前で次々と返り討ちに合うが、それぞれのフォローこそきちんと行われており、今のところは戦力の分断も心配は要らないだろうが、所詮は時間の問題か。

そう結論付けた俺は目の前の集団に歩いて行った時、姫路もようやく到着した。

「すまん！吉井、遅れた！」

「お、遅れ、まし、た……　ごめ、んな、さい……」

「東城君！姫路さん！！」

俺と姫路の姿を確認した吉井とＦクラスの連中の表情に、安堵の

色が浮かび、Ｂクラス全員の目の色が変わる。

『現れたぞ！姫路　瑞希と東城　和人だ！！』

この声を聞き改めてＢクラスの連中の間に緊張が走り、警戒感も顕に陣形が組み直される。
坂本の作戦では、この渡り廊下を押さえて連中を教室に押し込めることが、一番の重要点だからな、本気で行かせてもらうぞ！！

「木村先生！Ｂクラス本条　百合江です。Ｆクラス東城　和人くんに物理勝負を申し込みます！」

「木村先生、Ｆクラス所属の東城です。勝負を受けます」

「百合江！私も手伝うわ！」

早速俺に対して勝負が挑まれる、横目で確認すれば姫路も同じ様に２人から勝負を挑まれていることから、早急に潰したいという意図が丸分りだった。
だが、１０人しか来ていないと言うのに、俺と姫路に４人も投入とは随分と思い切ったことをするな。

「「「試獣召喚！！」」」

俺たちの声に応えてお馴染みの召喚獣達が姿を現す。俺の方はいつもとは違い神通棍ではなく、ドリルを連想させるような刀身が回転している剣を持っていた、敵の方はモ〇ハンのガンランスとも言うべき砲口の開いた槍と、日本刀を持った召喚獣であった。

「東城くんの召喚獣って、Dクラスの時と武器が違うんじゃない？」

「ああ、俺の召喚獣は少し特殊でね、高得点を取得すると腕輪が付くのではなくて、武器が変化するのさ」

「それって」

「まさか……」

俺の召喚獣を見た2人は疑問顔で俺に対して質問してくるのだが、俺は当たり障りのない返答を帰していた。

言えない、初めてこのあまりにも欠点だらけの召喚システムの術式を見てイラッとして、ついつい俺のだけ改良して別システムで術式を流してるなんて！まあ、普段は他の生徒と同じ術式で流れる様

に偽装しているから、この世界の解析技術ではばれない自信がある。
あのババアにだけはバレない様にしないとな、まあ、召喚する機会も数回だけだしバレることはないだろう。

当たり障りのない言葉で返したのだが、彼女たちは嫌な予感がしたのか一筋の冷や汗が、頬を伝っていた。

『Ｆクラス　東城　和人　ＶＳ本条　百合江　＆　小日向　悠歌
物理　６４１点　ＶＳ　１６９点　＆　１８１点』

「「ん〝なッ！き、教師並み！？」」

「前回は時間がなかったから、今一つだったが今回の準備は十分だ！！」

この学園では教師並みともいえる点数を持つ俺の召喚獣を見て、驚愕のあまり固まる２人の姿に俺は構わずに、まずは１人を一瞬で片付ける。

「きゃあ！！」

「悠歌！？　ッよく「終わりだ」キャッ！」

俺の召喚獣が動いた瞬間に倒され、もう一人もこの光景を見て正気に返ったのか、慌てて構えようと動くのだが、全力戦闘時の俺の動きを容易く再現できる今の召喚獣に隙はない！！

「戦死者は補習！！」

倒された後、どこからともなく西村教諭が走ってきて、２人を捕まえて連行していく。

『本条と小日向が戦死したぞ！！』

『それだけじゃない、菊入と岩下までだ！！』

『な！姫路　瑞希に東城　和人噂以上に危険な相手じゃないか！』

この報せを受けたＢクラス６人の表情には明らかな驚愕と言う感情が浮かび、戦意が明らかに低下していた。

戦意が挫かれて明らかに統率と呼べるものがなくなっていくＢクラス、それまで姫路と何かを吉井は話していたのだが、姫路が後退

していったことから、恐らくは特殊能力を使った姫路を気遣ってのものだろう。

「み、皆さん、頑張ってください！」

立ち去る寸前に全員に対して姫路の言葉が投げかけられるのだが、これによりFクラスのバカ共の戦意は鰻上りと言わんばかりに上昇し、逆に敵は俺が引かずに前線に残ることから、尻込みして撤退の機会さえ窺っている者の姿さえ見える。

どうやら予想以上に根本の奴はクラスの中で嫌われているようだ、普通に人望を集めているのであれば、ここでよりこいつらは奮い立つものなんだけどな。

「東城君、まだ戦える？」

「問題ないさ、吉井、野郎共！このまま一気に押し切る！突撃ぃ！！」

『ウオオォォォォオー！！！』

俺に対して姫路と同じ様に気遣うように声を掛けてくる吉井、この姿には打算的なものはほとんど感じられず、こいつは多分だけど

底抜けのお人よしなんだ、という印象を抱かせるに十分だった。
こういった奴が主人公といえる存在なんだろうな、横島さんも打算無きお人よしだったし。

だけど、今は感傷やそういったことに浸っている暇は無い！せっかく出来た隙だ、このまま押し切らせてもらう！

その勢いで俺は周りにいた連中に命令を下すと、連中もノリノリで返事を返し、この気迫に気圧されたBクラスの連中を相手に、圧倒的な点数差があるにも拘らずに挑み始めて、こちら側に流れを押し始める。
気持ちで負けたものは、たとえ圧倒的な戦力を保持していたとしても、勝つことは不可能だ、これは向こう側で学んだこと、たとえ圧倒的な戦力差があったとしても只管耐え凌いでチャンスを待つ、俺たちの戦いはそういったことの連続だった。

だからこそ、戦意を失いつつあるBクラスは最早敵ではない。

『中堅部隊と入れ替わりながら後退！絶対に戦死だけはするな！』

「させてもらえると思うのか！？」

新たな命令を下して後退しようとするBクラスに対して、俺は更に追撃を掛けるべく最前線へと躍り出て、俺の周囲には同じ様に士気が十分なクラスの連中が続く。

怒涛の勢いで気持ちが弱りきったＢクラスに雪崩れ込む俺たち、そんな状況下の横で木下と吉井に姫路達が戦線離脱するのを、横目で俺は確認しつつも追撃戦を優先して突入するのだった。

それから坂本からの伝令が俺たち最前線にいた者達に対して届いた、１６時以降は試召戦争の状況をそのままに明日に持ち越しのため中止せよ、という伝令を受けた俺たちは終了した様子を見せるＢクラスの連中をみた後、俺たちは他の連中を引き連れて教室へと戻ってくる。

そこには姫路に膝枕をしてもらい、全身に謎の大怪我を負って気を失っている吉井の姿があった。

というか俺たちのいない間に何があった？

「坂本、あの協定はどういった状況で結ばれたんだ？」

そう、俺が今一番に疑問に思っていることはこれだった。
あの根本が何の交換条件や自身が圧倒的有利になるような条件を突きつけずに、こちらだけが有利になるような条件を提示してくることなど、まずありえないからだ。

それに教室全体の様子も気になる、穴だらけにされた卓袱台や島田と木下などが協力して捨てている壊されたシャーペン。
これらを確認すれば根本がどのような策を行使してきたのか、分るというものだ。

「協定自体はあちらさんから持ってきたものだ、あちらの指定した場所に来て欲しいとの事だったからな、そこに行き戻ってきたら」

「教室はこんな状況だったというわけか」

俺が教室全体へと走らせていた視線に気が付いたのだろうが、元

々は話すつもりでもあったんだろう。

協定のことに関しての言葉に続けるように言っていた。俺の言葉を聞いた坂本は一つ小さく頷き俺に一つのリストを手渡してくる。

「そいつが今回の戦死者のリストだ、結構馬鹿にならん被害が出てる」

「確かにな、俺がフォローしていたが、やはり限界はあったな」

「それだけじゃない、戦闘自体は他の場所でも起きていたからな、そこで出た被害もそこには集計してある」

「……　渡り廊下での戦闘自体は圧勝といえる結果に終わらせ、奴らを教室に押し込んだが、階段付近やらトイレ付近で発生していた戦闘で被害が拡大したみたいだな」

「まあな、主力を欠いていたぶん、連中に蹂躙されちまったよ」

そこに書かれている被害状況は決して馬鹿に出来るものではなく、逆に酷いものといえる状態だった。

戦死者は８名、一般的に重傷者と言える点数が極端に低下したものが１０名近く、合計で１８名もの被害を出したわけだな、このクラスの全人数は５０名だから３分の１近くもの被害を今回の戦闘で出した計算になる。

「被害は全体で見ればワシらのクラスは酷いものじゃが、坂本よ、東城が居らんかったらもっと拡大していたのではないか？」

「当たり前だ、東城が最前線に敵主力を向かわせて、そいつらを迎撃しつつ削ってもくれたしな、今頃は向こうの方も馬鹿にならん被害が出ていると分ってる頃合だろうさ」

「そうね、前線にいて分ってるけど多分２０人以上やられても、ウチらのクラスじゃあ当たり前だろうし」

何時の間にやら俺たちの近くに来ていたのか、島田と木下がリストを覗きながら俺たちに話しかけていた。

色々と話し始めた俺たちの耳に、ようやく目が覚めたと思われる吉井の声が聞こえてきた。

「う、うーん……　ここは？」

「吉井くん！目が覚めたんですね！よかったぁ」

どうやら姫路の膝枕に破棄がついていない様子だな、吉井、まあ

気が付かれても話が進まなくなるから、気付かないままでいて欲しいがね。

「目が覚めたのか吉井、大丈夫か？」

「あ、東城君、ありがとう、大丈夫だよ」

「それならば良いが、というか試召【戦争】だからといって本当に怪我をする奴があるか」

「あ、あはははは……　ちょっと色々あってね」

純粋に心配して俺は奴に声を掛けるのだが、島田の奴が急に不機嫌になったこと、教室の隅にいた須川が吉井を呆れた目で見ながら、苦笑いを浮かべていることから、島田に何かやらかしたらしい。

恐ろしい視線を向けてくる島田にびくびくと怯えながら、吉井は渇いた声を上げて誤魔化していた。

そして目が覚めた吉井に対して現状の説明が坂本から、簡潔に行われて話題は修正される。

「じゃあ多少のハプニングには見舞われたけど、順調に進んでるのかな？」

「まぁな、順調に進んでいるといえば進んでいる」

そういっている吉井の言葉に坂本は頷いて答えて、更に言葉を続けようとしたら、音もなくムッツリーニが坂本の背後に着地する。

「……（ツンツン）」

「お、ムッツリーニか何か変わったことが起きたか？」

そう、奴は直接戦闘に参加することは無く、諜報員として各所の戦闘や、漁夫の利を狙おうというクラスに関しての監視や情報収集を行っていたのだ。

だからこそ奴が戻ったということは、それらの情報を得られるということなのだが、坂本との打ち合わせよりも早いな、何かがあったというわけか。

「……　Cクラスに動きがあった」

「ん？　Cクラスにか？」

「……　（コクコク）」

Cクラスと聞いて俺は少し引っ掛かりを覚えていた。
根本に関係することだったが、ん、思い出した！！

「漁夫の利を狙おうってのか、いやらしい連中だな」

「ちょっと待て！坂本！」

「どうした、東城？」

「すまんが、ちょっとこっちへ来てくれ、ムッツリーニもだ」

「……（コク）」

突然俺が珍しく大声を出したのか吃驚した様子を見ている坂本、
それに構わずに俺は坂本の肩を掴み、ムッツリーニにも声を掛けて
廊下へと出て行く。

廊下へ出て、誰もいないことを確認した後、突然の俺の行動に疑問を隠せない2人に対して俺は向き直る。

いつもの俺ならば、絶対にしないと自覚できる行動だしな、いい加減に説明しないといけないな。

「廊下へと出てきてもらった理由だが、ムッツリーニ、Cクラスの代表の名前は掴んでいるか？」

「……　無論、Cクラスの代表は小山　友香……　根本の彼女だという噂がある」

「っ！なるほどなぁ、その噂が本当だと根本が罠を仕掛けているってことか」

流石はムッツリーニに坂本、ムッツリーニは名前だけではなく噂に過ぎない所まで把握し、坂本に至ってはこれを聞いただけで根本の大方の狙いを察したのだろう、流石にかつては神童と呼ばれていただけはある。

「ああ、間違いないだろうというか、あいつの性格でこんな美味い状況下で罠を仕掛けていないということ自体がおかしい」

「確かにな、Ｃクラスとは不可侵条約を締結したかったんだが」

「……　１６時以降の試召戦争に関することを全面的に禁止、を盾にとって来てこっちに濡れ衣を着せるつもり」

２人とも奴の狙いが分ったようで険しい表情をしており、改めて根本の小物さにある意味での警戒感を高めているのだろう。

「こりゃぁ、不可侵条約の締結を見送って、今日は状況を放置したまま帰るか？」

「いや、罠には掛かってくれ坂本」

「……　考えを話せ、東城」

坂本はCクラスとの交渉を打ち切って帰ろうという意思を見せるのだが、俺はそれに待ったを掛ける。
困るんだよ、戦後まで俺が見据えた情報戦関連で、今ここで根本の奴に余計な警戒感を抱かせるのはな。
俺の言葉を聞いた坂本は既に険しくしていた目元を更に険しくし、俺を射抜くように見据えてくる。
そんな奴の視線を真正面から見て、俺は全部ではないが考えの一部を話す事を決意した。

「俺の考えは。根本の奴に最後まで余計な警戒感を抱いてもらうのは不都合といえるのさ」

「確かに、ここで何もせずに帰るほうが不自然だな、CクラスがFクラスとの試召戦争の準備をしているのに、対策も何もしないなんてな」

「ああ、だからこそだ、根本には自分の策が上手くいっていると錯覚させ、このまま奴に姑息な手を使わせる」

「そうすれば、奴は更に油断するだけじゃなく、つるんでいるCクラス代表の油断も誘えるわけか」

「そうだ、俺達が最低クラスのバカでしかない、と奴らに錯覚させてこの状況を逆手に取るのさ」

そうこれは向こう側でも良く使っていた手段である。敵に自分たちの戦力や戦術が弱体だと錯覚させて調子に乗らせ、チャンスを待ち時が来たら徹底的叩き潰す、という方法はな。

だがこれだけでは全部を話したとは言えない、実際に奴の目もい加減に話せや、と言わんばかりに輝いているしな。

「Cクラスについては坂本、お前のことだ他のクラスがこういった事を仕出かした時の為に、準備あるんだろう？」

「ああ」

「だったら、もうそっちは任せるが、俺が言った根本に最後まで警戒感を抱いてもらっては困る、っていうのは戦後処理に関わるのさ」

「戦後処理？　お前根本に何を仕掛けようとしているんだ？」

「情報戦だ、それも試召戦争中ではなく、戦争後に主眼を置いている、な」

「情報戦だと？　根本は学校中から嫌われていると言えるからな、悪い噂や情報はすぐに広まるだろうが、どんなものを流すんだ？」

「それは言えない、と言うよりも既に仕込みは終わっている。後は戦争が俺たちの勝利で終われば、分るさ、坂本は今回も設備の交換を行わないんだろう？」

「まあな」

「そこまでくれば、Ｂクラスとの交渉材料として使われる奴の末路が分るんじゃないか？」

坂本はあごに手を当てて考え込むような仕草を見せる。
俺が言った言葉を吟味しているのだろう。暫く考えていたが不意に目つきを元に戻すと、不敵な様子さえある笑みを浮かべていた。

「ふむ、面白いじゃないか、東城、正直一時の間でも奴の掌の上で転がされるのは癪だが、戦後に施したって言うお前の策、期待させてもらうぞ」

「ああ、それとその際にはムッツリーニにも協力してもらう」

「……　任せておけ（グッ）」

「んじゃ、お前の考えの確認は済んだ、根本の野郎への処置は任せたぞ、東城」

「というか、元からそのつもりだっての」

そして俺たちは痺れを切らしてやってきた島田と木下に教室へと連れ戻される。

それから仕込みの確認がある俺は木下と共に、教室に残って、他の連中がCクラスへと向かっていった。

それからの事は語るべくもないだろう、やはりCクラスには根本がいて俺たちの予想に違わず、試召戦争に関する行為の全面禁止を盾にとって、襲い掛かってきたのだから。

まあ、その際に島田が吉井のことを名前で呼ぶようになったり、またまた消火器を使って窮地を切り抜けたりとか、あったようだ。

首を洗って待って居ろ根本、俺がお前をどん底に叩き落してやるよ、より悪辣な人間のやり方、その身に思い知れ！

5話　卑怯者と悪辣者（後書き）

次回でＢクラスとの戦争は終戦を迎え、彼が流していた情報戦と言う名の噂も判明します。
彼がどういう情報を流し、根本君はどんな状況に叩き落されるのか、乞うご期待くださいませ。

そして今回は視点が一部明日香嬢に変更されている部分がありますが、見にくかったら遠慮なく書き込んでください。
私自身が、視点の変更部に描写を入れることを好まなかったので、あんな書き方にしておりますので、見にくいとの声があれば変更いたします。

そんでもって、彼女の正体暴露と想いも出てきた次第であります。明日香嬢は和人に嫌われていると勘違いをしておりますが、彼は嫌っておりませんし感情の向きとしては、逆で好きと言う感情に近いです。
ですがまだ彼の感情自体はＬｏｖｅに近いＬｉｋｅなので、結構複雑な感情を抱いております。２人の関係自体も近くて遠いような、近いようなという複雑なものですので、これからの進展があるかはどうなるのやら、と言った具合です。

では今回はこの辺で。

6話　Bクラス後半戦再開

第六問　以下の問いに答えなさい

『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路　瑞希の答え

『C６H６』

教師のコメント

簡単でしたかね。

土屋　康太の答え

『ベン＋ゼン＝ベンゼン』

教師のコメント

君は科学をなめていませんか。

吉井　明久の答え

『B－N－Z－E－N』

教師のコメント

西村先生から話があるそうです。土屋君と一緒に職員室に来るように。

東城　和人の答え
『鉄・人・二十八号！＝無敵　　鉄人の化学式』

教師のコメント
　後で西村先生からお話があるそうなので、土屋君に吉井君と一緒に職員室に来るように。

～馬鹿とテストと霊能者～
～第６話　Ｂクラス後半戦再開～

その日は偶然にも少しだけ早く起きて、気も向いたから俺は七時を少し過ぎたくらいに登校していた。

だが、こんな時間ではありえない人物を旧校舎の会談で発見した。

「吉井？　お前こんな所で、ムグッ」

それは吉井だった。

何故か階段の所でしゃがんで上の踊り場の様子を窺っていたのだが、疑問に思った俺が声を掛けたら奴は非常に驚いた様子を見せて、振り向き俺の口を塞いでいた。

「少しだけ静かにして」

口を塞いだ後奴は小声でそう言って来たので、俺の疑問は深まるばかりだったのだが、その踊り場から聞こえてきた声に疑問は氷解した。

「か、返してください！！」

「ハン、そう言われて返す奴がいると思っているのか？　それに俺ってさ凄い親切だろ？　読まずにちゃんと返してやるよ……試召戦争が終わった後でな」

「そ、そんな……」

「おっと口が滑るが、お前こいつを返して欲しければ、自分がどう行動すれば良いのか、分るよな？　期待してるぜ、Ｆクラス１番の優等生の姫路　瑞希サン？」

「……　っ！」

この耳障りで不愉快な声は、根本か、それに姫路のこの焦った様子。

恐らく姫路は昨日、教室を荒らされた時に大事なものを根本に奪われたんだろう、それを元に姫路は脅迫されて今日の試召戦争についての動きを制限されている。

そういった所か、はっきり言って俺は根本と姫路の会話を聞いている間、反吐が出そうになるのを堪えていた。

そこで会話は終わったのか、階段を上っていく根本と思しき足音が聞こえた後、涙を堪えるように泣きたいのを我慢するような様子を見せる姫路が、階段を上っていくのを確認する。

「落ち着け、吉井」

「でも！あんなのってないじゃないか！！東城君は何も感じなかったのかい！？　姫持さん」

「間違いなく、泣いていただろうな」

「じゃあ、どうしてそう落ち着いていられるのさ！？」

肩を震わせて怒りを無理矢理押さえ込んでいるであろう吉井の姿、俺は吉井の肩に手を置いて、今にも姫路の元へと行きそうな奴を止めていた。

案の定と言うべきか、奴から返って来たのは理不尽とも言うべき姫路への根本の嫌がらせ、これに対する怒りだった。

「落ち着いてはいるが、平気じゃないさ、逆に驚いたくらいだよ」

「なにに、何に驚いたって言うのさ、東城君」

「奴が、根本があそこまで腐りきったクズだとは思わなかったからさ」

俺は今、ある意味での驚きに包まれていた。
何しろ根本があそこまでのクズ野郎だとは思わなかったからだ、純粋に一人の人を好きな少女の想いを平気で踏み躙り、ゲラゲラと品格のない笑みを浮かべてそれを楽しんでいる正真正銘の下衆野郎。

「気が変わったさ、吉井」

「と、東城君？」

「根本は徹底的に、それこそ二度と立ち上がれないように、こんな考えを抱けないようにしてやる」

そう、俺は今までは根本も学生でありまだ将来がある人間でもあるから、ある程度は立ち上がれる隙を残してやろうと考えていたのだが、さっきまでの姫路とのやり取りを見て考えが完全に変わった。

「吉井」

「な、なに？」

「協力してくれ、姫路の大事なものを取り返すこともそうだが、奴は今のままだとまた同じ事を必ず繰り返す」

「……」

「だから、奴にこんな事をした時の報いを受けさせてやる」

怒りは少しだけ収まったのか、俺の話を大人しく聞いている吉井の姿、俺は吉井の目を見つめて協力を頼み、吉井は黙ってそれに頷いていた。

それから他のクラスはＨＲを始めそうな時間帯になったとき、登校していた坂本は俺たち全員を集める。
恐らくは昨日言っていたＣクラスに対する予備の策を実行するのだろう。

「じゃあ、昨日言っていた作戦、こいつを実行に移すぞ」

神妙と言うか、真剣な表情をしている坂本の表情に全員が同じ様な表情へと変わるのだが、吉井の奴だけは何故か疑問顔になっていた。

「作戦？　開戦時間は９時からだよ？」

この言葉を聞いた俺の心の内に浮かんだのは、いや、というかお前も昨日坂本の話を帰る前に聞いていただろう。と言うことだった。
そう俺は思うと同時に、鈍い頭痛がするのだが、周りは俺の心境など知ったことではない様子で話は進んでいく、吉井よお前はまさか姫路の事に気を取られていて、昨日のことを忘れているんじゃあ

るまいな。

「坂本が言っていたのはCクラスに対してだ、吉井」

「あ、そうだった、どんな作戦を用意したの？　雄二」

「……　まあ良い、作戦ってのは秀吉がこいつを着て、Cクラスに行って貰うのさ」

俺の言葉に昨日帰る直前に坂本が話していたことを思い出したらしい吉井が、坂本に声を掛ける。

こんな吉井の様子に坂本は一瞬何かを言いたげな顔になるのだが、すぐにそんな様子は奥へと引っ込むと鞄の中から、文月学園女子制服を取り出した。

大体分ってはいたことだが、坂本の奴はどうやってこれを手に入れたんだろうか？　恐らくはムッツリーニ辺りが手を回したんだろうが……　坂本が手にしている姿は性犯罪者にしか見えないな。

「それは別に構わぬが、ワシが女装してどうするというのじゃ？」

いや構えよ、お前は男だろ木下！？　そんな俺の驚愕ともいえ困惑とも言える感情の中、周りの話は進んでいく。

「秀吉には木下　優子として、Ａクラスの使者を装って貰う」

やはり狙いはそこか、木下　優子と木下　秀吉、俺は姉の方とは直接の面識こそ無いが噂くらいは聞いている。
木下姉弟は一卵性双生児並みにそっくりで、顔見知りでも同じ格好をされたら見分けが付かないとかな。それに違いとしてはテストの点数とか喋り方とかあるが、同じ格好をされたら喋り方くらいでしか普通の人間では、見分けられないだろうし。

まあ、ＣクラスをＡクラスとして挑発するのにはもってこいか。

「それじゃあ秀吉、こいつに着替えてくれ」

「う、うむ……」

「ひ、秀吉！？」

「……ッ！！（パシャパシャパシャパシャパシャパシャ！！）

坂本から制服を受け取り、その場で着替え始める木下に加えて、何故か女子の生着替えを公認で見れた！とか言わんばかりに騒いでいるバカ共。
俺はそんなバカ共から視線を放すと、坂本へと向き直った。

「坂本」

「ん、なんだ？」

「Ｃクラスへの挑発だが、俺もＡクラスの奴に変装して参加して良いか？」

「出来るならありがたいが、どういう風の吹き回しだ？」

「まあ、任せておけ坂本、気が変わったのさ、それにあと１０分位したらＣクラスに向かうんだろ？」

「ああ」

「なら、渡り廊下にある男子トイレ付近で合流だ」

そう、これは根本が他のクラスを巻き込んだ時から考えていた事の一つ、俺には向こう側で培った実績があるからな、こういう時に力を発揮できる。
案の定俺の言葉に坂本は怪訝な表情を浮かべてくるが、俺は坂本の問いに答えることはせず、一方的に時間を指定して教室を後にす

る。

こんな俺の行動に着替え中の木下と、そんな奴の姿を見るのに必死となっている吉井とムッツリーニ以外の姫路と島田が、坂本と同じ様に怪訝な表情を浮かべていた。

そして、俺は男子トイレの個室に入るとある一つの薬を取り出す。

それは【ヘンゲリンα？】と箱に書かれていた、これは服用すれば３０分の間エクトプラズムが全身を覆い、自身が望んだ人間の姿に変われるというオカルト全開の薬である！！

フッ、こいつを手に入れるために横島さんと共謀し、美神さんの下着を引き換えに厄珍のオッサンと物々交換したのは、俺の記憶に鮮明に焼きついてる。

何しろバレた後、横島さん共々美神さんに折檻されて気が付いたら、川を渡りきった隣に小さい頃に俺を可愛がってくれて、俺が小

学生の中学年頃に亡くなった父方の祖父母がいたし。

まあ、そんなことはさておいて俺は、この２４錠ある薬の２錠を取り出して、予め購買で買っていた水と一緒に飲むと携帯の画面に映った利光の姿をジッと眺める。

少ししてボワンというよくアニメとかで、なる煙の音と同じ音が鳴り響き、俺の姿が変わったことが分る。

「フッ、僕の名前は久保　利光、か」

今日の為に予め用意していた手鏡で見れば、俺の姿は完全に利光の姿となっていた。

携帯を確認すれば、ちょうど坂本達との合流の時間となっていた。

個室を出たと同時に俺の目の前にいたのは、吉井と坂本の姿であった。

「え、久保君？」

「……　いや……　まさか、東城か！？」

「ああ、そうだ俺だよ」

「「！？」」

利光の姿で出てきた坂本と吉井は驚愕した様子を見せる。

まあ、既にＨＲは始まっているからな、Ａクラスの利光がここにいるはずが無いということで、坂本は正体にたどり着いたんだろう。

だが、まだ２人は半信半疑だろうからな、俺の声を出して声を掛けてやらんとな、案の定ひどく驚かれたがな。

「驚いたぞ、見た目は完璧に久保じゃないか」

「でも東城君、声も久保君にそっくりじゃないと気付かれちゃうと思うけど……」

「フッ、心配いらないさ、吉井くん」

「！？　く、久保君の声だ！！」

「やっぱ出せるか」

見た目こそ完璧に利光のものなのだが、声は俺のままであったために吉井の奴の疑問は当然だったであろう。

だが、俺が利光の声に変えた瞬間、再び吉井は驚愕の表情を浮か

べて、坂本はある程度慣れたのか冷静になって面白そうにこちらを見ていた。

「完璧だぞ、秀吉と合わせれば確実にCクラスをAクラスに向けることが出来る！」

「うん！間違いないね、雄二」

そういってはしゃぐ2人の姿を見ていたのだが、1人足りないことを俺は思いだした。

「ん？　そういえば木下は？」

「というか、東城よ、今の秀吉の格好を思い出せ」

「ああ、なるほど、それで外にいるわけか」

俺は木下がいないことに疑問を持ったのだが、呆れた様に突っ込んでくる坂本の言葉から、今のあいつの格好を思い出して納得する。

というか、今の木下の格好で男子トイレに入ったら、木下姉が色々な意味で誤解される状況が出来るかもしれないな。

「んむ？　雄二に明久と、久保？　いや、まさか……」

「ああ、俺だよ」

「なっ！？」

「あの反応僕らもしたよね……」

「というか、普通はああなるっつーの」

そしてトイレから出てきた俺たちを待っていたのは女子の制服を着た木下であった。

……　見た目はどこからどう見ても美少女だ……　というか普通は男の骨格でくびれなんて出来ない筈なんだが、何でこいつにはくびれがあるんだろうか？

まあ、そんなことは置いといて、やはり利光の姿で俺の声を出すと木下も驚愕していたが、その後ろでは吉井と坂本は呆れを隠そうとせずに、先程までのことを回想している様子だった。

まあ、そんなこんながあって僕たちはCクラスの教室が目の前にある所まで来ていた。
試験の結果で教室の大きさが変わるから、配置自体も変になっちゃうのは分るけど、もうちょっと分りやすい配置にして欲しかったよね。

「さて、俺と明久が一緒に行けるのはここまでだ、ここからは秀吉と東城の2人で行ってもらう、頼むぞ2人とも」

「ああ、任せておくと良いよ」

「気が進まんのう……」

雄二の言葉に何故かノリノリの東城君と、気が進まない様子を見せる秀吉。
まあ、秀吉は仕方が無いかもしれない、自分のお姉さんを騙って人を騙すんだからね、決して気持ちのよい話じゃないよ。
でも東城君は何でノリノリなんだろう？　まあ、たぶん今朝のことがあったからなんだろうけど、でもさ小声で、懐かしいなぁ人を騙すのって、とご機嫌というか凄い上機嫌で呟いているし、君はこんなことが何回もあったの？

「そこを何とか頼む、秀吉」

「むぅ、仕方が無いの……」

「悪いな。とりあえずあいつらを挑発してAクラスに向けるようにしてくれ、今のお前ら2人なら絶対に可能なはずだ」

秀吉は演劇部のホープで演技が達者だから、心配は全くないし。同じ様に東城君もさっきまでの久保君の演技は完璧だった。
でもこうして考えてみると、東城君に弱点ってある（実はある）のかな？　変装も演技も達者で勉強も出来てイケメンで、料理も上手で……　グギギギギ……　コイツハスベテノオトコノテキカ？

「……　明久、お前何を考えている？」

ハッ！？　東城くんの良い所と言うか今出て来てた部分を考えてたら、いつの間にかトリップしてしまったらしい。
雄二が僕をバカを見る目で見ていることから、自分がどうなっていたのかが分るけど、僕はバカじゃないやい！！

「まあ、バカが少し場を乱したが、行ってくれ2人とも」

「はあ……。あまり期待はせんでくれよ……」

「では行こうか、木下さん」

溜息をついて足取りも重く向かって行く秀吉と、ノリノリで今にもスキップしそうな様子で向かって行く東城君、実に対照的な2人だった。

「ねえ、雄二、大丈夫なの？　特に秀吉が乗り気じゃないみたいなんだけど」

「大丈夫だろう、仮に秀吉が何らかのヘマをしても東城が上手くフォローをするだろうから、問題ないさ」

今にも黒い影を背負い込みそうな秀吉が心配だし、雄二に問いかけたけど雄二からは東城君を信頼している声が返ってきたし、ああ言っているけど秀吉のことも信頼しているんだろうけど、でも。

「……　心配だなぁ」

「シッ、２人が教室に入るぞ」

僕の言葉を遮るように雄二は声を掛けてきて、僕は雄二の言葉に従い声を潜めてＣクラスの前を見る。
２人は一度少しだけ深呼吸をした後、扉を勢いよく開け放って入ると言った。

『静かにしなさい、この薄汚い豚共！！』

『全く木下さんの言う通り、聞くに堪えない雑音とはこの事だね、この下等生物共め！！』

……　うわぁ。

「流石だな、２人とも」

「うん、これ以上ないくらいの挑発だよね……」

もう何も言わずに出て来てもとっくにＣクラスの敵意は、Ａクラスに向いているんじゃないんだろうか？

『な、何よ！アンタたち！！』

この甲高くて少しヒステリックを起こしてそうな声は、昨日会った代表の小山さんだね。

うん、凄い勢いで怒り狂っているのが、この場に居ても良くわかるよ、何しろいきなり豚に下等生物呼ばわりだしね。

『アンタたちＡクラスの久保と木下ね？ちょっと私たちよりも点数がいいからって、調子に乗ってるんじゃないわよ！何の用よ！？』

『話しかけないで豚臭いわ！！』

『下等生物如きが喋れるというだけでも度し難いのに、こちらに話しかけてくるとは言語道断だね！！』

自分達から来たのに豚臭いとか、下等生物で言語道断、だとかもう突っ込みどころが多すぎて突っ込めないや。

それに知名度としては2人のものは申し分ないだろうし、特に久保君は学年次席で木下さんは弟の秀吉よりも有名、それに秀吉は女装している上に、東城君は原理の分らない方法で久保君に変装しているから、見分けるのは至難の業だ。

その上に相手の冷静さを怒りで奪っているから、冷静な観察力と洞察力も奪える。まさに完璧な作戦だね。

『私達はね、こんな臭くて醜い教室が同じ学校内にあるなんて我慢ならないの！！』

『フン！君ら下等生物には豚小屋でさえもったいないさ！！下等生物は下等生物らしく試験管か、埃の中でじっとしていたまえ！』

『なっ！？　言うに事欠いて私達はFクラスじゃなくて、もっと酷い所がお似合いですって！？』

2人は別にFクラスとは言っていないよ！？小山さん！

『この手が埃で穢れてしまうからね、本当はしたくないのだが君たちを相応しい場所へ僕達が送ってあげるよ』

『そういうことよ！久保君の言う通り私達の手が穢れるから本当は嫌なんだけど、あなた達、ちょうど良く試召戦争の準備をしているみたいね、覚悟なさい！私たちＡクラスがＣクラスを絶望のどん底に叩き落してやるから！！』

そういって２人は荒々しい足音を立ててＣクラスを後にする。

「これで良かったかのぅ？」

「坂本、こんなもんで良かったか？」

どこかスッキリしたと言わんばかりの表情をしている２人、まさか君達、特に東城君はストレス発散したいから参加したとか、そういう理由じゃないよね？

「素晴らしい仕事だ、２人とも、良くやってくれた」

『Fクラスなんて相手にしてられないわ！！Aクラスとの試召戦争の準備を始めるわよ！！』

Cクラスの教室からは完全にヒステリックを起こした小山さんの声と、それに賛同するCクラス生徒たちの声……　何だろうね、この胸に広がる言いようのない罪悪感って。

「そんじゃ、もうCクラスについては心配はないだろうから、クラスに戻るぞ、そろそろ開戦時間だ」

「あ、うん」

いけないいけない、今は余計なことになったことに気をとられている場合じゃなかったよね、開戦まで後二十分にまで迫っているし、戻らないとっていうか。

僕達の後ろで、アニメとかでよくあるあのボワンという効果音が聞こえると、そこにはいつもの東城君が立っていて、突っ込む気さえなくなった僕達は完全に流して教室へと向かって行ったよ。

回線まで後十分を切った時間帯、教室へと戻ってきた俺と吉井は、演説の為に前に出ようとする坂本を呼び止めていた。

「坂本」

「雄二」

「どうした？　お前ら」

「頼みがあるんだ」

呼び止めた後、教室の外にさえ出たものだから坂本の表情には、疑問と言うよりも少しの苛立ちがあったようだが、吉井の真剣な表情を見たと同時にそれは奥へと引っ込んでいた。

「……　言って見ろ」

「姫路さんを今回の作戦から、外して欲しいんだ」

「理由を言え、そうすれば考えてやらんこともない」

「理由は言えない、でも、確実に姫路さんを外してほしいんだ」

「……　東城」

真剣な吉井の口から放たれたそれは姫路の不参加要請だったのだから、流石の坂本も疑問と言うか、何かがあったと思ったのだろう。

吉井の奴に理由を確認しようとするのだが、吉井ににべもなく突っぱねられる。

一歩も引く様子を見せない吉井に、困った様子を見せる坂本、当然だ、今や姫路は俺と並んで主戦力の一角、それを理由も言わずに不参加にしてくれと言っているのだから、他の連中の士気にさえも関わってくる。

坂本は俺に確認を求めるような光を持った目を向けてくるのだが、俺はそれに首を横に振ることで答えて、理由を言えない事を坂本に伝えていた。

「それと、根本君の着ている制服が欲しいんだ」

「……　昨日から今までの間にお前に一体何があった？　明久」

「吉井、それじゃあただ同性愛者をカミングアウトしたとしか思えない変態だ」

言った後で自分でこの発言の意味に気が付いたのか、吉井の奴はショックを受けた表情で頭を抱えるのだが、坂本は表情に呆れよりも衝撃の色が濃い表情を浮かべていた。

まあ、時間もないしこれ以上話を進ませないわけには行かないな。

「まあ、吉井が変な事を言ったが、坂本、姫路の不参戦は了承してくれるのか？」

「条件がある」

「話せ」

坂本に姫路に関しての事を聞いたと同時に奴から返ってきたのは、条件の提示だった。

まあ、当然だろうから坂本に俺も即答で返事を返して、更なる言葉を待つ。

「まずは明久、お前は姫路が今日やるはずだった役割をやれ」
「姫路さんの役割って、突破口を開くことだったよね？」
「ああ、お前にはその突破口をどんな手段でも良いから切り開いてもらう」
「うん、分ったよ雄二！」
「そんで、次に東城」
「なんだ？」
「お前がBクラス左右両方の扉全てを受け持ち、明久が突破口を開くことに集中している間の時間を稼げ、やり方は任せる」
「了解」

坂本から与えられたのは、普通に考えれば達成困難とも思えるような内容、だが、吉井の表情にも俺にもこれが達成困難だとは考えてはいない。
吉井も俺も出来るからだ、そんなことくらいはな。

「だが、姫路が参加しないとなると士気の維持が問題だな」

「そのことなんだが、坂本」

「どうした？」

「俺に考えがあるから、演説は俺に任せてはもらえないか？」

「何を言う気か知らんが、まあ任せるぜ」

今の俺は完璧に悪戯小僧というべき笑みを浮かべているだろう、自分でも自覚できるし。

坂本の奴も似たような表情になっているし、たまらんね、根本以外のＢクラスの生徒には気の毒だが、味わってもらうとしようかねバカの恐ろしさって奴をな。

それから教室に入り、俺が教壇に立ったら教室にいた全員が疑問顔で俺の方を振り向いた。

教室を見渡せば、吉井が姫路と共に隅に寄ると何かを話していたから、恐らくは姫路の不参加について吉井の口から話しているんだろう。

まあ、吉井の奴はこういった場合には姫路に対して適切な言葉を選べる奴だろうから、心配は要らない。

だからこそ、こちらは任せてもらおうか！

「今回、俺がここに立った事に疑問に思う奴がいるかもしれないが、まずは言って置く」

『……』

「今回、姫路はBクラスとの最終決戦には参加できなくなった」

『『『何ぃー！！』』』

俺の言葉と同時に叫び声を上げるFクラスの面々、やはり姫路の存在がかなりの士気向上になっていたらしい。

『姫路さんが参加しないだって！？』

『おいおい、勝てるのかよ、それって……』

『いや、東城の奴は昨日は教師並の点数を持っていたし、大丈夫だとは思いたいが』

『姫路さんが戦場にいてくれたから俺は戦えたのに！』

それから漏れ出てくる数々の不満の声を俺は、一度教壇を強く叩くことで静かにさせて意識をこちらに向ける。

「確かに姫路の戦力は大きい、だが、皆！！」

『……』

今の所は俺の話を聞いているFクラスの面々だが、坂本が島田と木下にムッツリーニに対して何かを話していることから、間違いなく今回のことを話しているんだろう。

「聞いて欲しいことがある、Ｂクラス代表根本　恭二にはガールフレンドがいる！！」

『『『『！！？』』』』

「それも結婚を前提とした付き合いの仲の女子生徒だ！！」

『『『『な、何だとぉー！！』』』』

俺の言葉を聞いて士気は最高潮とも言うべき昏いに達すると同時に、理不尽な怒りが彼らの間に立ち上がる。

去年噂だけは聞いてた【異端審問会】通称ＦＦＦ団とも呼ばれていた連中、全ての団員が独り身の男子生徒で構成されカップルを妬んで行動していた連中。

偶然と言うか行動原理がまんま【全くモテない横島さん】と言える連中だったから、少し興味を持ったんだっけ、会長が須川と聞いていたことからカマを掛けたんだが。

まさか正解だったとは……　俺の言葉を聞くと連中は黒い覆面にマントといった出で立ちとなり、どこから取り出したのかムチやロウソクを手に持っていた。

正直、これ以上連中の前で演説をすることさえも憚れるんだが、仕方が無い。

「昼休みは必ず彼女の手作り弁当を食べ！その上に週末には【お泊

り】を実行している連中だ！！」

『『『『！！』』』』

「根本の奴は今、お前達が惨めなみなしごである事を高笑いと共に見下ろしているのだ！悔しくないか！！」

『『『『悔しすぎるに決まっている』』』』

「よろしい、ならば貴様らが取るべき行動はなんだ！？」

そう俺が叫んだ瞬間、黒覆面とマント集団は一斉に立ち上がる。

『諸君！我らは何者であるか！！』

『『最後の審判を下す。聖職者である！！』』

『異端者には！！』

『『死の鉄槌を！！』』

『男とは？』

『『愛を捨て、哀に生きるもの！！』』

『宜しい。――――――――――これより、２－Ｆ異端審問会出撃

する！！』

恐らくは声で須川だとは思うのだが、奴が真っ先にBクラスの扉を開けて飛び出していくのと同時に、午前9時を報せるチャイムが鳴り響く。

凄まじい足音が遠ざかり、既に配置についていたであろうBクラスの生徒たちの悲鳴も聞こえてくる。

そんな中で坂本は、明らかに状況を楽しんでいるような表情でこちらに近付いて来る。

「東城、お前って奴は……」

「まあ、やり過ぎな感じは否めないが、先に卑怯な手段を講じてきたのはあちらだからな、ならばこっちも相手の流儀に合わせたまでだ」

「いや、これはやり過ぎじゃろう……」

「……　あんな奴らに標的にされたBクラスの生徒たちも、不運だったとしか言えないわよね」

まあ木下と島田は完全にこちらを呆れている表情で見ているのだ

がな。
その後ろでは姫路と吉井が乾いた笑いを浮かべているし。

「だが、坂本いくら奴らがあんな理不尽存在に変わったと言っても」

「まあ、早々に返り討ちに会って終わりだな」

「ああそうだな、俺達も出陣と言うわけだな」

「おう、明久に島田と秀吉はさっき説明した作戦の通りDクラスに向かえ」

「了解」

「うむ、心得た」

俺が懸念したのはそこだった、幾らあいつらが理不尽な化身と化したとしても、所詮はFクラスの連中だ、あっさりと返り討ちに合って戦況はひっくり返るだろう。

だからこそ、戦況がひっくり返っていない今の内に出陣しておくのが理想だった。
既に島田と木下にも作戦の伝達が終わっていたのだろう、彼らに対して坂本は同時に指示を出すと不敵な笑みを浮かべ俺たちを見回していた。

「いいか、お前ら必ず勝つぞ！」

その坂本の声にその場にいる参戦する者達がそれぞれの言葉で応えると、俺達も廊下へと飛び出していた。

機能にダメージを受けていまだ回復できていない木下と、島田と分かれた俺と坂本は、Ｂクラスの前に到着していた。

すでにＢクラス左側で入り口は何故か封鎖が完了しており、どうやら異端審問会となった連中に恐れをなしたのか、自分たちで一つの出入り口を封鎖して各個撃破を狙う算段になっているようだ。

事実狙い通りに異端審問会は各個撃破をされていっており、この

ままでは時間の問題ともいえる状況になっていた。

「まずいな、このままじゃやられちまうぞ」

「坂本」

「なんだ？」

この状況を見た坂本は苦々しく言っていたのだが、俺の言葉に振り向いていた。

「時間を稼げと言っていたが、俺流のやり方で、時間稼ぎを行っても良いんだろう？」

「言ったはずだぞ、東城、やり方は任せるってな」

「ありがとよ」

まあ、この言葉は一種の確認のようなものだ。
これから行う時間稼ぎのやり方は一般的には褒められたようなものじゃないからな。

坂本の言葉に礼を言った後俺は、Ｂクラスの開いている出入り口へと向かう。

「竹内先生、Ｆクラス東城　和人が右側出入り口にいるＢクラス生徒６名に現代国語勝負を挑みます」

『な、俺たち全員を相手にってかよ！！』

『なめやがって』

『Ｆクラスのくせに！！』

「試獣召喚！」

着いたと同時に行ったのは出入り口付近を固めていたＢクラス生徒６名に対する宣言だった。

それにＢクラスの連中が一斉に俺を睨んでくるのだが、構わずに俺は召喚して戦う体制を整えていた。

既に召喚済みだった連中と俺たちの間に名前と点数が表示される。

『Ｆクラス　東城　和人　ＶＳ　Ｂクラス　Ａ＆Ｂ＆Ｃ＆Ｄ＆Ｅ＆Ｆ
現代国語　４２８点　ＶＳ　１６９点＆１８０点＆１５１点＆１３９点＆２００点＆２１２点』

『なんだよ、俺たち全員を相手取るから、どれほどの点数かと思えば４００点代じゃないか！！』

『総合点では俺達が勝っているんだ！！勝てない道理はない！！』

『私たちを甘く見たこと！！後悔させてやる』

そう口々に言って来る連中だが、正直に言って数と点数が揃った程度で勝ったつもりか？　こいつらは。

こいつらを上手く指揮する指揮官もおらず、かといって纏め上げられるだけのカリスマも代表には存在しない、なにが言いたいのかといえば、こいつらはただの烏合の衆と言うわけだ。

少しだけ個人の戦闘能力が高くとも、優れた指揮官がいなければ話しにならんのだが、坂本との約束は『この場をかき乱して、時間を稼ぐ』事だ。

「ふん、ならば行くぞ！！」

『『『こい！！』』』

俺の叫びに相手も応え、これで戦いが始まるかと思ったこの場に沈黙が下りる。

何故ならば。

『逃げてるな』

『逃げてるわね』

『ケツまくって必死で逃げてるな』

『逃げてる』

そう、俺の召喚獣が回れ右して必死こいて逃げているからだ。

そうこれも、名づけて！

「まずはネズミの様に逃げる！！」

「アホかキサマぁー！！」

叫んだ瞬間俺は坂本にシバキ倒されて、BクラスもFクラスも竹内教諭も関係なく【だあぁぁぁあっ！！】という効果音が適切な様子でこけていた。

「と、見せかけてネコのように斬る！」

『『んなっ！！』』

だがやはり俺の召喚獣が逃げ出したという目の前の光景から、一番点数の高い２人が早く現実に回帰して、俺を追おうとした瞬間、俺の召喚獣は瞬間移動したように２人の前に居て、あっさりと切り捨てて戦死させることに成功した。

すぐさま西村教諭に攫われていく２人で残りはすぐに身構えるのだが、俺は間髪をいれず。

「そして再びネズミの様に逃げーる！！」

『『『マジメやらんかぁー！！』』』

そして再び逃げ出した俺に向かって突っ込んだ瞬間、今度は３人が一気に切り捨てられる。

残り１人となったと同時に、Ｂクラス生徒たちが続々と俺の周囲に集まってくる。

『よくもふざけた手を！！』

『正々堂々と戦えー！！』

『卑怯者！！』

「フン、こいつは【戦争】なんだよ！！甘ちゃんな手段しか知らないお坊ちゃんにお嬢ちゃんたちには、ちょっと高等な手段だったかな？」

集まると同時に奴らが口にするのは、やはり俺への罵声だった。
それに俺は挑発で返すと奴らは面白いくらいに冷静さを失っていってくれる。

そして俺たちの狙い通りに、場をかき乱すことに成功したと確信した俺は、ほくそ笑み吉井達の行動が成功することを祈っていた。

6話　Bクラス後半戦再開（後書き）

えーと、すいません。
今回でBクラスとの戦いを終わらせるつもりだったのですが、突然の主人公の豹変とも言うべき変化に驚かれた方も多いと思います。

実はこっちが素の主人公の戦い方なんですよ。
横島と同じようにふざけて場をかき乱して、チャンスを作り手痛い一撃を相手に与える。
まあ、いきなりこんな感じで描写されても困惑するでしょうから、投稿は非常に迷ったのですが、あえて投稿させてもらいました。

次回で本当に完結させたいと思いますので、どうかお待ちくださいませ。

では今回はこの辺で。

7話　覚悟なき卑怯者の末路

第7問　以下の問いに答えなさい。

『非核三原則に掲げられている言葉は何か』

姫路　瑞希の答え

『核を作らない、使わせない、持ち込ませない』

教師のコメント

正解です。簡単すぎましたかね。

吉井　明久の答え

『核兵器＝放射能怪獣！！』

教師のコメント

先生もゴ〇ラは大好きです。

東城　和人の答え

『核兵器の個人所有に加えて、あまつさえ躊躇無く使用した日本人を知ってますが何か問題でも？』

教師のコメント

後で西村先生と高橋先生に学園長先生から重大なお話があるそうです。学園長室に来るように。

佐々木　明日香の答え
『和人へ、この問題は非核三原則のお題目を言う事だから、使用した人を答える所じゃないよ』

教師のコメント
　これは以心伝心と言うべきですかね？　ですが何かを知っているみたいなので、貴女も学園長室に来るように。

～バカとテストと霊能者～
～第７話　覚悟無き卑怯者の末路～

戦況は混沌たる状態へと持ち込まれ始めていた。

理由はもちろん。

『くそ！東城のやつ、卑怯な手ばかり使いやがって！！』

『男らしく正々堂々と勝負しやがれ！！』

『と言うかなんで急にタライとかでっかい風呂敷とか現れるんだ！？』

「ハッ！そっちには卑怯な代表さんが色々とやってくれたんでね！そのお礼も兼ねているだけさ」

俺が美神流で戦っているからだ、前に召喚システムをいじったと言う事は話したと思うが、その際に何をどう間違ったかは分らないのだが、現代国語の教科では一定の点を突破したら召喚獣の手に俺が考えている道具が現れる、と言う能力になってしまったようなのだ。

だが、欠点がやはり存在し道具とは言っても、武器の類は現れないから直接的な戦闘に支障が出てくるのだが、道具も使いようによっては武器になるから特に問題はなかったりする。

最初に切り捨てた5人はハリセンで叩いたしな、まあ、ハリセンでも４００点オーバーの俺の一撃だから、ダメージは相当なものだしな。

『クソッ！さっきまでここに居ただろう！？　どこに行きやがったんだ！！』

『知らないわよ！』

なんて考え事をしながら戦っていたのだが、再び俺の召喚獣は身を隠していた。

まあ、どこにいるかと言えば。

「隙ありぃ！！」

『ん〝なっ！机に偽装していただと！？』

机、正確に言えば横の壁になっている部分に同じ色の布を使って隠れていただけなのだが、その瞬間を見られていなければ、どうって事はない。

俺を見失ってキョロキョロとしている連中の背後を着く形で俺の召喚獣が現れて、３人の召喚獣の体制を崩させて、転ばせると１人はそのまま俺の召喚獣でトドメを刺し。

残りはというと……

『思い知れー！我ら独り身の辛さと言うものを！！』

『貴様らのような毎日が充実している奴らに、我々の思いがぁ！辛さが分るものかぁ！！』

『な、なんだこいつら！』

『ちょ、ちょっと来ないで！！』

とまあ、ＦＦＦ団の連中によって集団リンチにあって戦死となっていた。

こいつら、まさかとは思うがＢクラスの生徒全員が彼氏彼女持ちだ、なんていう勘違いをしているんじゃあるまいな？

まあ、そんなこんなで戦いは進んでいるのだが。

「東城、好きにしろって言ったのは俺だけどよ、もう少し手段って奴を選んでくれ……」

俺の後ろで坂本が何か言っていたが、聞こえんなぁ！そんな戯言はな。

「チッ、やってくれるじゃないか、卑怯者サン」

「ん？　誰かと思えば、三流の小悪党じゃないか、三流の小悪党は味方を見捨てて無様に逃げ出すのが仕事だろう？　逃げなくて良いのか？」

「何だと……　ふん、まあ良いさ無様に逃げ回るはめになるのはどっちか、教えてやるよ」

あからさまな舌打ちに俺を挑発する声が聞こえたからそちらを向けば、苦虫を大量に噛み潰したような表情で奴が椅子に座ってこち

らを見下ろしていた。
座っている場所を確認し、俺は後ろにいる坂本に目線で確認すれば、奴も不敵な笑みと共に頷いていた。
挑発の声に応えて俺もやつを挑発する言葉を投げかけるのだが、これが見事にはまったらしい、奴の顔が怒りで真っ赤に染まっていくのが分る。
だがすぐに冷静さを取り戻したのか、言い返してくるんだけど、すぐにその表情を屈辱に染めてやるよ！！

「だが、なんだ？　この音は」

「さぁてな、お前のことが気に食わない誰かの嫌がらせじゃないのか？」

「おや、負け組み代表もこの場に来ていたのか、こんな卑怯な手をクラスの奴が使って恥ずかしいと思わないのか？」

「そんなことは東城のやつに言ってくれよ、俺は知らん、が、Ｂクラスも大した事ないな、東城にいいように踊らされてボコボコにされているんだからな」

「ハァ？　クラスの連中が使えないのは今に始まったことじゃないだろ、揃いも揃って役立たずでしかないのは分りきってたことだからな」

「まあ、代表がお前って時点でこの結果は分りきってたか」

俺と根本の会話が終わるか終わらないかと言う辺りから、Dクラスの方の壁から何かが衝突する音が聞こえ始める。
それに疑問を持った根本の言葉に答えるように坂本が前に出てきた。

坂本に対しても俺と同じ様に挑発の言葉を投げかけていく、が、坂本は更に挑発を加えつつ根本の本心を引き出させてもいた。
そんな馬鹿だからお前は三流にもなれないんだよ、根本、その言葉を言った瞬間にクラスの奴らの敵意が全てお前にシフトしたのが分らないのか？　まあ、分らないから下らない事しかお前は出来ないんだろうな。

「だけどドンドンドンドンとうるさくなってきたな、何をやってるんだよ」

「さあな、だけど負け組み代表の根本はギブアップでもする気か？
そんな風に周りを気にしだすなんてな」

「ケッ！言ってろよ、ギブアップする負け組み代表はお前の方だろ、坂本」

「……」

「それに頼みの綱の一人の姫路が参戦していないばかりか、東城のやつがあんな戦法を取っているんだからな、お前らの敗北は決定的

だろ？」

「フン、そうとは限らないぜ？　まあ、俺の狙いが何であれお前に言うつもりは欠片もないけどな」

「違いないな、負け組み代表」

なんていうやり取りを坂本達は行っている間にも、音は激しくなるどころかこの教室さえも揺るがしていくほどの物理衝撃を持っていく形になる。

俺の視界の隅には僅かに罅の入った壁の姿が映っていて、吉井が作戦通りに、尚且つ無茶な方法で突破口を開こうと努力をしていることが窺えた。

そしてついに壁に入る罅は完全な形での視認が可能となっていて、奴らの注意を逸らさないことには間違いなく気付かれる。

「グッ！しまった！！」

「東城！？　チィッ！一旦引くぞ総員後退だ！！」

「ハンッ！逃げられると思っているのかよ！？　役立たず共！！汚名を返上するチャンスだぞ！とっとと蹴散らせ！！」

「……　頼んだぞ、吉井」

このタイミングを俺たちは待っていた！壁の状況を確認した瞬間に俺はわざと攻撃を受けた状況の中で受け流すと、切羽詰った声をあげる。
ここら辺の演技自体は打ち合わせとかが合った訳じゃあなかったんだが、坂本は問題なく合わせてくれて俺と同じ様な声を上げて慌てた様子で、後退を指示する。

それを聞いて図に乗った根元は俺たちの読み通りに追撃を指示するのだが、言葉にかなりの問題があったために、Bクラスの連中は渋々従う様子を見せていたのは言うまでもない。
俺は半ば願うように小声で吉井へとエールを送ったと同時、ついに時がやってくる。

「だあああぁぁぁぁっしゃーーーーーー！！」

「な、なにぃ！？　んなバカな！！」

ド派手な音と共に崩壊するDクラスとBクラスを繋ぐ壁、それを見た根本の表情は引き攣ると、煙の中から現れて駆け足で奴に近づいていく3つの人影、島田に木下と吉井達だ。

「くたばれ！根本　恭二！！」

そう叫んで根本へと肉薄しようとする吉井の姿と、それを追う島田と木下。
だが、３人の前に２つの人影が立ち塞がる、近衛部隊だ、だが、これすらも俺と坂本達の作戦の中では計算済みだ！！

さてここで話は変わるが今現在の小悪党の根本が座っている位置について説明しよう、この時期、春の時期としては蒸し暑い今日の気温と湿度に加えて多数の生徒がＢクラスの教室に殺到していること、それに加えてＤクラスが故障に見せかけて破壊してくれた室外機の影響で、壊れたエアコン。
そのために教室内の温度はこの時期では考えられないほどのものとなっており、根本のバカはたった一人窓を全開にした所にのんびりと座っているのだ。

こういう時こそ、窓からの何らかの奇襲とかを警戒しなければならないんだが、こいつは確実に何も考えてはいないんだろうな。
まあ、警戒されていたらこっちが大いに困った事態になっていたんだがな。

だが、そんな様子だったから、こんなことが出来るんだがな、このＦクラスには常識外れの行動力を持った奴と、学園教師にもこいつと同じくらいの行動力を持った人間がいたことだ。

これらのおかげで、ここまでの一連の流れをくむことができた。
今俺と吉井に坂本は同じ様な笑みを浮かべているに違いない。

「……　Ｆクラス、土屋　康太」

「キ、キサマ……」

「……　Ｂクラス根本　恭二に保健体育勝負を申し入れる」

「ムッツリーニィー！！

今ここに全ての点が線となって結ばれる、俺と坂本が引き離した通常のＢクラス部隊に、吉井達の元へと殺到したＢクラス近衛部隊、それによって発生したのは空洞となった根本の周辺空間、そこに保健体育であれば、俺でも勝ち目が全くないムッツリーニが保健体育教師と共に突入する。

これが俺達が立てた一連の流れであった。

まあ、無論のこと俺が勝てない保健体育勝負で根本に勝ち目などあろうはずはない。

『Ｆクラス　土屋　康太ＶＳＢクラス　根本　恭二

保健体育　５０４点ＶＳ２０２点』

あっさりとムッツリーニの召喚獣の小太刀が一閃し、根本の召喚獣は抵抗の暇さえ与えられることもなく、一刀の元に切り捨てられた。

「戦争終結！！勝者Ｆクラス！！」

何時の間にやらやってきていたのか、西村教諭の終結宣言が辺りに響くと、現実を認識したＦクラスの連中からは歓喜の声と、Ｂクラスの連中からは絶望の叫び声が同時に出てくるのだった。

終戦となった後に俺が行ったのは、両手から血を流して痛がっている吉井の手当てだった。

「吉井、手を見せてみろ」

「う、うん……」

吉井が血を流していた為に、俺はBクラスの連中に救急セットがこのクラスには常備されていることを教えてもらったので、それを使って手当てを行っていた。

フィードバックによる幻痛が実際に体に作用した時の状況と似ているな、見た目は血が結構流れていて痛々しいが、傷自体は浅いから実際には大した事はないな。

「イタタッ！と、東城君、もっと優しく！！」

「後先考えないからこうなるんだ、今度からはちゃんと考えて行動するんだな」

「うぐぅ」

消毒液が染みたのか、奴は苦痛に表情を歪めて俺に注文をつけていたのだが、俺は無視して傷口の表面を消毒した後、薄手のガーゼを患部に貼って、その上から包帯で巻いていく。

「東城、アキのキズはどういう感じ？」

「ん、島田か、いや、見た目は酷いが大した傷じゃないさ処置はしたから2日もあれば治るだろ」

「そっか、良かったぁ」

「え、み、美波が純粋に僕のことを心配してくれてる！？」

「う、ウチだって心配くらいはするわよ！！血が凄い出てたし、心配、したんだからね」

「う、うん……　あ、ありがとう美波」

処置をしている間の吉井があまりにも痛がるからか、心配の色を濃くして島田が俺に聞きに来ていたが、俺の言葉を聞くと露骨に安心した様子を見せていた。

そして始まる島田と吉井のストロベリー空間、これを認識した俺は目立たないように静かに離れると、近くで呆れたように二人を見ている坂本と木下の所へと向かっていた。

「明久の傷はどうだった？」

「見た目は酷かったが大した傷じゃないさ、処置はきちんとしたしな、明日には９割がた治っているだろうさ」

「ふむ、それならば心配は要らぬのう」

「まったくだな」

やはり見た目が酷かったからだろうか、２人とも心配していたようで表情にこそ出していないが、俺の言葉を聞いて安心した様子を浮かべていた。

「ぎぃーやぁーーー！！」

和やかになったこの場にそぐわない悲鳴が響く、慌ててそこを見てみれば、何故か島田に関節技を掛けられている吉井の姿がそこにはあった。

何故？

「何が『美波が心配するなんてハッ！ま、まさか今日の前にいるのはまた偽者！？』よ！？　前にも言ったけどウチが純粋にあんたのことを心配しちゃいけないって言うの！！」

「ギブ！ギブギブ！！ごめんなさい！美波さまぁー！！」

「普通に美波って呼びなさいよ！このバカー！！」

「「「ハァ……」」」

すぐに疑問は氷解したのだが、なんというか照れ隠しに吉井が不用意な発言をして、島田の逆鱗に触れたようだ。

幾ら照れ隠しでも偽者はないだろう……　いや、横島さんも同じ様な状況下で同じ発言を美神さんにしていたな。

こういう人達って言うのはボケなきゃ落ち着かないのかね？　俺と同じ様に呆れ果てたような溜息をついてた木下と坂本は、気を取り直したように後ろを振り向く。

「……」

「さて、と、嬉し恥ずかしの　戦後対談といこうじゃないか、ええ、負け組み代表さんよ？」

そこにいたのは先程までの威勢の良さはどこに言ったのやらと言った風情の根本だった。
典型的な小悪党だな、こいつ自分が負けることを微塵も考えておらず敵を挑発するだけ挑発して、怒りを呻った上に、味方を見下して指示を出した上に罵倒するだけ罵倒して、本来ならば負けた後に庇ったりとかするはずの味方さえも敵に回しているんだからな。

本当に救いようがないな、こいつ。

今現在、教室の中には根本へ向けて敵意すら生温い、殺気とも言える位の重圧がBクラスの連中から放たれている。
それを感じ取ったのか、より体を縮こませて哀れささえ漂う根本の姿、惨めなもんだよな、負ける覚悟のない卑怯者の末路はな。

「本来ならば、俺たちの卓袱台と腐った畳をお前らにプレゼントといく所だが、Bクラスの諸君が条件を飲んでくれるのならば、免除してやっても良い」

坂本の言葉を聞いてざわつき始める教室内、BクラスもFクラスも同じ様なざわつき具合だから、Fクラスの連中は予想はしていたのかもな。

「皆落ち着いてくれ、ここでの戦闘はあくまで通過点の一つに過ぎない、俺たちのゴールはもっと違う場所にある」

「うむ、そういえば、そうじゃったの」

坂本のその言葉を聞き落ち着きを取り戻すFクラスの全員、だが、対するBクラスの連中には焦燥感に似た雰囲気が芽生え始める。

それはそうだろう、設備を見逃す代わりの条件がなんなのか、それが分らないのだから。

「……　条件は、なんだ？」

力なく、根本は問いかけてくる。

「条件？　決まってるだろう、それはお前だよ、負け組み代表さん」

「なに？　俺、だと……」

「ああ。お前さんは散々好き勝手にやってもらったし、正直に言えば去年から目障りだったんだよ」

坂本が結構凄いことを言っているのだが、その事について誰もフォローする事もなく、この場にいる全員が頷いていることから、奴がどれだけの恨みや怒りを買ってきたのかが窺える。

「そこでBクラスの皆に特別チャンスだ」

そして昨日の昼休みに坂本が言っていたBクラスへの条件が放たれる。

「今からAクラスへと向かい、試召戦争の準備が整っていると宣言して来い、ただし、宣戦布告じゃないぞ、それじゃ開戦になっちまうからな、それを行うと約束すれば、今回は設備の交換を見送ってやっても良い」

「……　それだけで良いのか？」

疑わしげに問いかけてくる根本、それはそうだろう先程までは、あれほど自身のことをぼろくそにいっていた奴が出した条件がこれだ。

まあ、坂本の当初の予定ではこれから行うことは計画に含まれて

おらず、俺はどうやって利光に流させた情報との整合性を取ろうかと考えていたものだが、それも全て解消されたしな。
それに坂本としては無理なく吉井の要望に応える為、と言ったところだろう。

「ああ。ただし、代表がこいつを着てから俺の言う通りに行動したら、設備交換は見逃そう」

そう言ってから坂本が取り出したのは、木下が着ていたあの女子制服だった。
これを見た瞬間、根本の顔は面白いくらいに引き攣る。

「なっ！？　馬鹿なことを言うな！何で俺がそんなことをしなくてはならないんだ！！」

ひじょうに慌てた様子の根本、それはそうだ誰も好き好んで女装なんぞしたくはないだろう。

『Ｂクラスの全員で確実に実行しよう！！』

『任せて！！完璧に実行して見せるから』

『ああ！こんなに良い条件で教室を守れると言うのなら、やらないなんて選択肢は存在しない！！』

自分の味方であるはずのBクラス生徒たちからの暖かい声援。
これを聞いた根本の表情は更に青くなるのだが、連中の様子を見れば根本の奴は普段どんな行動を取っているのか、丸分りだな。

「よし、決定だな」

「俺は決定なんてしていないぞ！！さかグオッ！！」

『とりあえず黙らせました』

「お、おう。ありがとう」

一瞬で代表を見限って鳩尾に拳を入れて根本の意識を奪った男子生徒の行動に、坂本は唖然としていた様子であるのだが、この程度で唖然としているようではまだまだ甘いな。

「んじゃ、制服の着付けに入るとしようか、明久に東城、後は任せ

る」

「うん！」

「ああ」

坂本の言葉に俺と吉井は根本に近づいて制服を脱がせていく、男の服を脱がすなんぞ気色悪いことこの上ないが、まあ、我慢しておこう。

「う、うう……」

「フンッ！」

「がっ……」

根本が意識を取り戻そうとしていた為、俺が延髄に一撃を入れて再び意識を奪う、そうしている間に吉井は制服を全て脱がし終えると、女子の制服をあてがっていたのだが、やり方がわからないのか頭を捻らせていた。

「2人とも、女子の制服の着付けの仕方なんてわからないでしょ？

私がやってあげるよ」

「ん、悪いが頼むとしようか正直、助かった」

「そうだね、悪いけどお願いするよ、折角だし可愛くしてあげて」

「無理無理、土台が腐りきってるから」

酷い言われようだったが、俺と吉井は彼女を皮切りに集まってきたBクラスの連中に根本を引き渡すと、その場を離れる。

「えっと、たぶんこの辺に、あった！」

「吉井、後の事後処理は俺たちでやっておくから、それを届けてやれ」

「うん！行って来るよ！」

姫路のラブレターを見つけた吉井は、俺の言葉に嬉しそうに頷いて教室へと行くのだが、あいつ教室には本人がいるってこと、忘れてないか？

まあ良いだろう、さてと、後は。

「坂本」

「なんだ？　東城」

「これからここでムッツリーニの技術を使った撮影会を行おうと思うんだが、どうだ？」

「俺も同じ事を考えていた所だよ」

俺が考えていたもう一つのことはこれだ、だがやはりと言うべきか坂本も同じ事を考えていたらしい。

「ムッツリーニ、撮影機材の準備とか、撮影時の事とか頼めるか？」

「……　断る、持っている機材は全て美少女や美女を収めるためのもの、醜悪な男を写すものじゃない」

「無論お前の主義を曲げて頼むんだからただとは言わんさ、報酬にこいつをやろう」

ムッツリーニに対して依頼するものの、当然の如くけんもほろろに断られるが、こんなことは奴の主義や主張からして当然だろう。

だからこそ、報酬を用意していた。

それは、まずは1の後に0が5つ付いた小切手と、向こう側で記念撮影した際に、個人で写ってくれた美女と言える人物たちの写真集だ。
無論魔鈴さんや美神さん達が写っている。こちらでは絶対に手に入らない極上の美女ばかりが写った品である。

「すぐに最高の機材を用意して、最高の技術を持って撮影する！！」

これを見た瞬間のムッツリーニの行動は早く、この場から消えるとすぐに戻ってきた時には既に、一目見て明らかに最高級品と分る機材を持っていた。
幾らなんでも早すぎるだろ、そう俺は突っ込みたい気持ちを必死で抑えていたが、無言で俺の肩に手を置いた坂本も同じ様な表情を浮かべていたので、気にしないことにした。

それから俺は戦後に備えて流していた噂を確認する為に撮影会が開かれるBクラスを出ると、一人屋上へと来ていた。
携帯に便利なモバイルパソコンの電源を入れて、この学園にも存在する裏のサイトにアクセスして、掲示板を見た瞬間、俺は真っ白に固まってしまった。

「ヤバイ、噂がかなりシャレにならないものに変化してる……」

種明かしをすれば、俺はこの終戦後に【根本は女装趣味の変態で、Fクラスとの試召戦争では自分が女装したいからわざと負けた】という趣旨に繋がる噂を流していたのだ。
無論のこと尾鰭と背鰭が付くのは確実だから、そこの所も計算して利光に噂の内容を依頼していたんだが、計算外だ。

まさか根本がこんなに嫌われていたとは、普通に過ごしていたら、こうはならなかったのにな。

何しろ今現在流れている噂を総合すると【根本は女装趣味のバイセクシャルで、その上にストライクゾーンは１０歳までの男女であり。それ以上の人間は全て中年と熟女】という噂に完全に摩り替わっていたんだし。
間違いなく根本に恨みを持った連中が徹底的に噂を改竄したな、これは。

「まあ、良いか……　根本だし」

「良い分けないでしょ、まったく」

「誰だ！？　ってなんだ、佐々木か」

俺の独り言に対して応える声があったため、俺は驚いて屋上の出入り口を見てみれば、そこには幼馴染の佐々木が呆れた表情で立っていた。

「なんだ、ってちょっと失礼ね、和人」

「で、何の用だ？」

彼女に見られたとしても問題はないと判断した俺は、再びパソコ

ンのモニターに視線を移すと彼女は俺の隣に腰をおろした。
俺の問いかけに彼女は人差し指を顎に当てて少し考える素振りをしていたが、すぐに何かに思い当たったらしく口を開く。

「まあ、大した用事じゃないと言うか、かなり重要な用事と言うかなんだけど」

「？」

「結界を解かなくて良いの？」

「なんだと？」

佐々木の口から出た言葉に俺は座った状態ではあったが、いつでも戦闘が行えるような体勢に自然と移行し、目は自身が分るほどに細められていた。
その瞬間に佐々木が何かに気が付いたように、なにやらワタワタし始める。

それは気の抜ける光景だった、俺の機嫌を害したと思ったためか、なにやら『言葉を間違えた』とか『あぅあぅ！何でこんなこと言っちゃったの？　私』とか小声で一人忙しない様子で焦っていたのだから。
はっきり言って一人戦闘体勢に入った俺の毒気を抜かれたよ。

「お前、俺がこの学校に張った結界を感じ取っていたのか？」

「あぅ、えと、う、うん……　ちょっと事情があって、私ってそういうのを感じ取れるの」

「驚いたな」

続いて出てくる佐々木の言葉には流石の俺も驚きを隠せなかった、こちら側の霊的、もしくは魔法のような技術はとっくに廃れており。向こう側では残りカスみたいなものしかないので、感じ取れるような人間がいるとは思えなかったのだから。

だけど驚くようなことじゃないか、廃れていてもかつての退魔名家の血は子孫に生きていることだし、技術だけを継いでいるのは不自然じゃない。

だが、それだと矛盾することがあるがな、佐々木の血筋には退魔名家、若しくはそれに連なる者は居ない筈だ。

「それは昔から感じられたのか？」

「う、うんまあね、幽霊とかそういうのは見えないけど、結界とか術みたいな壁とか、そういうのは見えるみたいなの……　結界は漫画とかで見たのを、そのまま言っているだけなんだけど」

「……　嘘は言っていないみたいだな、本当のことも言ってい

ないみたいだが」

「ッ！！」

問いに正面から俺の目を見て答える佐々木だったが、直感で悟る佐々木は『嘘は言っていないが、本当の真実の部分は語っていない』と、この学校で試召戦争が起きてから彼女とは数回しか話していないのだが、今までの付き合いでこいつのことはほとんど手に取るように分かる。

だが、佐々木が俺の敵と言うのはありえないな、この様子だと。俺の最後の言葉に顔を真っ青にしている彼女の様子を見れば、容易に分るし敵だったら、この言葉を言った瞬間に何らかの武力行使になっている。

それらを演じているなら大した役者だけど、そういった様子がないのは明らかだ、まあ、意地悪もこの辺にするとしようかね。

「まあ、お前が何者であっても俺は付き合いを変えないさ、正体が妖怪とかその類だとしても、前世の記憶を持ちつつ輪廻の輪に入った転生者でもな……　お前は俺の幼馴染だよ」

「和人……　ありがと」

「どういたしまして」

佐々木の顔色は俺の言葉を正しく認識していくほどに元の色へと戻っていく。
持ち直した後、俺にお礼を言って返事を返したら、肩に顔を埋めてくる。

「どうした？」

「ゴメン、ちょっと安心したら、こうしたくなったの……　ちょっとで良いから」

「構わんさ、気の済むようにしてろ」

「うん、私の事、私が心の整理を付けたら貴方に話すね」

安心したのか少しだけ震えている少女の姿、傷つけてしまったか。
俺はそう考えて背中に回そうとした手を引っ込めると、雲ひとつない青空を見上げていた。

それから少しして、落ち着いたのか佐々木は顔を俺の肩から離す。
実はこいつの形が良くて結構ボリュームのある胸が当たってた（だが、恐らくは姫路には負けているだろうが）から、ちょっとだけ残念だと考えていたのは、秘密だ。

「でも、やっぱりBクラス代表の悪い噂を流していたのは、和人だったんだね」

「まあな、奴は俺自身が気に食わないと思い、徹底的にやってやると思った奴だよ」

「ここまでやる必要あったのかな？」

「姫路を直接呼び出して、戦闘に参加するな、と脅した上に彼女の一途な想いを踏みにじっていたとしてもか？」

「……　やっぱり優しいね、和人は」

優しいと佐々木は言ってくるが、俺はそうじゃないと言いたかった。
根本を潰したのは間違いなく俺の私怨だ、奴は俺の中で絶対に許せないことを平気でやっていたから、徹底的にやると叩き潰すと判断しただけ。
実際にあの階段の出来事の後、利光に噂の中身の変更を依頼したからな。

「違うさ、俺は優しくはない奴に根本にはやられる覚悟がなかった、だからって、何だよ」
「クスクス……　なんでもないよ♪　和人は全然変わってないって、分っちゃったから」
「悪かったな」

俺は正直に言って佐々木が何を考えているのかが分らなかった、俺が根本のことを言っていたら、いきなり彼女が嬉しそうに笑い出したんだ。
それから彼女の口から出てきたのは、安心したような言葉を言って、微笑を浮かべながら俺を見ていたんだから。
なんだか、背中が少しむず痒くなった俺は何となく悪態を付いて

立ち上がると彼女に背を向けるのだが、その瞬間に俺は再び驚くことになる。
背中に抱きついてきたからだ、それが誰かは皆まで言わなくてもわかるだろう。

「あ、さっき和人から離れるときに思ったんだけど、当てられるのが好きなんだね……　和人って」

「う、あ……」

「クスッ、今回はこのくらいにしとくね、お楽しみはまた今度、だよ？」

さっきのは意図せずして当てた形だったんだろうが、今回は違った。
俺がちょっと残念に感じたあの感触が表情に出ていたらしい、小悪魔な声を上げて俺の背中に抱きついている佐々木に、彼女がはっきりと当ててきた胸の感触、それは背中であっても形が変わっているのを容易に想像させてくれるもので、少しの間俺は迂闊にも硬直してしまった。

そんな俺の反応に満足したのか、佐々木は俺から離れるのだけれど、チラリと彼女を見れば、抱きついてきた本人もまるで蒸気が出そうなくらいに顔を真っ赤にしていたので、佐々木も慣れてないというか初めての事だったのか、なんて考えて安心している自分がいることに気が付いていた。

「それはそうと！そろそろ結界を解かないとな！！」

そう声を張り上げた俺は、フェンスに貼ってある、この結界を維持していた札を剥がす。

「……　和人、流石にそれはないと思うよ？」

確かに、な。

微妙な表情をした彼女の言葉と感情は分る。

何しろその札には『四十円』と書かれていたのだから。

というか、この程度の力の札で大きな効果があるって、こちらの世界はドンだけオカルトの力が廃れているんだろうか？

俺はそんなことを考えざるを得なかった。

7話　覚悟なき卑怯者の末路（後書き）

やっとBクラスとの決着が付きました！

もっと早く投稿する予定だったのですが、仕事に家の大掃除に終われていたら……　あら不思議、もう12月も終わりに近づいていました。

もうあと4日も経たずに今年が終わり、新しい年がやってくるのですから12月は本当に忙しいです。

8話は現在執筆中ですけど、どんな展開にしたものか、と考えつつ執筆しております。

決着までの道筋は決まっているのですが、どうやってそれをそこまで持っていこうか、そんなことを考えつつ執筆しております。

では今回はこの辺で。

8話　Aクラス戦その前に

第8問　以下の問いに答えなさい。

『女性は（　）を迎えることで二次性徴期になり、特有の体になり始める』

姫路　瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

吉井　明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね。

東城　和人の答え

『男と初めてヤリ終えた朝』

教師のコメント

下品な回答は慎んでください。

土屋　康太の答え
『初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、生理のことを月経、初潮の初経という。初潮は体重と密接な関係があり、体重が４３ｋｇに達する頃に初潮を見るものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均十二歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される。』

教師のコメント
　詳しすぎです。

～バカとテストと霊能者～
～第８話　Ａクラス戦その前に～

Ｂクラス戦が終了し、あの後は結局の所、根本の噂は放置と言う方向で家に帰っていつも通りに過ごした次の日。

今日は補給試験で一日が潰れるかと思っていた俺は、女装した根本に捕まってなぜか、朝の人が全くいない学食で２人きり、という罰ゲームにも等しい状況に陥っていた。

「で、根本何の用なんだ？　俺たちはこれから」

「補給試験があるんだろう？」

「だったら……」

ただでさえ根本と二人きりと言う状況が苦痛だと言うのに、相も変わらずに奴の口から出てくるのは、こちらを小馬鹿にしているかのような言葉、少しだけ苛立った俺は根本の目を見たと同時に、疑問を感じた。

どうしてかと言えば、昨日まで奴の瞳にあった光が感じられないからだ。

以前とは言っても昨日の写真撮影会が行われる前までの根本の様子しか俺は分らないのだが。

昨日までは確かにあったあの濁りきって汚濁に満ちていた瞳ではなく、逆に清々しささえ感じられる良く清められたような瞳をしていたからだ。

「根本、一体お前に何があった？」

「裏で糸を引いていた張本人が何を言っているんだか……　まったく」

「……フン……」

俺の疑問に奴は嘲りも怒りや憎しみといった感情さえも見せずに、ただ苦笑するだけだった。
昨日までの奴ならば、間違いなくこちらを徹底的に罵倒の言葉の数々を向けてくると言う自信があったのだが、それがまったくない。

「まあ、それは良いのだけれど、俺は一度お前にお礼が言いたかったのさ」

「俺に？」

「ああ」

すぐに苦笑自体は消えるのだが、それから奴の顔に浮かんでいるのは陰湿なものではない、晴れやかとも言える笑みだった。

「昨日、お前のクラスに敗退して帰る時はお前たちへの恨みで一杯だった、だけどな俺は、そこで人生の師とも言える人達に出会えたんだ」

「人生の師？」

「ああ、はっきり言って人目見た瞬間は自分の今の格好を棚に上げて、変態だ！とか叫んだんだけどな、まあ、色々あって俺は、その方々に教えを請うことになって、今に至るってわけさ」

「どんな奴らだ？」

俺は見た目にこそ興味がないように振舞っていたが、実際には興味と言う感情で俺の心の内は埋め尽くされていた。
俺はつくづく思う、なぜここでこいつを更生させた人物のことを聞いてしまったのかと、ここで聞かずにいれば、トンでもない人間がこの世にいることを知らずに生きてゆけたのに。

と、そう考えずにはいられなかった。

「ん？　まずはピンクの下着だけを身にまとい、三つ編みにした髪を二房とあごに少しではあるが髭を蓄えた貂蝉って男性と、白い褌とビキニの胸当てにネクタイと上半身だけの燕尾服を身にまとい、立派な髭を蓄えた卑弥呼っていう男性のお２人さ」

「……　は？」

「まあ、普通はそういう反応になっちまうよな」

ついにこいつ頭が完全に逝ったのか？　俺は根本の言葉を聞いて最初に考えたのはそれだった。

一瞬思考が完全に停止して、余程の間抜け面を晒したんだろう、

奴は苦笑と微笑みの中間点のような笑みを浮かべて俺を見ていた。
その表情に一瞬だけムカついたりもしたんだが、俺はそういった感情を奥へと引っ込めると努めて冷静に根本のやつに聞き返すことにする。

「反応だとか、格好だとか、色々と突っ込みたいことはたくさんあるんだが、俺に礼を言いたいってのは結局なんなんだ？」

「そのことならば、ただ一言しかないな、東城、昨日俺を惨敗させて終戦後にあの噂を流してくれていたことだよ」

「余計に訳が分らんが……」

「いや、分らなくて良いさ、俺が勝手にお前に礼を言いたいんだからな、だけどあの惨敗とお前の仕掛けてきた情報戦とも言える噂で、俺は完全に一から裸一貫でやり直せる、それを分らせてもらえた人達と出会える切っ掛けを作ってくれたんだしな」

「……　そう、か」

正直に言えば、根本の言葉を聞いていた最中の俺の心境は、誰？
コイツ、だった。
何しろ『あの』根本が、俺に対して罵倒や罵声の一つも浴びせることも無く、感謝の言葉を言った上に奴は裸一貫でやり直す、なんていう言葉まで言っていたんだから、

「だが、どうする気だ？　俺の流した噂はほとんど修正とかは不可能だから、お前は……」

「分っているさ、噂については特に何もしないし、お前さんは何もしなくても良い、と言うかしないで欲しい」

「わかった、これに関してはほとぼりが冷めるのを早めるくらいにしておこう、お前は改心したんだからな、何時までもこんなものを流しておく趣味はないし」

「ククッ、まったく、何もしなくても良いと言っているのに、このお人好しが」

「うっせ」

笑みを浮かべて俺を見ている根本はなにやら仕方のないものを見るような、そんな表情で見てくる。

微笑ましいものを見てくるような表情をしている奴から俺は顔を逸らすと、舌打ち交じりで毒づいていたのだが、根本は苦笑を浮かべて更にその表情を深めていた。

「だが、クラスの連中とはどうする気だ？　あの様子から察するに……」

「言わなくても分っているさ、愚かだった俺がまいた種だ、Ｂクラスの連中とは関係を完全に直せるとは思えないけどやる前から諦めたくはない、言っただろ？　裸一貫でやり直すって、失うもの何ぞ何もない状況だからな、死に物狂いでやっていくだけさ」

「そうか、微力ながら応援させてもらうよ、根本、尤もあんな事をした人間の言うことじゃないけどな」

「確かにな、だけどまあ、頼りにしているよ」

根本の何の気負いのない表情と清々しくて、見ているものに爽やかささえ感じさせそうな瞳をした根本は、俺の言葉に嬉しそうな笑みを浮かべていた。

だが、ここで始業のチャイムが鳴り響き、どちらともなく立ち上がると廊下へと出る。

「まあなんだ、根本、ここから先はかなりきついだろうが、頑張れよ」

「言われずとも、俺はあのお二人に胸を張って立派な【漢女】として再会すると誓ったんだ、ここで完全に立ち止まるわけには行かないさ」

「今のお前となら良き友になれそうだよ、根本」

「こっちもだ、今度落ち着いたら、またゆっくりと話でもしたいも

んだな」

「ああ」

「じゃあな」

この時俺と根本の間には致命的にずれているある漢字の存在があった、根本がいっていた【漢女(おとめ)】と言う字だ、俺は普通に【乙女】と考えていたのだが、根本の奴にこんなことをいわせたほどの人物、会いたくねぇなぁ。

そんなことを俺は考えていたんだが、これは後々にある意味でトンでもない状況で裏切られることになるのだが、今はまあ良いか。

とにかく俺と根本は、そう会話を交わして右手で握手をした後、それぞれの教室へと向かって歩いていくのだった。

それからの学校内は騒然としたともいえるだろう、あの悪名高い根本が改心したと言うのだから。
今現在Fクラスでは補給試験に忙しい為に、まだ話題には上っていないものの、誰もがこれを話題にして盛り上がりたいと言う様子があるのは明白だった。

「それにしても東城、お前の言っていたあの事ってこういう事だったのか？」

「違うに決まっているだろ坂本、俺は今朝まで流れていた噂を操作して、戦後に根本をこの学校から排除するのが、本来の狙いだったんだよ」

「そいつが、どっかで狂っちまったってわけか」

「まあな」

昼休みとなり昼食の準備をしようとしていた俺に近寄ってきたのは、坂本の奴だった。
真剣な表情で俺に対して話しかけてくる坂本に答えて、俺もこのことは予想外だったと答えて話していたら、吉井と木下や島田に姫路達が俺と坂本の周囲に集まっていた。

「今朝学校に来て驚いたよ、何しろ根本君がBクラスの人達に今までの無礼の謝罪を行ったとか聞いたんだし」

「そうじゃのう、それに噂についても自身の行いの悪さが招いたものだ、と言って否定も肯定もしてはおらぬし」

「そうよね……　ウチも今朝ちょこっとだけ、根本を見たんだけど顔つきが全然違うのよね……　」

「私も、今朝来たら頭を下げられて謝罪されましたからビックリしました」

等等、近くに寄ってきた連中の言葉からは根本に対してそういった言葉が聞こえて、教室の各所でも同じ様な話題で盛り上がっていた。

まあ、みんなの戸惑いも分るなぁ、俺が今朝そうだったし、何よりも驚きの方もきたしな。

「なんでも、奴は昨日の帰りに人生の師ともいえる人達との出会いがあったらしくてな、恐らくと言うか確実に奴が変わったのは、それだろうさ」

「よく知っているな東城、根本のやつと話したのか？」

「ああ、今朝奴に呼び止められてね、てっきり昨日の復讐とばかりのお礼参りを行ってくるものと思ったんだが、あんな様子だったか

らな戸惑いと言うか、驚きの方が大きかったよ」
「そうか、あの根本をあそこまで変えたとかいう人物、興味があるな」
「……　確かに」

未だに今朝のことは夢での出来事だったかもしれないと言う感情がある俺だったから、表情も微妙なものになっているのだろう。
坂本と話していて雰囲気が微妙な空気になっていくのは避けられなかった。

だが、坂本とムッツリーニが根本を構成させた人物に興味を抱くのは、極自然の流れと言うものだろう。
奴が言っていた格好を本当にしていると言うことであれば、俺も怖いもの見たさのような感覚で興味はある。

だが

「止めといた方が無難だと思うぞ、俺は」
「んむ、何故じゃ？」
「……　根本本人の話だとガチムチの筋肉髭ダルマがビキニを着て髪を三つ編みにした姿をしている、とかいっていたから、間違いなく見ただけで殺人級の人物とも俺は思えるし」

「オイ、東城……」

「ちょっと、東城、そんな人間いるわけないじゃない……」

「そう、じゃと思いたいが……」

俺の言葉を聞いた瞬間に坂本の顔はあからさまに引き攣り、島田と木下も否定はしたいが【あの】根本を更生させた人物と言うフィルターが付属すると、強くは否定できないらしい。

かく言う俺も根本の言うことはほとんど信じていないのだが、奴を更生できた人物が果たして【普通】と言うカテゴリに入るのか、それが一番の疑問となって貂蝉や卑弥呼といっていた人物たちを否定することが出来ずにいた。

まあ、その後は特筆すべきことはなく、始業のチャイムが鳴り響いて再び開始される補給テストと、休み時間に飽きもせずに続く根本の変化に対する談義が行われていた。

「……　根本君の原作でのフラグが全部、叩き折れたのかな？　これって」

因みにこんなことを呟いていた少女がいることなど、誰も知ることなく、この日はこれ以外には特に何か起こることはなく平穏な日

常の一部として過ぎていくのだった。

そして時は過ぎて2日後の朝、予定ではAクラスとの試召戦争となる日。
俺たちはいつも通りに登校して、普通に考えれば今日でおさらばになるであろうFクラスの教室で坂本からの作戦説明を受けていた。

「まずは皆に礼を言いたい。周りからは絶対に不可能と言われていたにも関わらずに、ここまでこれたのは一重に皆の協力あってこそだ。本当に感謝している」

いつもどおり作戦を説明する為に壇上に上った坂本は、俺たちに礼を言っただけではなく、心持ち頭を下げて素直に感謝の言葉を発

していた。
この捻くれ者にしては珍しく素直に礼を言っているその姿に、クラスの連中からは戸惑いの感情が見て取れる。
それは付き合いの長いはずの吉井や島田達からも見れることから、こいつのこんな様子がどれだけ貴重なのかが手に取るように分るな。

「ど、どうしたの雄二、らしくないじゃないか」

「ああ。今こうして言っている俺自身もそう考えている。だけどな、これは偽らざる俺の本心だ」

恐る恐ると言った様子で吉井が坂本へと声を掛けるのだが、坂本は変わらない様子で俺たちへと再び言葉を重ねていた。
奴の言葉を聞いていたFクラスの連中の胸に去来するのは、感無量と言う言葉だろう、教室にいるほぼ全員が同じ様な表情で坂本を見ていることから、それが窺える。

考えてみれば簡単だな、ここにいる奴らは一部を除いた全員が、今の坂本が掛けてきた言葉を掛けられた経験なんぞあまりないはずだし、自分の力で何かを成し遂げると言うこともなかったと思える。
だからだろう、教室の中にいる者達から達成感とも言える感情が溢れているのは、なんて偉そうな事を言っている俺も今は同じ感情を抱いているんだけどな。

「ここまでくれば絶対にＡクラスにも勝利したい！この世の中を切り抜けるには勉強だけじゃないって事を教師どもと、エリート風を吹かせている連中に叩き付けてやるんだ！！」

『オオーーー！！』

『そうだ！っ！戦い抜くのは勉強だけが全てじゃないんだー！！』

『やぁってやるぜーーーー！！』

場の雰囲気はまさに最高潮と言える状況、盛り上がったこいつらを止めることは誰にも出来ないのではないか？　という状況が出来上がっていた。

「皆ありがとう。そしてＡクラス戦についてだが、一騎打ちで決着を付けたいと思う！」

先日Ｂクラス戦の前に聴いていた俺達は驚くことはなかったが、これを初めて聞かされた他の連中は驚きと困惑も顕にざわつき始めた。

それはそうだろう、今から総力戦が始まると思わせといて実際には一騎打ちという手段を聞かされたのだし。

『どういうことだ？』

『一体誰と誰が一騎打ちを？』

『戦力から考えて姫路さんか、東城のどっちかか？』

「落ち着いてくれ。何故俺が一騎打ちといったのか、それを今から説明する」

壇上に立つ坂本が供託を叩いて全員の注目を集めながら静かにさせると、一つ咳払いをして再び全員を正面から見て説明を始める。

「やるのはとうぜん、俺と翔子だ」

奴の口から出てきたのは極自然なものであろう、本来はクラス間の総力戦を持って決する戦争を一騎打ちで決めようと言うのだから、クラス間の代表同士での戦いとなるのは基本的な流れだ。

だが、霧島と戦うと坂本は言っていたのだが、勝算はあるのだろうか？　俺であれば霧島と良い線と言うか６割程度の勝率で勝つことは可能だが、かつては神童と呼ばれていた奴も、それは既に過去の名となっている。

元神童と現学年主席の差、これは圧倒的という言葉さえおこがましい状況で2人の間に壁として立ちはだかっている。
それを何とかする策が奴にはあるのだろう、実際に奴の表情には揺ぎ無い自信が見えているしな。

「な、何いっているのさ！馬鹿の雄二が勝てるわけがなあっ！！？」

全員が今発言したバカと同じ事を考えていても黙っていたのだが、空気を読まずに発言した吉井の頬をカッターナイフが通過して、奴の顔に一筋の赤い線を作る。

「次は耳だ」

まあ、本気で当てるつもりで投げるとは思えないが、それでも美神さんという前例を知っているだけに俺は坂本は吉井に当てるだろう、とも僅かに考えていた。

「まあ、明久が今言った通りに翔子は強い、正面からまともに遣り合えば勝ち目と言うのはまず存在しないだろう」

そうだ、今までの戦いでさえもDクラスは兎も角として、Bクラスは本来であれば勝ち目のない戦いだったんだ、それは坂本が人の本質って奴を理解して動かしていたからに他ならない。
そう、力で劣っていれば知恵を働かせて団結して立ち向かうことが出来るって言う、人が持つ一番の強みをな。

「けど、今回だって勝利の二文字は揺るがない、俺は必ず翔子に勝ってFクラスはAクラスを手に入れる！」

まあ、なんだかんだいわれながらも、こんなFクラスを勝利へと導いてきた坂本の言葉だ、この教室にいる連中の胸の中には誰の言葉よりも深く、響いていることだろう。

「俺を信じてくれ！過去に神童と呼ばれた俺の力をこの戦いで全力で発揮する！！」

『『『『おおーーーーー！！！』』』』』

これ以上ないというくらいの雄たけびを上げるFクラスの連中、何気に小さくではあるが姫路と島田も混じっていることから、全員

の意思確認は必要がないであろう。

「さて、具体的な一騎打ちの内容だが、一騎打ちの際にはフィールドを限定するつもりだ」

「フィールドの限定じゃと？　何の教科で挑むつもりじゃ？」

「日本史だ」

日本史、だと？　霧島本人から日本史が不得手だとかの話は聞いたことがないな、逆に得意と言える分野の一つに入っていたはずだ。

去年霧島の奴が言っていた坂本と幼馴染と言うのは、どうやら本当みたいだな、となれば坂本しか知らん霧島の弱点を知っていると言うことか。

「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点を上限として、召喚獣勝負ではなく、純粋な点数勝負とするってところだ」

「小学生レベルのテストだったら満点が当たり前だし、きっと延長戦だよ？　そうなったら絶対にテストのレベルも上がっていくだろうし、ブランクのある雄二にはきついんじゃないの？」

「明久の言う通りじゃの、坂本、お主一体どういうつもりじゃ？」

「吉井に木下、まずは坂本の話を聞いておこう、質問やらはその後でも出来るし、それに運頼みとしかいえないこの作戦を実行するんだ、お前は必勝の策があるんだろう？　坂本」

坂本の言葉を聞いた吉井と木下の２人は鋭い指摘を飛ばすのだが、俺は二人を諌めながら坂本に対して都築を話せと言葉と目で示す。
こんな俺の姿に坂本はいつも通りに不敵な笑みを浮かべており、自身の策に絶対的な自信を持っていることが窺えた。

「おいおい、明久に秀吉、東城が言った通り俺が完全に運に頼り切った方法を作戦だ、などというわけがないだろうが」

「？　じゃあ、霧島さんの集中を乱す何かを知っているの？」

「いや、あいつにとっては集中していようがしていまいが、小学生レベルの問題であれば百点満点を取ることなんて容易いだろう」

それはそうだろう、常に冷静沈着と言えるあの少女の集中力を乱せると言えば坂本くらいだが、あの以外に負けず嫌いの霧島の奴がこと勝負関係において集中を乱すとかありえん。
テスト中の監督の教師がいる中で坂本がどんな妨害工作を練ろうが、霧島には通用しないだろうな。

「雄二、もったいぶるのもこれまでじゃ、いい加減に何が必勝の策なのかを明かすが良い」

そんな時に放たれる木下の言葉、木下自身は落ち着いているのだが他のクラスの連中は少しだけ苛立った様子も見れることから、坂本の言葉を待っているのは明らかだ。

木下を聞き全員が頷いているのを確認した坂本は、一度かぶりを振ると、改めて口を開いた。

「すまない、つい前振りが長くなってしまった……　俺がこの方法をとる決心をしたのは、ある一つの問題が出れば、あいつは必ず間違えると分っているからだ」

「その問題って？」

「それは……　大化の改新だ」

なぜ大化の改新が？　これがこの教室にいた全員が抱いた疑問だろう。

「坂本、大化の改新と言っていたが……　まさかとは思うが霧島の奴は年号を間違って覚えているとか、言わないだろうな？」

「ビンゴというか大正解だ、東城、あいつはその大化の改新の年号を間違えて覚えているのさ」

「まさか……」

「事実だ」

坂本の言葉を聞いて半ば当てずっぽうで言った俺だったのだが、大正解と言われて絶句する破目になった。

まさか【あの】霧島にそんな弱点があったとは思いもよらなかったからだ。

だが、ここで偶然俺の耳は吉井の口から小声で放たれた一つの言葉を耳にする。それは『１１９２（良い国）造ろう、大化の改新』だったからだ、吉井、お前って奴は……　いや何も言うまい。

「大化の改新が起きたのは６４５年だ、こんな問題なんぞ明久でさえも間違えることはないだろう」

「……」

この答えと言葉を聞いた吉井の顔全体に冷や汗がダラダラと出て来ており、奴の動揺具合が手に取るように分る。

「この問題が出ればあいつは必ず間違える。そうなれば俺たちの勝利は決定だ、そして晴れて俺達はこの教室ともおさらばってわけさ」

「あの、坂本君」

「ん、なんだ姫路？」

とここで姫路が質問の為に手を挙げる。

それはそうだと言える、これまで坂本は霧島のことを名前で呼び捨てにしたり、あいつとかで呼んでいたことから、かなり仲の良い顔見知りでない限りはあのような呼び方はしないだろう。

ある意味でつんだな、坂本。

俺はそう考えてほくそ笑んでいた、前回現れたあいつらをＦＦＦ団がこのクラスにいることを、忘れているんじゃないか？　こいつは。

「霧島さんと坂本君は仲が良いのですか？」

「ん？　まあ、あいつとは幼馴染だが」

「総員狙えぇ！！」

「なっ！？　何故明久の号令で俺に向けて上履きを構える！それに何時んな黒いローブに着替えた！？」

「黙れぇ！！この男の敵！Ａクラス戦の前に貴様を倒す！！」

「ちょ！？　俺が何をしたってんだ！！」

俺と木下以外の男子が全て総立ちで坂本へと憎悪とも呼べるくらいの敵意を向けており、こいつらがドンだけ女の子に餓えているのかが分かろうと言うものだ。

だが、不意に俺の背筋を少し冷たいものが流れる。
もしもだが、奴らに俺と佐々木の関係がばれたら……　間違いなくこれが全て俺に向くことは確実だな、もしもそうなった時のために対策くらいは練っておくとしようか。

「遺言はそれだけか？　……　待つんだ須川君、靴下はまだ早すぎる。それは押さえつけてから最後に口の中に押し込むものだよ」

「了解です。吉井隊長」

ギラギラと目を危険に輝かせるバカ共、正直に言って他人の振りをして教室の外に出たいのだが、状況は更に変化を見せる。

「あの！吉井君」

「何、姫路さん」

「吉井君は霧島さんの様な女性が好みなんですか？」

「え？　そりゃぁ、まあ美人だし男としては正直な欲求だよ」

「「……」」

「えっ？　なんで姫路さんは僕に向けて攻撃態勢を取るの！？　それに美波もどうしてちゃぶ台なんて物をこっちに投げようとしているのさ！？」

「まあまあ戯れもそこまでにして、落ち着くのじゃ皆の衆」

両手を心持ち大きめな音になるように叩きながら場を取り持っている木下、やはり……　こいつが良心と言う名の最後のストッパーなんだな。

そんなことを俺は考えながら、ちゃっかりと教室の隅へと避難していた。

「秀吉はこの男の敵が憎くはないのかい？」
「何を言うておるか、相手はあの霧島翔子じゃ、男が眼中に存在しているとは思えんのじゃが」
「……　それは確かに」

場を収めてくれたのはありがたいが、確かに霧島には同性愛の噂があったな。
だが霧島は病的なまでに一人の男が好きなだけだから、今まで告白して来た男全てを振っているだけであって、実際には今でもある一人の男をっていうのが真相なんだが、言わぬが華かね。
俺の思考なんぞ全員無視して勝手に話は進んでいく。

「霧島が興味を示すと言えば……」
「そう、だね……」
「え、ど、どうして皆さん私を見るんですか？」

まさかとは思うが、このクラスにいる坂本と俺以外の全員が、霧島の狙いは姫路などと考えているのではあるまいな？　などと俺は

普通の常識を持っていればありえない妄想といえることを心の中で否定できないのだった。

「まあ俺と翔子の関係は分ったと思う、俺が小さい頃にあいつに間違えて大化の改新について間違った事を教えたのが原因だ、だけどあいつは一度覚えたことはたとえそれが間違っていようとも絶対に忘れない、それがあいつを学年主席にまでのし上げた原動力だ」

気を取り直したようにしていわれる坂本の言葉、一度覚えたことは絶対に忘れない、か確かにそれは普通に考えれば強みだが、今、この戦いの場では致命的な弱点となる。

「俺は、それを利用してあいつに勝つ！！そうしたら俺たちの机は――――――――」

『システムデスクだ！！』

その言葉は全クラスメイトの悲願でもあるだろう。

俺はそんなことを考えながら、宣戦布告の使者として首脳陣全てが出向くことを聞いていた。

俺のマナーモードに入っていて振動している携帯は、メールの着

信があったことを示していた。

時は少し進んで、1時間目が始まる直前の休み時間、俺は屋上へと足を運んでいた。

理由は簡単だ、Aクラスのある人物に呼び出されたからだ。

「待たせたな」

「……　別に待ってない」

そう、俺を呼び出した人物は霧島だ。
あのメールには『屋上で待つ　　霧島』とだけ書かれていて、俺はそれを見て足を運んだ形になる。

「で、何の用だ？　霧島、言っておくが今度の試召戦争についての作戦は漏らさんぞ」

「……　聞くつもりはないから心配はしないでほしい」

「そうかい」

俺が気になっていたのが一つあった、それは霧島の表情が怒りを堪えているかのように険しいものになっているからだ。
ほとんど表情というものが変化する事のないコイツにしては珍しい表情に、俺は少し疑問を感じるのだが、霧島は俺の心境など知ったことではないと言う様子だった。

「……　今度の試召戦争で、東城との決着をつけるから、覚悟をしておいて」

「……　何の覚悟を決めろってんだ？　霧島」

「……　明日香のこと、あの娘を何時まで待たせるつもり？」

「やれやれ、俺の意思は無視ってことか？　どうして応える事が出来ないことだとかは考えないのか？」

「……　それは知っている、でも、私も一人の女だから、一人の男性を想っている女の気持ちは分っているつもり」

俺は心の内で舌打ちをしたい考えで一杯だった。

どうしてコイツが佐々木に俺が言ったことを知っている？　それ以前にコイツと佐々木の関係は一体なんだ。

そんなことを考えている俺の様子を見た霧島は、一つ頷いて俺が疑問に感じたことを察したのだろう、改めて口を開いた。

「……　あの娘と私は親友、だから明日香から相談とか、東城とのことを楽しげに話して、悲しそうにしているあの娘のことを知っているから、だから私は貴方に言っている」

「予想外、と言うべきか……　だが、霧島よ俺があいつの想いに応えるか応えないか、俺自身が答えを出すかは当人たちの勝手だということも、分って口を出しているんだな？」

「……　分ってる、だからこそ今回のことで、私は雄二の事も貴方と明日香の事も決着を付けるつもり」

霧島の口から放たれる言葉は、俺の予想を完全に超えている内容だった。
俺からしてみれば確かに佐々木の今の交友関係は知らなかったのだが、霧島と親友と呼べるような関係を築いていたとはな、幾ら霧島とはビジネスと言うか除霊関係での付き合いしかないとはいえ、今まで全くそういった話を聞かなかったのは、霧島が隠していたからだろうな。

最後の霧島を聞いた俺は、あえて挑発の意味をこめて肩をわざとらしく竦めて見せたのだが、これが霧島にはお気に召さなかったようで、彼女の視線はより険しくなる。

「分ったよ、霧島がそこまでの決意を固めて俺に挑んでくるのなら、受けて立つさ」

「……　それで良い、私も全力で貴方を屈服させて、あの娘の想いに応えさせるだけだから」

「そうか」

「……　じゃあ、次会うときは決戦の場で」

だが険しくなった霧島の視線を俺は表情を引き締めて正面から見据えると、彼女は少しの間俺を試すように見つめていた。
だが、不意に視線を外して屋内へと続く扉の前に着くと、俺と彼女との間に交わされる宣戦布告の言葉、これを残して彼女は校舎内

に入って行った。

「参ったね、これは……」

一人残された屋上で、俺はこれから待ち受けるであろう事を考えて、思わずそう呟いていた。

9話　Aクラス前哨戦（前書き）

ちょっと今回は腐のような展開が後半部にあります。
苦手な方はご注意を。

9話　Aクラス前哨戦

第9問　以下の問いに答えなさい

『人間が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい』

姫路　瑞希の答え

『？　脂肪　？　炭水化物　？　タンパク質　？　ビタミン　？　ミネラル』

教師のコメント

流石は姫路さん、優秀ですね。

東城　和人の答え

『？　脂肪　？　炭水化物　？　タンパク質　？　ビタミン　？　ミネラル』

教師のコメント

……　第一問目に必ず珍回答をしている貴方の名前を見て、反射的に第一問目を不正解にしてしまった先生をどうか許してください。

吉井　明久の答え

『？　砂糖　？　塩　？　水道水　？　サラダ油　？　湧き水』

教師のコメント

それで問題なく生きていけるのは、君だけです。

土屋　康太の答え
『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経と言う。また十五歳になっても初潮がない時を遅発月経……　更に十八歳になっても初潮がない時を原発性月経といい……』

教師のコメント
　保健体育のテストは一時間前に終わりました。

～バカとテストと霊能者～
～第９話　Ａクラス前哨戦～

あの後、教室へと戻った俺は坂本達に捕まり、一緒になって宣戦布告の使者としてＡクラスに到着していた。

「一騎討ち？」

「ああ。俺たちＦクラスは試召戦争として、Ａクラス代表に一騎打ちを申し入れる」

既に俺たちにとっては恒例行事とも言える状況の宣戦布告という行為。

目の前で椅子に座って坂本と相対しているのは『木下　優子』だった。

苗字で言えば分るんだが、こいつは木下の双子の姉であり、女版

木下と言える外見をしているので、普通に美少女と言える外見をしているんだが、なんだろうか不自然な感じを受けなくもないんだよなぁ、まあ女性は皆結構強烈な裏の面があるし、こいつにもあるんだろう。

なんて事を俺は考えていた。

「うーん……　何が狙いなの？」

そういって僅かに眉を顰める木下姉、確かにそうだろうな。
通常の試召戦争の申し入れではなく、一騎打ちの申し入れなのだから、彼女の疑問も尤もだろう。

学年最低レベルの俺達が最高の学力を誇る霧島を相手に、と言うことも含めてだ、普通ならば裏があると勘繰ってもおかしくはない。

「もちろん、俺たちFクラスの勝利が狙いだ」

「面倒な試召戦争を手早く終わらせられるって言うのはありがたいけどね、だからと言ってリスクを冒す必要もないかな」

「賢明な判断だな」

予想通りというか分りきっていた返事が彼女の口からは出てくる。
さてとここからがきょう……　ゲフンゲフン、交渉の本番、と言ったところか。

「ところで、Ｃクラスとの試召戦争はどうだった？」

坂本が腕を組み、手をあごに当てて口元には小さく不敵な笑みを浮かべてから、そう切り出した。

「時間は取られたけど、それだけだったわよ？　特に問題もなし」

俺と木下の挑発に言いように乗って、Ａクラスに攻め込んだＣクラスなのだが、半日であっさりと返り討ちにあっていた。
この目の前にいる木下姉と、利光の奴がＣクラスからの集中攻撃を受けたと聞いたのは、まあご愛嬌と言う奴だろう。
まあ、そのＣクラスも今現在は敗北した為に、Ｄクラスと同様の設備で授業を受けているんだがな。

「Bクラスとやりあう気はあるか？」
「Bクラスって……　代表が『あれ』な人よね？」
「ああ、アレが代表を務めているクラスだ、何があったかは知らんが、クラスの連中とも少しは和解しているらしいからな、強敵と言えるぞ、それに試召戦争の準備をしているようだしな」
「でも、BクラスはFクラスと交戦して敗北したから、三ヶ月の準備期間が過ぎないと宣戦布告できないはずよね？」

そういって坂本が継げたのはBクラスのことである。
見た目だけで見れば相当に嫌だったのだろうし、実際に対応したのも彼女だったのだろう。
不愉快そうに彼女の眉は歪み声も尻すぼみとなって、嫌なことを思い出さないようにしている様子であった。

だが、彼女の言った三ヶ月の準備期間というのは、基本的に試召戦争に負けたクラスは、それから三ヶ月間の間教室のランクを落とされるのと同時に、宣戦布告が出来なくなるのだ。
いわば実質的に三ヶ月間は試召戦争を行う権利を剥奪されると言っても良い、このルールが導入されたわけは簡単に言えば、試召戦争の泥沼化を防ぐもので負けたクラスがすぐに買ったクラスに賽銭を申し込むことがないようにと、定められたルールである。

「知っているだろ？　真実はどうであれ、俺達が戦った戦争は全て

『和平交渉による終戦締結』と言うことだからな、試召戦争の規約やらは何も問題はないぜ、Ｂクラスはもちろんｄクラスだって同じだな」

これが坂本の狙いだ、実情はどうあれ教室の入れ替えを行わずに破格の条件をつけることで、出来てきた体外的な終結だ。

「それって、脅迫、なのかな？」

「人聞きが悪いな、ただのお願いって奴さ」

まあ、傍目には脅迫としか写らんだろうな、悪どい笑みを浮かべた坂本に対して険しい表情を浮かべている木下姉、まあ当然だろうな。

「うーん、分ったわ、そちらの提案を呑みましょうか、代表が負けるはずはないんだから」

「え、本当に？」

以外にあっさりと頷いた木下姉だったのだが、吉井はこれに驚いたのだろう、今まで口を挿まなかったのだが、つい口を挿んでしまったと言う様子で木下姉に問いかけていた。

「だって、あんな格好をした代表のクラスと戦争だ、なんて嫌だし……」

まあ、彼女がこんなことを言うのは無理もない、幾ら心を入れ替えたとは言ってもあいつの女装姿と言うのは、とてもじゃないが見れたものではないからな。

だがおかげで提案が通ると言うのも不思議なものだが、木下姉の口元には策士が浮かべるような笑みが浮かんでいることから、何かを言って来るのは間違いないか。

「でも、こちらからも提案よ、まず代表同士がいきなり戦うんじゃなくて、それぞれが五名を選抜してから、まずは戦うって言うのはどうかしら？　それぞれの五人で一騎打ちを行って先に三勝した方の勝ちっていうのなら、良いわよ」

そうきたか、彼女の言葉を聞いた俺はそう考えていた。

「なるほどな、東城か姫路が出てくることを警戒してってわけだ」
「まあね、でも、私達が本当に警戒しているのは東城君よ、知らないとでも思った？　彼は去年代表を大差の点数で打ち破ってからずっと、徹底的に力を抑えていたって事にね、彼の本当の実力って代表を圧倒できるんでしょ？　だから、この五人での一騎討ちを提案したの、それにBクラス戦で彼が教師並みの点数を取ったっていう確かな情報もあるし」
「なるほどな」

どうやら俺が霧島との一騎討ちに出てくると彼女は予想したようだが、まあ、現実は坂本と霧島の一騎討ちになるから、無用の心配と言えるだろうが、当然の事ともいえるな。

「安心してくれ、こちらからは俺が出るんだからな」
「その言葉だけじゃ、安心は出来ないし、それにこれは競争じゃないよ、戦争だし」

坂本の言葉に重ねるようにしていった、彼女の言うこともまた尤もな話しだ。
一目見た限りでは譲歩しているように見せて、自分たちに有利な

場面へと持っていこうとする木下姉を坂本も認めたんだろう、笑みを不敵なものから獰猛なものへと変える。

「そうか。それなら、条件を飲んでも良い」

「ホント？　嬉しいな♪」

「ただし、勝負内容はこちらで決めさせて貰う、最低クラスが最高のクラスに戦いを挑むんだ、この位のハンデはあっても良いんじゃないか？」

木下姉もまだまだと言ったところか、ここまでは恐らく坂本の掌の上だったのだろう、奴の顔には隠されていはいるものの、獲物が掛かったハンターの雰囲気が伝わってくるしな。

「え？　うーん……」

彼女にとっては予想外といえる言葉だったのか、本気で悩み始める木下姉の状況も当然だ。

今ここにいる彼女はクラスを代表して交渉の席についている、言うなれば自分の一言でクラスのこれからが決まってしまうようなものだから、簡単には返事が出来ないのだろう。

「……　受けても良い」

「うえぁ！！」

ここで何時の間にやら木下姉の後ろに立っていた霧島が発言するが、吉井よ驚きすぎだ。
なんて突っ込みたくなってしまう。

「……　雄二の提案を受けても良い」

ほとんど無意識に気配断ちとも呼べるようなものだからか、他の坂本を除いたFクラスの面々も同様の様子だった。
だが、こんな俺たちの様子を放って置いて話は進んでいく。

「あれ？　代表。いいの？」

「……　その代わりに条件が二つある」

「条件？」

「……　うん」

そこで言葉を切った霧島は、一度姫路を品定めをするかのようにじっと見つめた後、一瞬だけ本当に一瞬だけではあるが、俺に向けて険しい視線を向けてくる。
俺はそれに対して何もしないことで応えていたのだが、坂本は俺と霧島のやり取りに気が付いたらしく、訝しげな視線を向けて来ていた。

「……　負けた方は何でも言う事を一つ聞くこと」

「……っ！！（カチャカチャ）」

「ムッツリーニ、まだ撮影の準備は早いよ！！というか、負けるつもり満々じゃないか！」

このバカ共……　吉井とムッツリーニのやり取りをチラリと見た俺は頭を抱えたい衝動に包まれる。
それは坂本も同様のようで、こっちは頭を抱えてバカ共を見て、それから諌めるような言葉を言っていた。

「待てお前ら、翔子はまだもう一つの条件を言っていない、それはなんだ？」

「……　雄二が負けた時の状況が私の納得のいかないものだったら、Ｆクラスのある人物との一騎討ちにして再度戦闘をしてもらう」

「何でそんな条件を付ける必要がある？　それに先に言った条件は再戦する時には無効になるのか？」

二つ目の条件を言った時に木下姉は何かを言おうとしたのだが、霧島はそれを手で制すと更に言葉を付け加えていた。

そこで出てくる坂本の疑問、当然だ、ここで出てくる霧島の条件如何によっては、とんでもない状況になってしまうんだからな。

だが、どのような条件が出されたとしても俺たちには受けないと言う選択肢はない、否、存在できない。

「……　無効にはならない、逆に雄二が最初に勝てばそこで完全に戦争は終結する」

「分った、続きを言ってくれ」

「……　私が勝った後、指定した人間との一騎討ちに負けたら、その人にも同じく勝った時の条件をつける」

霧島の言葉を聞いてどよめく今日室内、それはそうだろう、もしも坂本が負けてさらにもう一人が負けると、Ｆクラスは２度も言う事を聞かなくてはならなくなる。
恐らくは俺と決着を付けると言っていたあの言葉を実践するつもりだろう、だが、ここで今まで黙って聞いていた木下姉が立ち上がる。

「ちょっと代表！そんな条件「……優子」代表？」

「……　私の我侭だって分っている、負けたら、責任は必ず取るし皆にも迷惑を掛けないようにする、だからお願い」

「代表……　わかったわよ、Ａクラスへの条件に関しての説得はするわ」

「……ありがとう」

彼女の反発の声は当然のものだろう、普通に考えればこのような条件を付けること自体が非常識なのだから。
事実、坂本の表情は驚愕やら疑問やらの感情が色々浮かんで複雑なものになっており、彼女が出してきた提案が彼女の性格を考えると、意外なものだったのかを窺わせる。

「でも、代表が言ってきた条件だとこっちが有利になるから、五回の一騎討ちの４回の教科選択権をそっちにゆずるわ」

「分った、交渉成立、だな」

「ゆ、雄二何を勝手なことを言っているんだ！！まだ姫路さんは了承していないんだよ！？」

落とし所としてはこの辺だろうな、木下姉は教科選択権を４回譲った形になるが、これにごねる権利事態はこちらにはない。
逆に更に厳しい条件がつけられる可能性もある現時点では、一番良いところだろう。

だが、吉井は未だに見当違いの方向に勘違いをしているな、霧島には同性愛の性癖はないというのに。

「心配するな、姫路には迷惑を掛けない」

自身に満ち溢れて入るのだが、どこか感情に揺らぎのある面をわずかに見せている坂本の姿があった。
やはり霧島のあの提案が以外だったのだろうが、今はそういうことを考えている場合じゃないな。

「……　勝負は何時から？」

「そうだな、十一時からで良いか？」

「……　かまわない」

坂本と交わされる言葉との間に再び一瞬だけ向けられる霧島の鋭い視線、俺はこれを正面から受け止めて他の連中には気付かれない程度に肩を竦めていた。

これを見て再び彼女の機嫌は悪くなった様子を見せるのだが、俺はそれに構うことをしなかった。

「よし、交渉は成立だな、一旦教室に戻るぞ」

「うん、そうだね、皆にも報告しないと」

そういって他の連中全員がＡクラスを後にするのだが、俺はそんな中で坂本へと近付き奴にだけ聞こえる声で話しかけていた。

「心配するな、坂本」

「ッ、どういう意味だ？　東城」
「霧島はお節介を焼いているだけさ、ある一人の少女の為にな」
「……　今はそれを信じると言うか、俺と翔子の間には」
「何もないってんだろ？　分っているさ」
「……　だったら良いが」

俺の言葉に明らさまに動揺を示した坂本だったが、すぐにそれを収めて俺へと問いかけてくる。
奴の瞳には未だに不信感と言う感情が揺らめいているのだが、坂本はそれを奥へと押しやることに決めたらしい。

そして未だに意地を張っているこいつに対して、俺はニヤニヤとした笑みを浮かべて声を掛けるのだが、奴には俺の笑みの意味なんぞ丸分りだろう。
だが、本人は隠しているつもりだろうが安堵の色が表情に浮かんでいることから、いつからかってやろうかね、などと俺は心の内で黒い笑みを浮かべて考えていた。

まあ、その時に隣にいたゴリラとも呼べる大男が悪寒を感じたと言うのは、まあ、完全な余談だな。

そして時間となり俺たちFクラスは全員でAクラスへと到着していた。
俺たち全員とAクラスの生徒たちが一堂に会してもまだ余裕があるとは、流石に完全実力主義を謳い文句に教室のランクを決めている訳ではない、と言うことだな。

「ではこれより試召戦争を始めます。両名とも準備は宜しいですね？」

ジャッジはここ数日の間、お世話になっていたAクラス担任の高橋女史が勤めていた。
きつそうに見える切れ長の瞳にメガネを掛けた、クールな感じの美女であるのだが、何故だろうか……　俺はこの人を見ると背筋に冷たい汗が流れることが多いんだよなぁ。
彼女に何かされたと言うわけでもないし、気のせいだと言うこと

にしておこう。

「ああ」

「……　問題ない」

なんていう俺の内心など誰も知ることもないので、状況は流れていく。

「では、一人目の方、どうぞ」

「それじゃあ、私から行くわね」

高橋女史の言葉に応えてAクラスから出てきたのは、にこやかな笑みを浮かべている木下姉だった。
対してこちらも既にある人物が名乗りを上げており。

「ワシが行こう」

彼女の弟である木下　秀吉だった。
まあ、こいつならば木下姉の苦手な教科や弱点を把握しているだろうし、妥当な線と言うところだろう。
だが、何かを忘れている気がする。なんだろう、俺にも関係していたはずなんだが。まあ、いいや。

「ねえ、秀吉」
「なんじゃ？　姉上」
「貴方、Ｃクラスの小山さんって知ってるかしら？」
「んむ？　誰じゃ？　そいつは」

木下姉の言葉を聞いた瞬間、俺の背筋に大量の冷や汗と悪寒が沸きあがってくる。
わ、忘れてた……　俺が利光に変身してＣクラスを挑発したことを、しかも、それに対して何のフォローもしていない事を……　感じる利光のものと思しき視線と不穏な気配を、それを極力顔に出さないようにしているのだった。
「うーん、まあ良いわ、それよりもこっちに来てくれる？」

「なんじゃ、姉上、ワシを廊下に連れ出してどうすると言うのじゃ？」

そして姉によって連れ出される木下、正直に言うと俺は今すぐにでもこの場から逃げ出したい気持ちで一杯だった。

何しろ、不穏な瞳の色をした利光の奴が不気味な沈黙を守っているのだから。

『姉上、勝負は――――――　どうしてワシの腕を掴むのじゃ？』

『アンタ、Ｃクラスで何をしてくれたのかしら？　どうして私がＣクラスの人達を豚呼ばわりしているなんて事になっているのかしらぁ？』

『はっはっはっ、それはじゃな姉上の本章をワシなりに推測して――　あ、姉上！ち、ちがっ！……　その間接はそっちには曲がらなっ……』

最初こそ穏やかに問いかけていた木下姉であったのだが、すぐに木下の悲惨な悲鳴が聞こえてくる。

どうしてだろう？　他人事に思えないんだが、木下が連れて行かれた後から利光はこちらに向けて表面上は笑顔なのだが、ナニか危険の感じる笑みを浮かべていたのだから。

そんな冷や汗をかいていた俺を無視して木下姉が戻ってくるのだが、彼女の両手は血に染まっている上に表情はどこかすっきりした様子を見せていた。

「秀吉は急用が出来たから帰るって、さあ、代わりの人を出してくれる」

「い、いや……　うちの不戦敗でいい」

にこやかにハンカチで返り血を拭いながら、坂本に声を掛ける木下姉の姿、この声に坂本は少しと言うかかなり引きながら返答を返していた。

だが、本来なら俺が立候補してでも木下姉の所で一勝を飾るべきなのだろうが……　俺が立候補しようとした瞬間、利光の目が妖しく光ったので自重したのだ。

ちょっとだけがっかりした様子を見せたから、間違いなく奴は俺が出来た時に俺に制裁を加えることを考えていたんだろう。

しゃしゃり出ないで良かった。

「そうですか、それではまずAクラスが一勝、と」

『Aクラス　木下　優子　VS　Fクラス　木下　秀吉

生命活動　　ＷＩＮ　　ＶＳ　ＤＥＡＤ』

続いて二回戦へと続くのだが、勝手ながら割愛といこうとしようか、Ａクラスからは佐藤　美穂という女子生徒が出てきたのだが、こちらからは吉井だったんだから。
結果などいうまでもなく瞬殺されて奴は今俺たちの目の前で島田によって折檻されていたりする。

「では、三人目の方どうぞ」

「……　（スック）」

出てきたのはムッツリーニか、と言うことはここで一勝を取るということだろうな。
奴ということは保健体育以外はありえんだろうし。

「じゃ、こっちからは僕が行こうかな」

Ａクラスからは髪の短いボーイッシュと言うべき少女が出てきた。
ふむ、奴を知らずに出てきたのか、それとも知っていて対抗が出

来るから出てきたのか、どっちだろうな？

「一年の終わりに転校してきた工藤　愛子です、よろしくね♪」

ぱっと見は体の凹凸も少なく美少年にも見えるが、年頃の少女らしい顔のつくりや他の部分も少女と言うことを主張している。

「教科はなんにしますか？」

「……　保健体育」

冷静に訪ねる高橋女史の声に応えてムッツリーニは当然の如く、自身の最大戦力の教科を即答とも言うべき速度で言っていた。

「土屋君だっけ？　随分と保健体育が得意みたいだね？」

工藤がムッツリーニに話しかけていたが、やはりコイツはムッツリーニに対抗できる自信があるようだな。

何しろ余裕そうに見えていてその実瞳には一切の油断も驕りもない、自分の成績に自信があるからこそ出来る瞳だろうな。

「僕もかなり得意なんだよ……　キミとは違って、実技で、ね♪」

か、かなりの問題発言だな、おい、既に俺の周囲にいるバカ共は色めき立っており、彼らの仲でどんな妄想が繰り広げられているのか、それが一発で分る状況が展開されていた。

その上に連中に対してAクラス女子の冷たい視線が降り注いでもいるから、こんな風に自分で自分たちの評価を下げる行動を取れるから、こいつらには彼女が出来ずに女に餓えることになるんだろうな。

「そっちのキミ、吉井くんだっけ？　さっきの見てて思ったんだけど勉強が苦手なようだし、僕が教えてあげよっか？　モ・チ・ロ・ン、保健体育でベッドの上で、ね♪」

この言葉を聞いた吉井の表情は引き締まると大真面目な顔になる。

……　なんでこんなときだけこんな表情をするんだ、お前って奴は。

「フッ、望むと――――――」

「アキにはそんな機会なんて永遠に来ないから、保健体育の実技の勉強なんて必要ないわよ！！」

「そうです！！そんな機会なんてないんですから、必要ありません！」

「島田、姫路……　吉井の奴が今にも召されそうな様子になっているんだが……」

張り切って工藤に返答しようとした吉井の言葉を遮って、島田と姫路が発言するのだが、酷い言葉が帰ってくる結果だった。

確かに思いを寄せている男子がああいう風に言い寄られて嫉妬したのは分るんだが、せめて言い方くらいは考えてやれと言いたいなぁ。

だが、工藤は何を思ったのかこちらを向くと、その顔に悪戯な笑みを浮かべていた。

「そっちのキミ、東城君、だよね？　吉井君に断られちゃったからさ、キミはどう？」

「謹んで断らせてもらうさ、そういった行為は好きになった人とするべきだろうし」

「へぇ〜　意外に古風なんだねキミって、顔が良いから結構遊んでいそうだったけどね」

「んな分けないだろ」

やはりと言うべきことを言い出した工藤にお断りの返事を返したのだが、続いて放たれた工藤の言葉には少々額に青筋がたってしまうのは、無理もないことだった。

周りの連中は工藤の言ったとおり、遊んでいそうと考えている様子を見せている者もいることから、こいつらの中での俺の評価がどうなっているのかを知りたくなった。

「そろそろ、召喚を開始してください」

「はーい、試獣召喚っと」

「……　試獣召喚」

いい加減に進まなくなってきた、この現場を収めるように発言した高橋女史に応えて、２人をそれぞれデフォルメした召喚獣が出現する。

ムッツリーニの方は今までと変わらずに二刀小太刀で武装した召喚獣だ。

対する工藤はと言うと。

「な、なんだあの巨大な斧は？」

吉井の言葉が示したとおり、工藤の方は巨大な斧を持っており、見るからに凶悪な外見をしていた。
その上に高得点者特有の腕輪も装備していることから、かなりの点数も持っていることも窺える。

「理論派と実践派のどっちが強いか、教えてあげるよ」

工藤の顔が艶やかな笑みを作り上げると同時に、斧が電撃を纏い始めてかなり速い速度でムッツリーニへと肉薄する。

「それじゃぁ、バイバイ、ムッツリーニ君」

「ムッツリーニ！！」

傍目には避けられるとは思えないだろう攻撃、だが、ムッツリーニの顔にも俺の顔にも、坂本の顔にさえも焦りの色は浮かんではいない。
と言うか吉井よ、俺よりムッツリーニとの付き合いは長いはずなのに、何でお前は一々そんな反応が出来るんだよ、ムッツリーニがこんなことでやられる奴じゃないことはわかるだろうに。

「……　加速」

一部の人間以外がムッツリーニがやられると思った瞬間、ムッツリーニは腕輪の力を解放、召喚獣の姿がぶれる。
いや、普通の動体視力では追い切れない速度で動いているだけだ、奴の召喚獣は一瞬で工藤の斧を回避、その後二刀小太刀の連撃で工藤の召喚獣を切り刻み、反対側へと抜け出ていた。

「……　加速、終了」

加速状態が終わりムッツリーニの召喚獣が小太刀を鞘に収めたと同時に、工藤の召喚獣は全身から血を流して消え去る。
それから少しと言うか一瞬の後に、それぞれのクラスと点数が表示されるのだが、それは驚くべきものだった。

『Ａクラス　工藤　愛子　ＶＳ　Ｆクラス　土屋　康太
保健体育　４４６点　ＶＳ　６３８点』

「「「「「「なっ！？」」」」」」

漏れ出る驚愕の声、それはもちろん俺の声もそこには含まれていた。
何時の間にと言うか前回の俺の物理並の点数じゃないか、コレ、俺は保健体育であったならとれて４００点代だから、ムッツリーニにおいてはこと、保健体育の分野では勝ち目など全く無いという事になる。

「……　前回のできは今一だった、今回もそこそこ」

「「「「「「「「「「「「……」」」」」」」」」」」」

更なるムッツリーニの言葉を聞いた全員が引いた。
こいつは……　いったい何処へと向かうつもりなのであろうか？
そう疑問を抱かずに入られない勝負だった。

「そ、そんな！こ、この僕が！？」

工藤はと言うと四つん這いになってうなだれていることから、相当なショックを受けたのだろう。
だけどムッツリーニのような規格外と自分を比べること自体が間違っているとは、考えないのだろうな。

「ではこれで二対一ですね。次の方は？」

「こちらからは僕が出ましょう」

そういって出てきたのは、利光だ。
だが、どこか不穏な光が強くなったと感じるのはせいだろうか？
まあ、良いや。

「ついに来たか、学年次席」

「じゃあ、こっちからは俺が出る……　文句はないな、坂本」

「ああ」

奴が出てきたとあらば、確実に勝てる俺が出た方が良いだろう。
坂本に有無を言わせないように確認を取るが、坂本は俺が出ること自体が当初からの予定であったらしく、俺の姿を見ても動じた様子はなくただ不敵な笑みを浮かべて頷いていた。

「久しぶりの手合わせだ、手加減はしないぞ……　利光」

「こっちこそ望むところだ、と言いたいけれど……　和人、ちょっとこっちに来てくれないかな」

「い、いや、ちょ、待てよおい！こっちの意思も聞かずに断定形！？」

「高橋先生、少し和人と話があるので外に出ますが宜しいですか？」

「……　フム、少しの間でしたら許可します」

その場の雰囲気に合わせて流そうとした俺だが、利光が一刀両断して俺に近付いて俺の肩を掴んでくる。
不思議と言うよりもかなりの力を発揮して俺の肩を掴んでいる利光、というか、どうしてこいつこんなに力が強いんだよ！？　よ、予想外だ。
高橋女史の許可が出てしまった為に、俺は利光に連れ出されてい

く中、坂本に助けを求める視線を送ったのだが。

『すまん、無理だ』

との無情な回答をいただいた為に、俺は連れ出されてしまった。

僕は連れ出される東城くんの姿を大人しく見守るしかなかった。
多分だけど東城君と久保君は仲が良いんだろう、2人ともそれぞれを名前で呼び合っていたし。

初めて、だよね東城君が名前で呼んでいる人を見たのって。
だけど、外から漏れ出てきた言葉を聞いて、僕は何故だか全身から冷や汗が噴出してくることになった。

『何をしやがる！利光』

『それはこちらの台詞だよ、和人、僕はあんなことをするなんてきみから一言も聞いていなかったんだけど？』

『そ、それはお前に伝えるのを忘れていた、って言うかなんだそりゃ！？』

『決まってるじゃないか、これをきみの――――に――――――――するんだよ』

『ば、馬鹿やろうが！それが――――――に――――――――るわけがないだろう！？』

『物は試しさ、和人、さあ――――――に僕が――――――――してあげるよ』

『止めんか！このバカ！――――――――　アッ――――――――』

どうしてだろう、近い内に東城君が体験していることが僕の身に起きそうな気が（和人は腐な展開になっておりません）してならない気がするんだけど。

同じことを感じたのだろう、特に最後の悲鳴は僕も上げそうな気がしてならないものに聞こえるなぁ。

でも、どうして木下さんは顔を赤くして鼻息まで荒くした興奮した様子で、いるんだろうか？　僕には、それがどうにも気になって仕方がないんだけど。

それから勝負自体は木下さんと同じ様に戻ってきた久保君が、立候補した姫路さんの勝ちで終わったけど、僕の心の中には不安しかよぎらなかった。

何しろ、扉が閉まる直前に見えた、廊下に倒れこんでいたと思われる東城君の手は、ピクリとも動くことはなかったのだから。

廊下に連れ出された俺は利光からの制裁（どんな制裁だったかは、思い出したくもない）を受けて、暫くの間気絶していたようだった。

「あー　死ぬかと思った……」

「んむ、東城か気が付いたのじゃな」

「ああ、そっちも大変だったな木下」

「う、うむぅ」

Aクラスの教室に入った俺を出迎えたのは木下で、木下に俺は労う言葉を掛けたのだが、その時のことを思い出したのか木下は青い顔をしながら、俺の言葉に頷いて答えていた。
だが、目の前の状況が気になる、恐らくは最終戦が終わり坂本の敗北で終わったのだろう、正座した坂本に詰め寄ろうとして姫路に後ろから抱きしめられて制止されている吉井、そんな吉井を宥めようとしている島田の姿。

少しはなれた所には俺を冷ややかに見つめている霧島の姿があるから、間違いなく、この後に俺は霧島と戦わなくてはならないのだろう。

「こちらが負けてしまった以上、霧島があの条件を出さぬ限りはワシらの教室は……」

「恐らくは更に設備のレベルを下げられるだろうな」

苦い顔をして言っている木下の言葉に俺も応えていた。
そう、恐らくだが普通であればこれからのFクラスの設備は卓袱台から段ボール箱に変わるだろうな。

だからこそ、Ｆクラスにとっては、ここで霧島が言っていたもう一つの条件『坂本が負けた際の状況が霧島の納得のいかないものだったら、霧島の指定した人間との一騎撃ち』に期待するしかないのだがな。

「……　雄二」

「なんだ？」

「……　私が勝った時の条件は、後で言うから、待っていて」

「分った、仮にも負けたんだ俺は何でも言うことを聞いてやるさ」

「……　そう」

潔いと言うかという坂本の言葉を他人事のように聞いていた俺だったが、坂本との会話が終わってから、すぐにこちらを向いて真っ直ぐに向かってくる霧島を俺を正面から見据えていた。
既に彼女が言う言葉が分っていたからな、俺には。

「……　もう一つの条件をここで使う。東城」

「フン、分っているさ、霧島」

「では、この後に霧島さんと東城君の一騎撃ちで宜しいと言うことですね？」

「ああ」

「……　そう」

ざわざわと騒がしくなる教室、霧島は俺の前に立つと強い意志の篭った視線を向けて、俺を睨むようにしてそこに立っていた。

俺もそれに応えるようにまじめな顔で、相応しい雰囲気で応えると、高橋女史が場の雰囲気を読んだのか出て着て確認してくる。

俺も霧島もそれに応えるように頷いて、高橋女史に応えると、彼女は頷いて再び召喚フィールドを発生させる。

「……　東城、今回の勝負で決着を付ける……　必ずあの娘の思いに応えさせる」

「やれやれ、俺にも事情があるというのに強情な奴だよ、あんたはな、だけど全力で受けて立つさ！」

「……　こっちも全力でいく」

俺と霧島の間に広がる緊張感と言うか、緊迫感を感じ取ったのか、

両クラスの連中は誰も何も言うこともなく、俺たちの推移を見守っていた。

「では、始めますが教科はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

「……　私も同じで良い」

「分りました、では、召喚してください！」

高橋女史の確認を取る言葉に俺と霧島は応えると、すぐにフィールドが総合科目のものへと切り替わり、俺たちに召喚を促す高橋女史の声も聞こえてくる。

「「試獣召喚！」」

そして、ついに俺と霧島の一騎撃ちは、その火蓋を気って落とすのだった。

9話　Aクラス前哨戦（後書き）

次回は霧島嬢との真っ向からの一騎討ちです。

どういった結果を迎えるのか、作者自身の頭の中では決まっているのですが、まだ秘密であり、期待していただけたら幸いです。

では今回はこの辺で。

１０話　Ａクラス戦―その結末（前書き）

注意！！今回は初めの部分が非常に重い話になっている上に、バカテスっぽくない話に仕上がっております。

そういった話が苦手な方はご注意を、平気な方はこのままスクロールしてくださいませ。

１０話　Ａクラス戦―その結末

第１０問　以下の（　）に正しい年号を書きなさい

『（　　）年　キリスト教伝来』

霧島　翔子の答え

『１５４９年』

教師のコメント

正解。特にコメントと言えるものはありません。

坂本　雄二の答え

『雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った１９９３年』

教師のコメント

ロマンティックな言い方をしても間違いは間違いです。

～第１０話　Ａクラス戦―その結末～

ついに俺と霧島の召喚獣が姿を現した。

俺の方は防具をＤクラス戦での装備していた青い外套を身にまとい、武器をＢクラス前哨戦で持っていたドリルを連想させる剣を持った召喚獣が現れる。

対する霧島はと言うと戦国時代に、女性が身に纏っていたともいる兜のない軽装の鎧を身にまとい、両手持ちの太刀を持った召喚獣が現れる。

そして、俺たちの召喚獣が現れるといつものように点数が表示される。

『Ａクラス　霧島　翔子　ＶＳ　Ｆクラス　東城　和人

総合科目　　４７７１点　　ＶＳ　５０５９点』

この学園での最高実力者同士の点数が表示されたことで、周囲にいる連中の間からは息を飲む音が聞こえてくる。
当然だろう、こんな点数が生徒同士の戦いで表示されること自体が以上とも言うべきことなのだから。
周囲を見渡せば点数表示を呆然と見上げているＡクラスの生徒に、Ｆクラスの生徒の姿が見える。

「行くぞ、霧島、極楽へ行かせてやる！」

「……　望むところ、決着を付ける、東城！」

そういって俺は持っている剣を構えて常識外れの速度で霧島へと駆け出し、彼女は俺の攻撃を太刀で真正面から受け止める。

「……　くっ」

『Ａクラス　　霧島　翔子　ＶＳ　Ｆクラス　　東城　和人
総合科目　　４５７１点　　ＶＳ　５０５９点』

一撃、そう立った一撃打ち合っただけで霧島の召喚獣は２００点近いダメージを受けた。
それもまともにではなくきちんと防御した結果での話しだ、まともに受けていれば間違いなく、彼女の召喚獣に千点近いダメージを与える自身はあったが、まあ、受け止められて次に繋げる為に真正面から突っ込んだのだから、計算済みだ！

「ふっ！！休んでいる暇はないぞ！霧島！」

「……　っ！舐めないで！！」

ぶつかり合い鍔迫り合いとも言うべき状況下で、俺の召喚獣は突然刃を引いて霧島の召喚獣の前から一瞬で消えると、彼女の召喚獣の真横から回し蹴りを叩き込んでいた。

「ゆ、雄二……」

「黙ってみていろ、明久……　多分だがあいつらは何か譲れないもののために戦っている、俺達に出来るのは２人の戦いを見守ってやること、それだけだ」

「う、うん」

回し蹴りを打ち終え足を引き戻して、再び駆け出す俺の召喚獣、その最中に俺の召喚獣が持つ武器に変化が起きていた。
刀身が回転をより早めて紅い電流のようなものを纏っていたからだ、禍々しささえ感じるその剣を使って俺は袈裟懸けに霧島の召喚獣を切り裂こうとすれば、彼女は紙一重で軌道を見切り回避する。
回避した瞬間、彼女の召喚獣が足払いを掛けてくる。俺の召喚獣はそれを片足跳びに飛んで回避すると、彼女の召喚獣の後ろ少し距離は開いた位置にではあるが、危なげなく着地して駆け出していく。

「……　応えて、東城」

「なんだ？　霧島」

「……　貴方が決着をつけようとしているって事は、あの娘の想いを踏み躙ってでも成し遂げなくちゃいけないの？　貴方は明日香が泣いていたとしても自分だけを優先するの！？」

「ふざけるなよ、霧島……　俺がいつ、そんな事を言った！？」

正直、この霧島の言葉には堪忍袋の緒が切れたというか、そんな感情に包まれる結果になった。
確かに俺の方の身勝手な決意であいつは傷ついだろう、でも、俺

はそれ以上に『俺が傍にいたらあいつはもっと不幸になるかも知れない』という可能性を思い知っただけだった。

当時小学校を卒業した時に周りの皆は佐々木も両親と卒業を喜び合っていたと言うのに、俺の方はあいつらは卒業式に来ることなんてない。

佐々木のご両親が俺にお祝いの言葉を多分本心で言ってくれていたんだろうけど、俺が本当に欲しかった人からの言葉はなく、逆に家に帰ったらあいつらにまた暴力を振るわれて部屋に放り込まれるいつもどおりの『日常』だったのだから。

その上にあの日、家に帰る前に当時佐々木を好きだったある男子生徒数人から言われた言葉。

『お前みたいな親で能なしの奴が佐々木さんの傍にいたら、佐々木さんも不幸になるだろ！！』

『そうだそうだ！両親が来てくれない様な奴が何で佐々木さんの傍にいるんだよ！』

『それに知ってるんだぜ俺、お前、親に憎まれて毎日殺されそうになってるんだろ、お前みたいな惨めな奴なんて消えた方がいいんだよ！！』

『その通りだよ！この蛆虫野郎！お前みたいな奴の面倒を佐々木さんは見なくちゃいけないから、俺達はよぉ、このクソ野郎が！！』

ショックだった、当時その生徒たちと俺は友人同士でよく遊んでいた仲でもあったからだ、これは後に知ったことだったが彼らは当時佐々木に告白して全員が振られていたと言うことなのだが、今はまあ関係ないか。
今まで仲良くしていた連中から理不尽に言葉と直接の両方で俺に振るわれる暴力を受けて、俺は同い年の人間の中にさえも居場所はないんだと、そう思わされた出来事でもあったから。

その日に俺は『東城　和人』という名前の存在は、完全に壊されたのかもしれない。
家に帰った直後に向こう側に飛ばされたと言うのに、俺は何も感じることは無く逆に安心までしたのだから。

この世界には完全に俺の居場所がないんだな、と。

「お前に何が分る！助けを求めても誰も助けてくれないあの日々に助けてくれたあいつを、俺が不幸にしてしまうと言う可能性に至った俺の気持ちが！？」

「……　そんなものなんて知らない、東城、貴方は逃げているだけ」

「フン、あいつが幸せになるというのなら、俺は逃げもするしある意味では戦いもする」

「……　だったら」

言葉を交わしつつも俺と霧島の召喚獣の動きは止まっていない、俺が切りつければ、霧島は防御か回避を行いつつ隙を見つけて俺に確実にダメージを与えていく。
話している言葉に不愉快な過去を思い出したことで、俺の方の攻撃と反撃の動きが疎かにもなっており、確実に俺もダメージを蓄積していた。

『Ａクラス　霧島　翔子　ＶＳ　Ｆクラス　東城　和人
総合科目　１５０１点　ＶＳ　１８５９点』

「だからといって、思い、思われる者達が本当に幸せに結ばれるなんてものはな、状況や色々なものが味方しないと成立しないんだよ！！逆にお互いに癒えぬ傷跡を残して辛い現実を味合わされるだけだ！！」

初めていや、本当に出てきた俺の本音がそれだった。
向こう側で横島さんがあの方とあんな別れ方になったのも、それだった。

世界の修正力とやらも協力できる味方もいない状況下で起きた悲恋、それだけじゃない、幾つもの出来事を見てきた俺は本当にそう思う。
こちら側の周りの状況を考えた時、俺と佐々木は結ばれない、と、そう考えれば後はすぐに答えは出た。

戻って来た時に着の身着のままですぐに家を出て行ったのは、それが原因だったのだから。

まだ間に合う内に彼女と距離を取って、既に俺の方は向こう側の出来事である程度の決着は付いていたから、大丈夫と言えたが佐々木の方はそうじゃないから、俺が離れれば彼女は俺との事を過去の事にしてくれると考えて行動を取っている。

大きすぎる誤算は未だに彼女が俺のことを思ってくれていることだけだったがな。

「……　それで諦めたの？」

「お前には分らんよ……　霧島、自分が傍にいるからこそ、不幸になる人がいると言うことに気付かされた者の気持ちはな」

霧島は突きを放ち、その直前に剣を振りぬいた体勢を取っていた俺に直撃させる。

『Ａクラス　霧島　翔子　ＶＳ　Ｆクラス　東城　和人
総合科目　８１１点　ＶＳ　７９９点』

ここで霧島に逆転を許した俺だが、すぐに態勢を立て直し突きを

放って技後硬直とも言うべき状況の霧島の召喚獣の顔面に拳を打ち込む。

『Ａクラス　霧島　翔子　ＶＳ　Ｆクラス　東城　和人
総合科目　６８２点　ＶＳ　７９９点』

「だからこそ、だ、霧島よお前さんの気持ちは分らんし、分りたくもない、ましてや俺の気持ちなんぞも分って欲しくもない……　とっとと決着をつけよう！」

「……くっ」

そして俺の召喚獣は今までの動きが嘘のように繊細で尚且つ、豪胆に動き始めた。
それは最初に動かし始めたときからも動きが数段上のものになっていることからも、窺えたようで周りの連中は更に驚きの表情を浮かべて見ていた。

先程までよりも高速で動いている召喚獣の動きに対応できないのか、霧島の召喚獣はゆっくりと全身を切り刻まれていく。

『Ａクラス　霧島　翔子　ＶＳ　Ｆクラス　東城　和人
総合科目　１２４点　ＶＳ　７９９点』

「……　くぅっ！」

「終わりだ……　すまないな、霧島……　ありがとよ、あいつのためにこんな俺に怒ってくれて」

ついに限界を迎えたのか、膝を折る霧島の召喚獣を切り裂こうとした瞬間、霧島が反撃してきた。

『Ａクラス　霧島　翔子　ＶＳ　Ｆクラス　東城　和人
総合科目　１２４点　ＶＳ　３１４点』

「……　勝手なことばかり言わないで、こういうことは本人たちがどう思っているのかが一番大事、こんな間違った考えを持った貴方に負けるわけには行かない……！」

「吼えたな霧島、俺も譲れないさ、こればっかりはな！！」

再び切り結びあう俺と霧島の召喚獣、最早俺と霧島には後がない、共に一撃を喰らえばその時点で終了と言う状況だ。
一瞬の隙が本当の命取りとなる状況下、打ち合う召喚獣の剣同士がぶつかり合い甲高い音を響かせる教室内、既に全員が固唾を飲んで静かに見守っている教室内に大きく響く。

「それに俺は間違ってはいない、間違っているなどとそう思える道をどうして進むことが出来る？」

「……　人は強い、貴方が思う以上に明日香も強い……！お願い、あの娘の心の声に耳を傾けて」

「……　確かに人は強いだろうな、だけどな俺は可能性って奴を沢山、それこそお前らが想像できない位に沢山俺は見てきた、一緒に人の醜さも美しさもな」

「……　それが分っていてなぜ！？」

冗談から切りかかってくる霧島の太刀を真っ向から受け止めて、弾き飛ばすように捌き彼女の体制を崩す。

すかさずそこに向けて横薙ぎに剣を振るおうとすれば、彼女は不安定となっている体制から無理矢理横に飛んで回避する。

そして俺は体制を完全に崩している霧島に更に追い討ちを掛けるが、床を転がって霧島は回避していた。

「これに答える気はない、だが今度こそ、終わりだぁ！霧島！」

「……ッ！」

更に転がったことで完全に態勢が立て直せなくなった霧島に、俺は剣を突きの体勢で真正面に構えると駆け出して行き、辺りに何かを貫く音が響いていた。

『Ａクラス　霧島　翔子　ＶＳ　Ｆクラス　東城　和人
総合科目　０点　ＶＳ　１０点』

俺の剣が霧島の召喚獣を貫いて０点として消滅させるのだが、俺の召喚獣にも霧島の太刀が突き刺さっており、彼女が執念で太刀を突き立てたのが分る光景だった。

その後、ふって湧いたようにFクラスからの勝鬨の声が聞こえてくるのだが、俺に近寄る様子がなくどこか様子を窺う感じなのは、霧島とのやり取りの所為とも言えるだろう。

「和人」

「利光、か」

そんな中で利光がいつも通りに俺に声を掛けてくる。

「あそこまで追い詰められるなんてらしくないじゃないか、いつものきみなら」

「ああ、もっと早くに決着を付ける自信があったさ、まあ、霧島の言葉に付き合ってしまったらこうなったって所だな」

「そんなに霧島さんの言葉は効いたのかい？」

「……」

正直に言っていつも通りに声を掛けてくれる利光の存在はありがたかった、もしも、この時にこう言ったやつがいなかった俺は今日、この場所でもっと歪んでいたかもしれないし。

だが、俺が霧島にあそこまで苦戦したことの真意も、奴にはお見通しのようであった。

利光の言葉に沈黙で応えていると、苦笑を浮かべた利光は俺に近付いて肩を一度叩いてこう言った。

「全く、何を考えているかは知らないけど、僕は和人の味方にいるから、そこだけは覚えておいてほしいな」

「……　ありがとよ、利光」

「どういたしまして」

そして利光は霧島のところへと向かうのか、彼女の方へと歩き出して行っていたのだが、奴と入れ替わりになるように吉井達が俺の周囲に集まってくる。

「よう、お疲れさん」

「坂本、お前が負けるからこんなことになったんだよ、全く……小学生レベルの問題であの点数はないだろ、お前」

「いや、それは、すまんかった」

坂本はいつもどおりの様子なのだが、他の連中は特に吉井と姫路に島田の様子が顕著だ。

恐らくは霧島とのやり取りを気にしているのだろう、まあ、こいつらのお人好し具合は今に始まった事じゃないみたいだけどな。

「……　あの、東城くん、霧島さんとのお話にあった明日香さんというのは……？」

「ちょ、ちょっと瑞希！」

「いや、姫路が気にすることじゃあないからな、気にしなくて良いさ」

「え、と、でも」

「ストップだよ、姫路さん」

誤魔化すとかをせずに直球で聞いてくる姫路を焦った様に制止している島田、更に姫路はこちらに食い下がろうとする様子を見せるのだが、意外な人物からの待ったの声が掛かる。
吉井だった、先程までの表情を消して吉井は既にいつも通りになっており、姫路にまるで諭すようにして声を掛けていた。

「姫路さん、東城君にだって知られてほしくないことがあるはずだから、今は聞いたらダメだと思うよ」

「は、はい……」

「それに東城君が僕らにも言って良いって思ったら、言って来るだろうしね、そうでしょ？　東城君」

「まあな、その時は頼りにさせてもらうよ吉井、それにお前らもな」

吉井に諭される姫路と言うのも珍しいものだ、などと考えていた俺は吉井の言葉を聞いて苦笑を浮かべて、それに応えていた。
そして、全員の顔を見れば吉井と坂本にムッツリーニは笑みを浮かべて頷いて、姫路は多少ぎこちなくはある表情で、島田はいつもどおりのペースを取り戻した様子で頷いていた。

「どうやらお話は終わったようですね」

「ええ、まあ」

俺たちの話がひと段落付いた時に近づいてきたのは、高橋女史と霧島を含めたAクラスの連中だった。
他の連中もこれからのことを考えたのだろう、騒いでいたFクラスの面々も静かになって高橋女史の次の言葉を待っている様子を見せていた。

「では、試召戦争開戦前の条件により、東城　和人君にも勝者の条件が与えられた形となります、どちらの希望を先に聞きましょうか？」

「……　私は後で良い、先に東城から言って」

「では東城君、お願いします」

「はい」

聞かれたのは案の定、勝利したものに与えられる『敗者は勝者の言うことを何でも聞く』と言う条件のことだった。
意外と言うか予想通り霧島がこちらに先に言う権利を譲ってきたのだが、まあ、坂本が逃げられないようにする為の措置だろうな。
坂本はクラス代表として俺の願いを気かなくちゃならんだろうし、

それに霧島は坂本を連れ出す腹積もりだろうから先に譲ったと言うのもあるだろうな。

「それじゃあ、俺の願いと言うか希望は」

ここで言葉を切った俺に全員の視線が集中し、唾を飲み込む音が聞こえるような雰囲気になる。
その雰囲気が最高潮に達したときに、俺は口を開いた。

「まずはというかこれしかないな、Ｆクラス設備の備品を新品のものに交換してほしいと言うところだな、畳に卓袱台に黒板、これらの諸設備を、だ」

「……　それで、良いの？」

俺の希望を聞いた瞬間の霧島の目は意外なものを見る目をしていた。
大方俺が霧島に佐々木とのことを言ってくるなんて思ってたんだろうが、まあ、それは俺があいつと決着をつけなくてはならないことなのに、霧島を巻き込んでしまった俺が悪いんだから、別に気にする必要はないというのに、な。

「霧島、あんたが何を考えていたのかは知らんが、とりあえずは俺の希望はそんなところだ、高橋先生この希望は叶えられそうですか？」

俺の言葉を聞いて嬉しそうな雰囲気に包まれたのはFクラスの面々だ、上手くすれば、教室のランクが落とされるのを防ぐことが出来るばかりか、ちょっとは良い設備に変わるかもしれないと言うのだから。

だが、対する高橋女史の表情には難しそうな色が宿っていた。

「できるかできないか、と言う形で言うのならば、可能です、ですが……」

「前例がない上に最初にこっちの代表が負けているのがネックになる、と言うことですね」

「ええ」

俺と高橋女史の会話を聞いたFクラスの面々は落胆すると、すぐに坂本のほうへと鋭い視線を向けるのだが、奴自信はどこ吹く風、といった様子で堪えた様子はない。

やはりそこがネックになるのかね、そう思い俺は考えを巡らせよ

うとしたと同時に、あくどい笑みを浮かべた坂本が前に出て来て口を開いた。

「ちょっと良いか？」

「坂本、良い考えでも浮かんだのか？」

「まあな、今回の状況が利用できるのさ」

「今回の、状況？」

今回の状況を利用するといっていたが、まさかとは思うが傍目に見たら『ＡとＦの代表が２人とも敗北している』と言う状況じゃあるまいな？　まあ、聞いてみるか。

「ああ、知っての通りに今現在は俺と翔子という二人の代表が敗北した、と言う状態があるからな、そいつを思いっきり利用するまでだ」

「……　確かに雄二も私も負けてるから、本来行われるはずの設備交換とかが微妙なものになってる」

「だろ？　本来なら俺が負けた時点でＦクラスは更に設備を落とされ、東城が勝ったという所でＡクラスはＦとの設備交換という形に

なるはずなんだが、ここにいたる経緯が複雑だからな、かなり今は微妙な形になっている」

「確かに、そうですね……　では両代表が討ち取られたことによる相打ちの状況下であるため、和平交渉により終戦の締結がなされた、そう対外的には公表すると言うことですか？　坂本君」

はっきり言ってそこが一番の問題点だった。

霧島が出してきた、俺との戦いを確実に果たす為の約束は俺が勝ってしまった場合、こうなる問題点を孕んでいたのだ。

まあ、これも承知で霧島の奴は条件を出してきたんだろうが、Ａクラスの連中は対戦相手が俺だと知っていれば、条件を出した時に全力で止めただろうな。

後々の戦後処理がゴタゴタして面倒になるのだから、戦っている最中はあえて全員が考えていなかった問題点でもある。

「まあな、そこが落とし処だろうと思うがな」

「確かに、そう発表するしかない状況下ではありますので、そうしますが、東城くんの言っていた設備更新についてはどうしますか？」

「……　それなら問題はない」

「まあ、一つしかないだろうな」

対外的なことについては高橋女史の言葉で決着が付いたのだが、今度は俺の言った願いに対する問題点が浮上するが、意外なことに霧島が自主的に口を開いてきた。
坂本も少々心苦しそうな表情ではあるのだが、頷いていて霧島が言わんとしている事を理解している様子だった。

「……　私が個人的に雄二と東城に言っていたということにすれば、何も問題はない、それにFクラスの設備についても私が後々に寄付と言う形で、予算分を学校に納めれば問題はないはず」

「それにだ、これからの試召戦争においてはこの手の約束を禁じるか、規制を掛けるかして抑止すれば後々のことについても、完全とは言わんが解決できるだろうしな」

「それしか……　なさそうですね」

「……　はい」

坂本と霧島から言われていく条件に関してのことと、後々の規制などに関する言葉、これらを聞いた高橋女史は神妙な顔をして頷くと改めて口を開く。

「では今回の試召戦争は対外的には、両代表の相打ちと言うことで決着ということにし、Ｆクラスの設備については後に今週中には入れ替える様に手配をいたします、両代表、これで宜しいですか？」

「ああ、問題はない」

「……　こちらも、問題はありません」

「では、戦争終結をここに宣言します！」

片手を高々と上げて宣言した高橋女史の言葉、これでこの試召戦争には幕が閉じる事となった。

そしてついに話はもう一つの願いになる。

「……　東城の件はこれで終わり、雄二、約束」

「……　ッ（カチャカチャ！！）」

坂本の正面に立った霧島は奴に対してそういっていたのだが、ムッツリーニの奴はまだ勘違いをしているのか？　あの様子を見る限り吉井も、か。

カメラを含めた機材の準備を始めた吉井とムッツリーニを、俺は呆れた表情で見ていたが、霧島はそんなこいつらに気付くこともなく、顔を少し赤らめて口を開いた。

「……　雄二、私と付き合って」

「お前、まだ諦めてなかったんだな」

「……　私は諦めない、ずっと雄二のことが好きだから」

ポカーン

吉井とムッツリーニの様子を適切に表すとこんな感じだな、その他の連中も似た雰囲気の連中がいるから、全員がほとんど似たことを考えていたんだろう。

「その話は何度も断っただろ？　ほかの男と付き合う気はないのか？」

「……　私には雄二しかいない、他の男性なんて、興味はない」

「拒否権は？」

「……　ない、今からデートに行く」

「ぐあっ！は、放せ！！やっぱり約束はなかったことに！！」

やれやれと言いたい気持ちだった。

坂本も素直になればよいものを、俺とは違って『まだ』やり直せると言うよりも『これから』始めることができるんだから。

俺はアイアンクローを霧島に掛けられて連行と言うべき様子で連れて行かれる坂本を見送っていたのだが、２人と入れ違いに西村先生が教室に入ってくる。

「さて、我がFクラスの諸君。お遊びの時間は終わりだ」

西村先生を見てギョッとした様子を見せる吉井達、それはそうだろう。

何しろ戦争がやっと終わったと思ったら、西村先生が現れるのだからな。

だが、Fクラスが坂本の狙い通りに完勝していたとしても、この結果は避けられなかっただろうな。

「あれ？　西村先生……　我がFクラスってどういう意味ですか？」

「おめでとう、お前たちは戦争にかまけて通常授業を蔑ろにしたおかげで、福原先生から俺に担任が代わることになった」

『な、なにぃ！？』

悲惨な悲鳴を上げるFクラスの面々、それはそうだろう普段から鬼の補習を受けるのと同様な事態となったのだから。

「いいか、お前らは良くやった。正直に言えばここまで辿り付ける

とは思って居なかったし、ましてや複雑な状況下とはいえ、勝利するとはな、だが、幾ら『学力だけが全てではない』とは言っても、社会を乗り切るための強力な武器の一つだ、蔑ろにしてよいものじゃぁない」

正論だ、正論過ぎて誰もが言い返せない様子を見せている。
更に険しい表情をした西村先生は、吉井と俺を見た。

って、俺も？　何で。

「特に吉井に坂本と東城は念入りに監視をしてやる。なにせ開校以来初の≪観察処分者≫とA級戦犯になり損ねた男たちだからな」

「そうは行きませんよ！監視の目を掻い潜って自由を満喫してやります！」

「まあ、右に同じくといったところです。西村先生」

「……　お前らには特に吉井は悔い改めると言う発想は浮かばんのか？」

溜息混じりの西村先生の台詞を聞いた吉井は、何故か自信満々な様子で胸をはり、やる気まで見せているのだが、間違いなくろくでもない方向なのは、いうまでもないだろうな。これは。

それから吉井の傍ににじり寄ってきた島田と姫路が、痴話喧嘩を行って吉井が斬新な捨て台詞を残して去っていくと、西村先生の言葉でその場は解散となった。

まあ、微妙なしこりと言うか何かが残っている気はするんだが、これで一応は試召戦争が終わったわけだ、後はこれから問題が起きないことを祈るばかりなんだが無理だろうなぁ、このクラスにいる限りはな。

なんて事を考えている俺は自分でも気が付いていなかった、俺の顔がとても楽しそうに、本当に楽しそうに何か楽しいことを待ちわびる子供の様な笑みが浮かんでいることに。

この時はまだ、自覚できていなかったんだろう、俺にも『新しく何かが始まっている』と言うことに、凍っていた俺の時間が本当の意味で動き出したことに、だけどそれに気が付いたのはまだもう少し先のお話だったりする。

１０話　Ａクラス戦―その結末（後書き）

まさかの同日連続投稿、どうしたんだろ、今日の私は……　話に色々と無理があると思いますが……　ダメな作者だなぁ、程度に思ってくださいませ（苦笑）私もこれ以上の展開が思いつかなかったものでしてｏｒｚ

今回は主人公が勝ちましたが、霧島さんが劇中でのことを諦めたとかそういうわけじゃあありませんので、またこれからもちょくちょくお節介を焼きに来ます。
後、主人公の過去とかについて一部を明らかにしました。
正確には向こうに転移する直前のことですね、これと周囲の状況を含めたものが、今の主人公を形作っていっている状況ですので、彼が本当に好きな人と結ばれる日が来るのやら。

と言った具合にかなりの難儀な奴ですので、イライラすることもあるでしょうが、見守ってやってほしいです。

では、今回はこの辺で。

１１話　現代を生きる退魔士ＧＳ（前書き）

今回の話は明久たちは登場しません。
主に主人公がどんな仕事をしているのかと、後は現代に生き残っている（？）悪霊などがどの程度の強さなどの事となります。

あと、変なのが登場してますが……　後々の伏線みたいなものだと思ってください（苦笑。
正体バレバレとか言わないで。

１１話　現代を生きる退魔士ＧＳ

第１１問　これから行われるレクリエーションについてのアンケートに答えてください。
『あなたが今一番欲しいものはなんですか？』

姫路　瑞希の答え
『クラスメイトとの楽しい思い出』

教師のコメント
　姫路さんらしい答えですね。これから行われているレクリエーションで、楽しい思い出が作られるように頑張ってください。

土屋　康太の答え
『　　成人向け写真集』

教師のコメント
　見る限り書き直したようですが、意味はあるのでしょうか。

吉井　明久の答え
『カロリー』

教師のコメント
　この回答に君の生命の危機を感じます。

坂本　雄二の答え
『自分一人で穏やかに過ごせる休日』

教師のコメント
　この答えに君の学生らしかぬ必死さを感じます。

東城　和人の答え
『高級温泉旅館宿泊チケット』

教師の答え
　渋いですね。若さが感じられませんが……　東城君はストレスを解消したいのでしょうか。

～バカとテストと霊能者～
～第１１話　現代を生きる退魔士ＧＳ～

Ａクラスとの試召戦争が終結し、今日はそのまま解散となったのだが、ＦとＡ以外のクラスはまだ授業中であったので、俺達は早急に帰らされる。
いつも通りの帰り道を歩いて駅へと俺は歩いているのだが、上着の内ポケットに入れていた携帯が着信を知らせる。

それを取り出せばディスプレイには『仕事先』と表示されていた。
良く俺の学校が終わっていると言うことが分ったな、と感心しつつも、あのババアが手を予め回していそうだから当然かね、なんて考えつつ俺は通話ボタンを押していた。

「ハイ、もしもし？」

『お久しぶりです。和人さん』

「ええ、先々週の北海道の霊的不良物件の除霊以来ですね、伊勢河さん」

以前俺が屋敷を購入した不動産が持ってくる仕事を請け負っていると言う話をしたと思うが、電話の向こうの人は屋敷を販売した【葛城不動産】の社員の一人であり、俺に除霊関係の仕事の仲介人である【伊勢河　達彦】と言う男性である。

見た目は温和な表情と物腰をした営業部の一社員である。だがここでこの世界でのオカルト、つまり霊や妖しの存在について説明しておこうと思う。

こちら側でのオカルト関係の扱いと言うのは、向こう側とは違い一般人には認知されていないのだが、上流階級の人間には未だに存在する脅威として認知されている。

だが、明治以降の科学技術の発達と陰陽寮の解体と後継となる組織が出来なかったことから、国内の退魔士と呼べる人間は全盛期と比べて人数を減らしているだけでなく、実力の低下も甚だしい為に基本的な呪いでさえもレジスト出来ない者達ばかり、と言う状況である。

だが、一般人に認知されなくなった所為か神を含めて悪霊や人に仇なす妖怪と言った連中の力の低下も凄いものだった、既に実体化出来るような神はほとんど存在しなくなっているが、無論例外もある。

例としては一度だけ依頼で行った、長野県のM矢神社に祭られて

いたミジャグジさまと風の神が現代ではかなりの力を持って存在できていた神様だったな、そこにいた巫女（風祝というべきか？）も相当な力の持ち主だったし。

だが妖怪も悪霊も同様で、妖怪は上級とカテゴリできる者も低級と呼べるくらいの力しか持てず、悪霊や悪魔も同様だった。

それどころか人間の退魔士も同様に力が低下しており、力の弱った妖怪も悪霊も祓えないどころか、返り討ちに合う様な人間ばかり、という状況になっているからだ。

その上に向こう側での一流ＧＳと同じか、それ以上の料金を請求する為に、退魔士はほとんどの者が信用を失うばかりか、自身の力を何故か過信して傲慢になっている馬鹿者達ばかりなのである。

とまあ、長々と説明したが、こんな状況であるので向こう側で本当の化け物と言えるような連中と相対し、その上に拠点を格安で提供してくれたと言う名目で安くで依頼を受けている俺の存在は国内の各退魔士と、それをお抱えにしている財閥の間ではある程度の知名度があるという状況であるのだ。

ここまでの実力を現代で保有しているから、何度か面倒な事態になったことがあるのだが、全て二度とふざけた考えを抱けないように徹底的に叩きのめしている。

『お元気そうで何よりです、今回の仕事については一度合流してからの方が良いですか？』

「当然でしょう？　伊勢河さん、今どこにいます？」

『いつも貴方が利用されている駅の駐車場にいます、そこで合流しましょう』

「ええ、分りました」

歩きながら俺は伊勢河さんと会話を終えると、携帯を切って駅へと心持ち早足で歩き始める。

そして駅の駐車場に着いた俺は、伊勢河さんの車である白いワゴ

ンRに乗り込むと、俺の自宅へと彼の運転で発進した。

「今日の仕事は隣町のマンションの一室で発生した霊症ですか」

「ええ、8ヶ月ほど前にその部屋に住んでいた男性が自殺したのですが、彼の自殺後に入居した人の身に不可解な現象が多発している、とのことでしたが……」

「その霊症が階層全体の部屋で起こり始めた為に、除霊の動きとなったわけですね？」

「ええ、詳しくは今お渡しした資料に書いておりますが、今現在、霊症が起きた階層と関連した上下の階はガス漏れが起きたと言うことで閉鎖しておりますので、一般人が入ることはないでしょうが」

「既に霊症が起きたこと自体は噂となっているでしょうね」

「まあ、そこは後々対処すればよいのですけど……」

資料を見ながら交わされる情報のやり取りを行っていたのだが、最後に伊勢河さんは何かを言おうとして口を噤む。

何を言おうとしたのか、それが分っていたのだが会えて黙って彼の言葉を待つ。

「私としては、ここまで霊症が大きくなる前に貴方に依頼をしたかったのですが……」

「一般人にこういったことを秘匿してますからね、タイミングによっては大事にもなりますから、犠牲者が出ていない分、まだ今回は良いですよ」

「ええ、そうですね」

それから俺と伊勢河さんの間に会話はなく、車中に俺の資料を捲る音が響いていた。

そして、自宅に戻り俺が除霊の際に着ている服を着用し道具類を用意すると、件のマンションへと到着していた。

俺は伊勢河さんの先導でマンションの中に入って、部屋の前に到着する。

「伊勢河さんは外で待機してください、終わったら電話しますので」

「はい分りました、和人さん、お気をつけて」

伊勢河さんが外に出て行くのを確認して、俺は周囲の廊下と階層全体に札（壱百円）を貼り付けて、安全地帯を作成すると、霊力を纏い自身の体を強化すると同時に強力な悪霊がいてもレジスト出来る様に耐性を整える。

まだ建てられて新しいこのマンションの扉は、特に嫌な音も立てることもなく開き俺は中へと進入する。

「こいつは……　中々だな」

扉を開けたと同時に感じる瘴気とも呼べる悪霊の気配、今は昼間であり、室内に太陽の光が入って来ているというのに薄暗く、じっとりと粘質的に感じる気配。

リビングへと通じる扉を開けて、中に入ったと同時に俺は霊力を最大限煮込めた拍手を打ち浄化の力を音と共に流し込むのだが、す

ぐに部屋には黒く粘着質の気配の塊が顕現し始めていく。

『……　俺は何も悪くない…！俺は…！た……　働い……　いだけのに！』

「何故アンタが自殺なんていう阿呆な手段を選んだかなんぞ知らん、だがな！現世を生きる者達に迷惑を掛けて良い理由にはならん！」

『阿…　ア…　アアア！！』

俺は右手に神通棍を握り、霊力を流し込んで刀身を展開した独特の音を鳴り響かせ、左手には独特の光を放つ水晶を握り締めて、ついに戦闘が始まった。

この場は室内の上という悪条件ではあるが、昏い嗤い声を上げて突っ込んでくる悪霊に向けて、まずは左手に握る2つの水晶を投げつけ、悪霊に接触した瞬間に水晶は全て霊体に直接ダメージを与える爆発を起こす。

「……　やはりこの程度では、やられてはくれんか……　だが！」

爆発に対してもまともなダメージを受けた様子がないばかりか、

防御さえ取っていない様子を見せる悪霊の一撃だが、そんな一撃を避けるくらい造作もないが、マンションに被害を与えないようにするために問題のない場所へと受け流し、神通棍を袈裟懸けに切りつけて直接ダメージを与える。
だが俺の予想を超えた強さを持ち、防御自体もそれなりの物を持っていたのか、僅かに薄皮一枚程度のダメージしか与えられなかった様子だった。

『お……　俺…　俺…　はまだいきたいんだぁ！死んでなどいないんだぁ！』

「自殺と言う自分で命を絶った馬鹿者が、何を言っている！！貴様は既に死んでいる！」

『死にたくないしにたくないシニタクナイシニタクナイ……　シニタクナィィィィ！！』

こちらの説得に耳をかさずにより自分の主張を強める悪霊の姿、俺は一度舌打ちをした後、懐から折りたたんだ【霊体ボウガン】を取り出して一瞬で展開する。
既に矢自体の装填を完了していた霊体ボウガンを一発打ち込み、怯んだ瞬間にボウガンを投げ捨てて、一気に決める為に神通棍に霊力を込めてより刀身が光を増す。

「生きたいと願う気持ちも、死にたくないと言う気持ちも【生者】

としては正しいがな、死んだ人間が何時までもそんなことを言っているのは害悪でしかない！！」

『阿阿阿阿アアアア

俺は無言で霊体検知機【見鬼くん】と呼ばれる、霊体を検知するオカルトグッズを取り出してまずはこの部屋を回った後、階層全体も同じ様にチェックしてもうこれ以上害を齎す悪霊がいないことを確認する。

「どうやらあれで全部だったようだな、それにしても珍しかったな……　実体化できるほど強力な悪霊は……」

除霊作業が終わり、今は建物に損傷が無いことを確認しながら、今回の悪霊について考えていた。
こちら側では珍しいというか、滅多な事では現れることも無いほど強力な悪霊だったからだ。

何しろ普段であれば、様々なオカルトグッズを使うまでも無く、霊力を込めた拍手を打つだけで悪霊は耐え切れずに成仏してしまうというのに、今回の悪霊は久しぶりに神通棍だけじゃなく、霊体ボウガンまで使わされたのだから。

「まあ、良いか……　後のことは伊勢河さん達の仕事だ俺の仕事はここまでだな」

そういって俺は懐に手を伸ばして、携帯を取り出して伊勢河さん

に事が終わったことの報告と、ギャラの交渉を行うのだった。

因みに交渉した結果、確定した今回のギャラは１０００万である。

だが、俺はこの部屋にいる間中ずっと、何者かに見られているような気がしていたのだが、見鬼くんは反応を示さず、周囲全てを霊波を使って探っても何も見つからなかったので、気のせいだ、と思うことにしていたのだが、トンでもない奴が俺を覗いていたと知るのは先の話である。

和人が除霊を行ったリビング、その空間に縦真一文字に亀裂が入

り横にそれは開かれる。
得体の知れないその空間の中は大量の目が存在しており、何時の間に現れたのか亀裂の上下の端にはリボンが結ばれていた。
そこからするりと妖艶とも胡散臭いとも言える雰囲気を持った、金色の髪を持つ人とは思えぬ美しさを持った女性が姿を現す。

「フフフフ……　試験召喚システムは大した事はなかったのだけれど、気紛れに強い怨念を持った悪霊の境界を弄った甲斐があったわね」

女性はそう独り言を鈴の音がなるような声で漏らすと周囲を見回して、それを見つける。
和人が必要ないと判断して残していった床に無造作に転がっている2つの水晶を。

彼女はそれを手に取ると、一度光に翳して何かを見るかのようにしているのだが、何かを見つけたのか瞳と口元は禍々しいとも妖艶とも無邪気ともいえる、どれにも属さない不気味な笑みを浮かべていた。

「まさか、ここまで生きていて驚かされるとは思わなかったわ、この私でさえも全く知らない未知の技術に術式……　あの子、興味が湧いたわ……」

楽しそうに本当に楽しそうにコロコロと年頃の少女のように嗤う女性、人とは隔絶したナニかといえる存在といえる彼女は、和人へと思いを馳せる。
それは新しいおもちゃを目の前にした子供のように、または愛おしい異性を目の前にした女のように。

だが、ここで変化が起きる、水晶に罅が入り砕けたのだ。
女性が少しだけ驚いたような目で自分の手元を見ていることから、彼女が砕いたわけではないのだろう。

「驚いたわね……　この水晶、境界を弄れないなんて……」

最初こそ驚きを見せていた女性だがすぐに彼女は口元を笑みに変えると、踵を返して開いたままの空間へと足を進める。

「クスッ……　さてと、一度お話してみたいわね……　この私を二度も驚かせた外の人間である、あの殿方と」

そういって空間は完全に閉じると部屋には、女性がいたという痕

跡など何も残ってなどいなかった。
あたかも【最初から何事も起きてなどいなかった】とでも言わんばかりにである。

家に帰り既に日も落ちた後、俺はいつもの日課である結界を関連の点検を行っていた。
いつもどおり何も異常の無い結界を一つ一つ点検していきながら、俺は今日の除霊について考えていた。

「おかしい……　今日の悪霊は確かに怨念は凄まじいが、それだけの悪霊だったはず……　どうして実体化の上にあれ程の防御力まで？」

改めて考えてみると今日の除霊はおかしいことだらけだった、今日俺が除霊した悪霊であればマンションに入る前から力の質と言うか、強さを探ることが出来るほどの強さなのだが、それが全くといって良いほど感じられなかったからだ。
それにあの場所で実体化できていたという点も不審な部分が多い。

通常この世界で悪霊が実体化してあれほどの戦闘能力を売るには、相当な条件が揃わないと不可能だ。
何しろオカルトが否定されて科学が全盛となるこの世の中、怨念が凄まじいと言うだけではまず実体化できないからだ、どのような妖しであってもまずは人の怖れという負の感情を取り込まなければならなず、その上に実体化、つまり受肉するにも等しい行為を行う為の外部の霊力も必要となるが……　それは相当な霊地もしくは霊脈や竜脈に風水上で重要な場所で無い限りは、この世界にそんな場所はない。

あのマンションはそのどれも条件は満たしてはいないし、霊症といってもポルターガイスト現象の軽いものと、他の部屋でも何者かの声が聞こえるといった程度で、霊本体を見たというわけではないのだから。

実際に例が実体化して襲って来たと報告した時の伊勢河さんは驚愕していたのだから、霊の本体が現れたと言う報告が無かった証拠にもなる。

だが、もう一つ気になるというか確信に近い点がある。

「神通棍で切りつける前と後で、強さが変わっていた？　いや何者かによって存在を弄られた？」

そう、あの悪霊が実体化した時のものであれば、間違いなくあの神通棍の一撃で終わっていたはずなのだ。

水晶にしてもそうだ、あれは精霊石を特殊な方法で加工してもらい、向こう側で拵えていた一品である。向こう側の悪霊には目晦まし以下にしかならずとも、こちら側の力の弱った悪霊は間違いなく成仏させることの出来る代物だったのだから。

時間が経てば自動的に砕け散り、この世から消えるように加工してもらっているが……　あの場所に残したのは失敗だったかもしれない。

それにもしも推測どおり、あの場所に何らかの力を持った大妖怪といえるものがいて、監視しながら強さを弄っていたとしたら。

「冗談じゃない……　俺に視線を悟らせはしたが、どこにいるかも特定できないほどの力の持ち主だと……　少なく見ても、メドーサクラスか小竜姫さまクラスかもしれないじゃないか」

思わず声が漏れるくらいに思う、冗談じゃない、と。

向こう側で幾度と無く妖し達と戦闘を繰り返したからこそ分る、

上位になればなるほど彼らが持つ力は凄まじいものに成り、人の身で対抗するなど不可能と言える状況になることに。

少なくとも悪霊が力を増したと思われる瞬間に、俺は僅かな違和感を感じたくらいで力の行使の瞬間が分らなかったから、裏にいた黒幕の力の質も想像出来る。

まともに遣り合えば、まず命は無いだろうと断言出来るほどの力の持ち主、出会いたくは無いし、正体が分りそれが手におえない場合だった時の為に逃走の算段もたててておかないとまずいな。

そんなことを考えて点検を終えた俺は、家に戻ると様々な状況を想定してプランを練っていくのだった。

だが、そんな俺のプランなど全て無駄になってしまうのだが、それはまた後日の話になるだろう。

１１話　現代を生きる退魔士ＧＳ（後書き）

ちょっと短い１１話でした。

現代に戻ってきた和人の除霊風景でしたけど、彼は無論のこと全力は出してませんし、切り札と呼べるものも使ってはおりません。
今回の話では全体の２割程度の力しか使っていない状況ですし。
まあ、いずれは全力で戦うことになりますがね、あの正体不明な何者かの所為でですけど（苦笑。

では今回はこの辺で。

１２話　俺と幼馴染と補習とお弁当

第１２問　以下の問いに答えなさい
『バルト三国と呼ばれる国名を全て挙げなさい』

姫路　瑞希の答え
『リトアニア　エストニア　ラトビア』

教師のコメント
　そのとおりです。

土屋　康太の答え
『アジア　ヨーロッパ　浦安』

教師のコメント
　土屋君にとっての国の定義が気になります。

吉井　明久の答え
『香川　徳島　愛媛　高知』

教師のコメント
　正解不正解の問答の前に、数に疑問を抱きましょう

東城　和人の答え

『日本　ドイツ　イタリア』

教師のコメント

それは日独伊三国同盟です。

～バカとテストと霊能者～

～１２話　俺と幼馴染と補習とお弁当～

Ａクラスとの試召戦争が終わってから、一週間が経った。
その間にＦクラスは一時的に設備入れ替え準備の名目で卓袱台がみかん箱と、腐った畳が莫蓙に替わる等のヘンテコな変化があったのだが、今日からは俺がＡクラスとの勝利で提唱した【新品の畳と卓袱台に入れ替える】という日でもある。

というか正確には昨日の下校時から入れ替えが行われていて、本日の登校時には既に入れ替えが終了しているということだったのだが、本日は日曜だ、という言葉を聞けば勘の良い人は気付くだろうが。
そう、我々Ｆクラスには日曜だというのに、授業があるのだ、まあ、間違いなく新学期早々に試召戦争にかまけていた分の授業の補習ということなのだがな。

だが、ここまで唯一といって良いほどだった休みを潰されてしまうのは、正直に言って勘弁願いたいほどだったんだが、何故か楽しんでいる自分がいることも、俺は自覚していた。

「吉井に坂本、おはよ」

「あ、東城君、おはよう」

「おう、おはようさん」

そんなことを考えながら歩いていた俺は、何時の間にやら靴箱に到着していたらしい。
何かを真剣に話し合っていた吉井と坂本に、俺は朝の挨拶がてらに声を掛けると、あいつらはいつも通りに声を掛けてくる。

「そんじゃ、教室に行くとしようか」

「うん、東城君も一緒に行こうよ」

「ああ」

そういった俺たち3人は横に並んで教室へと歩いていく。
だが、坂本の奴が妙に疲れきった表情であること、吉井に至っては少し痩せている印象になっている。

「お前ら、昨日の土曜日に何かあったのか？」

「フッ、まあ、な……」

「確かに、何かがあったといえば、あったとしか言えないよね……」

「はぁ？」

純粋に疑問に思ったからこその問いかけだったのだが、坂本から返ってきたのはまるでも何も燃え尽きたボクサーの如き様子の言葉と、同様の様子となった吉井からの言葉だった。

更に疑問は深まる、昨日、つまり土曜日は休みだったのだが、一体何があったのやら。

……　まさかとは思うが。

「坂本は霧島関連か？」

「……　ああ」

「んで、吉井は姫路と島田か」

「うん……　今月の食費の全てが映画の闇の中に消えて逝ったよ……」

俺の言葉に力なく答える二人の姿は哀愁を漂わせている。
だが、俺は吉井の肩に手を置くと、励ましとも取れる言葉を掛けていた。

「元気出せ吉井、どうしても困ったことになったなら、俺がバイト先の紹介か飯くらいは奢ってやるよ」

「と、東城君……！きみが今は救世主に見えるよ！」

「……　俺には何も無いのかよ……」

哀愁を漂わせてあまりにも哀れな様子になっている吉井に対して、少々同情してしまったので、俺は今度伊勢河さんに仕事の仲介があれば、こいつをバイト代わりに参加させるか、拒否されたら晩飯くらいは奢ってやろうと思うのだった。

吉井は、救世主をここに見つけたり！といった表情で俺の方を見てくるのだが、坂本はどこか苦虫を噛み潰したような表情と声で何かを言ってきた。
だが、吉井とは違ってこいつのは自業自得と言えるものだからな、同情の余地はないが、まあ一言言えば。

「幸せになれよ、坂本」

「……　テメエ……！俺に何があったのかを教えてやろうか……！？」

少々ぞんざいになってしまう俺の言葉だったのだが、まあ、これは仕方が無いと割り切ってもらうしかないのだが、言いたい事もある。

「坂本、お前霧島に思いを寄せられているってこと、知っていたんだろう？　こうなったのはお前が今まで放っておいてきていたことの、しっぺ返しともいえるぞ？」

「……　さあな、そんなことなんぞ知らんさ、だがよ、それはお前も同じじゃないのかよ？　東城」

「さてね、俺の方は霧島が意固地になっているだけさ……　お前の事情とは違うさ」

「そういうことにしといてやるよ」

俺は心の内で舌打ちをしていた、坂本をからかうつもりでいっていた言葉が、俺にもほとんどそのまま当てはまったからだ。
逆にニヤニヤという効果音が適切な様子でこっちを見てくる坂本の姿を見て、俺はあえて何も答えようとはぜずに、そのまま歩いて

いたのだが。

「あれ？　教室付近の壁が新しくなってる？」

「本当だな、東城の言った条件が遂に履行されたってわけだな」

「これで畳と卓袱台が当たらしくなっていたら完璧と言うわけだな」

「ああ」

「うん」

何時の間にやら教室の前に着いていたらしい、気の所為か教室の障子や襖調になっていた扉も新しいものになっているようだった。

既に何人かは着いていたのか今日室内からは、結構騒がしい声が聞こえてくる。

それも普段のふざけているような騒がしい声ではなく、喜んでいるような声なので、間違いなく中も俺の希望通りの状態になっているであろうと推測は出来た。

「おお、この新品の畳の匂いってのは、この教室では特に格別だよな」

「ああ、提案した甲斐があったよ、と言うか、あれ以上に設備を下げられたら、やる気なんて出るわけが無いしな」

「うん！見てよこの卓袱台、ピカピカに光ってるよ！それに畳だって肌触りが凄く気持ち良いし」

教室に入った俺たちを出迎えたのは、光り輝いていそうな畳と卓袱台に修復されたと思われる壁の姿と、新品の畳の良い匂いだった。

あの足が折れそうで見るからにボロボロだった卓袱台は、ピカピカのしっかりとした作りの卓袱台になっていて吉井を含めた教室内の何人かは、嬉しそうに頬ずりをしているのが見えた。

……　いや頬ずりって、お前ら、喜びすぎじゃないか？

などと突っ込みを入れたいのだが、ここでそんなことを言うのも無粋だな。

「それにしても設備を新品のものに入れ替えただけでこんなに変わるなんてね、東城には感謝ね」

「うむ確かにのう、このような環境に出来たのも東城のおかげじゃろうて、クラスの皆もお主に感謝しておるぞ」

「そうですね、新しい畳がこんなに良いものだとは思いませんでしたし、東城君、ありがとうございます」

「……　感謝」

そんなことを考えて適当な席に座った俺の近くに、いつものメンバーが揃って集まり、口々に俺に対して賞賛の声を掛けてくれるのだが、俺は少々照れくさい思いで一杯だった。
久しぶりだったから、こんな風に誰かに感謝というかそんな感情を向けられたのは。

「まあ、俺一人だけの力じゃないさ、皆が繋げてくれたから俺も戦えたんだ、だから、俺一人の勝利ってわけじゃあないだろ？」

「そうか、そういう事にしておくとしようかの」

「クスッ、そうですね」

「フフッ、そうね」

「……　（微笑みと同時にサムズアップ）」

チッ、俺の照れ隠しとも言える言葉をこいつらは分っているんだろう。
微笑ましいものを見るように見ているから、余計に背中がむず痒くなる感覚を感じていた。

そしてそれから暫くの間、皆と雑談に興じていたのだが、予鈴が鳴り西村先生も入ってきたので、全員がそれぞれ思い思いの席に座り俺たちの補習が始まった。

そして時間が流れて、時刻はお昼。
今日は昼までの補習だったので、ここで終わりなのだが、今日は昼までだし弁当も持って来てないからな、学食にでも行って食ってから帰るか。

「今日の補習はここまで、家に帰ったら今日やった範囲を復習しておくように！」

『『う～す……』』

そう締めくくって教室を出て行く西村先生の声に、俺以外のクラスの連中の疲れた声が返事を返していた。
教室から西村先生が出て行ったのを見計らったように俄かに騒がしくなる教室内、既に数人は帰り支度を整えていたのか、教室を後にして帰宅する人間もいる中で、誰も出入りしていない扉が突然開いた。

「……雄二、お昼」

「翔子、何でお前がここに？」

「……　今まで明日香と一緒に自習してた」

「ん？　翔子、その明日香ってのは、誰だ？」

「……　ん」

教室の扉が開いたときには霧島一人しかいないように見えたのだが、彼女の影に隠れた形になっていたようだ。
坂本の疑問に答えるように霧島は自分の体を半歩ずらすと、そこから佐々木が顔を出してきた。
その瞬間にムッツリーニの動きは早く、彼女に気づかれないようにシャッターを切り続けていた。

「えっと、初めまして、Dクラスの佐々木　明日香です、このクラスにいる和人とは幼馴染です！」

『『『『コロセェ！！』』』』

佐々木が自己紹介し、俺との関係を一緒に言った瞬間立ち上がるクラスの連中の姿、無論その中に吉井とムッツリーニが混じっている上に、衣装もあの黒ずくめのものに変わっているのはいうまでも無い。

俺が立ち上がった瞬間に、拘束する為の鎖や縄が飛び交うのだが、それを俺は最小の動きで見切り、いなし、回避すると廊下へと飛び出そうとする。

が

「ガッ！？」

「……　東城、明日香が来たのに何も言わずにどこに行くつもり？」

と言うか俺は何でこの時に、このような行動を取ったのだろうか。全ての攻撃を回避するまでは良い、と言うか俺の能力を駆使すれ

ば難しいことなんかじゃなかったし、だが、どうして【霧島と佐々木の間】を通り抜けようとしたのか。

そこは己自身で疑問に思ってしまう。

通り抜けようとした瞬間に、霧島からスタンガンの良い一撃を貰ってしまった俺は、そのまま床に崩れ落ちる。

「って！しょ、翔子！何やってるのよ！？」

「……　こうでもしないと、東城が逃げてたから」

「だとしても、やりすぎだよ！！」

どうやら最大出力で俺に押し付けたらしく、少し体が言うことを聞かない状況下、俺の耳に冷静な霧島の言葉と慌てたような、怒った様な佐々木の声が入ってくる。

「和人、大丈夫！？」

「な、なんとか……」

ゆさゆさと俺の体を揺さぶる佐々木に答えると、近くに数人が近付いてくる気配を感じた。
何とか視線を動かしてその方向を見ると、吉井と木下に姫路に島田と坂本だった。
近付いてきた人間の方を佐々木も振り向く。

「佐々木さん、始めまして、吉井　明久っていいます、よろしく」
「初めまして、姫路　瑞希といいます」
「ウチは島田　美波よ、よろしくね」
「始めましてじゃのう、ワシは木下　秀吉じゃ」
「東城、お前も災難だな」

未だに倒れ付している俺を無視というか、こんな光景に慣れてしまったんだろう。
いつも通りに佐々木の奴に自己紹介をしているのだったが、坂本の奴……　人事だと思って爽やかな笑みを浮かべてこっちを見てやがる。
いずれ仕返ししてやるぞ、坂本……！

「あ、えと、こ、こちらこそよろしく」

未だに動揺が激しいのか、かなりどもりつつではあったのだが、佐々木はそう返事を返していた。

その佐々木の言葉に他の連中は微笑を浮かべて頷いていたのだが、不意に俺の耳に佐々木の小声が響く『流石はFクラスクオリティ……　姫路さんもこの時点でもう染まってるんだ』なんていう言葉が聞こえてきたのだが、まただこいつは、一体【何】を知っている？

時折こいつが漏らす言葉に疑問は感じるものの、俺が聞くべきことじゃないだろう。

そう俺は判断して、あえて聞き流して上半身を起き上がらせる。

「大丈夫なの、和人？」

「ああ、なんとかな」

そう言って俺は立ち上がり、自分の席へと歩き出したのだが、吉井の奴はマイペースにも自分の席へと既に戻っており、昼を食べようとしていたようだった。

「明久、それはなんだ？」

「１／６７のカップめん」

そういって弁当の蓋を開けたところにあったのは、サイコロと呼べるくらいに小さな吉井の言葉を信じるならカップ麺だった。

それは無いぞ、吉井。

それから坂本に色々突っ込まれつつも、吉井はポリポリと食べ終える。

「ご馳走様でした」

「なんか、同情を引いちゃいそうになる光景だよ……」

「……　侘しい食事じゃのう」

このような食事風景を見た佐々木と木下の言葉は、的を得ていたと言えるだろう。

あまりにも侘しく、同情を誘うような光景だったからだ。

「あぅ、やっぱり全然足りないや……」

「あ、あのね、アキ」

吉井の奴が弁当箱を空けたときから気になっていたのが、島田の様子だった。
どこかモジモジして恥ずかしさを堪えるような、照れているような。

「し、しょうがないわね、ウチのお弁当を分けてあげよっか？」
「へっ？　ほ、本当、美波！？」
「つ、作り過ぎただけよ、た、たまたま何だからね！」

この言葉を聞けば分るだろうが、ツンデレつもりか？　島田。
そんなことを考えていた俺だが、島田はいそいそと自分の鞄をあさり目的の物を取り出そうとしている様子だった。

「えっと、確かこの辺に……」

などといいながら鞄の中を探しているのだが、それがどんどん焦っている様な様子になっているのは気のせいだろうか？　表情も同じ様になっているから、恐らくは。

「ゴメン、アキ……　お弁当、忘れちゃったみたい」

「えー、そんなぁ……」

「本当にゴメン……　確かに入れたと思ったのに……」

やはりか、今にもなきそうな雰囲気になってしょぼんと言う感じでそういった島田の言葉に、吉井は心の底から残念そうな声を上げる。

「良いよ、美波にそんな女の子らしいことを期待した僕の頚椎が砕ける！！」

「持ってくるのを忘れただけって言ってるでしょうが！！」

そういって瞬時に吉井にバックドロップを掛ける島田、だが、オイオイ……　ミニスカートをはいた状態でそんな技をかけたらどうなるか。

無論のこと、その中が顕になるのだが、だが、未だに島田のスカートは中を隠す為のものとして機能しているのだが、それが逆に怪しい絶対領域とでも言おうかと言う状況になっていた。

「……　み、見え！見え！！（カシャカシャ！）」

「ふ～ん」

「……」

捲れようとしているスカートと、いずれは現れるであろう中身を撮影しようとするムッツリーニ、興味なさそうにしながらも体を少しずらして下着を見ようとする坂本、かく言う俺も男としての本能に逆らえずに自然を装い下着が見える位置へと動いていた。
だが、こんな俺たちの行動を見た俺と坂本の横にいた女子2人の表情は、一瞬で不機嫌なものになりすぐさま行動を起こす。

「グアァ！目がぁ！！目があぁぁぁぁぁ！！」

「……　雄二は見ちゃ駄目」

「痛て！い、いきなり何をする！！」

「知らない！！和人のエッチ！！」

まず、坂本が霧島に目潰しをされ、俺の方は佐々木に脇腹を抓られて行動を制止される。

佐々木は頬を膨らませてそっぽを向いており、拗ねているのが丸分りだったが、霧島はというと見たものに恐怖を抱かせる氷のような無表情で、両目を抑えて倒れている坂本を見下ろしていた。

先程までの雰囲気から一変し、一気に騒がしくなった教室内の中で、木下だけが落ち着いた様子で持参していたサンドウィッチを頬張っていた。

「相変わらずじゃのう……　佐々木のやり方が普通なのに、不自然に感じるのは、どういうことじゃろうか？」

木下も大概にFクラスの連中に染まっていることかよ。

そんな風に騒がしく過ごしていたら、扉の開く音が聞こえて小さな恐らくは、小学生くらいと思われる女の子の声が聞こえて来た。

「あのーバカなFクラスって、ここですか？」

そういって教室の入り口から顔を覗かせているのは、島田と似た質の髪を持ち、それをツインテールにしている可愛らしい少女の姿だった。

その少女の姿と声を聞くと、今まで騒いでいた連中は一斉に扉の方を向くのだが、坂本の奴は目潰しをされたというのにもう復活できたのか？　いや、この場合はギャグ補正とかいう奴か、横島さんたちなんてもっと酷い状況から一瞬で復活出来てたし。

「葉月！？　どうしたのよ、こんな所に来て」

「あ、お姉ちゃん！」

ふむ、この娘は島田の妹か、島田と同じ勝気そうな目や明るい雰囲気とか似ている部分が多いな。
ここでようやくダメージが抜けたのか、背中というか頚椎の部分を押さえながら立ち上がる。

「いたたたた……　あれ、君は？」

「あ、バカなお兄ちゃんです！！」

「「「「「「「……」」」」」」」

流石の俺達もこの娘の言葉を聞いたら、黙らざるを経なかった。
オイオイ……　吉井、お前って本当に小学生からバカなお兄ちゃんと呼ばれてたのかよ。

「でも、本当にどうしたのよ葉月、学校に来るなんて」

「あ、そうでした、はい！お姉ちゃん、お弁当忘れてたです」

「あ、ウチが今朝作ったお弁当！」

ここに来た理由が本当に思い浮かばないのか、島田は妹に問いかける。
その言葉を聞いた島田の妹は、すぐに肩から提げていた鞄の中をあさり、布に包まれた二つの箱を取り出す。
どうやら弁当を届けに来たらしいな、良い妹さんじゃないか、島田よ。

「ね、言ったとおりでしょ、アキ」

弁当を受け取った島田は自慢げに吉井の方へと振り向いて、そう言っていた。
だが、それを見ていた島田妹は嬉しそうに笑うと、嬉しそうな声を出していた。

「そうなんですか、お姉ちゃんが朝早くから張り切って作っていたのは、バカなお兄ムグムグ」
「や、やだこの子ったら、何を言っちゃってるのかしら」

無邪気に島田にとっては看過出来ないことを言い始めた妹の口を、

島田は急いで塞いで誤魔化すように言葉を連ねていたのだが、素直になれば良いものをこいつは何を恥ずかしがってこんなことをするかねぇ……

なんて考えていたのだが、俺は口に出したり島田本人に言ったりとかは絶対にしないだろう、何故ならばその方が面白くなりそうだし。

「え、それって本当なの？　美波」

「ち、違うわよ！だ、誰がアンタのために張り切ってお弁当なんて」

「じゃあ、島田よお前の妹さんが言っていた、張り切って作っていたってのは何なんだ」

「そ、それは……　えっと……」

顔を真っ赤にして、慌てて否定している島田の様子に俺はニヤニヤと、からかい混じりの言葉を言っていたんだが、俺の言葉を聞いて佐々木が咎めるように脇腹を突いてくる。

それに小声で『趣味が悪いよ、和人』とか言ってくるが、知らん振りをして島田に問いかけていた。

俺の言葉に島田は更に顔を赤くさせて何か言うべき言葉を捜しているのだが、やはりこいつはＦクラスであり島田であるという言葉が放たれる。

「張り切って作ってたっていうのは、プラモデルよ！！」

「プ、プラモデル？」

「そうよ！１／３４レオパルトよ！！」

この誤魔化しは……　無いだろ、島田。

「ドイツ戦車か……　食べてみたらどうだ明久」

「意外といけるかも知れぬぞ」

「無機物だよ！絶対に食べられないよ！」

他の連中も唖然とした様子を見せているのだが、いち早く立ち直ったいつもの面子は、吉井をからかっているようだった。
それに一つ一つ律儀にというか、本当にそう思っているのだろうが、返答を返す時点でからかいがいのある奴だ。

「よ、吉井くん！」

「どうしたの、姫路さん」

「こ、これ、吉井君に作ってきたお弁当です！食べてください！」

それまで黙っていた姫路が意を決したように、可愛い布に包まれた弁当を差し出してきた。

恐らくは先に島田が言ってきたから、言うタイミングを逃し続けていたのだろう、が、姫路が吉井に作ってきたという言葉を言った瞬間、奴の姿は掻き消える。

掻き消えたように見えて、俺の優れた動体視力は吉井に起こった出来事を全て捉えていた。

吉井、姫路の言葉を認識する間もなく黒覆面集団に取り押さえられて、十字架に貼り付けられる。

その後、覆面集団は距離を離した位置に十字架を設置すると、集団で包囲していた。

この間僅か1秒にも満たない時間でやってのけたのだが、こいつらって変な部分でハイスペック過ぎないか？　俺でも捉えるのは気が付いていなかったら、目で終えるか怪しいレベルの早業だったぞ。

「あ、あれ？　吉井くん？」

「どこいった？」

「明久？」

「和人、どうしたの？」

この瞬間を他の連中は捉えることはできなかったらしい、キョロキョロと吉井を探していたのだが、俺がある方向を見ている事に佐々木が気が付いて、全員が俺の視線のほうを向いた時に、須川と思われる人物が裁判長が持っているような木槌で、裁判に使われていそうなあれを叩く。

『これより、異端審問会を開廷する、被告吉井　明久は異端審問会の血の盟約に背いたのは相違ないか？』

『「『『『相違ありません！！』』』』』

『宜しい、罪状、被告：吉井　明久は一人だけ美少女に弁当を作ってもらうという、大罪を犯した、判決、死刑！』

「ちょ、なんで弁護や遺言を発言する間もなく死刑なの！？」

「ま、待ってください！！」

『むぅ！！』

「ひぅ！」

理不尽、そうあまりにも理不尽な判決に吉井は無論のこと、反論するのだが、そこに姫路が口を挿んでくる。
姫路が声を掛けてきた為に全員が姫路の方を振り向くのだが、妙な威圧感に彼女は気圧されたように一歩だけだが後退さる。
そんな風に気圧されたりしたが、やがてというか、すぐに反論しようと口を開いた。

「ち、違うんです、これは……」

『『『『『……』』』』』

「こ、これは……　エヘッ☆」

『拷問した後、死刑！』

「あ、悪化してるぅー！！って言うか火、火がついてるよ！本当に！！シャレになってないって！！やめてぇー！！」

須川の言葉に従い火がつけられて、吉井は火炙りの刑に処されてしまったんだが。

こいつら、この教室が新しくなってるって事を忘れてないか？

まあ、良いか何故かは知らんが、教室に損傷が無いしな。

なんてことを考えながら、俺は目の前で火炙りにされる吉井を静かに眺めているのだった。

まあ、俺の横にはオロオロとしている佐々木の姿があったのだが、ご愛嬌という奴だろうな。

それから後、俺は弁当を持って着ていない佐々木と共に、学食へと向かい俺は日替わりのハンバーグ定食を頼み、佐々木はAランチを注文した後、佐々木を席の確保に向かわせて、俺は出来た2人分のランチを持って席について談笑しながら食事をしていたが。

「試獣召喚！！」

「ん？　吉井？」

「多分、先生に今雑用を頼まれたんだよ、フィールドも展開されてるし」

「確かにそうだろうが、あの瓶の蓋を開ける程度だろう、良いのかよ……」

「さあ、良いんじゃないかな……」

そう食堂内で召喚が行われたから、そちらを向けば吉井が誰かに雑用を頼まれたのか、召喚獣で恐らくはご飯のお供にするような食品の瓶の蓋を必死で開けようとしている様子が映った。

俺と佐々木はそう話していたのだが、すぐに蓋は開いたようで小気味良い音と共に蓋は宙を舞う。

だが

「いったぁ！！」

召喚獣は蓋が勢いよく開いた時の反動で、椅子に鼻をぶつけたらしく、そのフィードバックに吉井は襲われているようだった。

奴の召喚獣の頭上には点数が表示されており、それが０になった瞬間、頭を何者かが掴みあげていた。

「０点になった戦死者は！補習！！」

「何で鉄人が！！というか未だお昼食べてないのにぃ！」

「つべこべ言わずに来い！！お前が勉強していないからだ！！」

そして召喚獣を捕まれたまま、吉井は補習室へと連行される。

「運の無い奴だ……」

「あ、あはははは……　でも西村先生からは、逃げられないと思うし、吉井君が０点になったら、どこにいてもどこからか西村先生って出てきそうじゃない？」

「いや、さすがにそれは……　ありえるかもな」

俺の言葉に返した佐々木の言葉、俺はこれを否定したかったのだが、あの先生の行動力を考えると強ち否定できないのが怖い。

というか、あの行動力は本当に同じ人間として可能なのだろうか

？　時折、明らかに空間転移していそうな雰囲気があるのだが。

まあ、そんなこんなで過ぎ去っていったのだが。

それから利光と合い席になって一緒に食っていたのだが、佐々木がまずは不機嫌になった後、それからずっと、佐々木と利光が牽制しあっているような、火花を散らしているような雰囲気だったのが、気になるところだし。

これを後で霧島に知られたら、制裁を喰らったんだが、何故だ？

１２話　俺と幼馴染と補習とお弁当（後書き）

さて、今回の話で、分かるとおり2巻部分は大体の部分と言うか、ほぼアニメ版準拠となりますので、常夏コンビの登場は少々後の話となってしまいます。

ですが、キチンと登場しますのでご安心を（？）というか、あれらの人気ってあるのだろうか……　出てきてもなぜか、このＳＳの根本君に×××される悪夢のような光景が……

ま、まあ、さておきまして、最後の部分は和人は今は明日香の事を、唯の幼馴染程度の感情に抑えようとしているから、こうなってしまった形です。

無論のこと、霧島の怒りを買い制裁されたのは本文にあるとおりです（苦笑。

では今回はこの辺で。

１３話　俺たちの休日の過ごし方（前書き）

今回も日常と言うか、本編の補足というかの話になっております。
話自体はまだ進んでいません。

１３話　俺たちの休日の過ごし方

第１３問　以下の文章の（　）に入る正しい物質を答えなさい。

『ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムと（　）である』

姫路　瑞希の答え

『水酸化カルシウム』

教師のコメント

正解です。アンモニアを生成するハーバー法は工業的にも重要な内容ですので、確実に覚えておいて下さい。

土屋　康太の答え

『塩化吸収剤』

教師のコメント

勝手に便利な物質を作らないように。、

吉井　明久の答え

『アンモニア』

教師のコメント

それは反則です。

東城　和人の答え
『王水』

教師のコメント
……　ワザとやっているのは分っているのですが……　これはあまりにも適当すぎです。

～バカとテストと霊能者～
～第１３話　俺たちの休日の過ごし方～

本日は前回の話から時間が経ち、次の土曜日になっていた。
前回の話から分る通りに、土曜だけは休みになっているので今日は休日と言うことなのだが、そんな俺は。

「利光！４番の札を！！」

「了解だよ！和人！」

『阿阿阿阿！！』

再びやって来た仕事に精を出していた。

ここで俺が利光の名前を呼んだことに、疑問を持った人も多いだろう。
前に利光が俺の事情を全て知っているということを話したのだが、利光は時折ではあるのだが、俺の仕事を手伝っているのだ。

まあ、手伝うようになった切っ掛け自体は単純なもので、当時の利光はとある事情によりお金に困っていた状態であり。
そんなときに俺のこの仕事自体もちょうど助手と言うか、道具をこちらに投げ渡してくれるような人材を欲していたと言う事情があったのだ。

そんなこんなで、俺は利光にバイト代わりに手が必要なときに依頼するというスタンスで、今でも偶にこいつと仕事をしていることがあるのだった。

「悪霊よ！！現世への執着を断ち切り成仏せよ！！ＧＳであるこの俺！東城　和人が極楽へと、逝かせてやる！！」

『なんで、こんな目に！コンナメェニィ！！』

「極楽へと昇り輪廻の輪に入るが良い！！吸引！！」

今度の依頼は街中のとある雑居ビルの一室で、強力な悪霊が現れたと言う依頼だった。
俺に依頼が行く前にこちら側の数人の退魔士が除霊を試みたのだが、全てが失敗か返り討ちにあうという結果に終わった為に、俺に回って来た依頼のようであった。

俺はいつも通りに【見鬼くん】にて霊体の位置を特定後、神通棍や霊体ボウガンを用いた戦闘に突入して、吸引して除霊に成功する。

だが、ここでも俺は再び感じることになる。
あの監視されているような不快感を伴った違和感を、まさかとは思いたいが奴が覗いていたと言うのだろうか、だとすれば今回の依頼に利光を参加させたのは軽率だった可能性が高い。
吸引して除霊作業が終わったにも拘らず、俺の表情は硬いままであった。

「和人、どうかしたのかい？　まさか、怪我でも？」
「いや……　なんでもないさ、大丈夫だ、利光」
「それなら良いんだけど……」

こんな俺の様子に疑問を感じたのか、一度周囲を見鬼くんで探って安全を確認した利光がこちらへと近寄ってくる。
利光の言葉になんでもないという風に答えると、利光は再び周囲を見鬼くんで警戒する作業に戻っていた。
今は既にあの違和感は消えていることから、あれは姿を消したのだろう。
とりあえず今は終わったことを伊勢河さんに連絡して、報酬に関しての受け取りもいつもどおりの方法で良いと言うことを伝える。

『では、失礼します。和人さん』

「ええ、ではお願いします、伊勢河さん」

そういって俺は電話を切ると、結界の（手順さえ踏めば、誰でも撤去できるように改良済みである）撤去や道具の収納を行っている利光に声を掛ける。

「利光」

「ん？　電話は終わったかい、和人」

「ああ、時間もまだあるしどっかに出かけて帰らないか？」

「良いね、ちょうどお昼だし食事でもして帰ろう」

これは除霊作業が順調に終わり、時間に余裕がある時のいつも通りの行動だった。

ちょうど今はお昼時と言うこともあり、昼食を食べる為に俺と利光はボストンバックほどの大きさのバックを、俺と利光がそれぞれ一つずつ持って現場を後にするのだった。

それから利光が買いたい参考書があるということで、書店に寄って商店街の中にある食堂を目的地に談笑しながら歩いていた俺たちに、突然フォークが襲い掛かる。

「っ！！」

「何でいきなりフォークが？」

俺に４本、利光に３本のフォークが襲い掛かる。
俺は懐に忍ばせていた手帳に霊力を通して強化して打ち落とし、利光は買っていた英会話の参考書で受け止めていた。

そして更に状況は変化する。

「わー！！どいてどいてどいて！！」

「よ、吉井！？」

そう俺たちの正面から走ってくるのは、一口大のケーキか何かがのっている皿を大事に抱えている吉井の姿だった。

突然目の前から凄い勢いで走ってくる吉井に対応し切れなかった利光は、吉井と正面衝突してしまう、のだが、なんで吉井の顔が利光の股間にあるのだろうか。

作為的な何かを感じるような気がするのだが、ダメージ自体は少なかったのか吉井はすぐに体を起こしていた。

「あ！く、クレープが！！」

「く、クレープ？」

「ま、まだ３０秒以内だから……　うひゃぁ！！」

「待ちなさい！ブタ野郎！！」

「止めなさい！！美春」

「待ってください！皆さん」

こぼれたのはどうやらクレープらしく、白いクリームが利光の顔に全部掛かる形になっていた。
それを指で舐め取ろうとしている吉井の姿に、流石に引くのだが、すぐに後ろから大量のフォークが来襲、慌てて逃げていく吉井を追いかけるようにして、確かDクラスの清水だったか？　と姫路に島田達が走り去っていった。

「……」

「お、おい、利光……　大丈夫か？」

「……　吉井君、僕の顔を汚したね……」

「……」

追跡者と制止している者達が通り過ぎた後、利光は無言で立ち上がる。
俯いて変な様子だった利光に俺は声を掛けるのだが、その調子もどこか腰が引けたものだったのは、誰も俺を責められないだろう。

それから、何か変なスイッチが入っている様子の利光は、自身の唇の近くにあったクリームを舐めとるのだが、正直に言ってドン引きの光景だったのは言うまでもない。

兎も角として、俺たちはとりあえず利光の顔に着いたクリームを落とす為に、一番近くの公園の水道を使って利光に落とさせていたのだが。

清水が何かを探すような様子を見せていることから、ここに吉井たちがいるのだろう。

「待たせたね、和人」

「まあ、構わんさ」

「でも、清水さんって言ったかぃ？　彼女が探している様子だということは、吉井君達はここにいるのだろうね」

「だろうな、まあ、下手に巻き込まれたら時間が幾らあっても足りんし、行くとしようか」

「ああ、昼食も未だだしね」

そういって俺たちは公園を後にしようとしたと同時に大声が聞こえてきた。

「神聖な美春達を冒涜するブタめ！決して許しません！！」

そういって清水に追い立てられて吉井達が姿を現すのだが。

「吉井の身に、一体何があったんだ？　オィ」

「……　すごく、可愛いな……　吉井君」

「……」

出てきたのはウェイトレスというべき衣装で、女装した吉井だったのだから。

もうもはや何も言うまい。

そう俺は決意すると、取り残されて呆然というか普通にその場に残った様子の木下と、なぜか木の枝に逆さにぶら下がっているムッツリーニの所に近付いていた。

「よう、木下にムッツリーニ」

「ん、東城と久保ではないか、お主もここにおったのか」

「まあな、だが、お前さんのその格好はなんだ？」

「これかの？」

「……」

俺が2人に近付いたことで利光も一緒に木下達の所に行くのだが、利光は木下に挨拶はそこそこに、ムッツリーニの方に近付くと何かを耳打ちして話していた。

その光景に嫌な予感しかしないのだが、放っておこう。

なぜかピンクでヒラヒラの服のウェイトレスの格好をした木下に、

何故女装をしているのかを聞いたのだが、木下はスカートの裾をつまんで格好を見せるようにしていたのだが。
恐ろしさしか感じない、こいつの霊力の中枢の形状が男性のものだから、俺は男性として見る事が出来るのだが、これを見れない人間ではまず女性にしか見えないだろう。

「演劇部の連中がワシ用じゃと渡してきたものでな、明久が変装に必要じゃというからの、渡したのじゃ」

「だからといって、お前まで着替える必要はあったのか？」

「さあ？」

木下との会話を行っていると俺は頭を抱えたい衝動に包まれる。
どうしてこう、このクラスというか、この学園の連中って言うのは頭のネジが何本かイってしまっているような連中ばかりなのだろうか。

「そういえば、木下とムッツリーニは昼飯食ったのか？」

「ん？　ワシはまだじゃの、ムッツリーニはどうなのじゃ？」

「……　まだ何も食べてない」

「じゃあ、ちょうど良いね僕と和人は、これから昼食なんだけど木下君と土屋君も一緒にどうだい？」

俺の言いたいことがわかったのか、利光は引き継ぐようにして2人にそう言っていた。

2人は俺たちの誘いに少し顔を見合わせると、頷いて。

「では、相伴に預かるとしようかの」

「……　（コクリ）」

「よし、んじゃ、行くとしようか……　その前に木下」

「んむ？　なんじゃ？」

了承の言葉を言っていたので、俺たちは向かおうとしたのだが、俺はその前にやるべきことが一つあるので、木下を呼び止める。

俺の言葉に疑問を感じている様子の木下だが、そんな奴に俺はいわなければならない言葉を言っていた。

「元の服に着替えような」

「あ」

わ、忘れてたのかよオイ！

俺はそう突っ込みを入れたくなったのだが、こいつらのクオリティとしてはありえるので、突っ込みを入れても余計に疲れる可能性が高かったので、それ以上は黙っていた。

そして木下の着替えを待って俺たちは、元々の予定だった食堂ではなく、知っているレストハウスに向かうことになり、歩いて向かうのだった。

それから昼食も無事に済んで、少し４人で遊んだ後俺たちは分かれて帰宅した次の日。

今日は日曜なのだが今日も補習である為に登校した俺の目の前には、手紙を持って打ちひしがれているような吉井と、どこか励まそうとしているような様子の坂本の姿があった。

「ん、吉井に坂本じゃないか、どうかしたのか？」

「こ、こ、れ……」

「ん？　これはラブレターか？」

吉井が差し出してきたのは何の変哲も無いというかラブレターに使われるような、ファンシーな便箋と紙を手渡してくる。

読め、ということだろうか。

本当はマナー違反だが、坂本の目も俺に読めといっているから、読むしかないのだろう。

読み進めるのだが、俺はここにある筆跡に見覚えがありすぎるので、自身の顔が引き攣っていくのを感じる。

「……」

「う、うううう、う、う……」

「東城、お前も何か、言ってやれ」

「ああ」

ぶっちゃけると利光の字にしか、俺には見えなかった。
そして、吉井の足元には昨日の吉井のウェイトレス姿の写真が落ちていたから、間違いなく利光しかいないだろう。
そして、読み終わった俺は真剣な表情で吉井の肩を掴む。

「吉井……　ナニがあっても……　強く生きろよ」

「イヤァァァァァァァ！！！」

そう俺は声を掛けるので精一杯だった。
こんなものを吉井の下駄箱に入れたということは、利光は本気で吉井の貞操を狙っているのだろう、俺にはもうこれ以上奴を止めることは出来ないだろう。

そう俺は無力感を感じながら、吉井に声を掛けて、奴は前に坂本からも同じ様な言葉を掛けられたのだろう。
この世の終わりが来たといわんばかりの悲鳴と、目の幅一杯の涙を両目から流して嘆き悲しんでいた。

一方その頃、差出人のとある男子生徒の様子。

「な、ない！ない！！昨日買ったばかりの生写真を入れていたラブレターが！！」

そう言って自分の鞄を焦った様に漁っているのは、学年次席の利光君である。
今や彼は焦りのあまりに顔を真っ赤にして、必死の形相で鞄を漁っているのだが。

すぐに気を取り直すと、一つ溜息とともにブラックコーヒーを飲

む。

「まあ、良いか、差出人である僕の名前は書いてないし、それにこっちの方は無事だったしね」

そう言って、鞄の中からはもう一つの便箋が姿を現すのだが、そこに書かれている宛名は【東城　和人様へ】と書かれていた。
そして怪しくメガネを光らせる利光は、怪しい声を出して笑いつつ。

「フフフフフ……　吉井君の写真はまた買うとしよう、こっちのラブレターは衝動的に書いてしまったからね、今度は無くさない様にしないとね」

などといっていたが、余計に怪しい雰囲気となった利光の個室内、こんな状況になっていることに気が付いているものは、誰もいなかった。

「っ！？　な、なんだ今の悪寒は……　と、利光と一緒に居る時に良く感じるものに似ていたが……　まさか、な」

「っ！？　今、なんか変な電波を和人が掘られちゃうような予感を感じた……　やっぱり久保君、警戒するべき、だよね」

なんてことを言っている少年少女がいたのだが、これは余談である。

１３話　俺たちの休日の過ごし方（後書き）

今回は休みの日の和人たちの過ごし方という内容の割には、薄いとも思えるような内容ですが……　まあ、また日常編を描くことがありますので、その際にもっと掘り下げたいな、とか考えております。

和人は休日はいつも仕事をしているわけじゃないですよと、ここで言ってみる。
いつもは家でのんびりしているか、利光と一緒に街に出かけたりして過ごしてます。
次回の日常編でこの辺を描けたら良いな、とか考えつつも、今回はこの辺で。

１４話　トラブルメイカーの来訪

第１４問　以下の問いに答えなさい

『冠位十二階が制定されたのは（　）である』

姫路　瑞希の答え

『６０３』

教師のコメント

正解です。

坂本　雄二の答え

『６０３』

教師のコメント

一体どうしたのですか？　驚いたことに正解です。

吉井　明久の答え

『６０３』

教師のコメント

きみの名前を見て思わずバツをつけた先生を許してください。

東城　和人の答え
『６０３』
教師のコメント
　どうしたことでしょう、キミまで真面目に答えているなんて。

五反田　弾の答え
『６０３』
教師のコメント
　転校してから、学校には慣れましたか？　何かあれば何時でも相談してください。

～バカとテストと霊能者～
～１４話　トラブルメイカーの来訪～

これはちょうど一ヶ月くらい前の話になる。
俺は頭を抱えている。
それは。

「ズズ〜　ふぅ、うま」

目の前でのんきに茶を飲んでいるこのバカの存在そのものにだ！

「で？　何しにきたんだよお前」

「決まってんじゃん、こっちにしかないゲームとか漫画とかを読み漁りに来たんだよ！それ意外にあるか？」

「……　今すぐ自分の世界に帰れ！！」

「酷くね！？　俺だってエロ本処分されたりとか、向こう側じゃあゲームとか漫画とか映画に至るまでＩＳしか題材に選ばれてなくて、飽き飽きしてるんだよ！！こっちで数ヶ月くらい滞在するのＯＫじゃね！？」

目の前で猛然と反論している男、年の頃は俺と同じ位のこいつについて紹介しよう。

こいつの名前は五反田　弾、一度死んで転生したなんていう輪廻転生の体現者でもある。

その上に転生の際に神様にチート能力をもらって転生なんていう馬鹿げた事も経験しているようだ、実際に俺に見せられた能力なんてトンでもないのばっかりだったし。

だが、前世のことも聞けば、こいつって元からチートな存在なんじゃ？　なんて考えてしまったのは良い思い出だ。

何しろ十階建てのビルの屋上から転落して無傷だったと聞いたし……　しかも、もう数少ない文殊を使って確かめたら、本当だったし！

新しい種類の妖怪か、魔族かもしれないな……　まあ、初めての出会いは俺が除霊していた最中に、こいつが転移してきたことなんだが、関わってしまった事については本当に後悔している！何しろこいつは横島さん並のトラブルメイカーだからだ！！！

多分俺が通っている学園にいる連中と遜色ないレベルだろう、というか半日もあればＦクラスに馴染んでいるのが容易に想像できる。

まあ、こいつが今言っていた理由が本当のところなのだろうが、実際の本音を聞きだすか、気は進まんがな！！

「それで？　本当の理由は何だよ」

「久しぶりに、命の危険のない平穏な毎日って奴を送ってみたくて……」

「そうか……」

俺の問い掛けに途端に微妙な表情となる弾、それからアンニュイな雰囲気を漂わせている奴が言っていたことは、自然と涙を誘ってしまうのは、仕方の無いことだった。

「まあ、それは兎も角としてだ、ここに住むのか？」

「おう、それと仕事を伊勢河さんに工面してもらえたらありがたい」

「……　確かに、お前の除霊技術は高いからな、戦力としては申し分ない、それに暫くの間、2，3週間くらいは金稼ぎに専念するんだろ？」

「ああ、そうしないと娯楽品を買うどころか生活費も足りないしな」

「そうだな、働かざる者食うべからずだ、明日からキッチリと働いて貰うぞ」

「了解した！」

なんてやり取りがあった、その日の夜は俺が晩飯を作ってやって、次の日からは俺が対応できない遠い場所の除霊依頼の対処のために奴は、現地のホテルを転々とする生活を送っていたのだった。

だけど、試召戦争に興味があるから学園に来るようだし、奴が佐々木に手を出さないように見張る必要があるな。

あの野郎は基本相手がいる女性には、礼儀正しく接するが、フリーで美少女だった場合、ナンパに走る危険があるからな。

だからこそ、俺が見張っておかねばな。

これは全て空回りに終わってしまったんだがな。

そして、かれこれ一ヶ月近くが経つのだが、奴は一度も俺の家に来ることはなく、伊勢河さんに連絡を取れば順調に仕事をこなしているようだ、離島とかしまいには、海外とかの霊的不良物件を除霊しているらしい。
昨日連絡があり、今日には帰ってくるといっていたのだが、嫌な予感がするのは気のせいだろうか。

まあ、なんにせよ既に学校に居る以上は俺にはどうしようもないな。

「あれ？　どうしたの、東城君？　何か難しい顔をしているけど」

「いや、なんでもないさ、吉井」

俺のこんな様子に気が付いたんだろう、吉井の奴が心配そうに俺に対してそういってくる。
それに対して俺は手を横に振って答えていたのだが、ここで予鈴が鳴ったので吉井は席に戻って行き、鉄人、こと西村先生が教室へとはいってくる。

「皆席につけー！ＨＲを始めるぞ！」

その言葉が終わる前には全員が着席していたのだが、ここでようやく全員が気が付いた。

『先生』

「なんだ？」

『どうして卓袱台が一つ余ってるんですか？』

「それも含めて今から話す」

そう、誰も座っていない卓袱台が一つあったからだ。
クラスの誰かが代表として質問しているのだが、誰もが気になるところだろう。

それが俺の真後ろだと言うのが気に掛かるがな。

『先生！転校生ですか！？』

「ああ」

『男ですか！？　女ですか！？』

「男だ」

『……』

シィ～ン、先程まで転校生が来るということで、あれほど騒がしかった教室が男と言う一言で、一気に静まり返る。
間違いはないか、奴だ、奴がきやがった！

だが、このクラスらしいな、とも思うな。

「手間が省けたか、まあ良いか、入って来い！」

「ういっす」

西村先生は黙らせる手間が省けたと言わんばかりの様子だが、それで良いのかと言いたくはなる。
まあ、このFクラスに入ってくるからには、こういう洗礼も必要だと言うことなのだろう。

だが、おかしいな、この学園は流石に途中の編入の際には試験が行われるはずなんだがな。
奴の学力は直接見たわけじゃあないから分らんが、伊勢河さんの話だと最低でB、狙えばAはいけそうと聞いていたんだけど。

弾の奴は今は取り替えられていて、見た目は新しくなっている扉を開けて黒板の前にやってくる。
それから自分の名前を書いて自己紹介をするのだが、クラスの奴らは男が転校してきたという事実に、テンションが下がりきっている様子で誰も見ていないし聞いていないのは明白だったのだが、弾は楽しそうと言うか『好都合だ』と言わんばかりの笑みを浮かべていた。

それに気が付いた西村先生の表情が歪んだのだが、俺の後ろの席に座るように促されて、奴が着席していた。

それからHRも終わって休み時間になる。

「それにしても何時戻ってきていたんだ、お前は？」

「昨日さ、伊勢河さんにここへの編入手続きを頼んでいたからな、ちょうど良くお前がここにいるし、Ｆクラスならば色々と動きやすいかもと思ってな」

「そうかい……」

相変わらずフリーダムな奴だよ。
俺はそう思って頭を抱えていたのだが、坂本や吉井といったいつものメンバー達が集まってくる。

「転校生と知り合いなのか？　東城」

「まあな」

「ふぅーん、まあ良いか、俺の名前は坂本　雄二だ、よろしく」

「僕は吉井　明久だよ」

「……　土屋　康太」

「次はわしの番かのう、わしは木下　秀吉、言って置くがわしは「男、だよな？」わ、わしを初見で男だといってくれたのは主で二人目じゃ！！」

坂本達と自己紹介をしていくのだが、やっぱこいつも木下の性別は見抜いているようだな、だけど一瞬だけ自信がなさそうだったがな。
まあ、その言葉に木下の感激具合の凄いこと凄いこと、よほど俺だけじゃなくて弾までが男として見てくれる事が嬉しいらしい。
だが、ここで吉井の奴が立ち上がる。

「五反田くん「あ、弾で良いぞ、俺も明久と呼ばせてもらうが、良いか？」うん、良いけど、じゃなくて！」

「どうしたよ？」

「弾、秀吉は男じゃないよ！こんな美少女を捕まえてなんて失礼なことを言っているんだ！！」

「は？」

「だからわしは男だといつも言っておろうに……」

「苦労してんだな……　お前さん」

弾に対して木下の性別に関して猛然と反撃している吉井を見て、弾は木下へと憐憫の情が篭った視線をむけていた。
その口から出てきた言葉に、弱々しく頷く木下だが、そういう反

応と見た目が男と言うカテゴリーを全て否定していることに、こいつは気が付いていないんだろうな。

そんでもって坂本とも自己紹介を済ませ（名前で呼び合うようだ）た所で、姫路たちが近付いて来て同じ様に自己紹介を済ませる。

「……　Ｆか」

「？」

だが、あろうことかこのバカは姫路の胸のサイズを一瞬で測ったらしい。

とんでもなく小声で言っているから姫路は気付かなかったんだろうが、ムッツリーニは気が付いたらしい。

「……　同士よ……！」

「ッ！？　と言うことはお前もか……　改めてよろしく、ムッツリーニ」

「……　こちらこそ」

なんか、ヤバイのとヤバイのが手を組んだのは気のせいだろうか？　俺の勘と言う勘が全て警鐘を鳴らしているのも、気のせいだと思いたいんだけど！？

それに、なんか、胃の辺りがキリキリと痛んで来るんだが、まさか胃薬を常備しなくてはならなくなる。

なんてことには、ならないよな！？

そんでもってお昼になり、俺たちは弾の親睦会を兼ねて屋上へとあがったんだが、そこには地獄というものが待っていた。

「今日はちょうど良かったです！私もお弁当を作ってきたんですよ！」

「「「「「なぁ！？」」」」」

「？」

「どうしたんだ、お前ら？」

姫路のその言葉を聞いた瞬間、俺たちの時が止まる。
そう、あの殺人料理が俺たちの目の前に展開されてしまったからだ！

だが、ここで普通に食わせては島田にまで１８禁シーンと呼べる凄惨な現場を見せてしまう！
俺たちは一瞬でアイコンタクトを行う。

（生贄は！）

（奴だ！）

（雄二は後ろを羽交い絞めにして、東城君とムッツリーニは両足を、僕と秀吉が隙を付いて流し込む！！）

（……　了解……！！）

（了解じゃ！！）

全員の意思は一つだった。

それは弾を犠牲にするということ！そして俺たちは自信が誇る全てのスペックを駆使して奴に挑む。

「あー！！学園長が空中浮遊している！！」

「え！？　うそでしょ！？」

「へ！？」

「んなわけねぇ！グボッ！む、むぐぅぅぐぅぅう！！！」

吉井が三人の気を引いた瞬間、俺とムッツリーニが両足を固定、坂本が上半身を羽交い絞めにして身動き取れなくした後に、吉井と木下が奴の体内に姫路特性弁当（と書いて劇物と読む）を流し込む！

あまりの衝撃に悲鳴を上げそうになった奴の口を吉井と、木下が塞いで悲鳴が上がらないようにして、それから一秒も経たない内に奴は危険な痙攣を起こして倒れこむ。

「ちょっと、アキ、何もないじゃない……　って五反田！？　どうしたのよ！？」

「吉井くんの見間違いじゃないで、五反田くん！？」

そして、何もなかったことに対して少々怒った様子の島田と姫路が、既に惨劇の後といった風体の弾に驚いて声を掛けていた。

それに対して俺たちは。

「弾の奴がな、姫路の弁当が美味くてたまらんといって、独り占めしちまいやがったんだ……　美味いからって食い過ぎだっての」

「……　欲張りな男だった」

「フム、後で胃薬でも渡してやらんといかんのう」

「そうだね、弾って意外に食欲旺盛みたいだったからね」

「ああ、確かに凄い食いっぷりだったよ」

いけしゃあしゃあと嘘をつきまくっていた。

そんな俺たちの様子に、島田は気が付いたらしく、非難の色を込めた視線を向けてくるのだが、俺は弾の口にあの錠剤を放り込んで水で流し込んでいた。

まあ、それから俺たちは謝ったりとかして普通に昼食を過ごしていくのだが、まあ、割愛することになるだろう。

それから俺たちは、帰りのバスの中に乗り込んでいたのだが、校門の所で佐々木に出会った時、意外なことにナンパをしなかったんだ。

どうしてかと聞いたら、非難というかしょうがないものを見る目つきで見られたから、余計にわけが分らんし、佐々木に対して応援するような言葉さえかけていたから、余計にわけが分らん。

「だが、どうしてお前は編入なんて面倒なことを取ったんだ？　時間が束縛されるというのに」

「決まってるだろ？　試召戦争ってのをやってみたいからだ」

「やっぱりそこか……　Ｆクラスに入ったのも？」

「ああ、今年の二年Ｆクラスは相当な馬鹿の集まりで、試召戦争も数多く起こしてるって聞いたからな、楽しそうだろ？」

「はぁ……」

こいつはやっぱりこんな奴だったか、そう俺は思っていた。
面白そうなことには首を突っ込んで、楽しむ。

前回のときも同じ様に味あわされたからこそ分るけどな、こいつの性格とか、色々なものとか。

「それによ」

「なんだよ？」

「同年代の男同士で思いっきりバカな事をやってみたいって思ってたんだ、俺って向こう側じゃあ、男友達とか少ない、というかいないしな、それに風潮が風潮だったし」

「そう、か……」

こいつのちょっとだけ悲しみに包まれている言葉を聞いて、俺はこいつの居る世界の事を思い出していた。

弾の居た世界はＩＳ『インフィニット・ストラトス』と呼ばれるパワードスーツが開発されて、軍事技術とかのバランスが狂ってしまった世界、実際に一度世界大戦にまで行きかけたらしいんだが、

まあ、それは回避されて一応は平穏を取り戻したらしい。
だが、これには欠陥があって『女性にしか扱えない』という致命的な欠陥が合ったと聞いている。

それによって起こったのは国が女性優遇制度を始めたことによる、女尊男卑の世界、男性はほとんど女性の使い走りとされているような所もあるような風潮に代わったらしい。

まあ、弾によれば男性を奴隷扱いしているのは、自分が偉いと勘違いしたドブスとかクソ女ばかりらしい、逆にＩＳに乗れる女性達の方が男性を認めているというのだから、人間の醜さというか愚かさと言うか、そんなものを思い知らされた話でも合ったな。

そんな世界に生きていたんだ、勿論、俺達が今まで吉井や坂本たちとやってきたような、あんなバカ騒ぎは望めない状況でもあったわけだ。

考えただけで思える、窮屈な世界だ、と。
まあ、住めば都というし人は馴染めるということなのだろう、だけどやっぱり思う。

「窮屈だよなぁ、そんな世界ってのは」

「ああ、男の夜のお供なんて、コンビニとか普通の書店から完全に消え去ったんだぜ？」

「余計に、だな、というか、そんなものを何で無くす必要があるんだよ？」

「いえてるだろ？」

これについても大体の予想がつく、こっちの世界でもそういった本とかビデオは女性の人権団体と名乗る連中が、犯罪を誘発するものだ、なんて騒いでるんだから、間違いなくそんな世界になったら滅ぼそうとするのは目に見えてる。

こっちがそんな世界にならなくて、本当に良かったと安堵するべき、なんだろうかねぇ。

なんて考えながら、俺と弾は色々と雑談を交わしながら、家へと辿り着いて、その後はのんびりと過ごすのだった。

１４話　トラブルメイカーの来訪（後書き）

言い訳できないほどに、更新が途絶していた理由なんですが、ちょっとした思い付きでした。
こういう身内クロスとかやってみたら、自分的に面白そう！と考えちゃったからです。

作者が変なことを始めやがった、くらいに生温く見守っていただけだたらありがたいです（苦笑。

15話　俺と案内とオリエンテーリング！

第１５問　文月新聞！
噂のＦクラスに転校生が出現！！

本日、我々新聞部は新学期開始早々に試召戦争を3度も起こしたＦクラスに、転校生が入ったことをキャッチした！
どうやら男性のようであり、Ｆクラス内での最大級戦力であり、どうしてか隠れていて、今回の試召戦争で正体を現した男【Ｔ城　Ｋ人】との関係が噂されている男性でもある。

一部の情報筋においては友人の関係を越えた深い関係との噂も……
この噂を確認するために、我々はＴ城　Ｋ人と親しい人間達にインタビューを敢行する事となった。

Ｋ保　Ｔ光さんへのインタビュー
ああ彼かい？　知っているよ、僕とも親しいからね。
彼は大変聡明でね、非常に学力も高いはずなんだけど、どうしてＦクラスに行ったのかは分らないね。
編入試験もちゃんと受けていたみたいだし……

Ｋ人がいることだし、何かを企んでいるのかも、知れないね。
え？　彼とＫ人の関係かい？　さあね……　彼らからはそういう空気はないんだけど、もしも本当にそういう関係なら僕もまぜ……
いや、なんでもない。

記者のコメント
フムどうやら学年次席の彼とも転校生は親しいご様子、別な方向からの更なるリサーチが不可欠と言わざるをえないだろう。
それに、渦中となっている和人氏との関係についてははっきりした事は分らないが、親友と言う関係である可能性は高いだろう、それ以上の関係かどうかは我々の次報をお待ちいただきたい。

S々木　A日香さんへのインタビュー
え？　彼ですか？　普通に良い人でしたよ。
私の相談にも乗ってくれてますから、それに学力も高いようですからK人やS子達と一緒に勉強も教えてくれたりしてくれますし。
K人と彼が親友を超えた関係に……　ですか？　ありえません！
というか、私が絶対に認めないです！！！

記者のコメント
彼女のコメントからも普通に彼の学力が高いことが窺え、どうしてFクラスへ行ってしまったのかと言う謎が浮かび上がる。
だが、彼らの関係については怒髪点を突く、という勢いで怒り狂ったので、これ以上のインタビューは不可能と判断、彼女へのインタビューはこれだけとなる。

我々は、このようなコメントに納得できないのは明白であり、まだ謎となっている部分、K人氏と転校生である少年との親友を越えた関係についての疑問を解消する為に、渦中の人である本人へと直接インタビューを敢行する。

T城　K人へのインタビュー
俺と奴が親友を超えた関係だと……？　そうか、極楽へ行く準備は十分と言うことか……　貴様ら……

記者のコメント
このインタビューを敢行した直後より記者が行方不明となっており、コメントは出来なくなっております。

以上が今回の新聞であるのだが、我々は真実を明らかにする為に、これからも彼らを追い続ける所存である！

「おい、なんだよ、これ？」
「見ての通り、お前の特集だよ」
「何かが、おかしくね？」
「早めに慣れといた方が身のためだぞ」
「……　そうかい……」

などと会話をしている少年たちがいたのだが、それは誰も知ることはなかった。

～バカとテストと霊能者～
～第１５話　俺と案内とオリエンテーリング！～

よっす、五反田　弾だ！
今回は俺の視点で進む様だな！

……　なんか電波を受信した気がするが、気のせいと言うことにしておこう。

向こう側とはまた違った爽やかな朝の中、俺と和人は学園へと歩いて登校していた。

男と登校ってこと事態が久しぶりで、逆に新鮮だ！向こう側じゃあ、絶対に同年代の男と一緒に歩いて登校しながらのバカ会話なんて出来ないし。

「それにしてもだ、今回の新作のト釣リのアトリエって、様々な意味で釣りみたいな内容だったよな」

「名は体を現すとは言うが、ゲームでそれを体現しようとすること事態がナンセンスだな」

「まさか、錬金術を駆使して道具を作るゲームかと思えば、実際には湖の主を釣り上げるための道具を錬金術で作るゲームだったとは……！」

「ああ、それもあんな華奢な女の子が、あっさりと主を釣り上げるんだから、スタッフは何を考えていたんだろうな」

男同士で登校しながらしている会話は、昨日俺が買い溜めしていたゲームをやった際の感想だった。

……　前世で似たタイトルと言うか、この世界じゃあ漫画とかのタイトルが微妙に違うから、俺がやったことのあるゲームだと思って買ったんだがなぁ。

絵は前世の〇トリのアトリエと一緒で主人公も一緒、その上に登場キャラも一緒と来ていたのに、どうしてかフィッシングゲームに……　それもバランスがおかしいと言う明らかにクソゲーと化していたのだから。

俺の落胆は大きいのは言うまでもない！！あの名作が！名作が！駄作に代わっていたんだから！道理で新品なのに！発売日に買ったのに安いと思ったら！こういうことだったのかよ！？　と言いたい気持ちで一杯だった。

だけど俺たちの目の前というか、俺たちから数十メートルほど離れた所に、見慣れないものが展開されていることに気が付いた。

「召喚フィールド？」

「て、ことは、あれが例の？」

「ああ、俺達が試召戦争を行う際に必要なる、召喚獣を呼び出すためのフィールドだ」

「へぇ、あれがそうなのか」

俺はしきりに感心していた。
術式の完成度自体は低い、術式に疎い俺でもアンサートーカーの能力を介しないでの介入と改竄ができそうなものだからだが、だけど科学が全盛となっているのにこれほどのものを、現実を侵食できるようなフィールドを作れたこと自体が凄いと言える。

だけど、もう一つ俺の中に疑問が沸き起こる。
それは誰が、召喚獣を呼び出していることだ。

「多分だが、呼び出しているのは吉井だろう」

「ん、どうしてそう思う？」

「吉井の奴は観察処分者でな、先生達からよく雑用を頼まれているのさ」

「観察処分者と言う名称事態は把握しているし、能力も把握しているから分るが、あの長ランを来ている明久のミニチュアみたいなのが、召喚獣か？」

「ああ、それと観察処分者の召喚獣の能力と欠点も把握しているか？」

「一応はな、俺たちの召喚獣とは違い、物体に触れられることと、召喚者へのフィードバックがあることだろ？」

「ああ」

確認を取るように言ってくる和人に対して、俺は淀みなく答えていくんだが、目の前の光景は俺が自分で説明したことに対する解説を求めているように見えた。

「じゃあ、明久の召喚獣が、あんな感じで車に轢かれたら……　どうなるんだ？」

「うわぁ！うわぁ…　うわぁ……　ぅわぁ……！」

「……　普通の人間ならば、ファントムペインの現象による心因性のショックで、ショック死する危険があるほどの激痛を味わうな……」

「かすり傷程度のダメージっぽいが……　本当に人間か？」

「……　言うな」

明久の召喚獣が赤い車に轢かれたからだ、俺の顔が引き攣るのが分る。

隣では頭を抱えて頭痛を堪えている和人がいるから、あいつらのこんな光景はいつものことなのだろう。

だが、車に轢かれて掃討なダメージを負っていたはずの明久は猛然と立ち上がり、ドライバーと口論になっていた。

だけど、あのドライバーって確か……

「あれは、学園長か？」

「だな、あの婆さんは考え無しに毒を吐くことあるからな、それに吉井が激昂したって所だろう」

「ふぅーん……」

俺たちの目の前で明久と口論しているのは、俺たちの学園の学園長であるババアだ。

え？　名前はどうしたって？……　覚えてないな。

まあそれはそれとして、車を運転して去って行く学園長と、その場に残される、泣いている女の子とそれを慰めている明久。

だけど、あの娘は誰だ？

「あの娘は島田　葉月、島田の妹だよ」

「あいつに妹っていたのか」

「とりあえず、あいつらと合流するとしようか」

「だな」

まあ、その後は島田の妹に俺が自己紹介したり、事情を聞いたりしたんだが、この娘の俺の呼び方が【ハーレムなお兄ちゃん】だったのは、ちょっと顔が引き攣ってしまった。

和人の奴は【顔は良いお兄ちゃん】だったから、そっちよりはマシなんだろうか。

だが、明久から俺に対して負のオーラが放たれていたのは気のせいだろうか？　向こう側で中学のころに何度か感じたオーラに似ている気がしたが。

まあ、良いや。

そんでもって教室に着いた俺たちは黒板の近くに集まっているクラスメイトに気が付いた。

「なにしてるんだ？」

「弾に東城と明久か、なんかやるみたいだぞ」

「へぇ」

俺の疑問の声に応えたのは、雄二で目の前に張ってある紙を指差していた。

それから俺たち全員が近付いていく。

「文月学園主催！豪華景品争奪！オリエンテーリング大会！？」

「景品もここに書いてあるな」

「なんて豪華な……」

明久の声が示す通り、催し物のようだが書いてある景品が豪華すぎるとしか言いようが無い。

横にいる和人の顔は呆れ果てたものになり、明久の顔は嬉しさで輝いているのだった。

文具セット。

特別高等参考書１０冊。
科学実験キット。
食器用洗剤半年分引換券。
学食の食券一年分。
学食のデザートチケット一年分。
新作ゲーム引換券。
アルバムＣＤ枚引換券。
最新家電引換券。
ブランド物アクセサリー３個引換券。
一日だけ生徒会長になれる券。
高橋先生の【一週間個人特別授業】引換券。
西村先生の【一週間個人特別授業】引換券。
遠征もＯＫ練習試合チケット。
特別教室【１日】貸し出しチケット。
文月学園指定温泉旅館２泊３日ペア旅行券。
如月グランドパークプレミアムチケット。
５万円分図書カード引き換えチケット。
フィー・アイン・ノイン限定ストラップセット
喫茶【ラ・ペディス】２千円分お食事券
携帯電話無料機種変更券。
シークレットアイテム１。

シークレットアイテム２。

豪華すぎだろ。
そう突っ込みを入れたくてたまらない俺は、頭を抱えるのだが、他の連中の反応は静かなものだったから、この学園では普通なのか、それとも端から諦めているのか、それのどちらかだろうな。
ただし、俺にとっては欲しいものも数種類あるからな、きちんと参加してＧＥＴしてやる！

「だけど、こいつのルールはどうなってるんだ？　坂本」
「ああ、まずはこの学園内の地図を見てくれ」
「へえ、ここから探し出すんだね、僕ＲＰＧとかで宝を探すの得意なんだ！」

気を取り直したらしい和人の言葉に応えて、雄二の奴が数枚の地図を取り出してくる。
どうやら、この学園全体の地図らしい、グラウンドから新旧の校舎の一階～四階部分までを完全に網羅されたものだ。
明久は目を輝かせて得意げに言っていたが、こいつは何かを忘れてないだろうか？

「そして、これが試験問題じゃ！」

「やっぱりか」

「ああ、試験の答えがチェックポイントの座標となっていて、そこに宝のチケットが隠されているって寸法だ」

「それも早い者勝ちで他のチームとぶつかった際には、試験召喚バトルで奪い取っても良いそうじゃ」

「中々考えられているじゃないか、面白そうじゃん、それに転校してきたばかりだから、校舎内の構造を把握できる時間を得られるのもありがたいな」

「だけどバカには不利が重なっているじゃないかぁ……！」

ふむふむと、雄二と秀吉が説明するルールを着ていて俺は頷いていた。

それに俺自身がここに来たばっかりだから、校舎内の設備がどこにあるのかを把握出来てないのも痛い。

だからこそこういった企画は渡りに船だからな、ちょうど良いしタイミングも良かったな。

「皆席に着け！オリエンテーリングのチーム分けを発表するぞ！」

そういって入ってきた西村先生、いそいそと着席する俺たちの中から、明久と思われる『そうだ、姫路さんか東城くんと一緒になれれば』なんて声が聞こえてきたんだが、無理だろ。

なんて考えていた。

「俺のチームは和人との二人かよ」

「吉井は坂本に木下だな、さしずめ」

「問題児は一ヶ所に集めておいた、何をしでかすか分らんからな」

「やっぱりな」

発表されたチームは俺が和人との二人で、明久は和人の言葉通り、姫路が島田とムッツリーニという組み合わせだった。

それから始まる言い争いに似た言葉の数々、まあ、仕方が無いといえるのかね？　まあ良いや。

そして始まったオリエンテーリング、俺は和人に校舎内を案内してもらっていた。
そんでもって、たまに問題を解いて、そこへと向かう。

「ここが体育倉庫だな、一応ここに宝の座標があったから見てみるか？」

「だな、まだ一個も入手してないからな」

「おう」

解いた問題の座標が体育倉庫だったのでやって来た俺たちは、手分けして探すことにする。
俺が跳び箱を、和人がマットが置いてある場所を中心に探す。
俺が跳び箱の一番上を外したときに、ポケ〇ンのモン〇ター〇ールに似たカプセルが底に落ちていた。

「これか？」

「みたいだな、開けてみろ」

「おう」

カプセルを俺は開けてみた時に目に入ったチケットは【如月グランドパークプレミアムチケット】だった。
表面には小さくだが、文字が書かれている。

「ふむふむ、カップル限定でのウェイディング体験か……　和人、佐々木と行ってみろよ」

「ざけんな」

「あれ、照れてる？　なあ、照れてんの？　佐々木と行って来いって言われて嬉しいくせに～」

「……　ッ！！」

俺が手に入れたのは、カップル限定の如月グランドパークのチケットだった。
チケットを見た和人の顔に苦いものと、ちょっとだけ嬉しそうな

色が浮かんでいたが、俺はそこをより突っ込んでいく。

多分俺の顔は今、相当にウザいものとなっているのは明白だろう。

何しろ俺の言葉を聞いた和人は、はっきりとした内をして俺を睨んできているのだから、だが、一夏や千冬さんと比べたときの威圧感などと比べたら、台風と春の陽だまりくらいの違いがあるからな、どうでもない。

まあ、そんな感じの会話を行っていたのだが、俺たちの後ろに気配が現れた。

「先を越されたみたいだな」

「よ、よりによって東城くん……」

「東城を相手に流石に試験召喚バトルで奪い取るのは、無理じゃな、それに弾の実力も未知数じゃしの」

現れたのは、雄二達のチームで先を越された上に、和人がいることによって絶望の色が彼らの顔に浮かんでいた。

聞いた話だと、和人の野郎って前回のAクラスでの決戦で五千点台を叩き出したんだよな、本当にこいつの頭の出来ってどうなってるんだよ？

俺が必死こいて努力しても、どこまでいけるかが今は分からないんだよな。

「まあ、お前らの欲しいものじゃないかもしれないぜ？　こいつだからな」

「これは、違うね」

「……　おい弾、こいつをお前はどうするつもりだ？」

「ん？　ラブラブなカップルの奴に売りつけようと考えているが？」

「なら良いが、翔子には売りつけるなよ」

「……　誰？」

「まあ、知らないんなら良いさ」

嘘でーす！俺は雄二と霧島との関係は和人から聞いているので、知ってまーす！ククククッ！！こいつを霧島に売りつけてやるぜぃ！！いい売却先だぜ。

だけど、背筋に悪寒が走ったように自分の体を抱いた雄二が俺を見てくるが、俺はそっぽを向いて口笛を吹いてごまかしていた。

まあ、その後は順調に【新作ゲーム引換券】に【文月学園指定温泉旅館2泊3日ペア旅行券】とかを入手した俺たちは、それを見つける。

「それでは僕は和人か吉井君の靴箱から、ラブレターを盗もうとしているようじゃないか！！！」

「「……」」

「だが、二人の靴箱は一部の人にとっては宝箱かもしれないじゃないか！僕は！僕はどうしたら良いんだぁー！！」

「……見なかったことにするか、弾」

「そうだな……　あれ、本当に利光、なのか？」

「……　聞くな」

なんて言っているバラの鎖に包まれているような利光を、あいつって昔からヤバそうな所あったけど、何時の間にあんなオープンになったんだろうか。

チラリ、と和人を見れば呆然としているから、奴にとってもこれは予想外な出来事だったんだろう。

そんなアイツを俺たちは見なかったことにして、立ち去るのだった。

まあ、その後になんか変な先輩がコンビで絡んできたんだが、召喚バトルを挑んできてから、それを召喚獣で凹ったりしながら、俺たちは終了の時刻を迎えた。

家に帰ってから開いた景品の中に、見覚えのないものがあった。

「ん？　こいつは……」

「シークレットアイテムって奴、かね？」

「いや弾、俺たちはシークレットの引き換えチケットを入手してないだろ」

「あのバアさんのことだからな、俺たちに渡しておけば面白そうだ、なんて理由で渡してそうだけどな」

そう、俺たちの景品が入っているダンボールの中からは、腕輪と思われる形の鉄製の紅と蒼の無骨なものが出てきたからだ。
これを見た俺と和人の中には、シークレットアイテムという文字が躍っていた。

まあ、あのバアさんのことだから渡したら面白い結果を出すような奴らに渡してるのかもしれない。
これで考えたら、明久達の所にも渡ってる可能性は高いな。

だけど、これって……

「どうかしたのか？　弾」

「いや、能力で解析したらな……　これって明久クラスのバカにしか使えないみたいだぞ」

「はぁ？」

「だから、Fクラス内の平均点を越える点数を越えたら、暴走するようになってしまってる」

「わざとかよ？　それって」

俺の顔が苦いものになったのに気が付いたんだろう、和人の奴が問いかけてくる。
だが、答えを聞いた和人の顔にもより強烈な色の苦さが浮かんでくる。

「いや、わざとじゃないと思うぞ」

「根拠は？」

「多分だけど、この欠陥部分を取り除く方法が確立されてないんだ、だからだないか？」

「……なるほど、で、取り除けそうか？」

「時間が有ればな」

和人の疑問に答えていく俺、それを聞いて納得した様子を見せる和人だが、奴の更なる疑問も尤もなものだ。
だけど、この召喚システム事態が偶然の要素が大きいから、術式がグッチャグッチャのネッチョネッチョといえるくらいに複雑になってるんだよなぁ。
天災の、あの逆に綺麗と言えるプログラムの並びとは全く違うものだよ。

「なら大丈夫だろう、合宿辺りでどうもキナ臭いことになるって、俺の勘が囁いてるんだが、間に合いそうか？」

「それは大丈夫だ……　とりあえず二週間もらえれば、試運転くらいは出来そうなくらいに術式を整えられそうだ」

「そうか、それじゃあ任せる」

「おう、だけど！燃えてきたぁ！！！」

「はぁ？」

蒼穹を魔改造した後、アルテリオンを作ったときとは違うこの感覚！これこそが違う世界に来たという実感を与えてくれる！！

そいじゃあ、今日から弄りまくるぞ！！

なんて考えた俺は、和人が新たに作っていた工房っぽい小屋に移動して作業を開始したのだった。

「まあ、あいつなら悪いようにしないだろうが……　やっぱ、ああいう風に素直に楽しめるって羨ましいし、楽しめるようになりたいよな……」

なんて和人が言ってたみたいなんだが、俺は知ることもなかったんだがな。

１５話　俺と案内とオリエンテーリング！（後書き）

あ、勘違いされそうですが、主人公は和人です。
たまに弾視点での話やらが挿まれる形になります。

後、あのグランドパークのチケットは皆様の予想通りの方に渡ります。
それとシークレットアイテムの腕輪の能力は合宿の辺りに出てきますので、ご期待ください。

16話　バカと暴徒とラブレター

文月新聞

二年F組吉井　明久さんのコメント。

僕が小さなころ、祖父が良くこういっていました。

『明久。泥棒でも何でも良い、一番を目指して精進しなさい』と

そして僕は今、極楽にいる祖父に対してこの言葉を贈ろうと思います。

爺ちゃん、これで良いのかい？

以上

【女装が似合いそうな男子ランキング？1】

【こいつにだけはバカと言われたくない生徒ランキング？1】

【モテそうな男子（同性愛編）ランキング？1】

の偉大な三冠を達成した吉井　明久さんのコメントでした。

なお、女装が似合いそうな男子にノミネートされていた木下　秀吉さんは、協議の結果、アンフェアであるとの結果が出た為に、除外されております。

予定されていた第二特集。

【五反田　弾、東城　和人の女性遍歴と、モテない男性の極致、須川　亮との因果関係について探る！】

につきましては、諸事情により無期限の延期となりました。

ご容赦ください。

～バカとテストと霊能者～

～第１６話　バカと暴徒とラブレター～

今日も今日とて爽やかな一日の始まりを告げるＨＲの時間。

「工藤」「はい」「久保」「はい」

静まり返った教室の中で、西村先生のクラスメイト達の名前を呼び上げる声が響く。

ギリギリで吉井が駆け込んできたが、大方、西村先生辺りから雑用を頼まれていたんだろう。

この辺には煩そうな西村先生が特に何も言わなかったんだからな。

「近藤」「はい」「五反田」「はい」「斉藤」「はい」

気持ちの良い天気と開けられた窓から、入ってくる気持ちの良い風、今日という日がとても良い日になりそうな、そんな予感を感じるものは大勢いるだろう今日と言う日。

「坂本」「……　明久の奴がラブレターをもらったようだ」

『殺せえぇぇぇ！！！』

前言撤回、今日は吉井にとっては黒歴史並の最悪な一日となりそうな予感がする。

「ゆ、雄二！いきなり何を言い出すのさ！！」

明らかな小声、ある程度こういったことに関して訓練を受けていた俺がようやく聞き取れた声だと言うのに、あっさりと聞き取っているこいつら。
本当にイヤになる。

どうしてこうも人間の限界ってもんを嫉妬だけで乗り越えられる人間が多すぎるんだよ！？　俺のあの苦労は一体なんだったんだ！？　と責めたくもなる状況。

『どういうことだ！？　吉井の奴がそんなものをもらうなんて！』
『全員周囲を探せ！それに吉井がもらえたのならば、きっと同じものが俺たちの卓袱台の中にもあるはずだ！』
『だめだ！こっちには腐ったパンと腐り切って液状化したパンしかない！』
『もっとよく探せ！』
『有ったぞ！未開封新品のパンだ！！』
『お前は一体何を探してるんだ！？』

「面白いな、こりゃぁ」

「冗談じゃないぞ、弾」

怒号が飛び交い、あるはずもない物を探し始めるクラスメイト達

の姿と、面白がる弾。
本っ当に頭が痛くなる……　こりゃぁ、明日から頭痛薬を持ち歩いた方がよいかもな。

「お前ら！静かにしろっ！」

ピタリ！西村先生の怒号と共にクラスメイト達はピッタリと動きを止める。
流石のこいつらも鉄人と渾名される先生には逆らえないらしい。

「それでは、出欠確認を続ける」

「手塚」「吉井コロス」「東城」「半分が優しさでできた頭痛薬をください」「藤堂」「吉井コロス」

「ちょ！皆落ち着くんだ！返事が東城君以外僕を殺すってなってるよ！？」

「吉井、静かにしろ！」

「先生、ここで怒るのは僕じゃないですよね！？　このままじゃ僕はクラスの皆から囲まれて集団暴行されてしまいますよ！！」

「新田」「吉井コロス」「布田」「吉井マジ殺す」「根岸」「吉井

ブチ殺す」

き、聞いてない……　吉井の言葉は兎も角として、どうして俺の言葉までスルーされたんだ！？

「よし、遅刻欠席者は無しだな。今日も一日勉学に励むように！」

「待って先生！可愛い生徒を見殺しにしないで！！」

そういって締めくくった西村先生は出席簿を閉じて、教室を後にしようとする。

だが、それを吉井は必死の形相で止め様と声を掛けていた。

「吉井、お前は勘違いをしている」

西村先生は何を言うつもりなのだろうか、吉井を正面から見つめ、重々しく口を開いた。

「お前は……　不細工だ」

「不細工とまで言われるとは思わなかったよ！このバカ！」
「授業は真面目に受けるように」
「待って！先生！せんせーい！！！」

吉井の静止の言葉も空しく立ち去っていく西村先生、これで殺気立ったこいつらを止められる人間など誰もいなくなったことになる。
俺の横に座る弾は数種類の漫画を取り出して、既に広がり始めている惨劇を我関せず、と言った様子で読み漁っていた。
吉井の傍には島田と姫路がいつの間にかやってきていて、既に彼への攻撃態勢を整えているのは明白だった。

「アキ！指を……　じゃない！手紙を見せなさい！！」
「え、い、いや、それは！」
「出来れば、私にも見せて欲しいです……」
「その、ごめん！」
「でも！私は吉井君に酷い事をしたくないんです！！」
「ちょっとまってよ！！姫路さん！？　どうして僕に暴行を加える

こと前提なの！？」

……　頭が痛い、痛すぎる……
既にクラクラとして、俺は寝転がりたい衝動を必死に抑えていたら、教卓の方から手を叩く音が聞こえる。

坂本だ、何を言うつもりなのだろう。
ロクでもない事のような気がするがな。

「おい皆、ちょっと落ち着け」

『んんっ！！』

「今重要なのは、明久の手紙を見ることじゃない……　明久をどう惨たらしく殺すかだ！！」

「前提条件が間違いすぎてるんだよ！この野郎！！」

もう、ヤダ……
そう考えた俺は、吉井が教室を飛び出したのを確認した後、畳の上に寝転がるのだった。

『逃がすなぁ！追撃隊を組織するんだ！』
『手紙を奪え！吉井を殺せ！！』
『サーチ&デース！！！！』
「そこはせめてデストロイにしてぇ！！」

教室の外から聞こえてくる怒号と、地鳴りに似た地響き。
もはや何もかもがイヤになった俺は、意識を閉ざして眠りに着くのだった。

おーおー、凄ぇなこりゃ。
俺はそう言いたい気持ちで一杯だった。

横には寝転がって眠っている和人の姿、どうも、あの連中には付いていけなくなったらしいな。
そんでもって廊下から聞こえてくる悲鳴、どうも明久は善戦しているらしい。
何しろ未だにあの廃スペックなやつらが捕捉は出来ても、捕縛は

出来てないようだからな。

「五反田　弾！我らに力を貸してほしい！！」

「漫画見るのに忙しいからパス」

教室の扉が開いて須川が飛び込んできたと同時に、俺に対してそう言って来る。

だけど俺の周囲にはとっくに授業が潰れると分っていたから取り出していた、金弾（多分銀玉だろう、話の流れは一緒だし）鳴門（ＮＡＲＵＴＯだろう以下略）らの現状で出ている全巻を取り出して読み漁っているのだった。

「それが大変に重要だと言うことはよく分る！！」

「……　報酬次第では考えても良いぞ」

「初回限定完全受注生産版のみのリリースだった金弾のＤＶＤＢＯＸを進呈する！しかも、未開封新品状態だ！！」

「契約完了だ！奴を今から追う！！」

「おお！俺の読み通りだったか！お前は今から我らＦＦＦ団の必殺処刑人となるに相応しい人物だ！！」

須川の表情には必死さの中に真面目さ（弾の勘違いです）も感じたからな、俺は見ていた金弾を閉じて提案する。
それから奴は俺が買い逃していたものが報酬と言ってきたから、俺は即決で了承し模造刀を取り出して、奴を追うのだった。

「……　弾、お前もかよ」

なんて後ろで言っていた奴がいるが、知らんなぁ！！

僕は追って来るクラスの皆をぬれたサッカーゴールネットを利用

した罠に嵌めて、スタンガンで全員を気絶させて、追ってきていたムッツリーニを説得に成功し、その上に彼からは護身用の武器までもらえた。
そしてさっき、殺気に満ちていた美波を撒いた僕は屋上へと走っていた。

「っ！殺気！！！？」

「フンッ！！！」

「って弾！？」

「もらったぞ、明久ぁ！！」

突然、この場に、湧いた、と言える殺気を感じた僕は、横方向へと飛んだ瞬間、銀色の六つの閃光が僕がさっきいた場所を蹂躙していた。
そこにある鉄筋コンクリート製の壁や床がまるで豆腐を切った様な滑らかな断面になっているから、あまりにも高い威力を持っていると言うことが簡単に分る。

「危ないじゃないか弾！どういうつもりだよ！」

「お前に恨みはないがな……　明久」

「じゃあ見逃してよ！弾は漫画見てただろ！？」

「そうだな、だがな、俺はある目的の為にお前を討つ！」

「ふざけんなよ！この野郎！！」

そういって走り出した僕の後ろを拘束で追撃してくる弾、って言うか早すぎる！！！

あの野郎チートでも使っているかのようじゃないか！！どうして人間があんなに早く走れるんだよ！？

「必殺！斬岩剣！！（モドキ！！）」

「のぅわぁ！！」

走っている弾が、鞘に収まっている日本刀を抜き取った瞬間、危険を感じ取った僕の本能に従って前転するように倒れこんだ瞬間、目の前にあった消化ホースが収められている機材が二つに分かれる光景を見る。

なんだよこれ！？　なんて考えつつも僕は慌てて立ち上がり、すぐに走り出して逃げ出すのだった。

「明久！心配はいらん！こいつは模造刀だ！当たってもちょっと痛いだけだぞ！！！」

「弾にはちょっとでも！僕には痛恨だぁー！！！！」

「だから待てといってんだろぉ！！」

「ふざけんなー！！！！」

後ろで何事かほざいてきた弾だけど、全く信用できない！！
というか、あんな切れ味を見せたあれが模造刀だって！？　嘘に決まってるじゃないか！！

当てるつもり満々で、尚且つ、僕を殺るという気迫に満ちている弾の姿、だけど、本気になった雄二や皆ほどじゃない！！

「あ、あれは！！」

「ちぃ！逃がさんぞ！明久ぁ！！」

目の前にはちょうど良い位置にある窓、僕はそこから脱出をしようと考えた瞬間、弾も気が付いたらしく、より速度を上げて迫ってくる。

それよりも早く僕は窓にたどり着いて、ガラスを割りながら外へと飛び出していった。

「逃げられると思うな、明久！！」

「じゃあね～」

「き、貴様ぁ～！！！謀ったなぁ！！明久！！」

だけど、僕はガラスを破った瞬間には壁に張り付いていて、飛び降りていく弾を見送ることに成功した。

弾の目は血走っていて、はっきり言って見るに耐えない状況だったけど、これで安心手逃げられると思った僕は甘かったと言うことを思い知る。

「せぃ！！！」

「んなぁ！？　校舎の外壁に！？」

なんと、弾は校舎の外壁に日本刀を突き立てて、減速したと同時に突き刺さってる日本刀を抜いて、垂直の壁を真っ直ぐに走って登ってきたんだ！

流石の僕であってもこれは恐怖しか感じない！！
慌てて校舎の中に入って、僕は再び逃げ出す。
これから数秒程度で、弾は追ってくるだろうから一刻の猶予もない！！
どうやらたどり着いたらしい弾の不気味な声を聞きながら僕は、必死の思いで逃げに徹するのだった。

それから俺たちの前には、姫路の手で破られるラブレターと打ちひしがれる明久の姿があった。
やっぱり、このラブレターはぁ、ねぇ……　なんて考えながらニヤニヤしながら、差出人と思える少女へと視線を向ける。

「な！なんでしょうか、五反田くん！？」
「いや、なんでもないさ姫路、まあ、頑張れよ」
「は、はぅぅぅ……」

俺の視線の意味に気が付いたらしい姫路は、顔を真っ赤にして俯く。
それから雄二が手紙を燃やし、差出人を聞こうとした明久の首を姫路が百八十度曲げたりとか色々あった。

「まあ、なんにせよ明久の処分は確定的だな」
「だろうが、教室にはもっと面白い光景があるかも、しれないな」
「どういうこった？」
「よく耳を済ませてみたら分るさ」

虫の息となっている明久、それは島田からの折檻が原因なのだが、さっきまで参加していたはずの他の連中がいない。
理由は。

『東城が教室でＤクラスの佐々木さんに膝枕をしてもらっていたと言う、匿名情報が入ったぞ！！』
『なに！？　奴はＦクラスの血の盟約に背いた！これより神罰を下す！』

『奴は逃げ出したとのことだ！追撃するぞ！』
『サーチ＆デース！！！』

和人の奴が追われる結果になったからだ、俺がリークしたわけじゃないよ。
ていうか、こいつらのこの会話が始まらなかったら分らなかったし。

「貴様ら！！どういうつもりだ！？」

『黙れぇ！東城　和人よ！大人しく我らの裁きを受けよ！！』
『一人だけ女の子と良い思いをするという裏切り行為は死に値する！！』
『羨ましいんじゃー！！女の子に膝枕をしてもらえることそのものがぁー！！』

「なるほど……　次は東城のやつが標的にって訳か」

「おう」

ＦＦＦ団の会話を俺と坂本は聞きながら互いに、ニヤリ、と笑みを浮かべていた。

「アイツは必ず一歩引いた所でしか物事を見てないからな、ちょうど良い機会だろうさ」

「確かにな、あのツンデレは世話が本当に焼けるよ」

なんて言いながら更に騒がしくなった学校内を肴に、俺は教室に戻ると漫画の続きを読みふけるのだった。

まあ、帰った後。

「今日はよくもやってくれたなぁ！！！」

「お前とは一遍、本気でやりあってみたかったんだよな！気の済むまで遣り合おうぜ和人ぉ！！」

なんていう会話と共に、和人とのガチバトルが合ったんだが、勝手ながら割愛する。

１６話　バカと暴徒とラブレター（後書き）

もうちょっとで、合宿編……　これを越えたら和人も一皮向けますが、それがダメな方向なのか、よい方向なのかは、秘密と言うことで。

17話　脅迫と婚約と

第17問　【　】内部にて、私、がどうしてこのような痛みを覚えたのかを答えなさい。

父が沈痛の面持ちで告げた。
「彼は今朝早くに出て行った、もう忘れなさい」
その話を聞いたとき、【私は身が引き裂かれるような痛みを感じた】彼のことはなんとも思っていなかった。彼がどうなろうとも知ったことではなかった。私と彼は何の関係もない。そう思っていたはずなのに、どうしてこんなにも気持ちが揺れるのだろう。

姫路　瑞希の答え
『私にとって彼は自分の半身のように大切な存在であったから』

教師のコメント
そうですね、自分の半身のように大切であった為、いなくなった事で【私】は、まさに身を引き裂かれたかのような痛みを感じたと言うことです。

土屋　康太の答え
『私にとって彼は下半身の存在だったから』

教師のコメント
その認識はあんまりだと思います。

吉井　明久の答え
『私にとって彼は下半身のように大切な存在だったから』

教師のコメント
　どうして下半身に限定するのですか。

東城　和人の答え
『私にとって彼は腎臓と言える存在だったから』

教師のコメント
　どうして腎臓なのでしょうか。

五反田　弾の答え
『私にとって彼はパシリのような存在だったから』

教師のコメント
　それは……　酷すぎると言う問答の前に人としてどうだろう？
と言える答えです。

織斑　一夏の答え
『私にとって彼は、自身の身以上の存在だったから』

教師のコメント
　おや？　Ｆクラスでない人の回答が混じっておりますね、ですが、
これに込められている悲しみはこちらにも伝わってきます。

～バカとテストと霊能者～
～第１７話　脅迫と婚約と～

既に夜の帳が下りている深夜と言える時間帯、俺は弾と共に庭に出て、それぞれが右腕に紅と蒼い色をした腕輪をして立っていた。

「それにしても、今日はあいつらってプールを自由に使えたんだろ？」

「ああ、西村先生からの罰でプール掃除を命じられて、そのついでみたいだな」

「まあ、今日仕事が入っていてラッキーだったぁ……」

「そういえばお前は泳げないんだったか……」

「ああ、プールだったら大丈夫なんだがなぁ……　でもよ、もしも今日参加していたらと思うと、嫌な予感が頭をよぎるんだよなぁ」

そう、今日は週末の夜、昼間にはちょいと遠い場所の除霊の依頼があったので、吉井たちに誘われていたプールにいけなかったんだ。

弾はそれに少々残念そうな様子を見せるのだが、こいつは仲間内でバカをやれることであれば迷いなく参加するから、本当に残念に思っているのだろう。

だけど、俺の霊勘も囁いていたんだよな。

弾をあれに参加させていたら大変なことになる、と。

だからこそ、難易度の高い依頼を受けて俺達が今日はほぼ一日がつぶれるような状態を作っていたんだよな。

だけど、はっきり言ってこいつで何か問題が起こるなんて、あまり考えたくはないんだよな。

「言うな……　それにお前が転移してきた時のゲートはきちんと安定させているんだろ？」

「ああ、その【筈】だ」

「なに……？」

「い、いやちゃんと安定してるよ！？　多分だけど！今も異常が発生したとかの状況は見当たらないし！！」

妙に自信なさげな奴の言葉、これを気いた瞬間に俺は【まさか】という想いが浮かび上がるが、奴は慌てて誤魔化している様子を見せつつも、確認を取ってから言っているからな。

まあ、言っていることに間違いはないだろう。

だが、逆を言えばゲートの術式は未だに維持されていると言うことでもあるからな、俺がいた世界の暇な神々（特にヒャクメとかヒャクメとかヒャクメとか）達が妙なことをしないと良いんだがな。

なんて考えていた。

「と、取り合えずだ！！こいつの試験をするぞ！」

「ああ、お前の解析と改造で欠点の除去は済んだんだろ？」

「おう！術式が滅茶苦茶になりそうだったからな、あっちを直した

らこっちがダメで、こっちを直したら、あっちがダメ、とか普通に連発されたけどな、もう大丈夫なくらいに出来はよくなってるはずだ」

流石だ、としか言いようが無い。
幾ら俺でもアーテイファクトに属するようなこいつに手を加えるなんて事は出来ない。
それをこいつは随分と苦労はしたようだが、手を加えただけではない様子なのだからな。

「そうか……　それで、起動とかはどうするんだ？」

「起動ワードは基本的に【アウェイクン】だな、そんでもって能力だが……」

それから始まる弾の講義の中、俺はこんなものを作ったばあさんの考えに頭が痛くなると同時に、嫌な予感も感じるのだった。

まあ、それは近い内に明らかになってしまうんだがな。
え？　能力がなんだって？　それは今は秘密と言う奴だろうな。
意外と近い内に明かせる場に遭遇できるはずだしな。

あの試験起動から一週間が経ったある日の学校、俺は初夏独特の湿度を感じながらも、まだふいてくれる心地よい風を感じていた。

晴天で雲ひとつない綺麗な青空、こんな日に屋上で弁当を食ったら美味そうだよなぁ。

なんて考えていた俺の耳に変な叫び声が響いた。

『最悪じゃぁー！！！！！』

「吉井か……」

そう、吉井の叫び声だったからだ。

弾の奴は今日は漫画ではなく、ＰＳＰで出ていたモン○ンに忙しいらしい。

坂本と木下の二人と強力プレイの真っ最中のようで、先程から。

「あ！ブッ飛ばすんじゃねえよ弾！」
「俺の大剣の間合いに入ってくる方が悪いんじゃボケ！！」
「喧嘩するでないぞ！！雄二！そっちへクックが行ったぞい！」
「ちぃ！っていうか誰か粉塵使ってくれ！！ハメを喰らいそうだ！！」
「って雄二落ちてんじゃねえよ！！」
「知るか！あんなハメ喰らって無事で済むわけないだろ！！」

なんていう会話が聞こえてくる。
会話から察するに、使っている武器は弾が大検、坂本がどうやら片手剣、木下はライトボウガンらしい。
ここまで夢中になれるのも凄いよなぁ、なんて考えている俺を無視して彼らは更に夢中でプレイしていて、さっきの叫び声に気が付いていない様子を見せていた。
だけど、島田がソワソワしているから、参加したいんだろうが、素直に言った方が良いぞ……　島田。
まあ、そんなこんなで時間が過ぎていくのだった。

教室に戻ってきた吉井に一段落着いたらしい木下や、島田達（結局は交ぜて貰ったらしい）が話しかけていた。

「明久。どうかしたのかの？」

「べ、別に！ベツニ何でもないよ！！」

怪しい……　そういえるものだったんだが、奴の額には冷や汗と言うか顔もちょっと青いが、これはいつものことか。
だけどこいつのこの挙動不審具合は前回の、ラブレターをもらった時に似ている。

「嘘ばっかり、さっきアンタの変な声が聞こえてきたし、何か隠してるんじゃないの？」

「あ、おはよう美波」

「おはよう、アキ、それで何を隠しているのかしら？……　まさか」
「やだなぁ、何も隠してなんかないさ」

共に挨拶を交わした後、目が釣りあがる島田。
攻撃態勢へ移行まで数秒と言う状況下、さて、吉井の奴はどういう言葉を返すのやら。

「ラブレターをまた貰ったとか言わないわよね？」
「美波、言葉に気をつけるんだ。ラブレターの単語に反応した皆が臨戦態勢を整えているから」

島田の言葉を聞いたと同時に、黒装束に着替えてカッターナイフやムチに蝋燭や上履きと言った武器類を取り出して、臨戦態勢を整えるクラスメイト。
……　今更ながらに、振り分け試験を休んでしまった自分が恨めしい。

「皆、カッターはまだ早いわ。こいつがまたラブレターを貰えるとは思えないけど、確実に何かを隠している可能性はあるわ」

「……　もしかして明久、ラブレターと思ったら脅迫状だったとかのオチじゃあないだろうな？」

「えっ！？　だ、弾！？「まあ、普通の高校生が脅迫状を貰うなんて、そっちの方がありえんか」そ、そうだよネ！あ、あはははは！！！」

「そうね、ラブレターよりもそっちの方がありえないから、五反田の言うことは置いておきましょうか、それで、一体何を貰ったのかしら、アキ？」

島田の言葉に同調した弾の言葉に、吉井が【我、ここに大いなる希望を見つけたり！】なんて表情になったんだが、まさか……　本当に？

なんて考えながらも、更に島田は殺気を漲らせて吉井に問いかける。

それを見た吉井の表情に何か、決意した色のものが浮かび上がり、勢いよく息を吸い込む。

何を言い出すのやら。

「ふふん、そのまさかさ！今朝、僕の靴箱にラブ」

吉井の親指一ミリにも満たない位置に、島田の投擲したカッターナイフが刺さる。
これを見た瞬間の吉井の表情は絶望と言うか、そんな色に染まるんだが。
やっぱり火に油を注いでくれたか、このバカは。

「次は……　耳と鼻……　どっちが良いかしら？」
「大変に申し訳ございませんでしたぁ！！」

五体倒置、つまり土下座をかまして謝罪する吉井の姿、プライドと言うものはこいつにないのか……
そう思うと同時に俺は頭を抱えていた。

「本当の事を言いなさい、何を貰ったのかしら？」
「はい！僕が隠していたのは実は、きょ――――」
「きょ？」

殺気十分と言う具合の島田、そんな島田に吉井は放していくのだ

が、俺と弾は目を見合わせる。
まさかと思うが、本当にこいつは脅迫状を貰っていると言うのか？
もしも本当に脅迫状だった場合はかなりまずい、ここで不特定多数の人間にそんなものが届いていると言うこと事態が。
それに吉井も気が付いているのだろう、更に問いかけようとする島田の前で更に挙動不審が増していく。

「きょ、きょ……」

「教師からの、補習の通知だろ？　吉井」

「そ、そう！そうなんだよ！

「本当に？」

「たぶんと言うかそんなところだろ、吉井のポケットからさっき覗いていたんだが、西村先生の名前が見えたしな」

「まあ東城が、そういうなら間違い無いんでしょうね……」

「ああ、ここは哀れな状態になった吉井　明久に、黙祷でも捧げてやってくれ」

「あ、あはははは……　まあ、西村先生から通知があったんなら、余計に厳しいと思うけど、がんばんなさいよ、アキ？」

「う、うん！頑張るよ！？」

何とかして誤魔化そうとしている吉井、そんな吉井を追い詰める島田とクラスメイト、俺は助け舟を出すように吉井に声を掛けていた。
それにドモりながらも応じる吉井だったのだが、島田は流石に俺に対して疑いの目を向けてくる。
普通はそうかと考えながら俺は、咄嗟に浮き出た嘘を並べて誤魔化していく。
普段の俺の行動が功を奏したのだろう、島田は俺の言うことを信じてくれた後、俺のちょっときつめの言葉に苦笑いを浮かべながら吉井を激励していた。

（貸し一つだ、吉井）

（ゴメン！それとありがとう！東城くん！！）

アイコンタクトを行えば、吉井はキラキラと輝いた目で俺に対して感謝の言葉を述べてくる。
俺はそれに頷いて答えると、予鈴が鳴り西村先生が入ってきたので、そのまま話題はお流れになるのだった。

時は過ぎて昼休み、俺たちはいつものように屋上に集まる。
だが面子には変化があり、本日は島田と姫路がいないのだ、理由は知らないが佐々木や霧島が呼びに来ていたからな、女子一同でのガールズトークにでも花を咲かせたいのだろう。

「それにしても、今日の弁当は弾が作った奴か」

「おう」

弾に質問する坂本、無理は無い。
いつも俺が作る弁当と言うのは、大抵が洋食なら洋食のみ、和食であれば和食のみと言う献立なのに、今日はカレイの煮付けに野菜炒めと（業火野菜炒めとか言っていた）アジのフライという構成だったからだ。
吉井が物欲しそうな表情を（奴の手には砂糖水が握られていた）していたので、それに負けてしまい俺はフライ、弾の奴は野菜炒めの一部をやっていた以外には特に何事も無く昼食は済んでいた。

「それにしても東城もじゃが、弾も料理上手じゃのう、誰に習ったのじゃ？」

「俺は近くに洋食亭をやっていた人がいてな、洋食はその人に習ったな、和食は知り合いからだけど」

「俺は家が定食屋をやっていてな、自然と習った形だがな、尤も【こっち】じゃあ店はやってないけどな」

「そうなのか……　弾の家族がやっていると言っていた定食屋も興味があるからいってみたいのぅ、野菜炒めは非常に美味じゃったしの」

「そうだね、東城君が洋食を習ったっていう店にも言ってみたいよ、レパートリーを増やしてみたいし」

「俺もだな、機会があればお前らの言っていた店に連れてってくれ」

「……　機会があればな」

「機会があれば、声を掛けるぜ！」

「……　期待している」

感心したように言っている皆に俺と弾は、苦笑してしまいそうに

なるのだが、応えていた。
何故ならば、俺達が料理を習った所にはどうあがいてもいけそうに無いからな。

いや、弾ならば行く為の準備とかは整えることは出来るだろう、自力でこちらへと来るような奴だし。
だけど、奴の言っていた世界の特徴から奴は、絶対に連れて行かないかもしれないな。
場合によっては俺が前に居た世界よりも性質が悪いからな、篠ノ之　束という女のことやＩＳを使えない女が男性を普通にパシリにしているといった事実があるからだ。

どんなに気を遣ったとしても、そういったバカはこちらに近付いてきて問題を起こしたがるものだ、だからこそ連れて行かないだろう。
吉井たちにも迷惑になってしまいそうになるだろうしな。

だが、ここで坂本が咳払いをしてくる。
どうやら今朝のことについての話題を切り出すようだ。

「それはそうとだ、明久」

「なに？　雄二」

「今朝お前が言っていたあれは、脅迫状だろ？」

「え　ぇ！？　どうしてそれを！？」

「その反応で白状したようなもんだろ……　明久」

坂本の言葉に、吉井はあからさまな反応を見せてくる。
というか、もう少しは隠そうと努力しろよ。
そういってしまいそうになる光景だった。

「それで、どういう内容の脅迫状なんだ？」

「そうじゃ明久、それにはなんと書いてあるのじゃ？」

気に掛けている様子の弾と、心配そうな木下の様子。
二人の様子に吉井は嬉しそうな表情をするのだが、すぐに気を取り直した様子を見せて手紙を出していた。

ここでムッツリーニと坂本を見れば、彼らも心配そうな様子を見せているのだが、特に坂本は素直に出してやれば良いのに、なんて考えていた。

「えーと【貴方の周囲にいる異性に近付かないこと、この忠告が聞き届けられない場合、同封している写真を公開します】だって」

「フム……　異性と言うのは姫路に島田のことだろうな」
「東城くん！それは間違いだ！！」
「何だよ？」
「秀吉は立派な女の子だよ！！」
「いや、木下は男だろ！？」
「そうじゃ！明久！わしは男じゃ！！！」
「むしろ男の娘って言っても良いかも知れんな」
「……　弾、今お主は変な変換をしなかったかの？」
「別に」

俺の言葉に力強く否定の言葉を投げかけてくる吉井、それに俺と木下は否定の言葉を投げかけるのだが、弾の奴は変なことを言っていた。
おとこのこ、と言っていたがまさか、男の娘、とか言いたいんじゃあるまいな！こいつ！？
話が進まん……！

「話が進まんだろうがお前ら、明久、同封されている写真ってのはなんだ？　ちょっと見せてみろ」

「ええと……　！？」

坂本の指示に従い、写真を取り出した吉井が固まる。

取り出された写真、それは。

明久セーラー服バージョン☆

と言いたくなるような格好をした吉井の写真だった。

「こ、これってまさか……」

「入学式の時に来ていた服だろうな」

「おい、明久……　バカだとは思っていたんだが、まさか……」

「って弾！？　違うよ！僕はこの時に好きでこんな格好をしていたわけじゃないからね！？　それに東城君も僕から離れないでよ！？」

取り出された写真を見てドン引き、という様子を見せて吉井から物理的にも距離を開ける弾、俺も合わせて距離を開けていたのだが、

吉井は俺たちの様子に気が付いたらしく、必死で俺たちに追いすがろうとしていた。

「とりあえず明久が女装趣味の変態だってのは、良く分った」

「これから、接し方を少々変えんといかんか？」

「東城くんも弾も、そんな誤解しないでよ！僕はノーマルだよ、この時は本当に間違えただけなんだってばぁ！」

俺たちの言葉にマジ泣きしそうな吉井は、必死で弁明をしてくる。だけどこいつの女装趣味の疑惑は晴れないからなぁ、これからはこいつに関して少々考える所は考えた方が良いかな。

なんて考えていた。

まあ、それから再び坂本に軌道修正された俺たちは、話し合いを

続ける。

「これが盗撮の可能性が高いとはいえ、写真に収め尚且つ脅迫なんていう鬱屈した人格か……」

「このままじゃあ情報が少なすぎるしな、明久を脅迫しているのが男だとも女だともいえんしな」

「おい弾、女は除外されても良いんじゃないか？」

「……　雄二、お前この学園の連中の特徴を忘れてないか？」

「……ああ……」

俺の言葉に同調するように弾は言っていたのだが、坂本の奴が待ったを掛けてそう言っていた。

弾の言葉で坂本は思い出したのだろう、この学園の連中自体が【性別を些細な壁】と認識していることに。

どうして性別の壁を些細なものと認識できるのかなど分らない。

ただ、これを考えたら、俺の身近、それもかなり近い位置に該当する人間がいそうな気がするんだが、気のせいと思いたい。

「それも置いておこう、だがちょいと脱線するが明久の脅迫に便乗

する形になったが、俺からも相談がある」
「坂本がか？　何が有った」
「これを、見てくれ」
「ＭＰ３プレイヤーか？」
「別に変なところは無いじゃろう」
「雄二、これがどうしたんだ？」

深刻な顔をした坂本は俺たちの前に一つの物体を取り出してきた。
俺の言葉を皮切りに皆が問いかけていくのだが、坂本の表情が晴れていくことは無い。

「今日の休み時間、翔子がこれを持っていることに気が付いて没収したんだ」
「それだけなら何も問題ないと思うけど、雄二」
「再生してくれ、坂本」
「ああ」

坂本が言っていることには、疑問と言うものを感じなくなってきている自分が嫌になってくる。
だが、このままでは話が進まない、俺は坂本の奴に再生を促したのだが、そこから再生されたものは度肝を抜かれるものだった。

『翔子、俺は、お前、が、好き、だ、けっこ、ん、しよう』

「……　おい、これって雄二の声じゃないか……」

「かなり不自然ではあるが……　じゃが、ここから更に編集なり、雄二に近いことを言わせて編集すれば」

「……　かなり近いものになる」

これを聞いた瞬間にはかなりの違和感を持ったのだが、これを編集、もしくは木下に声真似を何らかの真似をさせるか、坂本に似たような事を言わせればほぼ完璧になるだろうな。

「でもさ雄二」

「何だよ明久」

「まだ結婚程度の話だったんだね、てっきり僕は霧島さんが懐妊し

た事になってるって、思ってたんだけど」

「明久……　笑えない冗談はよせ」

「ま、まあまあ、雄二、霧島はこれをどういった用途で使うつもりなんだ？　まあ、聞けば分るんだが」

「これの完成版を婚約の証として両親に聞かせるつもりでいたらしい」

『……』

どんどんと坂本の口から出てくるトンでもない事実の数々、というか、本当にこの学園ってこういったことに関してはかなりきついと言うか、なんと言うか。

だけど、聞いているうちに弾の奴は人事ではなく、自分の事のように聞いているのは気のせいだろうか？　こいつに幼馴染とかいたっけ、聞いたことが無いな。

だが、霧島がこれを婚約の証として彼女の両親に聞かせようとか考えていたと言うことは、彼女は逆に焦りを見せていたと言うことでもある。

「翔子はかなりの機械オンチでな、こんなものを持っているはずは無いんだが、持っていたのを怪しんで没収したら」

「これが入っていたというわけじゃな……」

「大体は読めてきたな」

「何が？　東城君」

霧島が坂本の言うように機械オンチだとすれば、坂本が何を言いたいのかも少しは分る。

俺の言葉を聞いた吉井は、心の底から疑問に感じているような顔でこちらを見てくるのだが、少しは考えてくれと言いたい。

「恐らく坂本は、吉井の脅迫写真と霧島のＭＰ３が同一犯の可能性がある、と言いたいわけだ」

「ああ、俺も明久の事を聞いていてそう思える」

「どうして？」

「そうじゃ、二人で納得しておらんと説明をしてくれんかの」

俺と坂本は確認をしながら、話していく中で弾は何かを考え込むような様子を見せる。

今は奴に聞くことじゃないか、と考えた俺は話してたのだが、木下と吉井から更に突っ込まれたのもあり、一度全員に説明をするこ

とにした。

ムッツリーニか？　大体の判断はつけてそうだな。

「まあ、説明をしておこうか、どうして俺と坂本が同一犯と思ったか、だな？」

「うむ」

「うん」

「第一に、吉井は入学式の時のセーラー服姿をカメラで撮られた覚えは無いんだろ？」

「ないよ、というかあったら、その人を追いかけてこれを処分させるさ！」

「だったら盗撮と言うことになる、それもお前をほぼ正面に入れて、しかも近くから撮影している以上は程々の腕は持っている可能性が高い」

「なるどの」

「うん」

俺が最初に疑問に思ったのはこれだ、セーラー服姿の吉井が何か

を追いかけるように走っている。
それなのだが、ほぼ被写体である吉井の姿は中央に位置しているにも拘らず、奴の目はカメラを向いていないのだ。
この時点で盗撮だと判断できるし、カメラの周囲と思われる近くには茂みのような場所も確認できる。
確実だろう。

「第二に、坂本のＭＰ３は確実に盗聴した坂本の言葉を無理矢理繋げたものだろうからな」
「そうだよね、じゃ無いとあんな不自然なものなんて出来ないだろうしね」

坂本の場合はもっと分りやすい、あれは間違いなく盗聴されていた坂本の言葉の数々の中で自分に必要なものを抽出、繋げただけのものだ。
それに霧島が機械オンチと言うのは、以前、本人からひょんなことで聞いた覚えがあるからな、これについては編集などを誰かに依頼していたのは確実だ。

「だからだ、盗撮と盗聴が得意な奴ということになるし、この学園にムッツリーニクラスともいえる奴が、早々いるとは思えない」

「……っ！？（ブンブンブン！！）」

「それにムッツリーニが犯人でないのも明らかだろうな」

「ムッツリーニなら確かに、こんな証拠物を残さずに一瞬で俺たちは決められていただろうからな」

「うん、それは間違いないね」

「……　二人とも失礼」

盗聴と盗撮、これらを実行できるような人材が、この学園に早々簡単にいるとは思いたくないが、ここで俺たちに証拠を気取られたのだから、ムッツリーニクラスではないことが幸いだろう。

ムッツリーニクラスであれば、ここで吉井と坂本は暢気に対策を練ることは出来なかっただろうしな。

それにムッツリーニが犯人でないのも明白だ、こいつならば脅迫の類を使えば、本人が気が付いた瞬間にはすべてが手遅れになっているのは確実だろうし、こいつは綱渡りのような人生を歩んでいるんだ、間違いなく自分からこういったことには突っ込まない。

だから確実に白だろう。

「だから、ムッツリーニと東城君には犯人捜しを協力して欲しいんだ、御礼は必ずするから！」

「そうだ、ムッツリーニ、東城！協力してくれ！このままでは！俺は！俺は！！」

必死、壮絶さ、なんと言うおうか、そんな様子を浮かべて言っている、そんな二人に俺とムッツリーニは互いに頷きを返しあう。

「……　協力する」

「分った、俺としても、こんな事をやる人間が分らんが、やっている奴がいると言うのは不快な状況だからな、協力しよう」

「協力してくれるか！！」

「本当にありがとう！！東城君！ムッツリーニ！！」

俺とムッツリーニの言葉を聞いて嬉しそうに言っている二人、弾の奴も言葉には出さないが協力するつもりなのだろう、奴の顔にもムッツリーニと似た色の表情が浮かんでいた。

それから俺たちは、予鈴がなったので教室へと戻ると、色々と調べ物を行うために携帯を使って早速、学園の裏サイトへとアクセスするのだった。

教室に戻ってＨＲの時間、俺たちは明日に迫った強化合宿の説明を西村先生から受けていた。

「さて今日のＨＲは明日から始まる合宿についての説明を行う、大体のことはしおりに書いてある通りだが、旅行に行くのではないからな着替えと勉強道具があれば十分だろう」

黒板に向かう西村先生、そんな中で俺はしおりに目を通していた。
ふむふむ、卯月高原か、中々洒落た避暑地で人気のあるところだな、車で四時間、電車とバスを乗りついで五時間近く掛かる場所だ。

「これから集合場所と時間を教えるのでしっかり聞いておくように、クラスごとによって集合場所と時間も違うからな」

その言葉を聞いて集中する様子を見せるクラスメイトたち、流石にこういった泊り込みの学校行事に参加できないと言うのは、奴らにとってもいやなようで真剣な様子を見せていた。
まあ、この学園であれば、普通にＡクラスやＢクラスは豪華な設備のバスで優雅に向かい、俺たちは西村先生が引率するだけと言う可能性が否定できない。

……　いや、それは無いかもしれないが……　ありえるかもしれない。

「良いかお前たち、他のクラスとは違って、我々Ｆクラスは十六時に現地集合だからな」

『『『『『案内すらないのかよ！！！！』』』』』

全員の言葉がシンクロする。
あんまりの扱いに全員の心は一つとなって涙を流しているのだった。

１７話　脅迫と婚約と（後書き）

次回、もしくは、その次辺りで一夏やちーちゃんたちが登場です！

……　再会予定時の状況が状況なので、弾にマジで命の危険があるのが難点です。

18話　電車と拷問と……（前書き）

今更ながら、グループ分けの一つに一夏、千冬、シャルロットを加えていたのを忘れていたことに気が付いた……　まあ、やまや酷い目にあってたから、ここで休暇みたいな感じにさせてあげるのも良いか。

１８話　電車と拷問と……

第１７問　強化合宿一日目の日誌を書きなさい。

五反田　弾の日誌

『駅に滑り込んでくる電車を見た時からワクワクしていて、自分がいつも使っている電車から見える景色とは全く違う景色に、凄く心が躍りました。自分が今住んでいる場所とは違う所にいく事に喜びと何か良い事でもありそうな予感に、クラスメイト達との思い出が作れそうな合宿、転校して初めての学校行事に高揚感を感じました』

教師のコメント

五反田君は転校してから始めての学校行事ですね、どうですか学校には慣れましたか？　吉井君や東城君たちといつも行動しているようですので、先生達は楽しい思い出が作れることを願っています。

東城　和人の答え

『バイクを流しながら合宿所へと向かう道すがら、ちょっと合宿所のある町に入って休憩して、ヘルメットを取って空気を吸い込んだときに、やはり自分の住み慣れたところではない場所に来たんだなぁ。とそう感じました。出会う店の人や商品に目が移りそうとなりましたが、楽しい思い出にしたい、そう思える光景でした』

教師のコメント

東城君は旅をすることが楽しく感じる性格のようですね、それに今までのようなどこかお友達にも一線を引いたような、そんな所が無くなり始めているので、楽しい思い出が出来ることを願ってますよ。

～バカとテストと霊能者～

～第１８話　電車と拷問と……～

今俺たちは合宿所に向かう為に電車に乗っている。
メンバーはいつものメンバーに和人が除かれた状態だ、最初こそ和人も電車で行くつもりだったんだがな、急に除霊の仕事が入った上に、それが夜明け近くまで掛かったからか彼は電車を諦めてバイクで向かうようだった。
鉄人、こと西村先生からの許可も貰っているので、問題は無いのだが和人の表情は電車で行けない事に残念がっている様子だった。

まあ、それは置いておくとしても、既に出発してから一時間が経過して、周囲の景色は緑が増えて、俺と和人が済んでいる場所よりも更に田舎の方へと進んでいく。

『貴女が次の色でイメージする異性を挙げなさい【?:緑　?:オレンジ　?:青】』

ふむ……　島田から聞こえてきたのは恐らく心理クイズか何かだろう、それを聞いていて俺はひっそりと考えていた。

緑はセシリアとラウラに箒
オレンジはシャルロット

青は一夏と鈴って所か……

これの答えはなんなんだろうな。

『坂本！窓を開けて！！！』

『捨てる気！？　僕を窓から捨てる気なの！？』

『窓からごみを捨てるなよ、島田』

『雄二。美波を止めてくれてありがとう、でも僕をナチュラルにごみ扱いしてないかい！？』

『大丈夫よ、ゴミじゃなくてクズだから』

『どうしよう。僕、ここまでひどい扱いを受けるのは久しぶりだよ』

『クズもきちんとクズカゴに捨てるべきだ』

『そして雄二はクズは否定しないんだね……』

呆れてしまうやり取りの数々、相変わらずだな。

「あいつらは……」
「まぁ、それが明久達と言うことじゃろう」
「だな」
「ちょっとわしはあっちに顔を出してくるぞい」
「おう」

そういって離れて行く秀吉。
俺も付いて行っても良かったのだが、残ったのには理由がある。

「大丈夫か？　ムッツリーニ」
「……　あまり大丈夫じゃない……」
「言ってくれたら酔い止めくらい渡したものを、何で言わなかったんだ？」
『緑は友達、オレンジは元気の源、青は……　ふむふむ、なるほどなぁ』
「……　忘れていた」

それはさっきから少しずつ顔色が悪くなり始めているムッツリーニが気になったからだ、どうやら乗り物酔いらしい。
今はかなり顔色が悪くなってしまっている。

それと同時に雄二たちの方から聞こえてくる言葉、これを聞いてもいたんだが……　俺の元気の源ってシャルロットだったのか？
青は……　雄二のあの表情を見たら嫌な予感がよぎる、まさか【恋人にしたい異性】とか言わないよな？

「全く、こいつを飲んどけ、ちょっとはマシになるだろう」

「……　感謝」

俺はもう遅いだろうが、薬を渡していた。
ムッツリーニはそれを水で流し込んで、飲むと目を閉じていた。

俺も目を閉じて眠ろうかな、なんて考えて眠る。

俺は肩を軽く叩かれる感触を感じて、目を開ける。

「どうかしたのか？　ムッツリーニ」

「……　そろそろお昼」

「お、もうそんな時間か、それに皆も準備は済ませているようだな」

ムッツリーニに起こされた俺は携帯で一度時刻を確認すれば１３時２０分、確かにいつもであれば昼食をとっくに済ませている時間帯だな。

皆もそれぞれ弁当や惣菜パンなどを取り出しているので、俺も自作の弁当を取り出していた。

「お昼でしたら……　皆さんの分も一緒に作ってきたんですが、どうでしょうか？」

嫌な予感がする。

姫路が弁当を取り出す仕草を見たら俺の頭の中に、あの悪夢が蘇る。

流し込まれる弁当の中身と、脳天まで一直線に駆け抜ける凄まじいエグ味としか表現できない味。
本当の三途の川というのはあんな場所なんだ、と思ってしまう状況も味わってしまった。

何しろおっぱいの大きな変な形のカマ持った死神いたし、ていうかあれってサボマイスタとか呼ばれている死神じゃないかね？　おっぱいに向かって飛び掛ったら弾幕で迎撃されて現実に戻されたが。

それはどうでも良いとして、まずはこの危機を回避せねば！！

「ひ、姫路！俺とムッツリーニはこっちの席だし、そっちの明久達にでも分けてやってくれ！！」

「……　準備はしてある……！」

「そ、そうじゃの！わしも弾とムッツリーニの席と同じじゃからな、遠慮させていただくとしよう！！！」

「そうですか……　残念です」

俺の言葉を聞いた明久の顔に【先手を打たれた！！】とでも表現できそうな色が浮かんでいることから、大方【皆でおかずを交換し合おうよ！】とか言うつもりだったのかもしれないな。
……　危なかった……

まあ、それからは明久の惣菜パンが雄二とムッツリーニの活躍で潰されて、姫路と島田の弁当を食べることになった。

「あ、二つに一つは辛子を入れてみたの」

「き、キミはバカかい！！？」

どっちから食うのかといわれたら、安全策とるよな。
島田の弁当から食べた明久は島田が仕掛けていたトラップに引っ掛かったようで、その場をのた打ち回っている。

というか、向こう側にだってそんな奴はいなかったぞ……　精々千冬さんが作ったお握りにワサビが入っていて俺と一夏が犠牲になったくらいだが、あの時はわざとじゃなくてセシリアと同じ様なミスみたいだったしな。

「明久、ある意味でこれはラッキーかもしれない」

「っ！？　そうか！！」

雄二が明久の方に手をおいて、何かを囁いている。

それを聞いて何かをひらめいた顔をした明久、まさか！？

「姫路さんお弁当全部貰うね！！！」

「ちょ！？　バカ！！明久！？」

俺が止める間もなく、明久は姫路の弁当を全て流し込んでいき、そのまま倒れる。

「明久ぁ！！」

「弾！東城が持っておったあの薬は持っておらんのか！？」

「あれは和人しかなおしている場所は分らないんだ！」

それから始まる阿鼻叫喚の地獄絵図、俺たちは明久に応急手当を行いながらそれからの時間が過ぎていくのだった。

和人に緊急連絡を取り、明久を旅館へと大急ぎで俺たちは運び込む。

「弾！吉井の容態はどうだ！？」

「和人か、急いで例の薬を！！」

「おう！待ってろ吉井！！」

俺達からの緊急連絡を受けた和人が部屋に駆け込んでくる。
その顔は珍しく焦燥に満ちており、奴が余程焦っているのが丸分りだった。

急いで薬を取り出して秀吉が用意した水と共に奴の体内に流し込む、だが、明久は全く反応を示さない、いや、まだ諦めてたまるか！！

「弾！ＡＥＤを持ってきたぞ！！」

「待っていたぞ雄二！」

薬を飲ませた後、心臓マッサージをする俺と気道を確保し人工呼吸をしている和人、おれ達は今必死で今できる応急措置を行っていた。

そこへ雄二が俺たちが待ちわびていたものを持ってくる。

そして、俺達は電気ショックで処置を行うと、明久の脈拍が正常に戻るのが分った。

「ふぅ……　なんとか蘇生出来たか」

「ああ、良かったよ」

安堵の溜息を漏らしている俺と和人、他の連中も同じ様に安心した様子を見せていることから、心配していたのだろう。

「う、うん……」

「明久！起きたのか！！良かった！電気ショックが効いた様だな……」

気が付いた明久に心底安心したようにＡＥＤを直す雄二の姿に、流石の明久の顔も引き攣っていた。
それから奴は周囲を見渡して状況を把握している様子だった。

「ここって……　合宿所？」

「ああ、そうだ。全く贅沢な所だよな文月学園が丸ごと買い取って、合宿所にしているんだとよ」

「まあ、旅館時代の設備の名残とかは残っているようだがな」

「この部屋にも浴衣とかあるしな」

状況を把握した明久はキョロキョロとしていたのをやめ、俺たちに尋ねてくる。
それから俺達は、この施設の説明を行っていく。
それに頷きを返しながら明久は聞いていたのだが、俺達の説明が終わるか終わらないかと言うタイミングで部屋の扉が開いた。

「おお！明久目が覚めたのか！お主が前世の出来事をうわ言で言い始めたときには、もうダメかと思ったのじゃ……」

秀吉だ、部屋に入ってから明久が目覚めていることに秀吉は、心の底から安心した様子を見せて胸をなでおろしていたのだが。

……　こいつって、本当に、男、だよな……？　向こう側で男装していた時のシャルロットと似た雰囲気を感じるのだけど……

気配とかそういったのは男性特有のもの……　どういう人間なんだ？

まあ良いか。

「心配してくれてありがとう。秀吉もこの部屋なんだね」

「うむ、後はムッツリーニも一緒じゃな、六人でこの部屋を使うみたいじゃ」

「でも、ムッツリーニはどこに行ったのかな？　覗きか盗撮かな……」

「クラスメイトに対してそんな言葉が出ること自体どうなんだろうな、和人」

「俺に聞くな」

ムッツリーニが不在な事に関して出てきた明久の言葉、常識では

計り知れない言葉を聞いた俺は和人に尋ねるのだが、奴からは頭痛を堪える表情でつれない言葉が返って来るだけだった。

「……　ただいま」

「あ、お帰りムッツリーニ」

「……　明久、無事で何より……　これで情報も無駄にならずに済む」

「情報？」

「俺と明久が、東城とお前に頼んだ件か早いな」

ムッツリーニも安心した様子を見せている。
やはり心配したんだろうな、まあ、あんな姿を見れば無理も無いか。

だけど奴は明久と雄二にとっては重要なことを言い始める。
それと同時におれ達全員の表情と様子が全て真剣なものへと代わっていく。

「昨日ムッツリーニと俺に弾の三人で校内を洗った結果、お前達の脅迫に使われていたと思われる盗聴器に、後は盗撮に使うカメラ類

の機材を発見した」

「一応は現時点での機能は全て無力化させたが、復旧は時間の問題だろうな」

「……　二人の手口と明久の写真撮影に使われたカメラの種類を考えた結果、昨日言っていた通り明久と雄二の犯人は確実に同一犯と断定できた」

そうなのだ、俺が驚かされたのが、この学校に仕掛けられている盗聴器と盗撮用と思われるカメラの量だったのだ。

流石に更衣室やトイレと言った場所には仕掛けられていなかったのだが、教室や廊下に屋上と言った主要な場所は全てにおいて機材の確認が出来た。

だけど、この会話に疑問を感じなくなっている俺は果たしてどうなんだろう？　向こう側でも盗撮とか盗聴とかされていた（とはいっても全て偽装という名の無力化をしていたがな）が、ここは『普通』の学校のはずだろ！？　なんて言いたくなる光景だったよ。

少なくとも前世で通っていた学校じゃあ、こんなこと無かったしな。

「そうなのか。やっぱ同一犯と完全に断定して行動した方が良いようだな、それにそんな真似が出来る奴が何人もいるとは思えないしな」

「それで、犯人はやっぱりまだ分らない？」

「……　すまない、力不足」

「いや、そんな、協力してくれるだけでもありがたいんだから頭を上げてよ、ムッツリーニ」

流石に昨日の今日では犯人の特定は出来ない。
俺達が機材の無力化を担当している間に、ムッツリーニに校内に網を張ってもらったんだが、やはり難しかったようだな。

「……　犯人はお尻に火傷の痕のある女子生徒ということしか分かってない」

「「「君（お前は）何を調べていたんだ！？」」」

思わず叫んでしまう内容をムッツリーニが言い出したから、綺麗に明久と和人の二人とユニゾンしてツッコミを入れてしまう。
それに動じた様子はないムッツリーニは、懐から小型録音機を取り出して前に出していた。

「……　昨日、校内全体に網を張った」

〈――――――――――　らっしゃい〉

再生ボタンを押して再生される音声、それはノイズ混じりで聞き取りづらいがかろうじて女性の声だということが分る。

「随分と音声が粗いね」

「校内全体に網を張ったんなら仕方が無いだろう」

〈……　雄二のプロポーズをまたお願い〉

更に再生された声を聞いた雄二の表情には絶望の色が浮かぶ。
そりゃそうだろう、明らかにこの喋り方は霧島だ、その上に運良く没収できたものが、また依頼されていると言うのだから。

〈おや、昨日のはどうしたんだい？〉
〈……　雄二にとられた、幾らでも出す、今度は完全なものをお願い〉
〈流石はお嬢様、上客だねぇ、毎度！きちんとした完全版を渡すよ、それじゃあ受け渡しは明日――――――　と言いたい所だけど、明日から強化合宿だからね、受け取りは月曜で良いかい？〉

〈……　構わない〉

「あ、危ねぇ……　強化合宿があってよかったぜ……」

「時間が延びただけだ、油断は出来んぞ、坂本」

「ああ」

これは相当にヤバイ会話だった。

霧島の依頼を受けたと言うことは、既に犯人の手には雄二の完全捏造の台詞を作れるだけの状態が揃っていると言う事なのだ。

雄二の顔が真っ青を通り越しているのも分かる所だ。

和人の言葉に真剣であり、尚且つ、はっきりと怒りに似た感情を浮かべている雄二、霧島の行動にも犯人の行動にも起こっているってところだな。

もしも俺も一夏にやられたらと思うと、ちょっとやりきれない感情が浮かぶしな。

「……　それで、こっちが犯人特定のヒントとなった会話」

〈――――――　相変わらず凄い写真撮影の技術ですね、これがバレたら大変じゃないんですか？〉

〈実の所一度母親にバレちまってね、お灸を尻に据えられたのさ…

…　だからさ今でもお尻に火傷の跡が残っているよ〉
〈それは、大変ですね〉
〈華の十代の乙女に酷いことをするさね、まあ、これが約束の写真だよ〉

それ以降は他愛も無い商談と雑談に似た話が続いていた。

「……　分ったのはこれだけ」

「今の会話で分かったのは、尻に火傷の痕のある女子ということだけだな」

「でも、お尻に火傷の痕があるといっても、スカートを捲っても分らないだろうし……」

「捕まえて脱がす以外にないな」

事情を知っていてもトンでもない会話だった。
事情を知らずに俺がこいつらを見てしまった場合、ある意味で同士と認めてしまいそうになるだろう。

……　主に、欲望関係の……

まあ、それはそうとして会話が続いていき、何故か秀吉が女子風

呂に入って確認すれば良いと言う会話になっていた。
だけど、それは無理な話だろうな、何しろ。

～合宿中の入浴について～
男子ＡＢＣクラス　２０：００～２１：００　大浴場（男）
男子ＤＥＦクラス　２１：００～２２：００　大浴場（男）
女子ＡＢＣクラス　２０：００～２１：００　大浴場（女）
女子ＤＥＦクラス　２１：００～２２：００　大浴場（女）
Ｆクラス　木下　秀吉　２１：００～２２：００　個室風呂？

「どうしてわしだけが個室風呂なのじゃ！？」

「やっぱりか……」

「雄二も納得しておるでないぞぃ！！！」

だけど、こいつらに何が有ったのか、あの西村先生が秀吉だけをこのような扱いにしたのには理由があるんだろう。
あのプールの時に何かあったのかもしれないな。

なんて男六人で、云々と唸っていると部屋の扉がけたたましい音共に開かれる。

凄い勢いで扉が開くと、入ってきたのは女子勢であり。
ぞろぞろと凄い剣幕で入ってくる。

「木下と五反田はこっちへ！！そっちのバカ四人は抵抗を止めなさい！！」

島田が窓と屋根裏に逃げ込もうとしている和人と明久たちの機制を制していた。
出切るな、島田！なんてアホなことを考えていたのだが、秀吉は女子たちが丁重に囲んでいる。

まさか、あいつ被害者扱いされているのか？　なんて考えた俺の前に秀吉と良く似た【女子】が姿を現した。

「初めまして、というべきね、五反田　弾くん？」

「ああ、初めまして、そういうそちらさんはどこのどなただ？」
「私は秀吉の双子の姉の木下　優子よ」
「それで、そのお姉さんが俺に何の用だ？」

俺の前に居るのは双子だけあって瓜二つといえる、優子と名乗った少女である。
彼女からは他の女子たちとは違いどうしてか、敵意と言うかそれに似た感情を感じない。
ただ彼女から感じるのは、静かにこちらを見定めるような瞳だけだった。

「貴方は転校して来たばかりで、姫路さんも島田さんも貴方はやっていない可能性が高いと言っていたわ、それにあの娘もね」
「本当にやってないし、明久達もやってないぞ」
「……　嘘は言っていないようね」

俺の瞳をじっと、じっと、見てくる優子と名乗った少女。
俺はそれを真正面から見返し、視線を逸らさずに言っていた内に

不意に彼女は表情を緩め、そう言っていた。

「ああ、嘘を言う必要を感じないからな」

「そうね……　貴方の言うことを信じるわ」

「それと、明久達を止めるか、せめて和人の方くらいは何とかしてやってくれないか？」

そういって指差した方向を優子が見れば、石畳で大昔の拷問をされているムッツリーニと明久に、アイアンクローやスタンガンによる制裁を受ける雄二と、大粒の涙を流している佐々木を見てオロオロしている和人たちの姿だった。

あ、和人の奴、霧島に雄二と同じような制裁と拷問が加えられてる。

優子はそれらを呆れ果てた表情になって見渡す。

「分ったわ……　幾らなんでも代表も姫路さん達もやりすぎだしね……　佐々木さんは勘違いが大きくなっちゃって感情が昂ぶってるんでしょ」

「じゃあ、頼む、俺がやると逆効果になるだろうしな」

「ええ」

それから優子は拷問している連中に近づいて行き、それぞれを説得、もしくは宥めたりして女子全員を宥めすかして、部屋を後にしていくのだった。

やっぱ、この学園は何かが……　ズレているな。

そう考えさせられるには、十分な出来事だった。

一方そのころ。

自分の部屋に帰った優子は、溜息をついていたのだが、彼女に黒く綺麗な髪をサイドポニーにした少女が近付いて来た。

「弾はなんて言ってた？　優子」

「やってないって言ってたわ、貴女も彼は確実にやってないって言ってたしね」

少女は優子に対して、ニコニコしながら問いかけていた。
彼女はそれに笑みを浮かべながら応じると、少女は更に嬉しそうな様子を浮かべていた。

「うん、弾はね、覗くんなら直接来るからねカメラとかを使うなんて絶対にありえないし」

「流石は幼馴染ね、直接覗かれた事あるの？」

「私は無いけど……　姉さんがね……」

「……　彼もおバカなのね」

「うん……　でも弾はね……　その後、姉さんに9分の9殺しの目に合わされていたけど」

「それって、ほぼ全殺しと同じじゃあ、ないの？」

「うーん、でも次の日にはピンピンしてたよ？」

「あの先生に、そんな目に合わされたっていうのに……　本当に彼って人間？」

常識って何だろう？　そう言いたくなる少女の言葉に、優子は頭を抱えて頭痛を堪えている様子だった。

それにニコニコとしている少女。

だが、少女は思う、思い人との再会のタイミングを。

（クスッ、弾、この騒動に便乗して直接女子風呂を除こうと考えたんなら……　クスックスクスクスクス……　楽しみにしててね）

なんて考えていた。

因みに、そのころ。

「ピィ！」

「どうしたのじゃ？　弾、変な悲鳴を上げたりして」

「い、いや、なんか濃厚な死の気配を感じて……（い、いい、いいいいいいいるわけ無いよねぇ！！一夏なんて！それに千冬さんの気

配に近いものも感じたけど、いるわけ無いよねぇ！！）」

なんて言って大勢の男子と共に女子風呂へと向かう弾が、懐かしい死の気配を感じていたのは、言うまでもない。

「フン……　私達に心配を掛けさせておいて、女子風呂覗きか……しっかりと教育と言うものをしてやらんとな」

「はい！いかなる理由があっても、女の子のお風呂を覗こうなんてことは絶対にいけないんです！！」

なんて言っている教育実習生扱いの新任教師二人もいた。

１８話　電車と拷問と……（後書き）

次回に一夏たちが登場します！

集団覗きは初日から原作とは違った展開になる予定です。

そして、和人の意外と言うかあまりにも酷い弱点も……

１９話　集団覗き開始！と思わぬ再会

今現在俺達は。

『うおぉぉぉぉー！！！障害は排除だー！！』
『邪魔者は全て抹殺！！』
『サーチ＆デース！！！』

などと叫ぶＦクラスの連中と共に、女子風呂を目指して突っ走っていた。

「一日目からだと貴様ら！？」

「見事に裏をかかれた様だな鉄人！！」

驚愕と言う感情を浮かべる西村先生、この先生がこの手の感情を表に出すのは珍しいのだろう。
雄二と明久やムッツリーニまでもが西村先生の表情を見てから、ちょっと嬉しそうな色を浮かべているからだ。

「それに五反田も東城までも、一体何を考えている！？」

「友人の為っすよ！！」

「嘘をつけぇ！！」

「こちらも右に同じです！！」

「……　ええぃ！！全員補習室送りにして、みっちりと補習を行ってやろう！！！」

俺たちを見て驚きともどうともいえない表情となる西村先生、それから彼は携帯を取り出しながら、Ｆクラスの連中を一人また一人と仕留めて行きながら呼び出しを行っているようだった。

「全教員に対して第一種戦闘体勢を指示！！至急ここに集まるように伝えてください！！教育実習生二人もです！！」

『了解しました！！』

「続いて、女子の中で志願していた者達にも召集を！！」

そういって西村先生は携帯を切り、俺たちを見据える。
彼の足元には既に仕留められたクラスメイトたちがいて、状況が悪い方向へと流れ始めているのが良く分る。

「東城に五反田、次は貴様らだ」

その西村先生の言葉と同時に俺と和人は互いに目を見合わせて頷きあう。
そうだ、俺達はここに何のために来ている！？

「「「「「試獣召喚（サモン）！！」」」」」

『Ｆクラス　東城　和人＆五反田　弾ＶＳ　Ａクラス担任　高橋洋子＆教育実習生　織斑　千冬＆山田　真耶
総合科目　５７０８点＆４０４８点　ＶＳ　８０９１点＆３３９１点＆３１２８点』

「「ん？」」

あれ？
俺と和人は召喚獣が現れた後、表示された名前に疑問の声が上が

る。
それもそうだ、西村先生が相手かと思えば、高橋先生と……　い、いいいいいるはずの無い人達の名前ががが！！！
そして俺の背中に、慣れ親しんだとてつもない威圧感を伴った気配を感じる。

「私達は二日ぶりだがお前にとっては数ヶ月ぶりらしいな、久しぶり、と言おうか？　五反田」
「ち、ちちちちちちち！千冬しゃん！？」
「お久しぶりですね？　五反田くん」
「や、山田先生まで……　ま、ままま……　まさか……」

俺の目の前に現れたのは【この世界】に居るはずの無い人達、千冬さんに山田先生だった。
周囲の連中は戦闘中だというのに、文句の付けようのない美女といえる二人を見て、歓声を上げていた。

『な、なんだあの美女二人は！？』
『……　あの教育実習生がいると言う情報は無かった……！！』
『それに、五反田に久しぶりと言っていたぞ！？』

『あの野郎！俺達と同じ存在だと考えていたのに、異端者だったと言うのか！？』
『異端を許すまじ！奴を裁け！！』

そして感じる、俺が一番恐れている事態が、そこにあることに……

「クスクスクス……　クスクスクス……」

「い、い、い……」

「なぁに？　弾？　私の名前、ちゃんと、呼んで欲しいな」

「い、いち、か……」

「くすっ、試獣召喚（サモン）」

『Ｆクラス　五反田　弾ＶＳ　Ａクラス　織斑　一夏
総合科目　４０４８点　ＶＳ　３１４８点』

何でこいつらがここにいるんだよ！？　と思うと同時に……　俺、家に帰ったら……　買ったばかりのＭＧのガンダム００作って、モン〇ンのクリアしてないクエストクリアするんだ。
なんて現実逃避を行っていた。

横では。

「む、ムチ……　ムチ…」

なんていって、顔を真っ青にして震えている和人がいた。
俺達、いや、俺って生きて帰れるの？
後、こんな状況になったのは今から数時間ほど前にさかのぼる。

～バカとテストと霊能者～
～第１９話　集団覗き開始！と思わぬ再会～

拷問に遭う事三十分、俺達はやって来た木下姉の口添えで全員が解放されたのだった。
その間、弾の奴は転校生だからと尋問に合うだけで済んだらしい。

「うぅ……　覗いたって証拠も無いのに、酷い目にあったよね」

「……　見つかるようなヘマはしないのに……」

「酷い拷問じゃったのぅ……　わしは一人だけ被害者側に立たされていたのは解せぬが」

などといっている吉井やムッツリーニ達、確かにあれは酷い拷問だった。
俺の方は泣き始めた佐々木を宥めていたら、突然霧島のアイアンクローを喰らった上にスタンガンを使われてまでの拷問をされたからだ。

「……　上等じゃねえか」

それまで返事の無かった坂本を吉井が気にして話し掛けようとしたと同時に、坂本のかなりの怒気が込められた声が部屋に響く。

「雄二、どうしたのさ？」

「話は簡単だ！あっちがその気なら、こっちは本当に覗いてやれば良い！！！」

「ゆ、雄二！？　正気か！落ち着くのじゃ！！」

トンでもないことを言い始めた。
本当に何を考えているんだ、このバカは。

「おい、雄二、霧島の裸が見たいなら霧島個人に頼んどけ」

「お、おおおおお、俺がいつ翔子の裸を見たいと言った！？」

「興味津々なの丸分りじゃねぇか」

ニヤニヤしながら言われた弾の言葉に、坂本は動揺が丸分りと言った様子で答えていた。

本当にこいつは素直になっていない（人の事をいえません）よな。

「話が進まんぞい、雄二よ、お前が覗こうと思ったのは例の件でかの？」

「ああ、流石に女子風呂を除いて確認しようとするのはやり過ぎだと考えたんでな、最終手段にとって置こうと考えてたんだが、あっちが先にそういうことをするんなら関係ない！！」

そういっている坂本、こいつは霧島に拷問をされたこともあるが、女子が全員俺達の言うことを信じなかった。

それもあるのだろう。

恐らくと言うか確実に、俺達を信じていたと言うか、そんな感じだったのは木下姉くらいなものだったから。

「……　さっきのカメラとマイクは、犯人が使用していたものと同一のもの」

「なんだと、それは確かなのか？　ムッツリーニ」

「……　間違いない」

「それは嬉しい誤算じゃな」

「ああ、決まりと言うことだな」

「……（コクリ）」

そう言って目の前でとんでもない話が纏まっていく。
向こう側でも、こんな話し合いが持たれたこと等無かった。
もたれた瞬間に俺達男は全員が全殺しすら生温い目に合うのは確実だったからだ、ここでも同じだと思うんだが、やっぱあんなことをされたと言う怒りがこいつらを突き動かしているんだろう。

だけど、唯一話についていけていない人間がいた。

「つまり、どういうことなの？」

こいつは……　流石の俺も予想外と言えた。
というか木下の言った言葉で分りそうなものなんだが、そう俺は考えながら吉井に向き直ると口を開いた。

「吉井、前にお前と坂本の手口が同じと言っていたな」

「うん」

「そして、ムッツリーニが発見したのは、その犯人が使っていたのと同じだろ？」

「うんうん」

「そして犯人の特徴は『お尻に火傷の痕がある女子生徒』だ、と言うことはつまり？」

「そうか！！女子風呂を覗いてから、お尻に火傷の痕のある女子を見つけたら解決なんだ！！」

「そういうことだ」

その言葉と同時に納得した様子を見せる吉井。
やっとか、なんて思いながら俺は一つ溜息を着いていた。

「すまんな東城、だがこれで迷う余地は無いだろう」

「うん！そうだね！やってやろう！！」

「おう！」

「でもさ、雄二はどうして霧島さんのことになると、やる気を凄く見せるのかな？」

などと言っている吉井と坂本、坂本が俺に謝罪に似た言葉を言っていたが、気にするなと言うジェスチャーを送って遮る。
それから吉井は坂本に対して問いかけているのだが、奴の顔は何処か悲壮感を漂わせる表情になっていた。

いや……　何があったんだよ、と言ってしまいたくなる表情であった。

「まあな、俺はこの前の休日に翔子によって、いつものようにスタンガンを押し付けられたと同時にクスリを使われて意識を失ったんだ」

「待て雄二、その前提条件がおかし過ぎる」

「そうだよね」

いきなり頭を抱えたくなるような話が飛び出してきた。
というか、いつもの様にとか言っていたから、既に何度かあったのだろう。

弾の奴がちょっと顔が青くなっているんだが、似た経験があるのか？

「とにかくだ、俺が気が着いた時には家に拉致されていたのさ」
「ふぅん、その時にご両親に挨拶させられようとしたとか？」
「いや、監獄みたいなお前の部屋が用意されていた、とかか？」
「……　何で分ったんだ、弾」
「お、お、おい……？」

多分弾は、冗談のつもりで言ったのだろう。
と言うか冗談であってくれと言わんばかりの表情だ、だが、坂本からの返事は長い沈黙の果ての認める返事だった。
これには流石に俺達全員がドン引きだったようで、顔を引き攣らせていた。

だけど、ここで扉が再び開く音が聞こえた。

扉が開いて入ってきたのは、Ｆクラスの面々で一様に気怠そうな表情でいる。
というか、こいつら一体？

「五反田、なんだ話って？」

口々に面倒くさいとか、言っているのだが、弾はニヤリ、と不敵な笑みを浮かべて坂本を見る。
これを見た坂本は同じ様な笑みを浮かべていた。
こいつら一体何を分かり合ったんだ？

「さて、これは雄二からの提案なんだが、お前等、女子風呂覗きに興味はあるか？」

『『『『『『『『『『『『『詳しく聞かせろ！！！！』』』』』』』』』』』』』

うわ……　なんて嫌な団結力なのだろうか……

弾の言葉を聞いたクラスメイト達は一斉に目を輝かせると、聞き入る体勢を整える。

これを見た弾の表情には『計算通り』といった色の感情が浮かび、弾の狙いなど読めている坂本にも同じ色の感情が浮かぶ。

「実は俺達は風呂覗きを計画してはいなかったんだが、愚劣な女子共はやっていない上に俺達は潔白にも関わらずに、証拠もないのに覗きを計画していたと捏造し拷問したのだ！！」

『それで！』

「俺は報復の為、覗きを決意した！！」

『おお！』

『流石は代表……！』

坂本の言葉にツッコミが入ることも無く、賛同の声が上がることにツッコミを入れたくなる。

こいつらは……　こんなことだから彼女なんて出来ないんだよ。

だが、まあ、狙いは読めてきた。

俺達が今から行おうとしているのは間違いなく犯罪に属する行為だ、それを【木を隠すなら森の中】と言うべき感じで俺達の行動を

集団の中に溶け込ませようと言うのだろう。
この学園じたいが、世論に弱い、という弱点を持っているからな、余計に効果的といえるだろう。

それに坂本が巻き込もうと考えているのは学園全体だろう、まあ、詳しいことは明日にでも確認すれば良いか。
なんて考えている間にも坂本の演説は続く。

「そこでだ！今日俺達が、こんな目にあったことから教師部隊が警備に付いているだろう！！お前らには警備部隊の排除を願いたい！！報酬はその後に待つ理想郷の光景だ！！どうだ！？」

『『『

『『『『『『『『『了解！！！』』』』』』』』』』』』

「いいか！俺達の目標はただ一つ！理想郷への到達だ！！途中に何があろうとも四肢に神気を込め、目的地まで突き進め！神魔必滅・見敵必殺！ここが我らの行く末の分水嶺だと思え！！」

『『『『『『『『『『『『『『おおおおおおおおおおおお！！』』』』』』』』』』』』

そんで持って和人から俺に代わるんだが、俺の前には……　ち、ちち、千冬しゃんに、山田先生と、い、いいいいいいい、一夏がそこにいた！！！
どうしてこいつらここにいるんだよ！？

「ど、どうして……？」

「どうしてここに居るのか、それを聞きたいのか？　五反田」

俺は千冬さんの言葉に一も二も無く頷いていた。
多分だが、効果音としてはブンブンブンブン！！とか出ているだろう。

それを見ていた目が笑っていない山田先生が、表面は綺麗な笑顔を見せながら口を開いた。

「親切な三柱の方々が居ましたので、その方々が連れてきてくださったんです」

「というか！誰！？」

『お前さんが好き勝手しつつも、それを抑制する奴が居ると面白そうやしなー』

『ええ、こんな楽しみしかないことを、私たちが見逃すはずはありませんよ』

『和人君の事も楽しみだけど、こっちも楽しそうなのねー』

山田先生が言った理由と、頭の中に響いた凄まじいまでの神々しさを持った2つの声と、神々しさの欠片も無い1つの声、誰が原因なんだよ！？　というか、あの世界で和人の奴をこちらに戻したとか言う神と魔の最高指導者達だってのか（一柱は違います）！？

くそぅ！！！！

これか

「これから自分が好き勝手に出来そうだったのに、って言いたそうな顔だね」

「……　ソンナコトオモッテナイヨ？」

「ふ～ん、じゃ、覚悟良い？」

「……　デキテナイッテイッタラ？」

「知らない♪」

目の前には、冷たいオーラを放つ一夏に、指を鳴らしながら怒りのオーラを放つ千冬さん、絶対零度といえるオーラを放つ山田先生達の姿。

い、生きて帰れるはずは無い……！

「に、西村先生！「西村先生、こいつへの指導は私と山田先生で担当しても宜しいでしょうか？」ぜひ貴方に補習をして欲しいです！！」

「では、任せましょう、良い経験になりそうですし……　それに貴女方の方が慣れていそうですしな、五反田、罰はきっちと受けなければならんぞ」

「イヤァァァァァ！！！！！！」

「フッ、お前にとっては久しぶりの指導というわけか、腕が鳴るな……　準備は良いか？　一夏に山田君」

「うん！」

「はいっ！」

くっ！こいつぁ！逃げられない！！多分だが先に召喚獣勝負になるだろう！俺の方は腕輪の起動実験の際に動かしていた分のアドバンテージがあるだろうが、そんなものなど子の三人を相手にしたら物の役にも立たない！！
俺が最初は優勢に攻めても、すぐに慣れてやり返してくる。
点数さえ三人が協力すれば圧倒的なんだ、どうしようもない！
俺は、頼みの綱とばかりに和人を見れば、既に戦いは始まっているんだが、明らかに様子がおかしい。
和人の奴の動きがおかしすぎるんだ、どういうことだ？　なんて考えた瞬間に和人の召喚獣は、ムチを振るう高橋の召喚獣に倒されていた。
それと同時にプルプル震えて股間というか男のシンボルを押さえながら倒れる和人。
え？

「か、和人！？　どうしたんだ！！！」
「東城君！？　どうかしたんですか！？」
「東城！？　一体何が……！高橋女史ぃ！！テメエ！！召喚獣で生徒に体罰を振るいやがったって言うのかよ！？」
「東城君！？　一体何があったって言うんだい！？　それにまさか

高橋先生！？　僕達は確かに人として間違った事をしていると思います！だけど！こんなのは間違ってる！！」

「わ、私は東城君本体には何もしては居ません！」

阿鼻叫喚、そういうべき状況へと変化する。
流石の一夏達もこの光景には停止している様子であり、泡を吹き、白目を向いて気絶している和人の姿に、呆然としている様子だった。

そして、異常に気が付いて駆け寄ってくる雄二と明久の言葉に対して、慌てて弁明する高橋先生、彼女の言っていることは本当というか、彼女の召喚獣自体和人の召喚獣しか攻撃していないのに、どうして和人の奴は倒れたんだ？
まさか……　これが、こいつの弱点？　なんていやな弱点というか、ムチで男のシンボルを打たれた経験でもあるのかよ！？

「東城！何があった！？」

「鉄人！とにかく医療班を呼んで治療を！！」

「おう！待っていろ東城！」

ビクンッ！ビクンッ！と明らかにヤバイ痙攣をしている和人を、雄二が西村先生に依頼して医療班に引き渡していた。

だけど、本当に、なんでムチでこんなことになったんだ？

「さてと、弾」

「覚悟は」

「良いですかぁ？」

和人が運ばれていき、他の連中も次々と補習室送りとなる中、俺の後ろには三人の夜叉が迫っていた。

他の連中はと言えば、触らぬ神に祟りなし、を貫くようで俺を気にするものは皆無だった。

そんな恐ろしい雰囲気の中、俺はなるべく夜叉達を刺激しないように、こう言うしかなかった。

「お」

「「「お？」」」

「オテヤワラカニオネガイシマス」

「フッ」

「クスッ」

「アハッ」

そ、そ、そそそそそそそそ、その後のことは……　お、おおおおおおおお、思い出せない！思い出せない！思い出したくない！！イヤアアア

１９話　集団覗き開始！と思わぬ再会（後書き）

和人くんの弱点ですが、こうなった理由は……　ＧＳ美神、ムチ、ゴーレム、股間、と言えば分かってしまう方には、分かってしまう弱点かもしれません。

因みに、弾にはサ〇デー系の漫画の原作知識はなかったりします。

２０話　合宿二日目と更なる参戦

第２０問　合宿二日目の日誌を書きなさい。

東城　和人の日誌

『迫り来るムチ、打ち据えられる自分の股間、過去に自分が味合わされた痛みがフラッシュバックし、何がなんだか分からない内に朝を迎えていました。勉強に関しては弾と共に吉井や木下達に苦手分野を教えたりしつつ、自分にとっても誰かに勉強を教えると言うことがプラスになるのだな、と思える一日でした』

教師のコメント

こ、これは……　東城君は幼い頃に虐待を受けていた経験があるというのでしょうか？　今でもそれに苦しめられていると言うのであれば、先生達に何時でも相談してください。微力ではありましょうが力になりたいと考えています。それに勉強に関してはどうやら吉井君たちと過ごせて充実した時間を送れたようですね、その調子でこれからの残りの日数も楽しく過ごしてください。

五反田　弾の日誌

『まさか、ここに居るとは思わなかった人達と再会したことで、かなりの驚きに包まれました。けれども勉強の方もきちんと進める事が出来ましたので、充実した一日となりました』

教師のコメント
　彼女たちのことですね。彼女たちもキミとの再会には心を躍らせていたようですので、サプライズは成功したということでしょう。それに勉強に関してもうまく行ったようなので、何よりです。

～バカとテストと霊能者～
～第２０話　合宿二日目と更なる参戦～

ここは僕たちが泊まっている部屋、だけどここには。

「……」（真っ白になって干からびている弾）

「……　ムチ……　ムチはいやだぁー！！！」

まるでもなにも干からびてミイラ（ノクターン的な展開はありませんでした）みたいな感じになって断末魔の表情を浮かべている弾と、うなされて股間と言うか、僕達にも付いているモノを押さえてのた打ち回っている東城君の姿があった。

二人とも僕達が部屋に帰ってきてから一時間近く後で鉄人が連れてきたんだけど、連れて来られた時にはこんな感じになっていた。

東城君は別れる前のあの様子を見たら、こうなった理由なんて見当が付くんだけど、弾はどうしてなんだろうか。

まさか、あの三人の女性とイロイロな事を！？　くぅ……！！

「ついに異端者になってしまったというのかぃ？　弾……！」

「お主は一体何を言っておるのじゃ……」

あ、因みに今部屋にいるのは僕と秀吉だね、雄二とムッツリーニの二人は朝食を食べに行っているんだけど、二人がこんな調子だから誰かが付いていた方が良い、なんて考えてまずは僕と秀吉が二人

で食べてきてから、雄二たちと交代した形だね。

「う、うううぅ……」

「弾！気が付いたのかの！？」

だけど、ここで状況が変化した。
弾が目を覚ましたんだ、僕は有り余る怒りと憎しみをこの拳に込めて打ち出す！

「チェストォー！！！」

「うぉ！？　なんだいきなり！」

「そうじゃぞ明久！何をやっておるのじゃ！？」

チィ！避けやがったこの野郎！！
僕は伸びきっていた腕を戻すと、更に力を込めながら腰を沈めて、踏み込みを深めて右ストレートを打ち出した。

「なんか動きがよくないかお前！？」

「黙れ！この異端者めぇ！！昨日の夜あの女性三人とイロイロと良いコトをしたんだろう！！？」

「ふっざけんな！！連れて行かれてから俺は死んだ方がマシな目に合わされたんだぞ！！」

「それこそだよ！僕は鉄人との補習を選択するくらいなら、絶対にあの人達を選ぶ！！」

「それこそ何も知らない奴の言える台詞だぞテメエ！！」

そんなやり取りをやっていたんだけど、弾に一瞬の隙を付かれて僕は両腕を捻りあげられる。

「僕の腕がぁ！ねじ切れる……！」

「ほい」

「こぺ！！」

腕を捻り上げられてから弾の抜けるような掛け声が聞こえたと同時に、僕の意識は途絶えてしまった。

ちくしょう……！異端者を抹殺するという使命がぁ！！

それから俺は目覚めた時に何故か錯乱していた明久を布団に寝かせる。

「どうして俺が異端扱いされなきゃならんのだ」

「先程までのお主の様子を見ていたら、そういう方面でお仕置きをされたと思われても無理は無かろうて……」

「どんな姿だったんだよ？」

「……　目覚める瞬間までは干からびているミイラのようじゃったと言うのに、目が覚める直前には元のお主の姿に戻っておったしの……」

「なんだ、いつものことか」

「……　人間を辞めておらぬか？　お主は」

「失礼な！」

上記の秀吉の言葉を聞いても俺にとっては、いつもの事としか思えなかった。
向こう側じゃあ、血まみれになってモザイクが掛けられた状態から復活したこともあったし。

まあ、こっちの奴らには刺激が強いとも思うんだが、普段のＦクラスの連中を見ても俺と同じ様な連中が多いとも思うんだが、そこはどうなんだろ。
なんて考えても声には出さない、言った所で更にこの学園の異常性を自覚してしまうだろうからな。

「それよりも、腹はどうじゃ？　空いてはおらぬか？」

「いや、食欲は今は無いな……　だけど、和人の奴はやっぱりか？」

「うむ……」

気を取り直したらしい秀吉は、俺に対して心配そうにそういっているんだが、それよりも未だに股間と言うか、男の象徴を抑えての

たうっている和人の方が気になっていた。
こいつって、まさか一晩中こうしてたんじゃあるまいな？　なんて思ってしまう光景だった。

「東城がこうなっておる原因をお主は知らぬのか？」

「まあな、こいつとの付き合いって何気に中二くらいの頃からだったけど、こんな弱点が出来そうなことなんて無かったなぁ……」

「そうか……」

なんて会話をし続けていった俺達は、戻ってきた雄二たちから現状の話を聞いていたときに、和人の意識が戻ったのだが、それからすぐに授業が始まるのでいそいそと教室へと向かうのだった。
目覚めたときには、顔が青かったんだが、すぐに元に戻ってくれたのは僥倖だったな。

強化合宿二日目の今日であるのだが、俺達ＦクラスはＡクラスとの合同授業が行われている教室にいた。

「……　雄二。一緒に勉強できてとても嬉しい」

「待て翔子、当然のように膝の上に座ろうとするなクラスの連中が臨戦態勢を整えている」

「弾、私が分からない所を教えてくれるかな？」

「一夏、胸を強調して密着しようとするんじゃない。離れるんだ俺にも雄二と同じ惨劇が訪れてしまう」

「クスッ、私ね……　最近Ｄになったんだよ？」

「なん……　だと……　佐々木と同レベ「ねえ、その女（ひと）ってダレ？　どうして、その女（ひと）のサイズを知っているのカナ？」な、ナンデモナイヨ？」

目の前には坂本の膝に座ろうとして抑えられる霧島、二人が楽に腰掛けられる椅子に座っていながら、弾に密着しようとしている織斑（さっき自己紹介した）がいたんだが、織斑の奴は弾の耳元で何かを囁き、これを聞いた弾はというとちょっと鼻の下を伸ばしてい

るな。

だが、弾の方はなんか地雷を踏んだらしい、突如として織斑の瞳に危険な色が浮かび上がり、弾の頚動脈付近に人差し指の爪が当てられる。憐れ、弾の奴は今や狩られようとする子羊の如き存在となってしまっているようだ、せめて極楽に迷い無く逝ける様に祈りだけは捧げておいてやろう。

だが、こんな彼らを見たＦクラスの面々が無論のこと黙っているはずはない。

既に全員が上履きを脱ぎ、ＦＦＦ団特有の黒装束に身を包んでいる者も居る。

まあ、それはそれとして今日の授業についてはほぼ自由と来て、その上に質問があれば周囲の生徒や先生に声を掛けてＯＫというのだが、やっぱり。

「授業内容はさしずめ、モチベーションの向上と言う訳か」

「モチベーションの向上？　それが授業をやらないことと何の関係があるの？　東城君」

「東城の言葉通りのことで、簡単なことだ明久」

「？」

「つまりだ、ＦクラスはＡクラスを見て『こうなりたい』と思わせ

て、Ａクラスは Ｆクラスを見て『こうはなるまい』と思わせるところに真価があるのさ」

「そうだ、今回の授業そのものがメンタル面の強化に比重がおかれているからな、授業なんてさして問題にならないのさ」

「なるほどぉ」

俺と坂本の説明に深く納得した様子を見せる吉井だが、こればっかりは思う。

せめてお前の頭でもここまでの答えに辿り付いて欲しい……　と、坂本も同じ事を考えているような雰囲気があるんだが、黙っていることにしているようだ。

「あれ、代表や織斑さん達はここにいるんだね、じゃあ私もここにしようかな」

「あんたは確か……　工藤だったか？」

「正解だよ♪　東城君、それに吉井君たちも久しぶり」

俺達に近付いてきたのは、あの試召戦争でムッツリーニに大差で負けた少女である工藤だった。

既に何らかの釈明は行われたのか、落ち着きを取り戻した織斑の隣で、誰？　という表情を見せる弾に気が付いたのか、彼女は一度ウィンクをした後、ニッとした笑みを浮かべる。
彼女が持つボーイッシュな雰囲気とあいまって、それは見事に似合った仕草になっている。

「それじゃあ、ちょうど良いし、自己紹介を改めてさせてもらうね。Ａクラスの工藤　愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から７８・５６・７９、特技はパンチラで好きな食べ物はシュークリームだよ」

「……　女子の自己紹介で混ざるはずの無い項目が二つもあったことについては、スルーさせてもらうとしよう」

やっぱこいつも何かがズレた奴だったか。
またもや俺は頭を抱えたい衝動に駆られてくる……　やっぱバ〇ア〇ンとかを持ってきておくべきだった。

……　頭が痛くなってくる。

だが、ここで何故か腕を組んでムッツリとしていた面の弾がいきなり重々しく口を開いた。

「ふむ、パンチラと言っていたが工藤……」

「なにかな？　五反田くん」

「やっぱ俺の名前は知ってるか」

「そうだね、一夏から聞いてるよ、君の事をイロイロとね♪」

「まあ、詳細を聞くのはよしとくよ……　だがそのスカートの中に穿いているスパッツが無ければ、完璧だったと言う所だな」

「！？　気が付いていたって言うのかい……　！？」

「まだまだ甘いな、ムッツリーニも気が付いていたぞ」

「ムッツリーニ君まで！？」

弾の言葉にはよほどの衝撃を受けたらしい工藤は、倒れこむようにしていたのだが、そこへ弾は追撃をかけていた。
だが、奴は気が付いていないのだろうか？　隣に夜叉と言うか、鬼神と言うか、そんな感じの存在が生まれていることに……

「弾、えっちなのは自重しようね」

「は、ハい……」

ハイライトが消え去った瞳と平坦な声で弾へと告げる織斑、それにしても弾の奴は幸せものと言うことかね？　奴が他の女に目移りすると、こんなに嫉妬してくれる幼馴染が居るようだし。

自分の顔が、ニヤリ、と言う形をとるのが良く分る。

佐々木の事で世話になった礼をこれから『たっぷり』としてやらんとなぁ。

なんて事を考えていた。

「ひ、酷いよ工藤さん！僕をこんなにドキドキさせたって言うのに、嘘だったのかい！？」

「あははは。騙して悪かったね吉井君、でも最近僕が凝ってるのはこれかな」

吉井の言葉を聞いてからから笑う彼女が取り出したのは、ＭＰ３プレイヤーにも似た小型の機械であった。

これって、まさか。

「……　小型録音機」

「うん、それにね、これってとても面白いんだよ、例えば――――」

ふむ、小型録音機か、やっぱこういうのを持っていることでもＡクラスに所属していることが分るな。
恐らくは授業中の音声を記録して、家で復習の際に使用するのだろう。
俺も利光もタイプは違うけど、同様の機能を持っている奴を使っているから間違いないな。

だけど、工藤の奴は何を弄っているんだろうか、俺の霊感が『吉井の身に、これから惨劇が起きる』と言っているんだが、何が起きるんだ。

〈工藤さん、僕、こんなにドキドキ、してるんだ、やらない〉

「わあぁぁぁああ！！僕はこんなこと言っていないから！！変な風に再生しないでよ！？」

「ね、とても面白いでしょ？」

再生されている内容は今までの吉井の言葉を繋ぎ合わせたものであり、坂本のものと同様にかなりの不自然さに溢れていた。
だけど、猪突猛進と呼べる連中は騙されるだろう、なんて考えていたんだが、吉井にとっての惨劇と言うのは既に背後に忍び寄っていたらしい。

工藤の問い掛けは、吉井の背後に立つ姫路と島田に向けられていたのだから。

「……　ええ。本当に、本っ当に面白いわ」

「……　本当に、面白い言葉ですね」

ここでと言うか、既に吉井は気が付いていたらしい。
大量の冷や汗を流しながら姫路達のほうを振り向いていた。

「瑞希、あれを運ぶのを手伝ってもらえる？」

「ええ、分りました美波ちゃん、喜んでお手伝いいたします」

氷の微笑を称えた姫路と島田は教室を後する。
恐らくと言うか確実にあの石畳を持ってくるつもりだろう。
それから木下が入ってくると、吉井の奴と何か会話をしている様子だった。

「工藤、あれは明久の言葉を合成したものなのか？」

「うん。そうだよ」

そんな吉井たちを横目に見ながらの真剣な表情をしている坂本の質問、多分だが工藤を犯人かと疑っているんだろう。

だけど、勘だが、こいつは犯人じゃないな。

犯人だとすれば動機が分らん、Ａクラスとの戦いの際と今日の二回しかあっていないが、彼女がこのようなことをするような人間には見えないし、何よりも犯人の候補が『同性愛者』と言う観点で見れば、この女は確実に白と言えるだろう。

そのことを指摘しようにもここではまずいと考えた俺は、黙っていることに決めたんだが、吉井と坂本の奴はアイコンタクトを交わして何かを確認しあっていた。

何をする気なのやら。

「工藤さん」

「なにかな？　吉井君」

「キミのお尻を僕に生で見せてくれると、僕はとても嬉しいんだ！！」

……

「明久、お前は勇者だな」

「へ？　どういう意味なのさ、弾」

「弾の言う通りだな……　録音機を前にそんな事を叫ぶとはな」

「……　まったくだ」

吉井との接し方を考えた方が良いだろう。
幾ら犯人を確認する為とはいえ、こんな事をいえるとは。

弾と坂本の表情が勇者を見る目へと変わり、織斑や他の女子たちの目が侮蔑と言う感情が篭った視線へと変わる。

「ぷっ、あはははは！吉井君、僕の胸が小さいから気を遣ってくれたんだね、でも、さっきの言葉は面白そうだしせっかくだから録音させてもらったよ」

「！？」

ここでようやく、やってもうた、と言う感情を浮かべる吉井だが、手遅れにも程がある。
そして、無常にも工藤はカチリと再生ボタンを押していた。

〈キミのお尻を僕に生で見せてくれると、僕はとても嬉しいんだ！！〉

「合成されていない分のダメージが大きすぎるぅ！！！い、今すぐにそれを消してください！！お願いします！！工藤さん！」

「あっはははは！！吉井君て本当に面白いね」

〈お願いします！！工藤さん！お尻を僕に生で見せて、ください！！〉

「うわぁぁあああ！！！僕がドンドン変態になっていく気がするぅ！！！」

「いや、変態そのものだろ」

坂本の冷静な突っ込みの声に激しく同意したい。
何しろ吉井の言った言葉は元から変態的というしかなかったしな。
直後に俺達の背後から凄まじい殺気が襲いかかる。
どうやら彼女たちが戻ってきたようだ。

「……　今の何かしらね？　瑞希」

「……　なんでしょうね？　美波ちゃん」

彼女を確認したと同時に冷や汗が大量に噴出し、顔といわずに制服もびしょ濡れになっている吉井。

今更自分の発言の危険さに気が付いたようだ。

「まさか、ただでさえ問題クラスとして目を付けられているって言うのに、自分からこれ以上の問題を起こそうとしたバカがいるのかしら」

「そうだとしたら大変ですね、そんな人がいるというのならしっかりとお仕置きをしないといけませんね」

絶対零度といえる雰囲気で石畳を用意している島田に姫路、既に準備は万端と言うわけか。

吉井の肘間接は既に極められて歩かされて、石畳の方へと向かっていた。

「……　工藤　愛子、おふざけが過ぎる」
「そうだ工藤、ムッツリーニの言う通りだな」
「ムッツリーニ！弾！助けてくれるの！？」
「……　まかせておけ」
「ああ、うまくやってやるさ」

吉井は救世主を見る様な様子で二人を見やるんだが、こいつらが助ける気が無いのは明白だ。
何しろ二人の瞳の奥には面白いものを眺める色しかなかったんだし。

まあ、吉井の奴は弾とムッツリーニを信用することに決めたらしく、彼女らに対して弁明に走っていた。

「姫路さんに美波、良く聞いて欲しい、僕が言いたかったのは〈雄二に〉〈生でお尻を見せて〉って言いたかったんだ〈雄二だけ〉じゃなくて〈男子全員の〉〈お尻〉も〈生で〉〈見せて〉って！弾にムッツリーニィィィィィィ！！！！！！前半はムッツリーニで後半は弾の仕業だな！？　うまくやるって僕を上手く追い込むことなの！？」

「……　工藤　愛子、お前はまだまだ甘い」

「右に同じくだ」

「くっ！流石はムッツリーニくん……！それに五反田君も、これほどの実力者だったなんて……！」

まるでライバルのように睨み合う三人だが、その横では島田と姫路が打ちひしがれるようにしていることから、如何にこいつらが人の話を聞いていないというか、Ｆクラスという環境に適応できる人種であったのかと言うのも良く分る。

「二人ともどうして僕をすぐに同性愛者扱いするの！？　僕はそんな人なんかじゃ」

ない、と言いたかったのだろうが。突然教室の扉が開いてＤクラスの清水が入ってくる。

どうして覚えているのかって（１３話参照）あんなインパクトの強い奴を忘れるわけが無いだろう。

まあ、その後は清水が同性愛者をバカにするなとか云々言っていたのだが、利光の様子がちょいとおかしかったのは気のせいだろうか、どうしてか背筋が寒くなって、尻の辺りに鈍い痛みが走ったんだけど。

まあ、俺はそんな光景を横目で見ながらある人物に対してメールを打っていた。

そして再びバトンは変わって俺に移る。
まあ、さっきまでBクラス代表の根本とか言うあの女装趣味の男と対談をしていたんだよな。

参加していたのは俺と和人の二人だけ、理由としては俺達だけで行動すれば幾らでも教師たちの目を誤魔化せることと、スピードが重要なあの場では他の連中がいると邪魔になりそうな感じになっていたからだ。

俺達の奇行はさすがに彼の元にも届いていたようであり、最初は呆れていたんだが事情をある程度説明した所から、こちらの話を真剣に聞く体勢に入ってくれたのはありがたかった。
だが、おかげでBクラスからの協力を取り付けられたのはありがたい、これをまだ雄二たちには話してないんだけどな。

それに。

「和人があの調子じゃあ、今日は参加できないだろうしな……」

「そう、じゃのう……」

「東城の奴は相当にムチがダメみたいだな」

「……　股間を抑えていたから無理も無い」

何故ならば開いた押入れに『頭隠して尻隠さず』の体勢で震えながら、隠れているつもりの和人がいるからだ、ただし、あれを抑えているのはデフォルトだけどな。

さっき覗きの話を開始して高橋女史の所に差し掛かった瞬間にこれだ。

これには流石の雄二達も困った様子を浮かべて、苦笑いを浮かべるしかない様子だった。

「あんな様子の東城君を参加させるのは可哀想だし、でも僕達男子の最大戦力でもあるし」

「それについては考えてある」

「弾、そいつを話してくれ」

明久の懸念と言うか、不安がる気持ちは当たり前のものだろう。
間違いなく和人は二年と言う学年中で最強と呼べる奴だからだ、学年次席である利光でさえ総合科目３７００点台が現界なのに、唯一５０００点オーバーと言う規格外の点数を叩きだす人間だ、この点数を持って挑めば学年主席である霧島も圧倒できる。

だからこそ、昨日の様子を見ていて考えていたことが一つある。
雄二に促されて、俺は一つ頷いて説明を開始する。

「俺が考えたのは、あのままの和人を無理矢理前線に出す方が危険と考えたからだ」

「……　だろうな、昨日の様子を見る限り高橋女史に出てこられたら、東城の奴はあっさりと終わる」

「ああ、その後に待つのは味方である俺達男子の士気の低下、敵である女子は士気が一気に上昇する」

「だな、はっきり言っちまえば、そっちの方が手が付けられなくなる、勢いづいて調子に乗った女子に俺達は一挙に制圧されて終わりだ」

「じゃのう……　それに東城はＡクラス代表に勝っておるからの、ネームバリューとしては最高じゃ」

「そうだ、それらの最大の懸念材料があるが、ここで発想を一旦逆転させる」

「というと？」

「あえて出撃させないのさ」

「そうか、なるほどなぁ」

「どういう意味じゃ？」

最後の俺の言葉に納得してにやりとした笑みを浮かべる雄二だったが、秀吉は今一つかめなかったらしく、疑問を投げかけてきていた。

ムッツリーニの奴も納得した様子を見せていたから、こいつも分っているんだろうが、明久だけは最初から今一つ理解していない様子だった。

……　後で雄二に説明させよう。

まあ、とにかく残りを説明する為、俺はまた頷いて口を開いていく。

「つまり、あえて出撃させないことで敵に誤認させるのさ、和人が後詰め戦力、もしくは別働隊として動いている、とな」

「なるほどのぅ……　そうすれば女子や教員達は東城が来るかも知れぬ、という疑心暗鬼に囚われるから戦力の温存、もしくは」

「徹底防戦による攻撃戦線の縮小も考えられるのさ」

「だが、東城の護衛はどうする？　このままでは間違いなくやられるぞ？」

「それは俺が付くさ」

「それしかないか」

この作戦というかなんだが、これの最大の問題点は和人の状況だ、和人は間違いなく戦えないからな、その間をぬって間違いなく女子達が奇襲をかけてくる。

それの間和人が討たれない様にしないといけないわけだ、これにも問題は存在している。

護衛だ、戦えて、しかも場合によっては大量の女子を相手取っても勝てる人物が付かなくてはならない。

この中で適任といえるのは、俺か保健体育に限定すれば、ムッツリーニも該当できるが、ムッツリーニだと間違いなくそれ以外の強化で勝負を挑まれるだろうから、ムッツリーニは除外されるだろう。

それに他の理由もある。

「俺はFクラスに入ってから日が浅いからな、連携を邪魔してから

返って集団戦では足手纏いになりかねない」

「だから、ほとんど個人戦と言えるここにいるってわけか」

「そうだ、それにまだ俺の点数自体は全体に知られていないはずだから、Ｆクラスの更なるダークホースとしてのインパクトも強めることが出来るし、お前らもやりやすくはなるだろう？」

「だな、俺達もお前らの動きをそれっぽく臭わせれば、教師舞台の分散と高得点者かそれに通じる連中の分散も狙えるな」

「……　動きの偽装も徹底すれば、女子部隊の各個撃破も狙える」

これらの理由が一番のものだ、まあ、動きを偽装して部屋にいれば漫画やゲームがのんびりできる！なんて考えもあるが、まあ良いだろう。

どちらにせよ和人の弱点を何とかする為にも、最終日辺りでは本当に実働部隊として動いた方がよいだろうな。

「後もう一つ知らせがあるぞ、雄二」

「なんだ？」

「Ｂクラスとの協力を取り付けた、今の代表は完全にクラスの連中と信頼関係を築いていたからな、確実に戦力となってくれるはずだ」

「おま……！何時の間に！？」

「ついさっきだ、合流とかはお前の判断とタイミングに任せるとさ」

「ああ、任せておけ！朗報だぞそれは！」

Bクラス参戦の報せには流石の雄二も喜びを隠せない様子でいた。
まあ、最初からFクラス全体を巻き込んでいたしな、これから先はほとんど全てのクラスを巻き込むのが奴の最終目的だろうからな。

これからは奴に交渉は任せるとして、雄二たちは時間となったので出撃していくのだった。

部屋に俺と和人を残して。

それから時間にして三十分ほど経ったくらいだろうかね、俺達の

部屋の扉が開かれて、高橋先生に竹内先生の二人が入ってくる。
どうやら俺達の居所の確認のようだ。
部屋に入ると同時に召喚フィールドが展開されて、彼女たちの召喚獣が顕現し俺達を牽制する様子を見せていた。

「やっぱり高橋先生がこちらに来ましたか」

「ええ、坂本君の言う通りでしたね」

「む、むむむむむむむむ……　ムチィ……！！！！」

「「「……」」」

高橋先生の召喚獣が顕れた事に敏感にも気が付いたんだろう、和人の体の震えがヤバい事になっていた。
俺達はこんな様子を見ていて一様に沈黙するしかなかったんだが、高橋先生が何を思ったのか、自分の召喚獣を和人の下へと向ける。

その後のことは、うん、簡単に言えば、高橋先生は音が和人に良く聞こえるようにムチを振るって床に叩き付ける、それを聞いた和人は普段では絶対に上げない悲鳴を上げて、それ何十回か繰り返されたくらいで和人マジ泣きし始める。
高橋先生竹内先生よりやりすぎたと怒られて、部屋の外へと追い

出される。
竹内先生がなんと慰めようとするものの、奴は落ち着くこともなく、教師部隊の撤収指示が出た為に高橋先生たちは退散。
その後、俺が呼んだ佐々木が和人を慰めて、奴は落ち着く。

といったのがダイジェストだ、え、俺は止めなかったのかって？
というか、和人の奴がここまでの反応を見せたのがな、意外すぎて動けなかったというのが正解だ。
まあ、佐々木の結構ある胸に埋められて泣き止む和人の奴は、幸せそうだったから良かったのかね？

なんて考えていた。

２０話　合宿二日目と更なる参戦（後書き）

今回は先生二人の出番はなしでした。
生徒とは違う点がここでは裏目に……　そして、次回辺りに今現在
根本君がどういう扱いを受けているのか、それが明らかとなります。

21話　決意と更なる参戦と

強化合宿三日目の日誌を書きなさい。

土屋　康太の日誌
『前略（坂本雄二に続く）』

教師のコメント
今日はリレー形式ですか、次から次へと良く思いつくものです。

坂本　雄二の日誌
『そして翔子が浴衣の帯を緩めようとした、俺はそれを手で押さえると思い留まる様に説得しようとしたが、ふと気が付けば、左横では明久が島田に、右横では弾が織斑、俺の頭の側では東城が佐々木にそれぞれ迫られており、特に弾の奴は唇を（五反田　弾へ続く）』

教師のコメント
こ、ここで切ると言うのでしょうか？　き、君たちの身に一体何があったんですか？　ともあれ続くようなので続きを見てみます。

五反田　弾の日誌
『俺の体に馬乗りになっているのは、慣れ親しんだ彼女の温もり、久しぶりに俺と会えて触れ合えると言う嬉しさからか、彼女は感極

まったように涙目になっていて俺は、そんな彼女の様子に目を奪われていた、祖父さんに言われた、女は魔物、と言う言葉をここで味わったのだが、和人の方ではなにやら複雑な様子になっているようだった（東城　和人に続く）』

教師のコメント
　五反田くんと織斑さんは再会できて本来の関係に戻れたようですね、これからはきちんと彼女を大切にしてあげなくてはいけませんよ。

東城　和人の日誌
『目の前にはどうしてか大粒の涙を瞳に浮かべているあっちゃんの姿、彼女がこんな様子を見せること、それ事態に心当たりの無い俺は動転していたのだが、いきなり俺の視界を彼女の顔が……（吉井　明久に続く）』

教師のコメント
　ふ、再びここで切りますか……　では、吉井君の日誌を見て見ましょう。

吉井　明久の日誌
『全略』

教師のコメント
　ここまで引っ張っておいて、このオチは無いでしょう。

～バカとテストと霊能者～
～第２１話　決意と更なる参戦と～

翌朝。
爽やかな朝の日差しを感じながら俺は、ウトウトとまどろみに身を任せていた。
このまま二度寝したい、なんて考えてより深い眠りに付こうとした瞬間に。

「まさかの夢オチ！？　がっかりだよ！ちくしょう！！」

「明久……　何だよ、大声出して」

明久の奴に邪魔をされた。
どうも良い夢を現実と勘違いしていたらしい、夢から目が覚めてがっかりだったのは分るんだが、せめて声位は押さえてほしい。
なんてやってたら明久は体こそ起こしていないが、こちらが起きたことに気が付いたらしい。

「あ、ゴメン弾、起しちゃったみたいで」

「まあ、もうすぐ起床時間だったからな、大丈夫なんだが……　明久」

「な、なに？」

そう謝ってくる明久の方を見た俺は、ちょっと顔が引き攣るのがわかる。
こいつらって、噂の通りの関係だったってのか？　そう言いたくなる光景があったのだから。

いや、違うだろうけれど、教えなければいけないかね、なんて考えた俺は真剣な声で明久を呼び、奴は嫌な予感を感じているようだ。
だが、俺が教えようとした瞬間に、それは自分からその存在をアピールしてしまうのだった。

朝っぱらから、血なんぞ見たくもないんだがなぁ。

「うぅん……」

「……」

「男同士なんていう大惨事になる前に、そのゴリラをどかすか、自分が離れるかした方が良いぞ」

「うん、そうするよ、起きろやコラァ！！雄二ぃ！！」

「ぐふぅあ！？」

俺が指摘する前に明久は背中に乗っている雄二に気が付いたようだ、奴の表情は絶望というなの感情に染まり切っている。
それから明久は怒りの形相を浮かべて、雄二を布団の外へと蹴り出していた。

「むぅ……？　なんじゃ？」

「んだよ……　朝っぱらから…」

そういって起きだす和人と秀吉、ムッツリーニも同じく起きたようである、最初三人は状況が把握出来ていなかった様子だが、すぐに状況を把握したらしい。

「どうやら、また雄二は人の布団の中で寝ておったようじゃの」

「秀吉、また、ってどういうこと？」

「いや、雄二は寝相が大層悪いようでの、明け方にはわしの布団の中に――――って明久花瓶を持って振り上げてどうするつもりなのじゃ！？」

「落ち着け明久！！流石にそれはシャレにならんぞ！！」

「僕を放してくれ弾！！この男の耳からドス黒い血が流れるまで殴り続ける！！！」

「なにやってんだよ！吉井！？」

秀吉の言葉が彼の中の何かを刺激したらしく、明久は窓際にあっ

た花瓶を持つと雄二への頭に振り落とす体勢を一瞬で整える。
って言うか速いぞおぃ！？　何をやっているんだと戸惑う間も惜しい俺は明久の後ろに回って奴を羽交い絞めにして、事態に気が付いた和人も俺に加勢して明久を前後で押さえ込もうとしているんだが、何でこんなに力が強いんだよコイツ！？

なんて言っていると扉が開く音が聞こえた。

「おいお前ら！起床時間だ、ぞ……？」

「死ね雄二！今すぐに死んで侘びるんだ！それがイヤなら法廷に出てくるんだ！！」

「なんだ朝から明久がキテるぞ！？　持病か！？」

「とにかく落ち着くのじゃ明久！」

「雄二！とにかく逃げるか明久の言う通りにするかしろ！！こいつの力が強すぎるんだよ！」

「とにかく落ち着け吉井！！西村先生！こいつを押さえるのを手伝ってください！！」

「……！（コクコク！）」

「……　お前達は朝から何をやっているんだ…」

最後には全員で明久を取り押さえていたのだが、やっぱ力が強かったよ。
どうして嫉妬と言う感情だけで、こうまで強くなれるんだよ！こいつらって！

それから鉄人、こと西村先生に落ち付かされた明久を含めた俺達は食堂にて朝食をとっていた。
無論のこと、昨晩のことに関しての報告会も兼ねていたりする。

「雄二に東城君、昨日妙なことを言われたよ」

「ん？　なんだ？」

「何を言われた？」

昨晩のことを報告している中で、明久の奴が和人と雄二を見ながらそういっていた。
にしても、何を言われたんだ？

「僕は工藤さんと戦うことになったんだけどね、その彼女から、脱衣所にまだ仕掛けられているカメラが一台残ってる、って言われたんだ」

「それは本当か？　明久」

「その話が本当なら、カメラの確保さえ出来れば犯人の絞込みも容易くなるな」

明久が言い出したのは犯人に繋がる重要な証言だった。
これを聞いた和人と雄二の箸が止まり、明久を真剣な表情で見ていた。

「やっぱり怪しいよね、工藤さんが犯人なんじゃないのかな？」

「いや、違うだろうな」

「そうだな、東城の言う通りだろう」

「え、どうして？」

和人と雄二の言葉には俺もそう思うな、何しろ奴の行動には矛盾もあるし、実際に彼女が犯人であるとするならば、言うはずの無い一言だろうしな。

「わしも雄二や東城たちと同意見じゃな、犯人ならばわざわざ怪しまれるようなことを言うのは考えにくいしのぅ」

「他にも言えるぞ、奴が実際に犯人であるとするならば、昨日の授業中における行動も不自然だろうしな」

「弾の言う通りだ、駆動がもしも犯人ならば昨日の時点であのボイスレコーダーを見せる必要もないわけだ、その点からでも奴が犯人ではないことは窺えるし、何より奴は」

「奴は？」

俺の言葉を補足して、さらに付け足していくのだが、和人は最後の所で溜めを作って真剣な表情をしている。

全員が固唾を呑んで見ている中で、重々しく和人は口を開いた。

「ノンケだろうが」

「なるほど！！！」

っ！水も食い物も口の中に入れずにいて正解だった！

まさかあの和人からこんな言葉が出てくるとは！？　因みにこれは雄二も同じ様子なようで、何かに耐えるような表情をしているから、笑いを堪えていると言うか和人の予想を超えた言葉に動揺しているのは間違いないだろう。

まあ、それは置いておいて、俺達は明久も納得したことだし、続きに戻るのだった。

「まあ、脱衣所にカメラが仕掛けられていると言うことは、やはり」

「……　確認するしかない」

「やっぱりそれしかないか」

そう、続きに戻ったとは言っても特に気にする必要は無い、俺達に取ってやることといえば、やはりこの覗きを継続して行くしか道が無いのだから。

「だけど、工藤の情報はありがたいな」

「え、どういうこと？　東城君」

「明久、それを工藤しか知らないということは、脱衣所の中を既に盗撮されていると言うことなんだ、それを確保できて中身を見れたら、入浴もせずに妙な行動をしている女子がいないかどうかの確認も取れるしな」

「……　隠し場所ならば五秒で見つける自身がある、確保自体も十秒以内に行える自信もある」

流石はムッツリーニ……　変態技能に関しては俺でさえも敵わない人間だ……　やはりエロに関することでコイツだけは絶対に敵に回したくは無いな。

「だけどさ、本当にそんなカメラがあるかどうかも怪しいよ？」

「それについては問題ないさ、俺達が拷問されたあの夜に簡単にカメラが発見されたこと事態がおかしいんだ、俺やお前の脅迫の手口を考えて、あれほどに盗聴や盗撮に長けた人間が簡単に発見される位置に隠すなんて考えにくい、それを考えると――――――」

「……　二段構え」

「そうだ、最初のカメラは囮で本命が今現在も脱衣所で撮影を続けているってわけだ」

「用意周到じゃな」

やっぱ改めて思うが、今回の一件の犯人の用意周到さとある種の異常性というか、なんと言うか。

女子風呂の盗撮と言う話題なのに、犯人が同じ女子生徒というのだから、それからも窺えるだろうな。

というか、なんて手の込んだ事を仕掛けてくる犯人だよ、それに時間外に確認をしようにもできないしな、何しろ。

「じゃあ、お風呂の時間を避けてとりに行けば良いんじゃ「無理だな」え、どういうこと？　弾？」

「……　時間外は厳重に施錠されている」

「と言うわけだ、初日のカメラ騒ぎと今までの俺達の覗き騒ぎが影響しているだろうな」

「僕達の行動が全部、裏目に出てるってことだね」

「そういうことだ」

そうなのだ、時間外においては女子風呂の脱衣所は厳重に施錠されており、女子であっても理由があったとしても入れないと言う状況なのだからな。

まあ、つまるところ。

「諦めて、今までと同じ方法をとるしかないってことだね」

「そのようじゃな」

まあ、格好つけて言っているんだが、やっぱ凄い会話だよなぁ。

「さてと、明久、昨日の反省会だ、敗因はなんだったと思う？」

「うーん、やっぱり弾と東城君の不参加と女子が大量の戦力を出し

てきたって所かなぁ」

それから始まる昨日の反省会の内容なんだが、やっぱ女子は大量の戦力をこちらに当ててきたらしい。

もしもだが、戦力そのものが初日と同じものであるならば間違いなく勝っていただろう、布施先生には実際にFクラス総員でかかり圧勝しており、他の先生達も同じ様に競り勝っていたからだ。

「……　敵側には工藤　愛子もいた」

相当悔しそうな様子で告げるムッツリーニ、余程邪魔されたのが腹に据えかねたんだろうな。

普段であれば絶対に見せないくらいの調子だし。

それに工藤が出てきていたということは、間違いなくAクラスの連中が出張ってきていたと言うことでもある……　昨日部屋に居て良かったぁ……

「お前の考えとしては、更なる戦力の増強といったところか？　坂本」

「ああ東城、お前の言う通りだ、Bクラスも参加していた状況下で

の敗北の一番の理由は質も伴った形での物量が敵が上回っていたからだ」

「だから、こちらも同様に物量を増して対抗する、と言うことか？」

明久達の言葉を考えるに参加していた敵の物量、Ａクラスを含めて３～４クラスが参加していたのは間違いないだろうな。

そんな中でＢとＦクラスのみで参加した、こいつらの単純に二倍の物量で持って蹂躙された形にもなるだろうし。

だが、普通であれば常道と言える作戦なんだが、明久は違和感を感じている様子だった。

和人から聞いた雄二は、複雑な策略を練るのが得意と聞いたからな、それと比べて力押しのパワーゲームと言えるこんな作戦を立てることに違和感があるんだろう。

「む？　明久、どうかしたのかの？」

「うーん。なんかさ、的の物量が多いから僕達も同じ様に増強して対応って言う考え方事態が、いつもの僕たちらしくないなって思ってさ……」

明久の言葉には、雄二も和人も感心したように頷いていて、コイツがこんな風に頭を使って物を言ってきたのが、素直に感心できた

んだろう。

「ほぅ、明久も頭が回るようになってきたな、その通りだ、今回の作戦は戦力増強だけが目的じゃないさ、いや、もう一つの方が重要度は大きい」

「やっぱりな、目的としては俺達全員の保身、と言った所だろうな」

「そうだな、東城の言う通りだ」

「え、僕達の、保身？」

戦力増強のいとはやっぱりそこに重点が置かれているか、と言うか一番重要だろうな。

何しろ俺達のやっていることは、一般的に見れば犯罪行為だ、それから身を守る為にはひとつしかない。

「今現在俺達のやっていることは、世間一般から見れば立派な犯罪行為だ、未遂で終わっている分だけ大した問題になっていないが、成功したとしても犯人を発見できない場合、俺達だけ処分されるだけなのがオチだ」

「だから、それを避けるためのメンバーの増強だろう、俺達の数が増えれば教師たちは参加した人間達のリストアップは事実上不可能

となる」
「でも、それだと僕達は処分を免れないのは確実じゃない、面は割れてるだろうし」
「それも問題は無いだろう、雄二？」
「おう」

明久の疑問も尤もと言うか、当然のものだろうな。
だけどこれにだけは策と言うか、回避策だけは十分すぎるくらいにある。

何しろ、俺の転入と言うかそういったことも山吹色のお菓子を出すことで、簡単に済んだという裏事情もあるからな。
それにこの学校自体が試験校だ、それも【全世界から注目を浴びている】と言う向こう側のＩＳ学園にも似た状況。

ならば取れる方法は一つ。

「この学校は世界中が注目している試験校だ、こういった不祥事が起こった際には取れる手段なんて限られている、このこと自体を揉み消すか、キッチリと関わった人間全員を処罰するか、このどちらかしかとれないんだからな、半端に関わった人間を処分するなんてマイナス要素を増やす事は出来ん」

「それにこの現時点で既に前者の選択は取れん、Ｆクラスだけじゃなく、Ｂクラスまでもが参加していることだ、最低クラスと上位クラスが参加している状況下、この時点でＦクラスのみを裁けば、世間に対して、同じ事をした優秀クラスは手心を加えて見逃し、最低クラスだけを徹底的に罰するなんていう良いバッシング対象を世間に与える結果になるしな」

この学園の特性であるが、同時に世間からは非難の対象ともなっている【成績によるクラス間の扱いの差】についても利用できるのだ。

ただでさえもＡクラスよりしたのクラスの扱いで、非難を受けているこの状況下でこんな騒ぎを起こした主犯格のＦクラスのみを処罰すれば、優秀なクラスはどんなことをやっても良い、なんていう間違った認識を世間に与えるだけじゃなく、内部にも良い影響なんて与えないのは明白だ。

だからこその戦力増強と言う所だろう。

「なるほど、流石は雄二に東城君、二人に汚いことを考えさせたら、右に出るものはいないね」

「知略に富んでいるといえ」

「姦計と行動力に溢れていると言え」

「和人、それは明久の言っていたことと一緒だから」

というか、和人の言ったことは明久の言ったことと一緒で思わずツッコミを入れてしまったんだが、まあ、それから秀吉が俺達の話を軌道修正をかける様に口を開いた。

「ふむ、ならば今日は協力者の確保を重点に活動するわけじゃな？」

「ああ。幸い全クラスが合同授業の上に、ほとんど自習みたいなものだしな、こっちとしては好都合だな」

「そうだね、でも、Ｂクラスは仲間だから他のクラス行くんだよね？　どのクラスから交渉に入るの？」

「当然Ａクラスだが、東城、お前に任せても良いか？」

「ああ、それが適任と言う所だろう、任せておけ」

とまあ、方針が固まった俺達は朝食を再開したんだが、明久の奴は幸せそうな顔をして食べてやがるな……

あんな風に嬉しそうに食うから、普段の弁当もついつい分けちまうんだが、やっぱこいつの生活を改めさせる為にも今度からは心を鬼にした方が良いのだろうかね？

なんて考えるのだった。

先程島田を出汁に使って抜け出した雄二たちを追って、西村先生が教室を後にした。
それから織斑先生が教室の監督官として入ってきて、俺達の元へと近付いてくる。

「どういうつもりだ？　五反田」

「何のことっすか？」

「昨日のことだ、お前は参加しなかったからな、何を企んでいる？」

疑われてーら。
まあ当然かね、再会したタイミングがタイミングだしな。
その間に和人にアイコンタクトを行い、利光の説得に向かわせる

と俺は織斑先生と向き合っていた。

さてと、ちょっち時間を稼がないとな。

「別に【俺は】何も企んではいないっすよ、ただ、理想郷を見たいだ、け……」

「へぇ、そうなんだぁ……　弾、理由なんてなくて本当にお風呂を覗きたいんだね……」

「お前が理由も無くこのようなことをするわけは無いと思っていたが、本当にそれを行おうとしているのか？」

やばい、俺の命がライブで危険だ。

俺の言葉を聞いた瞬間に顕れる凄まじい殺気を纏った一夏と、危険レベルへと移行した千冬さん。

こ、言葉を間違えた瞬間、俺の命は霞と消えてしまう！？

「ま、まあ、表面上というかそんなところではそういうところですね」

「……　言えない理由がある、そういうことか？」

「……　弾……」

「さあ、どうでしょうね？　普通の状況であるならば、覗きに精を出したいところでしょうけどね」

やっぱりこの二人は気が付いていたか、俺は絶対と言うか知り合い、それも俺を武力で鎮圧できる人以外は覗かないと決意しているのを、この二人は理解しているからな。

冷静に考えたときに余計に俺の行動の不自然さに気が付いてしまったんだろう。

だけど、本当の理由ばっかりは言えないな。

あいつらのプライベートに関わることだし、何より言って良い理由なんて何もない。

断固として本来の理由を言わないと言う様子を見せた俺に、千冬さんは察したようで複雑な表情を見せ、一夏はというと哀しげに顔を伏せているのだった。

「では、私は監督に戻るとしよう、もうじき山田君も来るからな、問題だけは起こしてくれるなよ？」

「うぃっす」

気を取り直したように教卓へと上がっていく千冬さん、教卓についたと同時に扉が開いて山田先生も入ってきたからな、言っていたことは本当なんだろう。
でも、この二人の担当教科って、なんだろう？
ＩＳ学園での担当教科は二人ともＩＳに関することで、通常の教化はほとんど関わってなかった気がするんだけどなぁ。

「弾、理由は本当に言ってくれないの？」
「まあ、なぁ、これが俺だけの問題ならいっても良いんだがな、俺の問題じゃないからな、理由なんぞ言えんさ」
「そ、っか……」
「ったく」

悲しげに伏せている顔をより悲しそうに歪めて俺にそう言っている一夏、そんな彼女に俺は隣の椅子をぽんぽんと叩くと、座れ、と合図を送る。
それに気が付いた一夏は、何故か筆記用具も一緒に持ってきていたので、座ると俺は一夏の頭をクシャクシャと撫でていた。
「か、髪が乱れるよぅ……」

「まあ、なんだ……　今は授業中だからな、分からないことあれば俺が教えてやるよ、それに久しぶりに二人で一緒に勉強出来そうだしな」

「……っ！？　うん！！」

「めったに出来ない経験だし、楽しめよ……　世界を移動しているんだしさ……　それに俺はお前が笑っている方が、まあ、良いんだよ」

「ふぇ、えぅっ、だ、弾？……　で、でも、ここでなら、皆の邪魔は絶対に入らないし、でも、姉さんや山田先生たちがいるのは予想外だったけど……　エへへへへ」

俺ってやっぱり甘いのかねぇ？　一夏にだけは落ち込ませるようなことをしてしまったら、こんな風にフォローをしてしまうんだよなぁ。

俺の言葉を聞いた一夏は最初こそ驚いた様子を見せたが、何かを小声で言った後で、嬉しそうに微笑んでいるのだった。

まあ、教卓から千冬さんの凄まじい視線が降り注いでいたし、山田先生は不満そうにこっちを見ていたけどネ！！

それから時間が経って今は、恒例の出撃前ブリーフィングの時間。
Ａクラスの説得？　失敗してしまったけどなにか？

「結局手を貸してくれたのは、ＤとＥクラスだけじゃったな」
「仕方が無いだろう、Ｃクラスはあの女が代表を務めるクラスの上に、Ａクラスは東城と弾の説得でも首を縦に振ってはくれなかったんだ」
「だけど、その二クラスが手を貸してくれたことで、俺達の戦力は四クラス分だ、昨日の女子連合に匹敵しているんじゃないのか？」
「だな」

まあ、抜け出す際に島田を出しに使って抜け出したこいつらは、キッチリとＤとＥクラスの協力を取り付けてきていたようだ。

「さてと、ムッツリーニ、全クラスに作戦開始場所と集合場所は伝えてあるな？」

「……　問題ない」

そういってやり取りを行う二人の姿を見て、俺も口を開こうとした瞬間、扉が凄まじい勢いで開く。

「吉井！坂本！東城！大変だ！！」

「須川君？　どうしたの？」

「作戦が読まれた！全クラスが食堂や廊下で女子の部隊に奇襲を受けて各個撃破をされている！！」

「なに！？」

やっぱりか！！昨日の戦闘報告を聞けば霧島も前線に出てきていたと聞いた！！奴に雄二の考えを読まれたか！！？

「……　情報が漏洩することはありえない！」

苦虫を噛み潰した様子のムッツリーニ、当然だろう。
奴の情報の秘匿能力は俺でさえも習いたい部類のものだ、奴から情報が漏れるのはまずありえない。

「くっ、翔子か……」

「それしか考えられんだろう」

「ああ、迷っている暇は無い！総員出撃だ！！」

「「「「「おう！！！」」」」」

事は一刻を争うこの状況下、俺達は須川も含めて七人で飛び出す、雄二は俺と和人まで飛び出してきたことに驚きの様子を見せるのだが、すぐにその表情から疑問は消えていた。
なぜなら。

『このスケベども！！大人しく縄に付きなさい！！』
『覗き出来るなんて思わないことね！！』
『くそぉ！！どうしてこんな所に女子がいるんだよ！？』
『知るかよ！とにかく迎撃だ！！』

既にあちらこちらで戦闘が始まり、次々と仲間となっている男子が討ち取られている状況が展開されているからだ。
かなりの人数が徒党を組んだ女子によって制圧されたようであり、俺は近くにいた男子の一人に急いで駆け寄る。

『Dクラス　小野寺　優子VS　Fクラス　朝倉　正弘　五反田弾
科学　116点VS　44点　564点』

「へ？」

「終わりだ！」

「そ、そんな！どうしてFクラスの転入生がこんな点数を！？　きゃあああ！！！」

急いで召喚獣を召喚、襲っていた女子を撃退すると、呆然としていた朝倉は俺を確認すると安心した様子を見せた。

「すまん！五反田、助かった！！」

「いや、とにかく指示を出せ！雄二に須川！このままでは全員がやられるぞ！！」

「おう！すまん弾！！全員聞け！！とにかく一点突破でここを突っ切れ！！俺の後に続け！！」

そう言って俺は未だに呆然としている須川と雄二に檄を飛ばすと、彼らは正気に返った様子で、全員に指示を出していく。

それから全員の突破を確認した俺と和人は、一番後ろにいてそのまま立ち止まる。

「！？　東城君に弾！！なにをしてるんだよ！！」

「明久！お前達は先に行け！！ここは俺と和人で抑える！！！」

「そうだ吉井！ここはお前達が踏ん張るべき所だ！俺達がお前らの背中の安全を守ってやる！！」

「と、東城君、弾……！」

そう、立ち止まった理由は挟み撃ちを防ぐ為だ、幸いこの下は大浴場のある階だ、ということはここから女子を通さなければあいつらは挟み撃ちに会うこともないってことだ！！

だが、明久の奴はいつまでも行こうとしない、俺と和人を残すこ

とに迷いがあるのだろう。

だが、この事態に気が付いた雄二が声を張り上げる。

「明久！」

「ゆ、雄二……」

「弾と東城の思いを踏み躙るんじゃねぇ！！」

「っ！？」

「こうなった俺達には進むしかないんだ！！早くこっちへ来やがれぇ！！」

「そうだ吉井！俺と弾はここでお前らのための壁となる覚悟は決めている！！」

「行け！明久！俺達に構うな！！」

「……　うぅ、うわあああああ！！！」

叫んで涙を流して走り去っていく明久、こんな状況だからこそ、仲間を見捨てる選択肢をとらざるをえない自分に嫌気がさすのだろう。

だが、俺達を見た女子たちには余裕という色が浮かんでいる。

『ふん、相手はAクラス代表を圧倒できる人間とAクラス級の人間でも』

『これだけの人数で囲めば……！』

『私たちを抑えるなんて思わないことね！』

なんて言っているのだが、俺と和人の表情には不敵な笑みしか浮かんでいなかった。

そうさ、俺達には切り札ってもんがあるのさ！

「和人、ムチの恐怖症はどうだ？」

「昨日高橋先生に攻められてからかな、本人を前にしなければ平気だ、想像や音程度では今日の俺は止まらんさ！」

「上等だ！それに俺とお前ならば」

「やれるさ、俺達が協力し合うんだからな！！」

そう言って俺達は、それぞれの利き腕に腕輪を嵌め、決意する。

これの全能力を使うことをな！

「「起動(アウェイクン)！！！」」

起動ワードを放った俺達の前に、召喚フィールドが生成されていく。

さあ、戦いはこれからだ！！！

２１話　決意と更なる参戦と（後書き）

長くなりすぎたので、腕輪の能力は次回に持ち越しに……　でも結局は敗北しちゃうんですけどねｗｗｗ

日誌でちょいと触れてますが和人と明日香の関係にちょっと変化が訪れます。
それがどういう関係の変化なのか、それをお楽しみに……

22話　敗北の後の夜這い

第二十二問　以下の英文を訳しなさい

『Although John tried yo take the airplane for Japan with his wife's handmabe lunch, he noticed that he forgpt the passport on the way.』

東城　和人の答え

『ジョンは手作りパスポートと妻が作ってくれた弁当を持ち、日本行きの飛行機に乗ろうとしたのだが、お札を忘れたことに気が付いた』

教師のコメント

一度手作りパスポートという言葉を考えて欲しいのですが……さらに問題の英文を無視して勝手に文章を捏造しないようにしましょう。

五反田　弾の答え

『ジョンはパスポートと妻の手作り弁当を持って、自分の手造りの飛行機で日本に向かおうとしたが、燃料を入れるのを忘れていることに気が付いた』

教師のコメント
　問題を無視した文章を作らないようにしましょう、見た限り問題の英文を理解している様子なので。

～バカとテストと霊能者～
～第２２話　敗北の後の夜這い～

俺達は腕輪を起動させるのだが、明久のものとは違い召喚フィールドの生成は俺達の意思一つで可能となるので、あえて今回は生成を行わずに腕輪の能力のみを使う！

「「試獣（サモン）召喚！！」」

『女子連合防衛部隊　ＶＳ　東城　和人＆五反田　弾
科学　平均１８０点　ＶＳ　５０１点＆５６２点』

未だに腕輪の能力を使っていないが、召喚獣を呼び出した俺達の前に女子連中の平均点と、俺達の点数が表示される。

『点数自体は上だけど……！！』
『この人数を相手に勝てるなんて思わないことね！』
『あんたたち二人も捕縛してやるわ！！』

なんていっている女子連中を俺達は、不敵な笑みと共に見ていた。
そんな態度に彼女たちは怒りを覚えたようで、一様に表情を歪める。

んじゃあ、本番といこうかい！！

「ユニゾン！」

「ブーストアップ！！」

俺達が起動させたのは、俺が召喚獣を融合させる【ユニゾン】和人は融合した召喚獣の能力を、点数消費無しで増幅させる【ブーストアップ】だった。

俺は腕輪の能力自体は弄っていないんだが、この二つの腕輪はセットでの運用が前提であるようだ。

何しろ他にも能力があるんだが、それも合わせるとちょいとチート臭いしな。

「まあ、終わりだ！！」

『女子連合防衛部隊　ＶＳ　東城　和人&五反田　弾
科学　半数０点　残り平均１５０点ＶＳ　合体召喚獣増幅能力使用
２１２６点」

『きゃあああああ！！！』
『う、うそ！？』
『一撃で半分がやられたって言うの？』
『それになによあの点数！！』
『増幅されるって言ってもされすぎじゃないの！？』

俺の言葉と同時に振るわれる俺と和人の外見特徴を足して二で割った感じの召喚獣は、手に持っている神通棍を振った瞬間に３０人以上居た女子の半分が一瞬で、やられていた。
そして和人がもう一つの能力を解放する。

「セパレーション！！！」

『なっ！？ぶ、分身！？』

『なによ、あれ……』

『マジかよ……　五反田と東城のやつら女子連合を相手に一歩も引かない戦いが出来るじゃないか！！』

『俺達の希望だ！理想郷を、俺達を理想の都に導いてくれる救世主だ！！』

女子の間に絶望という感情の色が漂い始め、男子の間に希望という感情の渦が巻き上がる。
それもそうだ、俺と和人の合体召喚獣は四体に別れて、しかもそれぞれが５００点程度の点数を持っていたのだから。

「やはり今日は参加してくるか、五反田」

「五反田くん、恋人でもない女性の裸を見たいなんていけないこと

なんですよ」

「弾、女の子の裸を見たいならどうして私に言ってくれないのかな？」

「一夏達か……」

「「「試獣召喚（サモン）！！」」」

『教育実習生　織斑　千冬＆山田　真耶＆Ａクラス　織斑一夏ＶＳ
五反田　弾
科学　４０１点＆４３８点＆３０１点　ＶＳ　分裂召喚獣　Ａ５０１点＆　Ｂ５１４点』

俺の相手はこの三人ということらしい、隣の和人には木下姉と佐々木が居ることから奴の相手は彼女たちということだろう。
一見すれば、点数で僅かに劣る俺が不利だ、だが、俺にはまだ取れる方法がある。

「Ａ！召喚獣腕輪を起動！ＩＳ顕現！！！」

「「「なっ！？」」」

そう、俺が４００点を越えた際に発動できる召喚獣の腕輪の能力

は【ＩＳ蒼穹】を呼び出せるということだったんだ。
因みに以前に模擬試召戦争をやったときに使ったからな、把握していたんだが、千冬さんたちは本当に驚いた様子を見せたからな、把握していないのか？

まあ、良いか。

「さてと三人とも、今日の俺は手加減が出来そうに無い……　点数の貯蔵は十分かぁ！！！」

「なめるな！五反田！」

「そうですよ！今日も止めて見せます！」

「弾！言ってくれた私はいつでも弾に裸を見せる覚悟があるよ！」

そういって蒼穹の武装の一つドラグナーを解放、一基の攻撃一回ごとに１０点が消費されていく中で、千冬さんたちは迎撃体制を整えて、俺を迎え撃つんだけど……　さっきから一夏の言葉がなんか致命的にズレているのは気の所為だろうか？
き、気にしない方が良いよね！！

俺の目の前には真っ直ぐにこちらを睨んでいる木下姉に、涙目になって悲しそうな表情を浮かべている佐々木の姿。

「……　俺の相手はお前らか」

「そうよ、東城君……　佐々木さんをこれ以上悲しませない為にも大人しくお縄に着いてくれるとありがたいんだけど？」

「フン、まあ、俺一人の事情なら大人しくそうするがな木下姉「ちょっと待って」なんだ？」

「木下姉って言うのは止めてくれないかしら？　呼ぶのは名前で結構よ」

「断る、俺は本気で愛する女性（ひと）以外は名前で呼びたくないんでね、

木下は俺のクラスに居るから、こう呼ばせてもらうよ」
「その思いを佐々木さんに向けてあげなさいよ、恥ずかしいと感じないの？　こんなに良い娘を悲しませたりして」
「それにかんしては、まあ、な……」

俺に対して侮蔑の色さえ篭っている目を向けながら、木下姉はそういってくる。
だけど、今まで悲しそうにしていた佐々木は何かを決心した様子を見せる。

「和人！！」
「なんだ？」
「どうして私の体じゃ満足してくれないの！？」
「……　ちょっとまて」

って何言ってくれちゃってんのこの娘は！？
彼女の横を見れば木下姉も唖然とした様子を見せている。

「それに私を見てくれないのって、まさか……」

「……　なんだよ？」

もう、つかれたよ……

どうしてまだ俺は戦いを初めてさえ居ないというのに、こんなに疲れているんだろう？

あ、今木下姉が頭を抱えてる、奴は俺とコイツの関係を正しく把握しているようだな。

「まさか、和人って不能なの！？　まだしてないけど、これからする和人とのえっちの時に私が困っちゃうよ！！」

「とんでもなく失礼なことを言っているなお前！？　俺のはきちんと機能するわ！！」

「佐々木さん……　あなたって……」

「それとも、木下さんみたいなぺったんこが好みなの！？」

「ふざけるな！！俺の好みはボインだ！ぺったんこなんぞ眼中に無い「ふん！！！！」ぐほぁ！！！」

「……　佐々木さん、それと東城君？　ちょっとこっち

に来てもらいましょうか？」

「えっ？　ちょ、ちょ、まって！」

「ちょ……　まて、木下姉……　俺はまだ回復していないんだけど……」

なんていっている間に、核地雷灸の地雷を踏んだらしい俺の腹に、木下姉からのコークスクリューブローが突き刺さり、佐々木は木下姉によってアイアンクローをされていた。

俺は、捕まって既に消された召喚獣を見ながらも、周囲にいる奴らへの指示を出すために、気を入れなおす。

「おぅわー！！！」

あ、今、弾の奴がやられた。

「総員聞け！俺はもう戦えない！！だからこそだ総員自身を信じて、自分の判断で戦え！！！」

『応！！！！』

視界の端には高橋先生もやってくるのが見えたから、より状況は絶望へと向かっていくんだろうが、ここで皆の戦い方や意志の強さというものが顕れる！！さあ、みせてくれ！！俺に皆の意志の強さを！！！

『……』↑土下座
『……』↑土下座
『……』↑土下座
『……』↑土下座
『……』↑土下座
『……』↑土下座

バカばっかりだ！？　木下姉の絶大な力によって、霞んで行く視界の中で俺と弾以外の男子全員の見事な土下座を見るのだった。
そして俺に近付いてくる高橋先生に、織斑先生のアイアンクローを喰らって拘束されている弾、今、ここに俺達の命運が尽きたことを思い知るのだった。

それから一時間近くもの間、俺は昨日と同じように高橋先生科の攻めを受けることとなってしまった。
くそぅ……

それからお仕置きやら、補習やらが終わった俺達は部屋にて休んでいるんだが。

「む、ムムムムムムムム……　ムチはいやぁー！！！」

「東城君、大丈夫かな？」

「出撃は和人自身で決断して飛び出したんだ、お前が気にすることじゃないさ明久」

「それは、そうだけど……」

再び頭隠して尻隠さずの状態となった和人がいるからだ、男のシンボルを抑えているからな。

どうも高橋先生がまた出てきたらしい。

「でもさ、東城君はまだ分るけど、どうして弾まで負けたのさ？
話を聞いた限りだと負ける要素なんて無い様に感じるけど」

「まあ、なぁ、本気になったあの三人を相手に勝てると思った俺が、
バカだったのか……　それともあの三人が異常なのか……」

「どういうこと？」

「なら明久、鉄人にお前はガチで勝てるか？」

「無理だね」

「だろ」

どうしてというか、負けて当然というべき戦いだった。
何しろ彼女たちは召喚獣の腕輪の能力を把握していなかったそうなのだ、俺って、自分から彼女たちにヒントを与えてしまったんだよなぁ。

ダイジェストで戦いを振り返ればこうだ。

俺最初こそ一夏達を相手にＩＳの能力と、もう一体の通常召喚獣の力で圧倒していたが、すぐに腕輪の能力に気が付いた山田先生と織斑先生が共に腕輪を使いＩＳ【ラファール・リヴァイブ】と【暮

桜】を顕現させる。
そして、俺の蒼穹はコンビネーションを組んだ二人によってＩＳ召喚獣は敗北、というか、俺の操作よりも上手いって……　その間、通常召喚獣はなにをしていたかって？　一夏に足止めをされて居たんだよ、というか、ＩＳとは全く違って一夏の召喚獣が持っている武器は変な形の二挺拳銃を持っていたから、ヒットアンドアウェイを中心にされて、足止めされちゃったんだよな。
一夏の奴、射撃の方がＩＳでも上手く戦えるんじゃないのか？
そう考えた俺は悪くない。

その後は、うん、なんだな、無残にふるもっこ！！にされて終わりましたが、何か？

でも、山田先生の通常時の召喚獣の武器はＡＫ－４７っていうちゃんとした武器なのに、織斑先生の召喚獣の武器がでっかいスパナとイーゼルって……　中の人ネタ、か？　確か中の人でスパナを持ってた娘がいた気がするが……　お、思いだせん。
あ、因みに三人の召喚獣の服装は、一夏はリリカルな魔王様のバリアジャケット（多分第三期の序盤のデザイン）みたいな格好で、織斑先生はプレートメイルを身にまとっていて、山田先生はスーツを着てたな。

「じゃが、本当にどうするのじゃ？　このままでは明久と雄二は脅迫の影に怯え、尚且つ、覗き犯という不名誉な称号を掲げられてしまうぞい」
「勿論諦めるつもりは毛頭ない、残るチャンスは明日だけだが、逆に考えれば、明日があるってことだからな」

明日はいよいよ合宿大詰めの四日目だ、五日目は丸一日を移動に使うから、明日のみのチャンスとなる。
だけど、諦めるにはまだ早いな。

「そうだね！雄二の言う通り、まだ明日がある！！！」

「……　このまま引き下がれない！！」

「そうじゃな、こんなことはFクラスに入ってからは、慣れっこじゃ、今更慌てるまでもない」

士気が上がっていく明久やムッツリーニ達、それを俺は見ていると雄二は満足そうに頷いた後、俺にいきなり顔を向けてくる。

「お前らも、俺も諦めていないからな、やりようはあるが、弾」

「なんだ？」

「東城は戦えるのか？」

そう、一番の問題は和人だろう、今回こそ地雷を踏んでバーサーカーと化した秀吉の姉貴によって、理不尽な負け方をしたんだが、高橋女史が出てきたからか、あれは時間の問題といえるだろうな。
だけど、本人を前にしなかったら戦えるんだからなぁ。

「高橋女史を何とか俺に当てて、織斑先生たちを和人に当てれば、戦えるだろうな」

「やっぱそうなるか……」

「ああ、今回のアイツはまあ、秀吉の姉貴の地雷を踏むまでは普通に戦えていたんだし、別に戦うことに問題があるわけじゃないさ、ただ……」

「ムチの恐怖を乗り越えられるかどうかって、所か……」

「ああ……」

なんだろう、真面目な雰囲気に声なのに、言いようの無いこのギャグ時空は。
内容だからか？　まあ、それを咳払いをして空気を払拭させると同時に、明久がいきなり声を張り上げる。

「そ、それでさ、雄二！僕達があきらめていなかったら、考えている作戦があるんでしょ？」

「ああ、正面突破だ」

あ、明久の奴が【我、ここに絶望を見つけたり】なんて表情をしている。

「まあ、そんな絶望を見つけたような表情をせずに最後まで聞け」

「じゃあ、なにがあるのさ」

それから始まる雄二の明久に対する作戦説明なんだが、微塵も考えようとしないというか理解という感情を放棄しているような明久に、雄二は一度殺意を浮かべたようだが、すぐに押しやっていた。

まあ、簡単に言えば、あちらはもう数を増やせないという状況下なのに、こちらには数を増やせる許容量が残っているという話題なのだ。

だけど、未だに参加していないＡとＣクラスの説得に関する質問となっていた。

「まあ、主な作戦自体は言った通りなんだが、通路を守る鉄人と大島先生に高橋女史達を撃破する為には最低で四人の連中を無傷の状態で、それぞれの教師に送り込む必要がある」

「え？　それは誰？」

「お前にムッツリーニと弾と東城だな、内訳は明久が鉄人、ムッツリーニが大島先生、高橋女史に弾と東城の二人だ、この連中の勝利が最低条件だ」

「僕が鉄人に当たるのはやっぱり＜観察処分者＞である僕の力が鉄人に有効だからだね」

「ああ、そうだ、鉄人の戦闘能力を考えれば、当然だ」

雄二の言葉は的を得ているといえる。

というか、鉄人って素で千冬さんや俺を超えていないかよ！？

偶然初日の戦闘の際に明久の召喚獣を無効化した時の攻撃を見たんだが、一発のパンチで三十の打撃を放ったって何だよ！？　俺でも出来んぞ！！

それに他の動きを見る限り、千冬さんも子供扱いされる危険がある。

鉄人って……　俺達の世界に来たら、身一つで世界のバランスを崩してしまうんじゃないか？

まあ、それは置いておくとして。雄二の言い分を纏めればBとCクラスは高橋女史に辿り着く為、Aクラスはそれ以外の教師部隊を

抑えるため、それぞれが必要なのだろう。

「でも、AクラスとCクラスを仲間にするって言ってもどうするの？　昨日も今日も断られたんだけど」

「それを何とかするのが、俺達の仕事でもある」

そういって雄二がその手に掲げたのは、デジタルカメラと備え付けの浴衣。

……　ふむ。

「浴衣を女子に着せてAクラスとCクラス男子の劣情を煽るというわけか」

「そうだ、それに更なる士気の拡大のために他のクラスにも同様に配ることで、明日の戦いを磐石にする」

「単純だが、一番効果的だな」

「だろ？」

やっぱりというか、どの世界でも変わらないのが男をその気にさ

せる一番の方法が、やっぱ美少女を使ったものだよなぁ。
それを利用して劣情を煽り、上手く交渉すれば男子一同の協力体制は磐石となるだろう。

「でもさ、雄二の作戦っていつもそんな感じのばっかりでもあるよね」

「やかましい」

「でも、一番効果がありそうだからね！任せたよ！秀吉！！」

「また、わしが着るのかのぅ……」

不満そうな表情で浴衣を受け取る秀吉なんだが、まあ、当然だろう。
こいつらが自分を男扱いしていないというのが丸分りなんだし。
そんな様子を一人出来ることに不満を持ったと勘違いしたのか、雄二は秀吉に苦笑いを浮かべながら話しかける。

「一人じゃないさ、島田と姫路にも着て貰うから、安心しろ」

「いや、わしは別に一人だから不満ということではないんじゃが……」

まあ、それから秀吉のささやかな反論は無視されると、雄二は明久にメールで島田達に対してメールを送っているようなんだが、その内に何故か表情が絶望に染まりきっていた。
が、俺はそれを無視すると、未だに押入れに隠れているつもりの和人へと近づいていく。

「そろそろ、落ち着いたか？」

「あ……　ああ……」

顔は蒼く、体は震えている和人だが、受け答えだけはキッチリとして行っていた。
正直、大丈夫か？　といいたい気持ちで一杯なんだが、状況がいきなり変化する。

「明久、お前がさっき言っていた大変な状況ってのは、なんだ？」

「たった今、キサマが作り出したこの状況だ！！」

なんていっている雄二と明久だが、明久の携帯と思われる残骸が転がっているから、何か致命的なメールでも送って、誤解を解くメールを送る前に壊されて、それの誤解を解けない状況にでものか？
良く分らんが。
なんて思っている間にも彼らの会話は進んでいく。

「どうした明久、まるで姫じか島田のどっちかに告白まがいのメールを送ってしまって、それの誤解を解こうと思ったら、俺に携帯を壊されて出来なくなったという色の表情を浮かべて」

「あはははははは。雄二、それって面白い冗談だよね、そんなことあるわけないじゃないか」

「だよな、そんなことになっていたら、流石に俺は極悪人だよな」

「まったくもって、その通りだね、あはははははは」

目の前の和人は気が付いていないようだが、俺の予想が当たっていたらしい。
というか雄二の携帯には、島田か姫路のアドレスは残っていなかったのか？　奴の表情は変わらないんだが。

まさか、霧島に全部削除された、なんていわないよな？　昔に何回か一夏にやられた手口なんだが……　鈴と話し合いをしてからは一夏の奴はしなくなったんだよな。
何があったんだろ？

「ごふぅあ！！明久！キサマなんというメールを送信してくれたんだ！！！」

「黙れ！キサマも僕と同じ苦しみを味わうと良い！！セィッ！」

「あ――――！！！キサマ、お茶の中に携帯を突っ込みやがって！誤解が解けなくなっただろ！！」

「それだ！それこそが今僕が抱いている絶望だ！！！」

「ナニをわけの分らんことを！翔子にこの誤解を解いてこないと！！！」

そういって廊下へと飛び出していった雄二は、きりもみ回転をしながら部屋へと戻ってくる。

簡単に言えば、雄二廊下に出る、そこにて見張りをしている鉄人に殴られる、それから雄二が様々なものをなぎ倒しながらきりもみ回転で戻ってくる。

以上だ。

「部屋を出るな」

「了解です」

「了解っす」

この部屋の警戒態勢は磐石だ、なにしろ部屋の前を常に鉄人か大島先生たちが巡回しているのだから。

まあ、ピクリとも動かないモノになった雄二の代わりに俺と明久が返事を返す。

それから奴はこちらへと近付いて来るんだが、行動が読めてきた。

「東城君と弾は美波のアドレスは知らないかな？」

「俺は知らないな……　和人はどうだ？」

「ん、確か入っていたと思うぞ、ほれ」

「ありがとう！東城君！！」

さっきの明久の行動を見ていなかったんだろう、和人はあっさりと携帯を渡すと明久の顔に希望と言う色の感情が浮かび上がる。

だが、その表情は一気に絶望に彩られる。

「さ、佐々木さん以外のアドレスが、ない……」
「何時の間に……　また霧島かよ……」
「ていうか、過去に消された経験あるのな……　それと明久」
「な、なに？　弾？」
「和人の携帯で、さっきの雄二と同じ事をしよう、とか考えてないよな？」
「そんなわけ無いじゃないか、弾」

和人の携帯を見たときから、明久の様子がおかしかったから、問いかけたんだが、まあ、普通はしないよな。

まあ、その後は姫路だけがやってきてから、撮影会を開始、途中ムッツリーニが鼻血の海に沈んだりとかのアクシデントはあったが、つつがなく終わり。
俺達は眠りに着くのだった。

それから俺達は全員が昨晩はキツイ制裁を受けていたからか、消灯した後はすぐに寝息が聞こえ始めていた。
まあ、俺も同じ様にすぐに眠りに着いたんだが、体感時間で大体一時間くらい経った後だろうか、なんかフニフニというかフニョンというかという効果音の柔らかさと、柑橘系というか、いつも一夏が使っている香水みたいな匂いも一緒にしてくる。
はぁ！？　と思い目を開けた俺の眼前数ｃｍも無い位置に一夏の顔があった。

「……」

「やっと、おきてくれたね」

やばい、ちょっとでも動いたら、き、キスしてしまう……　それに、寝起きといえるこの状況下と、彼女の妖艶ともいえる色気、油断していたこの状況下でこれは強烈だった。

「い、一夏……　なんで……」

「くすっ、こんな時間に女の子が男の子の布団に入っていること、これの答えって、一つしかないと思うよ？」

「……　っ」

本気でヤバイ、一夏の奴本気だ……！彼女が口を開くたびに感じる、彼女の息遣いと柔らかな体に押し付けられる大きな胸。

ひ、引き込まれる……！

そう思ったと同時に俺は周囲を視線だけで見渡せば、島田に押し倒されている明久、佐々木を押し倒している体制でかたまっている和人、浴衣を脱ぎ捨てようとする霧島にそれを必死で抑えようとする雄二、静かにカメラを構えるムッツリーニ。

これらの姿だった。

「っていうか、どんな状況だよ？」

そういいたくなる気持ちで一杯だ！

２３話　夜這いと危険な女（前書き）

色々と考えた結果、現設定で行くことを決めました。
こんなダメで愚図な作者ですが、お付き合いいただけたら幸いです。

23話　夜這いと危険な女

皆が寝静まり、静かになった室内で俺は浅い眠りについているのを自覚していた。

何時からだろうか？　完全に眠れなくなったのは？　眠っても常に浅い眠りで僅かな物音でも起きてしまう。

両親は俺が眠っていても、突然殴りかかってくることなど日常茶飯事といえる状況だった。

この妙に浅くてすぐに目が覚める寝方も自分で身を守る為に、自然と身についてしまったんだ。

すぐに気が付いたら奴らの攻撃を防御したり、ずらしたりとかできるから。

周りからは全員の寝息が聞こえてくるから、もう皆は寝てしまったんだろう。

……　寂しい。

ただこの感情だけが自分の心の中を埋め尽くす。

せっかくの合宿だというのに皆と同じ様に眠れない感覚、しなく

ても良い筈なのにしてしまう周囲への警戒、こんな時ばかりは嫌になる。
もうあいつらとは離れて暮らしていて、まったく関係ないはずなのに、未だに自分の心を縛り続けて楔を打ち続けるあの二人という存在。

今のこんな自分を作り上げたあいつらに復讐をしよう、なんて考えたこともある。

でも、それだけは嫌だった。

あいつらに自分が得た力でもって復讐なんてしたら、確実にあいつら以下の場所へと堕ちて行ってしまうし、俺を鍛えてくれて様々なことを教えてくれた、本当の父親みたいに思っている老師にも顔向けできなくなる。
だからこそ、やりたくなかった。

弾の奴に、今の状況を話して副作用とかがないような睡眠薬を作ってもらおうか、なんて思ったと同時に体に染み付いた反応は、こちらへと明らかな意思を持って侵入しようとする人間を感じ取り、俺は一瞬でそいつの腕を取り、布団の上に押し倒していた。

「きっ！むぅ！」

「静かにしろ、何者……だ？」

腕の細さから女性と判断した俺は、同じ学校の女子生徒かもしれないとも判断してなるべく、痛みが少ないように押し倒したんだが、やはり素人だったのか一瞬で押し倒されて少女は悲鳴を上げようとする。
俺はすぐさま彼女の口を塞ぐと小声で呼びかけようとしたんだが、顔を見て驚きという感情に包まれてしまう。

なんでか、それは。

「あ、あっちゃん……？」

「む、むぐ……！」

そう、俺が布団の上に押し倒しているのは明日香だったからだ。

～バカとテストと霊能者～
～第２３話　夜這いと危険な女～

静かに皆を起こさないように問いただす為に極限まで顔を近づけていた俺は、キスしそうなくらいに近い位置にある彼女の顔に吸い込まれそうな感じで見ていた。

「む、むぅむぅぅ……」

「え、あ、っと、す、すまん、明日香」

彼女の手元を抑えている俺の手を見たことから、放して欲しいという意思を感じて、俺は話すとすぐに息を吸い込んで、酸素を補給しているようだった。

だけど、こんな時間、それも男子しか居ない部屋に侵入したんだ、彼女が俺にナニをしようとしたのかが分ってしまう。

多分だけど、夜這いに来たの、かも知れないなぁ。

「ぷはっ、うぅ……　び、ビックリした、よ……」

「あ、え、えと、す、すまん、そんなに驚くとは……」

よほど怖かったのか、俺が手を離すと弱々しい声を上げる明日香。
俺が押し倒した際に浴衣がはだけてしまっているようで、ピンク色のブラの紐とか下の下着とかが僅かに覗かせている状態な為、余計にエロい状況だった。

目のほよ……　ゲフゲフ、ちょっと危険な格好になった明日香から目を逸らして周囲を見れば、島田に押し倒されて何かを考え込んでいる吉井、布団の中にいる明らかに発情していると思われる織斑に迫られている弾、帯を緩めて浴衣をかなり際どい位置というか坂本の方からは丸見えな感じの格好となって坂本を押し倒す霧島。
そして、女のようなあどけない寝顔で寝ている木下に、静かに霧島と島田をカメラに捉えてシャッターを切るムッツリーニ、あ、こっちにも向けてきた。

「ふぇ？」

「じっとしていろ、獣がお前を見ている」

「う、うん……　わ、分った」

「……」

俺は明日香がムッツリーニのカメラに移らないように、布団を使い彼女の体と全体を隠していた。
あ、弾もカメラを向けられる前に同じことをしている。

「……　チッ」

そして聞こえてくるムッツリーニの舌打ちに彼女達をカメラに収めることが出来なかったと言うことを判断できた。
ここで俺はようやく周囲へと聴覚も向けるだけの余裕が生まれたから、聞き耳を立てる。

「美波……　一つだけお願いがあるんだ」

「な、なによ？」

「苦しまないように一瞬で僕を極楽へと送って欲しい」

「オノレはどういうロジックでそんな結論に達したんだ！？」

吉井が言い出したのは、こんな状況ではまずありえないお願いだった。
というか、まさか島田が自分を暗殺しに来たとか勘違いをしているんじゃあるまいな？　だけど、普段の島田の行動を見ていたら否定できないのが恐ろしい。

「ちょ、五反田……！静かにしなさいよ！それに一夏をきちんと相手してあげなさいよ！！」

「そうだよ、だん♪」

「ちょ、ちょ、ま、まつんだ一夏、落ち着こう、落ち着こう、ね、ね、ねねねね！」

小声な大声で弾に注意した島田、彼女の声に応えるように弾にさらに迫っていく織斑、更に焦った様な声を上げ始める弾、様子を窺えば坂本も似たような状況のようだ。

「むぅぅぅぅ……！」

「ど、どうしムグッ！？！？！？！？！？！？」

「……　んっ」

俺が周囲を気にしていることに対して不満があったらしく、明日香が唸るような声を上げてくる。
俺は彼女を振り向いた瞬間、目を閉じた彼女の顔が俺の視界をすべて覆いつくす。
そして唇に感じる暖かくて柔らかい感触、キス、された。
そう俺が考えたのは、彼女が唇を重ねてきてからたっぷりと数秒が経ってからだった。

「ん、ぷはっ……」

「あ、あっちゃん……？」

「……　和人……　和人、ゴメンね」

「えっ？」

キスをしてくる前とは大きく違う感情が彼女の顔には浮かんでいた。
悲しげな表情と瞳に浮かぶ涙、突然の彼女の様子に俺は完全に頭は停止してしまっていた。

「な、え、っと、なんで……？」

「わたしは……　ずっと、和人のこと……　傷つけてた……」

『……』

「え、おれ……　を？」

彼女の口から出て来たのは更に分らない言葉だった。
周囲の連中は涙声になっている明日香にビックリしたのか、俺達の様子を窺っているようであり、固唾を飲んで俺達をじっと見守っていた。

「わたしは……　わたし……　は……　」

「明日香……　俺は、お前に傷つけられてたなんておも「お姉様ぁ！！」ってなにぃ！？」

「み、美春！？」

「清水！？」

「コイツがあの噂の！？」

部屋の扉が気負いよく開くと同時に入ってきたのは、同性愛の変態であり過激な女である清水だった。
奴の登場には全員が驚いたようで、各自がそれぞれ布団から飛び出、あ、弾の奴は織斑に布団に引き摺り込まれた。

「すまん！明日香！！」

「きゃっ！！」

かく言う俺も明日香を胸に抱きつつも、こんな状況でも撮影を続行中のムッツリーニの視界に明日香を入れないように、奴の攻撃に巻き込まれないために退避する。
坂本も霧島と共に退避しているからな、これから起こる惨劇が大体分るな。

清水は真っ直ぐに島田と吉井のところへと向かっていく。

「さっきお姉様の部屋に行って布団の中を見ていないと思って、まさかと想ったら……！！やっぱりここに来て正解です！！」

やっぱこいつ、常識ってもんが抜け落ちているって言うか、なん

で【布団の中を見ていない】と考えてからここに来たんだよ！？
俺の胸の中にいる明日香も清水が来ている事に気が付いたようで、今現在は落ち着いている様子だった。

「昨日で懲りたと油断したら……！！」

って、昨日も来たのかよ。

「さあお姉様！今すぐにこんな汚らわしい男子ばかりがいる部屋から私達の愛の巣へ戻りましょう！！も・ち・ろ・ん！百合な事を沢山するので寝れません！というか寝かせませんが」

「……ッ！！！！！！（ブシャァァァァァァ！！！！）」

「止めるんだ！清水さん、これ以上の会話はムッツリーニの命に関わる！！」

「だ～ん☆！と・に・か・く！つ・づ・きをしよっか♪」

「……　雄二、続き」

「「お前は本当にマイペースだな！！」」

「な、なんじゃ！？　目が覚めたら女子が五名もおる上にムッツリ

ーニは鼻血の海に沈んでおるぞ！！！？」

もう何がなんだか分らない状況になって行ってしまっている！！
というか、どうして重いシリアスの中に含まれていたラブな雰囲気から急転直下することになるんだよ！？
なんて考えていたら、吉井がいきなり立ち上がる。

「あああああああ！！皆してそんなに騒いだら鉄人にみつか「何事だ！今、吉井の声が聞こえたぞ」っ！！」

『……』

吉井の声が響くと同時に聞こえた西村先生の声、奴の責任ではないだろうが、思わずにはいられない。
というか、全員の冷たいというかしらけた視線が吉井に向けられていた。

まあ、その後は吉井と坂本が囮となって女子を逃がし、浴衣をきちんと着た明日香と織斑にも写真をお願いしたんだが、最初ムッツリーニが要求したのは結構過激なポーズだったからか弾の奴の凄まじい怒りともどうとも取れない表情が印象的だった。
だが、まあ、あまり過激なポーズは俺と弾によって制止して、普通のポーズに変更してもらったんだが、普通のポーズの中に色気を

感じさせるとは……　撮影技術は完全に変態といえるくらいの神業だな。

それから夜が明けるか明けないかと言うくらいに吉井と坂本は戻って来たが、最早眠るような時間ではなかったので眠そうに朝食をかきこんでいた。

まあ、その後にムッツリーニが持ってきた写真を見て、目を覚ましたようだが、明日香と織斑の写真は俺と弾の奴からの厳格な姿勢注文によって使えなかったらしい。

それを狙ったのは、間違いない。

そんな俺は今、弾を連れてある所へと来ていた。

『お前は……』

「Ｆクラスの東城と五反田だ、お前達の代表である根本　恭二と会わせて欲しい」

『姐御に？』

『わかった、ちょっと待っていなさい』

ある場所とは、Ｂクラスが使っている区画の代表の部屋だった。
根本の部屋の前には護衛のためということだろうか、歩哨の男女の生徒がたっている。

だが、やっぱり俺達との試召戦争が終わった後の人格変貌により、奴はＢクラスにおいて絶大なカリスマを完璧に備えた代表として君臨していた。
その上に奴はマッサージにエクササイズといったものを、本職の人間が修行をやり直すというほどの腕を備えている上に、人格も人を思いやり優しさに満ちた行動をするからか、女子生徒のカリスマといえるくらいの人気になっているのだった。

ただ、別な意味での男子からの人気が出始めているのが、気に掛かるが……　どちらかといえば悪い意味じゃなくて、良い意味での人気なんだが……

え？　どうして今になって奴の設定が出てきたんだって？　作者が描写を忘れていたからに決まっているだろう。

何しろ書き終わって、少しした後に気が付いたらしいからな、度し難いというかなんと言うか。

それは置いておこう。

『失礼致します！姐御！Ｆクラスの東城と五反田が面会したいといってきております！』

『なに？　東城が……　か？』

『はい！』

『通してくれ、そろそろ来る頃だと想っていたからな』

『はっ！！』

『姐御がお会いになる、入りなさい』

そんなやり取りの後に出てきた女子の歩哨は俺達を部屋の中に招き入れる。

「ご苦労だった、後は引き続き佐藤と一緒に部屋の外に居てくれ」

「はっ！何かがありましたら、すぐに私達をお呼び下さい！！」

俺達の目の前には女子生徒の制服を着た根元がいた。
歩哨として立っていた女子生徒に労いの言葉を掛けていた、この光景を見ても思う。
前の奴であれば確実にこんな言葉を掛けることなんて無かったのは間違いない、が、弾の奴はまだ慣れていないのか、根本の姿をちょっと戸惑ったように見ていたりする。

「和人やら雄二たちの話を聞いたイメージが想像できんな」

「それはそうだろう」

小声で言っていた弾の言葉が聞こえたようであり、根本は苦笑いを浮かべながら肯定していた。

「あの時の俺はバカで愚かだったが、まあ、あの時の自分があったから、今の自分がある」

「ふむ……」

「だからこそ、ある意味では過去の自分に感謝しているし、そんな俺を全うな道に戻してくれた人達もいたしな、もの凄く幸運だったと思ってるさ」

「そうか……　だけど、そんなに人格が変わる人との出会いって……」

「縁があったら会えるさ、あの方々は忙しい方達だからな」

こんな会話が目の前で繰り広げられているんだが、いい加減に本題に入りたい。

そう俺は考えると一歩前にでると、咳払いをすると、二人はこちらの方へと振り向く。

「まあ、根本のことはまた今度でも良いだろう、お前にちょっと相談というか、話がある」

「お前が俺に？　珍しいというか、なんと言うか……」

「前のお前だったら絶対にしないけどな……　でも、ちょっと、な……」

「まあ、話して見ろ、力にはあまりなれないかも知れないけどな」

それから俺が話し始めたのは、昨日の夜の明日香達が部屋にやってきて彼女が言っていた事の相談と、もう一つ起きた出来事に関することを話し始める。

話し終えた後、根元は考え込むように手を顎に当てていたんだが、苦笑いとも、呆れているとも取れるような笑みを浮かべて俺を見ていた。

……　なんだよ。

「まあ、お前が佐々木のことが好きで好きでたまらないってのはよく「そんなんじゃねえ！！」ククッ」

「見え見えの否定だよネ～」

コイツ！俺が毛筋も思っていないことを言いやがった！俺の否定の言葉を聞いた奴はおかしそうに笑う。
それと同時に弾の奴もムカつく笑みを浮かべてからかうように言っているんだが、根元もそれに頷いているのがまた……！
だが、根本は今までのにやけた表情を一瞬で引き締めると、真面目な雰囲気と表情となる。

「まあ、お前さんがどう考えていようとも、佐々木には正直な気持ちを伝えてやれ」

「……」

「自分の中じゃあ、本当の気持ちは決まってるんだろう？」

「……」

分ってるよ……　俺はそう言いたくなる。
彼女に対する気持ちなんてずっと昔から変わらない、初めて出会い俺を何度も助けようとしてくれてた彼女、眩しく輝いている彼女を正面から見れなくなり始めたのは何時だったんだろうか。
それに思い出す、向こう側で起きた未来の自分との戦い、その最

中に言われたこと、俺はただ彼女に憧れているだけのまがい物、という言葉を。

「……　分ってるさ……　自分を誤魔化しているってことくらい」

「まあ、お前が佐々木に何時、その想いを伝えるのかは自由だが、きちんと答えだけは伝えてやれよ」

「……　ああ」

微笑ましいものを見るような笑みを浮かべて、慈しみに満ちた声で俺を諭すように言ってくる根本に素直に頷いていた。

「最初から素直になっていたんなら、こんな状況にもならずに済んだってのになぁ」

「フッ、五反田、お前も同じじゃないのか？」

「……　俺の方は置いておくってことで」

「そうしておいてやるとしよう」

今度はからかうような笑みを浮かべた根本は、弾の方を向くとからかい混じりでそういっているんだが、奴はちょっと冷や汗を流しながら顔を逸らしていたりする。
まあ、今の俺はこの面での余裕は無いからな、決着が付いた後、世話をしてやるか……　くくっ！！
そこにきて根本が突然咳払いをすると、この場の空気を払拭する。

「もう一つのことについても俺に任せておけ」

「頼む」

「ああ、だが、今日は俺はお前達のところには参加できないな」

「え？　なんで？」

もう一つのこと、それは俺の勘でもあるし弾も同じ様に感じたらしい。
昨日の夜に俺達の部屋に突入して来たアイツのことだ、それに関することを根本に洗ってもらいたいし、この後の事後処理に関しての相談もあって来たんだよな。
そのことに対しては頼もしい返事がもらえたから、何も問題は無いと判断できるんだが、今日の作戦には参加できないという言葉にはちょっと驚いた。
見れば、弾も同じ様に感じていたようであり、驚いた表情をして

いた。

「今日は学園長が来る上に卑弥呼と貂蟬のお二方も来るんだ、それで夜に呼ばれていてな」

「「……　縁があったらって、早すぎる縁だろ……」」

「確かにな、だからだ、夜は学園長たちに付き合わされるから、俺は物理的に無理なんだ」

思わずといった感じで重なってしまう俺と弾の声、それはそうだろうな、さっき縁があったら合えると言っていた人とこんなに早く会えるんだし。

だが、どうしてだろうか？　弾の奴は蒼い顔をしているのが気に掛かる。

まあ、良いか……

「まあ、それは分ったんだが……」

「ああ、Bクラスはいつも通りに参加させるし、戦力的には問題ないように調整をしておく」

「それなら問題ないな」

それからは、幾つかのことを話し合ったりした後に部屋を後にしたんだが、何処か嫌な予感、それもかなり強烈な予感を感じるのは、気の所為か？

なにか、最悪な史上最大級のフラグっぽいのが立っている気もする……

23話　夜這いと危険な女（後書き）

……　原作以上のカオスとなりそうなフラグが立ってしまった可能性が……

２４話　最終決戦開戦

第２４問この合宿全体についてのまとめをかきなさい　その一

織斑　一夏のまとめ

『大好きな人と再会できたとき、彼は変なことをしていましたが、後できちんと事情を聞くと彼らしいなぁ、と、考えてしまいました。彼は仲良くなった人には不器用にですけど優しくて、精一杯色んな事をしてくれる人ですので、最初から私は彼の事が好きだったのに彼の事がもっと……　それにここに来て初めて参加した学校行事でもありましたので、お勉強中もお部屋にいる時の皆と過ごす時間も楽しくて、もっと日にちがあればいいのにな。なんて考えてしまいました。それに夜は凄い騒ぎがありましたけど、後から考えるととても楽しくて素敵な思い出になっていましたし、私はこの学校が好きになりました！』

教師のコメント

織斑さんは転校して初めての学校行事でしたが、楽しんで勉強やお友達との時間を過ごせていたようで何よりです。これからももっと青春という今しかない大切な時間を充実して過ごせるように頑張ってください。

五反田　弾のまとめ

『この学校の行事に初めて参加しましたが、勉強の時間は他人に教えるということがあまり無かったので、逆に新鮮で楽しい時間でした。夜の騒ぎについては……　この学校では以前も似た騒ぎが合ったらしいとは聞いていたのですが少し驚きました。でも、後から考えると、今までとは違ってみんなと一緒にバカをやるというのが凄く新鮮で楽しくて、連れていかれて本来は嫌な筈の補習の時間でさえも楽しくてたまりませんでした。もっともっと、この学校のことを知りたくて、うずうずしている自分に気づかされます。なのでもっと楽しい思い出を作って生きたい、そう思える強化合宿でした』

教師のコメント

　五反田君も転校してから初めて参加した行事だったようですが、色々と充実していたようで何よりです。それに文面を見る限りお友達と過ごせる時間が少なかったようなので、これからもっと楽しい思い出を作って社会へと出る時の糧とできるように頑張ってください。

東城　和人の答え

『今回の合宿は自分のトラウマと真正面から向き合って克服することと、大事な幼馴染の女の子をずっと傷つけていたんじゃないのか？　と、様々なことを考えてしまう合宿でした。どうして彼女があんなことを言ったのかが分らないし、俺が彼女をどう思っているのかがわからない。いや、自分が彼女に向き合おうとしなかった。と思わせられた合宿でしたが、勉強も想っていた以上に捗ったので、やはりこういう場での勉強というのは特別な効果を発揮するんだなぁ、なんていうことを考えさせられた合宿でした』

教師のコメント

トラウマと言っていましたが、克服して乗り越えることが出来たようで何よりです。ただ、誠実な東城君が女の子を傷つけていた、ということですが……　ちょっと信じられないですね……　文面を見る限り恋愛ごとのようですけど自分の中で気持ちが決まっているのであれば、先生から言えるのはひとつです。後から後悔することの無いように自分の正直な想いを、その人に伝えてあげなさい。それが彼女に対する一番よい方法ですよ。先生は東城君の恋が上手く行くように願っております。

～バカとテストと霊能者～
～第２４話　最終決戦開戦～

時間は経ち夜。

昨日までは特に気にならなかった時計の秒針が時を刻む音、これが妙に気になっていた。

それは他の連中も同様であり、吉井の奴が特にウズウズしていた。

まあ貧乏ゆすりなんだがな。

「明久、今更ジタバタしたってしょうがないさ、補充試験も受けたし、他のクラスも参加してくれたんだ、後は全力を尽くすのみ、だろ？」

「そうだぞ、弾の言う通りだ、あとは自分たちを信じるだけさ」

こんな吉井の姿を見てから弾が奴に声を掛けている。弾の言葉に合わせるように目を閉じて、部屋の壁に身を預けていた坂本も目を開けて吉井に声を掛ける。

それに吉井は頷いて答えると、奴は落ち着いたらしく足の動きは止まっていた。

「B・D・E・Fクラスは今日も参加じゃの、じゃが……」

「AクラスとCクラスは参加してくれるかどうかが分らないんだよね……？」

「……　だが、今日こそ、借りを返す」

木下の言葉に吉井が返すと同時に、質問をして来るんだが、これについては全員の間に少しだけ重い沈黙が流れる。

今日は補充テストに時間を費やした形になってしまい、あの後に利光の説得にいけなかったんだよな。

こればっかりは奴の決断に期待するしかないな。

それにムッツリーニの奴もやる気十分だ、今日の補充テスト中に

問題を『超加速』でも使っているかのように解いて行く様は、とんでもないとしか言いようが無かったが……　本当に超加速を使っていたりとかしないよなぁ？
保健体育であればありえそうといえるムッツリーニが恐ろしい。

「じゃあ、時間もないし、最後の打ち合わせを始めるぞ」

閉じていた目を開けた坂本がこちらへと近付いてくる。
それにあわせて弾も木下達も俺達の周りに集まってくる。

「俺達がいるのは三階だ、だから順に三階、二階、一階、地下女子風呂前を通過しなければ目的地には辿り付けないわけだ」

「ああ、それに部屋割りも三階に俺達FクラスとEクラス、二階にC・Dクラス、一階にA・Bクラスだな、三階の連中はEとFクラスの連中が抑えてくれるが……」

「二階と一階をDとBクラスのみで抑えるのは、厳しそうじゃな……」

坂本の言った言葉に補足を加える弾に、不安そうな様子を浮かべてそういってくる木下。

それはそうだろう、教師達もクラスの強さに応じて防衛についている生徒達を配置しているだろうし、二階も一階もDとBクラスだけではかなり厳しい状況だ。

だが、俺達の間に垂れ込めようとしていた不安な様子を払拭するようにして、吉井は立ち上がると勢いよく声を張り上げる。

「でも！ここまで来たらやるしかない！そうだよね！」

「ああ、勿論そのつもりだ、三階は問題なく突破は可能だろうからな、二階も何とか突破すれば」

「……　高橋先生を含めた教師部隊にA・Bクラス防衛部隊が待っている」

「そうだ、学年主任の高橋女史率いる教師部隊に加えて生徒では最強の布陣も待っていることだろう」

最後に坂本が言った言葉、それに今回の作戦の成否の全てが掛かっていると言っても過言じゃない。

そこを吉井が突破できるかどうか、それに全てがかかっているんだから。

「明久、お前が突破する為の隙は俺と和人が作る……　なんとして

でも通り抜けろ」

「高橋女史と織斑教諭を含めた教師陣のみだったら、足止めは俺と弾の二人でどんな手段を使ってでも行ってみせる」

「え、で、でもそれじゃあ二人に負担が……」

不安そうと言うか、どうともいえない複雑な表情を浮かべていっている吉井。

確かにこの作戦では俺達に負担が掛かるし、その負担も大きいだろう。

無理も無い、俺と弾が相手にするのは織斑教諭や高橋女史だけではなく、山田先生や霧島に姫路に加えて、Aクラス全員が出てくる危険性があるんだ。

どれほど困難で、尚且つ、重圧の掛かる役割なのかが簡単に分る。

「じゃが、もしも東城や弾が高橋女史や織斑教諭たち、昨日のメンバーに釘付けとなってしまったら……」

「そん時は簡単だ、俺は望まぬ結婚を強いられて、明久は変態として生きることになっちまうな」

「今現在の状況とあんまり変わらんぞ、お前ら」

「弾の言う通りじゃと思うのじゃが……？」

弾と木下の言葉に対して心外だ！とでも言いたそうな雰囲気に吉井と坂本の表情は歪むのだが、現状を見る限りでは、ここで凌げても吉井は兎も角としても坂本は避けられないように感じるんだが、俺の気のせいだろうかね？

「とにかくじゃ、Ａクラスの協力が確実なものじゃと良かったんじゃがな……」

「ああ、利光、Ａクラスの代表格が女子にきちんと興味を持っていてくれたらな……」

「あはははは、弾、その言い方だとＡクラスの代表格は女子に興味が無いみたいじゃない？」

弾の言葉に笑いながら吉井が問いかけると、弾を含めた全員が吉井と俺から目を逸らした。

え？　こいつらの中では俺も……　ってことか……？

じ、冗談じゃ。

「とにかくだ！そこまでいければ、それぞれが果たすべき役割が分るはずだ」

「……　大島先生を倒す」

「そして、僕は鉄人……　だね」

くぅ、坂本に俺の誤解を解く間を与えられなかった。
そんな俺を無視して吉井とムッツリーニは気合を入れている様子だった。

まあ、思考を切り替えるとするか。
はっきり言って今までの試召戦争でも綱渡りと言える状況だったんだが、今回は更にそれに輪をかけて不利な状況が連なっているんだから。

だけど、こいつらの表情には絶望といえるものは無い。

「……　大丈夫、きっと上手く行く」

「うん」

「当然だ」

「じゃな」

「おう」

「ああ」

ムッツリーニの言葉を皮切りに力強く頷きを返す俺達。
まあ、あの試召戦争を考えれば、俺達なら出来る、そう今日のフルメンバーが揃った状態ならば！

ピピッピピッ！という電子音がなると同時に、全員が立ち上がる。

「……　よし。気合は入っているかお前ら！！」

「「「「「おう！！」」」」」

「女子も教師も、クラスだって関係ねぇ！！俺達男の意地と底力ってもんを見せてやるぞ！！！」

「「「「「おう！！」」」」」

「これが正真正銘のラストチャンスだ！！俺達六人から始まったこの騒ぎは勝利以外の幕引きはありえねぇ！！」

「「「「「当然だ！！」」」」」

「強化合宿第四夜、最終決戦！出陣（で）るぞ！！」

「「「「「よっしゃぁー！！！」

いつもの如く気合を入れる坂本の声に応える俺達、強化合宿、第四夜二〇：〇〇時。

今、ここに覗きと男の尊厳を掛けた最後の戦いの火蓋が気って落とされる。

部屋を飛び出してすぐに防衛についていたＥクラスの女子達に俺達は捕捉されるのだが、坂本の一撃によって力尽きる。

その直後に教師を含めた防衛部隊がこちらへと迫って来るんだが、Ｆクラスの連中によって阻まれていた。

『吉井、坂本！ここは俺達に任せておけ！！』

『『『『試獣召喚（サモン）！』』』』』

俺達を守るように展開されるE・Fクラス男子達の召喚獣、俺達に頼もしい笑みを向けてそう言って来る彼らに背を向けると、駆け出していた。

「須川君！ここは任せたよ！！」

『おう！東城や五反田たちも頼んだ！！』

『そうだぞ！ここを突破した後の理想郷が無くなっちまうからな！！』

「了解した！女子風呂にて会おう！！」

「ああ、任せておけ！！」

頼もしいクラスメイト達に吉井は声を掛けると、クラスメイトとEクラスの連中は俺と弾にまで声を掛けてきてくれた。

間違いなく下心全開だろうが、でも、こういうのは悪くない！！

俺達も彼らの期待の声に応えると、階段を二段飛ばしで駆け下りていく。
そして、そんな俺達の背後から勇士達の怒号が俺達の背中を後押ししてくれる！

『島田さんのぺったんこサイコォー！！』
『木下さぁーん！！』
『秀吉ー！大好きじゃぁー！！』
『佐々木さんのDクラスの胸を生で拝みたぁーい！！』
『翔子たん！翔子たん！はぁはぁ！！はぁはぁはぁはぁはぁ！！！』
『織斑さん！貴女のスタイルバツグンな体をはぁはぁはぁはぁはぁはぁ！！したーい！！』
『瑞希ちゃーん！僕とイイコトしようよぉー！！』

前言撤回、全員、惨たらしく死んでしまえ！！

二回に到着した俺達を待っていたのは、奮戦しているCクラスの男子とDクラスの男子達だった。

「Cクラスの皆！！協力してくれるの！？」

『あったりめいでぃ！べらぼうめぃ！！』
『ここで協力しなくて、なにが男でぃ！！』
『おめぇらこそしくじるんじゃねぇぞ！！』

士気が高すぎて異常者になってしまったCクラスの連中はべらんめぇ口調になって、俺達が階段を下っていくのを何も問題が無いようにしてくれていた。

「こういうのって凄くいいよね」

「そうじゃの、共に戦う仲間が増えて行く喜び、とも言えるじゃろうな」

「まあ、その分仲間だったはずの女子が敵になっちまったけどな」

嬉しそうな表情と共にそういっている吉井に、木下が同調して言った言葉に補足するように弾が付け加える。
そんな彼らの会話を聞いていた坂本は苦笑いを浮かべる。

「それは気にしない方向で行こうじゃねぇか」

「だね」

「ああ」

苦笑いと共にそういってきた坂本に俺と吉井は答えると、遂に一階部分へと辿り着く事に成功する。

「そろそろ一階に着くのじゃが……」

「Bクラスにクラスも協力してくれてるだろうし、問題なくいけそうだね！！」

『……　か！……　護を…！』

『…力が圧倒的すぎ……』

『恭二の姐御……　もうしわけ……！』

「いや、それは分らんぞ」

「どういうことだ？　弾」

「チィ……　やっぱりか」

「東城も……　っ！まさか！！」

そのまさかだよ。
階段を走っているときに聞こえてきたＢクラスの連中と思われる声は、その全てが焦燥と絶望に彩られていて、とてもではないが戦局が有利に傾いているということが判断できないものだった。

一回に着いた俺達を待っていたもの、それは。

『Ａクラス　霧島　翔子＆ａｍｐ；Ｆクラス　姫路　瑞希ＶＳ　Ｂクラス　加西　真一＆ａｍｐ；　工藤　信二
総合科目　４７６２点　＆ａｍｐ；　４４２２点　ＶＳ　１６９２点　＆ａｍｐ；　１７０２点』

圧倒的な戦力で持って蹂躙されているＢクラス男子生徒たちの姿があった。
くそっ！やっぱり利光の奴の協力が取り付けられなかったのが痛いか！？　真実を話さずに協力をしてもらおうと考えたのがやっぱりまずったな。

「……　雄二、悪戯はここまで」

「吉井君。ここは通しませんよ」

「翔子……！」

「それに、姫路さん！！」

女子用の大浴場へと続く階段の入り口に、布陣されていたのは学年主席と次席という最強コンビであった。
既に戦闘が始まって暫く経っているのが分る。彼女たちの周囲には打ち倒された男子達の召喚獣が死屍累々と転がっており、今までの戦闘の激しさを物語っていた。

「やっぱりＡクラスはおらんようじゃの……」

「半ば予想は出来ていたけどな……！」

「それに階段の向こう側も随分と用心深い布陣だな、くそっ！」

打ち倒されている男子達を悔しそうに見渡す木下に、苦虫を噛み潰した表情で続ける弾と坂本、状況は間違いなく絶望的といえるもの。
何しろ階段の向こう側には高橋女史に織斑、山田の三名の教師部隊に加えて、Ａクラス生徒の織斑や佐藤といった連中が雁首を揃えているのだから。

彼女たちは姫路達が突破された際の防衛ラインというわけなのだろう、彼女たちの周囲にも累々と召喚獣が転がっているから、彼女

たちを突破できた連中はいるにはいた。
ということでもあるな。

だが、こんな状況であっても周囲にいるBクラスの連中に、諦めという色が浮かんでいないのが救いか。

『なんとしてでもお前達を女子風呂へと通すための突破口を作る！』
『それこそが我らに下された、恭二の姐御からのご命令！！』
『だからお前達も諦めるな！！俺達も出来る限り協力する！！』

「Bクラスの皆……！」

「お前ら……！！そうだな！お前らが諦めていないのに、俺達が諦めるわけには行かないな！！」

「その意気だ！明久！雄二！！」

「「おう！！」」

Bクラスの連中からの力強い言葉に、勇気を貰ったのかより自分を奮い立たせるようにして言葉を発する坂本と吉井に、鼓舞するように大声を上げる弾。
奴らの様子に周囲にいる連中全員が奮い立たされる中で、木下だけが疑問という表情を浮かべていた。

「明久、どうしてお主はそこまで頑張れるのじゃ？　Ｂクラスの連中は根本の命令があるからとしても、お主には〈観察処分者〉としてのフィードバックもあろうに……」

心配そうと言うか、心配の色だけを浮かべて木下は吉井に問いかけるのだが、どうして今の木下の見た目は完璧に『恋する男性が死地に赴く際に不安げな表情をする少女』にしか見えないんだろうな。

それに、俺の直勘は吉井がバカなことを言い出す、なんて言っているんだが、何を言い出すのやら。

「そうだね、秀吉の言う通りに今の状況は脅迫写真のこととか全部諦めて、降参なりするのが一番かもしれない……　でも！僕は、たとえ世間一般では許されないことだとしても！！」

『……』

「――――――――――――――――　そう！たとえ世間一般では決して許されない行為だとしても！！僕は今ここに宣言しよう！！猛烈に自分の欲望にしたがって！！女子風呂を覗きたいんだぁ――――――！！！！！

「お前本来の目的を忘れてないか明久！？」

「弾の言う通りじゃぞ！どこまでお主はバカなんじゃ！！？」

もう、なにもかも忘れて帰って良いかな？　なんて言ってしまいたくなる状況、犯人に関してもほぼというか確信にも至れるものは手に入ったし。

坂本は兎も角として吉井は掬える手立ては整っているが、まあ、ここまで来たからには最後まで参加しようかね。

なんて考えている内に姫路の顔は羞恥と怒りに嫉妬と言う感情で埋め尽くされていく。

あーあ……　姫路が完璧に怒ってしまったな。

「そんなに、そんなに美波ちゃん達の方が良いんですか……　吉井君、もう許しません！！覗きは犯罪なんですからね！！」

そういって吉井へと向けて姫路が召喚獣に突撃の命令を下すと、吉井へと真っ直ぐに向かっていく。

ってマズイ！！しまった、出遅れた！？　間に合うか？　そう俺は考えていたんだが、吉井は姫路の召喚獣を正面から見据え、彼女の召喚獣を真正面から迎え撃つつもりのようだった。

「世間が決めた一方的なルールなんて関係ない！！誰にどう思われようとも！僕は僕の信念と道を貫き通す！！！」

他の連中もこの状況に焦った様に召喚獣を呼び出そうとするのだが、吉井が召喚獣を呼び出して姫路にやられる方が早いか！？

心の内で毒づきながら、吉井を守る為の行動をとろうとしたとき、それは現れた。

『良くぞ言ってくれた！！吉井君！！』

突然廊下に響き渡る一人の少年の声。
それと同時に現れる大量のＡクラス生徒達、階段にいる高橋女史たちが驚いた表情を見せることから、彼らは最初は参戦の意思が無かったことが窺える。

「久保君！？」

「待たせてしまったね和人、吉井君」

「利光……」

「弾もすまない、クラスの皆と一緒に準備はずっと前に、済んでいたんだけど踏ん切りがつかなくてね……　だが、吉井君！君の気持ちは僕らが聞き届けた！！」

「おい、正気か……？　利光」

姫路の驚きの声を意に介した様子もなく、利光は俺達に謝罪の言葉を掛けつつ近付いてくる。
周囲にいる女子たちは俺達の様子を窺っているようなので、仕掛けてくる様子はない。

だけど、それ以上に気になる所があった。
それは利光の言葉というか、怪しく光るメガネと言うか……　奴の雰囲気全体がおかしいというか、正気とは思えないんだよなぁ。

そんな俺の気持ちを知ってかしらずか、利光は鼻息を荒くして顔を赤らめ、俺と吉井を熱っぽく見つめながら更に声を張り上げる。

え？　おれ、も……？

「これより二年Ａクラス男子一同全員が吉井君たちに協力しよう！！」

「協力してくれるのは、凄い嬉しいけど正気に、正気に返ってくれ、利光……」

「東城の言う通りじゃ！Ａクラスの皆よ、正気に返るんじゃ！！」

「クラスの皆！聞いていたな！これより吉井君や坂本君たちの援護を行う！！彼らが円滑に覗きを行えるように僕達が道を作るんだー！！！」

『『『『『『応！！！！！』』』』』』』

「ありがとう久保君にＡクラスの皆！！」

そして、吉井の言葉を皮切りに動き出すＡクラスの連中と女子の防衛部隊。

今ここに全ての戦いのケリをつけるための戦いの真の火蓋が気って落とされるのだった。

一方そのころ。

「ん？　なんだい騒がしいね……」

「今夜も奴らは元気に動いているようだな」

「まさかぁ！うら若きオノコたちが私たちって言う瑞々しい漢女の柔肌を拝みにこようとしているのかしらぁあん？」

「な、なにぃ！わしに貂蝉や恭二という漢女を拝みに来ていると申すか！？　歓迎の準備をしてやらんとなぁ！！」

「まったく……　この学園の連中ってのはもうちょっと静かに出来ないもんなのかね」

「それが良い所でもありますよ」

「そうさね、それと根本、もうちょい腰の指圧を強くしておくれ」

「分りました」

などというおぞましいモノが四つ程大浴場に集結していること、そのことに神ならぬ男子一同は全員が気が付いていなかった。

２４話　最終決戦開戦（後書き）

最悪な結末フラグが確定しました。
どうなってしまうのか……　作者にも分かりません！！（＞＿＜）

２５話　俺の気持ちとあの娘の気持ち（前書き）

今回は暴走したとしかいえない。
特に後半部……　だが、後悔はない！（多分。

25話　俺の気持ちとあの娘の気持ち

第２４問　この強化合宿全体のまとめを書きなさい。そのニ

佐々木　明日香のまとめ

『今回の合宿、私は色々と取り返しの付かない事をしてしまいました。誤解とは言っても自分の人を信じてさえ上げられずに傷つけたばかりか、自分自身の勝手な思いまでぶつけてしまった形になってしまいました。もう自分がどう行動したらよいのか、何も分らなくなって、グチャグチャになりそうです。でも、彼の事を諦めたくないし、自分のこともっと見て欲しいなんていう汚い感情ばかりが浮かんできて、自分がどうしたいのかも分らなくなりました』

高橋先生のコメント

どうやら佐々木さんには好きな人がいて、彼との間に関係が変化する何かがあったようですね。ただ、貴女が一方的に思いつめるのではなく、一度、佐々木さんが好きな人とゆっくりと話し合ってみるのが宜しいのではないのでしょうか？　先生は恋愛というものを経験したことがありませんから、こういった当たり障りの無い事しか言えませんが、貴女の恋が上手く行くことを祈っています。

織斑先生のコメント

ふむ、私も恋をしているかと言われれば、今現在は微妙な感情を抱いているだけなんだが……　だが、そんな私からも言えることは

ある。今のお前では後々に後悔するだけだ。今は未熟とは言っても感情に一時的にでも身を任せて行動して、彼に自分の中の気持ちを全てぶちまけてみるのも良いだろう。どちらにしても、これは佐々木が決めることであり、私達は当たり障りの無い事しか言えん。だが、こんな私でも応援くらいはさせて欲しい。頑張れ！！

山田先生のコメント

ええと、以前居た学校では、こんな悩みが出てくることなんて無かったものですから、私もどういえば良いか分りませんが、と、とにかく！頑張ってください！！恋愛は思いだけじゃなくて行動が一番大事と聞きます！わ、私から言えるのはこのくらいです！

霧島　翔子のコメント

……　明日香がこんなに悩んでいるなんて気が付かなかった……　だけど、こればっかりは東城をシバいても解決しないから……　だから明日香、東城に貴女の本当の気持ちを伝えて、それしかないから、私に出来ることなら何でも協力する。だから、頑張って。

～バカとテストと霊能者～

～第２５話　俺の気持ちとあの娘の気持ち～

遂に文月学園全男子が俺達の味方となった状況、感極まったように吉井は利光を見ていた。

「礼を言うのはこちらさ吉井君、そうだ！自分の気持ちに嘘はついてはいけない！！世間体なんて関係ない！好きなものは、そう！好きなものは大好きなんだ！！」

ッ！！？　な、なんだ！？　今一瞬だけ悪寒が……

それは吉井も感じた様子であり、顔を青くして周囲を見渡している。

周囲にいる連中全員が俺と吉井から気まずそうに視線を外しているのが、余計に俺と吉井のこれからの状況が分るというものだった。

「まさか久保君たちまで参加するとは思いませんでしたが、問題ありません」

「そうだ、お前達は全員ここで倒れてもらおう」

「フッ、高橋先生に織斑先生。今の僕達を簡単に止められるとは思わないで貰いたい、西村先生を打倒し、男子を理想郷へと導く希望を失うわけにはいかない！！」

前に出てくる高橋先生に織斑先生たちと、俺達を守るように前に出る利光にAクラスの連中と弾の姿。

だが、ここで弾の奴が俺に向けてアイコンタクトを仕掛けてくる。

『ここは俺が引き受ける、お前は雄二と明久と一緒に下に行け』

なっ。

そう思った瞬間、俺達の目の前に召喚フィールドが張りなおされて女子と男子達の召喚獣が姿を現すのだが。

「起動（アウェイクン）！！！」

「なっ！？　それが例の腕輪ですか！！」

弾が召喚フィールドを再生成する。

ここで、弾が持っている腕輪の方のもう一つの能力について説明をすれば、装着者の意思一つで召喚フィールドの生成が可能という特徴があるが、デメリットもあり総合教科で千点、単教科で百点をＯＮとＯＦＦの際に消費する。

だが、試召戦争において、召喚獣を使役できるフィールドは一つの教科のフィールドだけとなるので、もしも弾が高橋女史の展開している総合科目とは別の教科のフィールドを展開すれば。

「干渉ですか……　やってくれましたね……！」

「ちっ、厄介なものを……！」

干渉という現象と共に、全ての召喚フィールドは無効とされて消え去り、同時に召喚獣も全てが消え失せるのだった。

「今だ！明久に雄二とムッツリーニ！それに和人！階段へ向かって走れ！！」

「了解だよ！弾！！」

「分った！いって来るぜ！」

「……　了解！」

「させ「織斑先生の相手は俺っすよ！！」チィッ！！」

「弾！私も忘れないでよね！！」

召喚獣のいない女子生徒や教師（若干ニ名を除いて）は男子に力では叶わないから、生身となった俺達の進行を阻止できない。
そんな俺達を阻もうと織斑先生が動き出すんだが、弾の奴が上手く彼女をひきつけてくれた上に、Ｂクラスの連中も弾を援護するように動いているから、他の女子連中も身動きをとれずにいるようだ。

「くっ！吉井君に坂本君、土屋君に東城君の四人は逃しましたが、他の方々は通しません！！」

「流石は高橋先生ですね、判断が早い！！」

「くそっ！もう展開されたか！！」

「形勢は逆転したな！五反田！！」

後ろから苦虫を噛み潰したような声を上げる利光と、弾の声を聞きながら俺達は階段を下っていく。

「でも、弾は大丈夫かな……　東城君を抜きで戦うなんて……」

「奴が決めたんだ、それに東城、お前さんに対するお客さんもこの先にいるだろうしな」

「……　ああ、そうだな」

今までとは違った長さを持つ階段を駆け下りていく中で、俺は吉井に坂本の二人とそう会話を交わしていた。

弾が俺にまでこいつらと行動を共にしろといった理由はただ一つ、あの場にいたはずのもう一人の少女がいなくなっていたことだ。

肌で感じる、奴がこの先に待っていると、冷たくて冷徹な気配を感じる。

それは隣を走る坂本も同様のようで、なんか顔を青くさせながら走っているから分るのだろう。

「……　もうすぐ階段を降りるね、ムッツリーニは打ち合わせどおりに大島先生をお願い」

「……　了解」

この場の雰囲気を少しでも明るくしようと考えたらしく、吉井が確認するようにムッツリーニに対してそういっていた。
それにムッツリーニは自信に満ち溢れた表情と声で答える。
遂に俺達は階段を降り切って女子大浴場へと続く一本道へと辿り付いた。
その先に待っているのは、予想通りに大島先生と近くにいる小柄の女子生徒。

「やっほ！ムッツリーニくん！遅かったから、もう来ないんじゃないかって思ってたよ！」

「く、工藤さん……」

「やっぱ居やがったか……」

工藤がいたのだから。
奴の姿を見たと同時に苦々しく顔を歪める坂本と吉井、俺自身の顔も絶望という感情で引きつりそうになる。
だが、現れた二人を見てもムッツリーニの表情には揺らぎという

ものは無く、ただ、静かな自身と共にあった。

「……　三人は行け、ここは打ち合わせどおり俺が一人で引き受ける」

「え、で、でもム「……　心配は要らない、行け！」……　うん！！」

だが、やはり奴が強い自信があるとは言っても教師とAクラス保健体育のトップの双璧だ。

ムッツリーニ一人では確実に分が悪い戦いになるのは明白だ、だから、俺達も援護する為に構えようとしたと同時にムッツリーニの口から出てきたのは、俺達を驚かせるものだった。

「……　奴らには借りがある……　それも一緒に精算する……

試獣召喚（サモン）！」

「「「「「はぁ……？」」」」」

そういって前に出てくるムッツリーニは同時に召喚獣を出すのだが、口からは間抜けな声が漏れ出てくる。

それはそうだろう。

何しろ表示されていたのが。

『体育教師　大島　武　&

なんてやり取りが聞こえたんだが、まあ、大島先生たちが逆に一瞬でも持てば良いよなぁ。
などと考えながら俺達は走るのだった。

そして、俺達の目の前に一人の女子が姿を現す。

「し、翔子……　ここにいやがったか……！」

「……　雄二、今投降すれば、お仕置きは軽くですませてあげる」

「信用できるか！！」

学年主席でありＡクラス代表の霧島　翔子、彼女がいたからだ。

だが、坂本とやり取りをしている間もずっと視線は俺に固定されたままであり、彼女の瞳は絶対零度の温度を湛えて俺を睨みつけていた。

「吉井、お前は行け」

「え、で、でも……」

「そうか東城！ここは任せ「……　雄二は、絶対に逃がさない……！！」ぐぅあああ米神がぁあああぁぁぁ！！」

「うん、任せたよ！東城君！！」

そういってこの先に待つ西村先生の元へと走っていく吉井を見送ったと同時に、いつもよりも激しかったのか、坂本が地に伏せってしまう。

どうやら、気絶したようだ。

霧島は気絶した坂本を優しく隅に横にさせると、俺の方へと向き直る。

「ッ！！」

「……　話がある……」

「なんだよ？」

一瞬だけ、俺の首が飛んだ、と思わせるようなイメージと共に途轍もない殺気がぶつけられ、周囲の空気自体がビリビリと振動しているかのように張り詰めていく。

気圧されるな、気圧されるな！そう自分に渇を入れて、話しかけてきた霧島を俺も正面から見据え、睨みつける。

そして、彼女が次に発した言葉に俺は、一瞬だけ、自分の意識が飛ぶのが分った。

「……　明日香と今すぐに縁を切ることを誓え……　そして明日香は転校させる……」

「な、な、な……　に？」

「……　二度は言わない……」

それは、明日香と絶縁しろ。

というあまりにも一方的な霧島からの通告だったんだから。

さっき和人達が地下に突入してから少しして、俺達は一進一退の攻防を繰り広げていた。
いや、男子の士気が高い所為もあってか、逆に俺達が押している状況でもある。

だけど俺はやっぱり。

『Ｆクラス　五反田　弾　ＶＳ　教育実習生　織斑　千冬　＆ａｍｐ；　Ａクラス　織斑　一夏
現代国語　３４８点　ＶＳ　２９８点　＆ａｍｐ；　３０１点』

「そこだ！！」

「貰ったよ、弾！！」

「それはこっちの台詞だぁ！！」

「きゃぁ！！」

千冬さんと一夏の二人に阻まれちゃったんだよなぁ！！

山田先生がいないのがまだ救いだな、最初の任意選択型のフィールド展開を行ったときに百点を消費した状態だから、ただでさえ今は不利なんだし。

まあ、それは置いておいて千冬さんの召喚獣が振り被って来たイーゼルをかわし、その隙を狙って銃弾を撃ち込んで来た一夏に俺は持っていた小太刀を投擲、彼女の点数を削り取る。

『Ｆクラス　五反田　弾　ＶＳ　教育実習生　織斑　千冬　＆ａｍｐ；　Ａクラス　織斑　一夏
現代国語　３４８点　ＶＳ　２９８点　＆ａｍｐ；　２１１点』

「ちぃ！点数を消費した状態でこの攻撃力か！？」

「厄介すぎるよ！！」

なんて苦々しい様子で行っている一夏達から少し視線を外して、利光達を見る。

『Ａクラス　久保　利光　ＶＳ　学年主任　高橋　洋子
現代国語　　４４８点　ＶＳ　８０１点』

化け物かよ、あの女。
なんていいたくなるんだが、利光も召喚獣の扱いに慣れている様子ではあるので、上手く攻撃を回避したり受け流したりしつつ、手の空いた連中の援護を受けていた。

それに女子の召喚獣も徐々に倒されていっている状況、既に女子達は会談ギリギリまで追い詰められている状況下であった。
そのことに一夏や姫路達も状況に気が付いて援護しようとするのだが、俺を含めた実力が拮抗している連中の妨害を受けて、上手く動けない様子でもあった。

とにもかくにも思う。

和人、明久、雄二、ムッツリーニ（一名は早速脱落）頑張ってくれよ！！

と。

霧島からの一方的な通告を聞いた俺は、少し呆然としていた。
だが、その隙は致命的なものであり、彼女は一瞬で俺に詰め寄ると俺の胸倉をつかみ上げて、俺は壁に叩きつけられる。

「ぐ、ぅあ！！」

「……　あの娘は貴方に謝っていた……　許しを請うていた……」

「な、なんだ、と？」

「……　なにをした？」

感情というものが一切合財抜け落ちた伽藍の同と言える瞳で俺を問い詰める霧島。
彼女の口から出てきた言葉、それに俺は更に驚くんだが、彼女はそんな様子に怒りを感じたらしい。
より胸倉をつかむ手に力が込められる。

息苦しさを感じるんだが、それよりも。

「なにも、何もしてはいない！俺がアイツを傷付ける様なことを「……　ふざけるな……！」ッ！！」

「……　だったら、何故、あの娘を遠ざけているの……！！」

俺の言葉を聞いた霧島の瞳には、怒りが昇華されて殺意という感情で埋め尽くされる。

そんな彼女を見ていた俺にも怒りと言う感情が浮かんでくる。

確かに、俺は遠ざけることで彼女を傷つけているだろうさ！だがなぁ！俺にだって言い分はあるんだよ！！

「……　好きだから」

「……　なに？」

「好きだからだよ！愛してるって言い換えても良いさ！！」

「……」

「前に言ったよな！俺があいつの傍にいればあいつが不幸になるって！好きだから離れた！！距離を置いた！！周りが俺とあいつの関

係を絶対に認められないから！！」

「……」

「そしてわざと向き合おうとはしなかったんだ！！向き合ったら俺は彼女にこの想いを言ってしまうから！！だから俺は！俺は！」

「……　歯、食い縛れ……！」

「ぐっぅ！！」

一度言ってしまえば、後は簡単に口からは言葉が漏れ出て行った。どんどんどんどんどん、溢れ出てくる言葉、視界も滲んでいるから涙も流れているんだろう。

そんな俺の言葉を様子を霧島は冷たい瞳のままで眺め、掴んでいた手を離すと俺に平手打ちを放ってくる。

予想以上に力の強い平手打ちを受けた俺は体が揺らぐが、すぐに態勢を立て直していた。

だけど、態勢を立て直した瞬間に霧島は俺の胸倉をまた掴み上げる。

「……　ならどうしてその思いを言わないの……！あの娘は待ってる……！！」

「そう、だろうな……」

「……　明日香は私の夢を笑わずにいてくれていた、一番の理解者で、私の親友……」

「……」

「……　だから、私は親友の幸せを一番に願う……」

「……　ああ……　そうだよな……」

霧島は最後の言葉を言い、それに俺が答えたと同時にいきなり手を勢いよく放す。

彼女とは逆の方に勢いよく放されたから、俺は体制を崩し掛けた時にいきなり横から何かに抱きつかれたような衝撃を受けて、地面に倒れこんでいた。

「かず、とぉ……！」

「あ、明日香……？」

「……ここまでくれば分るはず……」

「ま、まさか最初から……」

俺に抱きついてきたのは明日香だった。
彼女は嬉しそうでいて悲しそうでいて、起こっているようで泣いているという複雑な表情で俺に抱きついている。

彼女の様子を見て思ったのは、最初から明日香は見ていて、俺の本心が……！
そう思った俺は霧島を見やれば彼女はフッ、という笑みを浮かべた後、黙って立ち去ろうとする。

だが、気絶していたはずの坂本の姿が消えていたから、彼女の雰囲気は一変しどこかへと消えてしまうのだった。

「かずと……　わたし、わたし……」

「ちょ、ちょっと隠れられる場所に！」

抱きついてとめどなく涙を流している彼女を連れて、俺は目立たない場所へといく。
本当なら部屋に戻るのが一番良いのだろうが、現状では無理だろう。

「ゴメンね……　ゴメンね……　かずと……！」

「あーと、明日香」

「ッ！」

俺に抱きついて謝っている彼女を、俺は繊細なものを扱うように抱きしめる。

彼女は一度身を震わせるんだけど、すぐに俺の胸の中で安心したように落ち着きを取り戻す。

「好きだ、お前のことが……」

「へっ、あ！あぅ！」

「俺のほうこそ、ゴメンな、今まで……」

「う、ううん！わ、私のほうこそ！それに私も好きだよ……」

「……　明日香」

「……　ん……」

するり、そう表現できるくらい簡単に重要な言葉が出てきた。

やっといえた言葉、それを聞いた彼女の表情は喜びに満ちて、それを見た俺は自然な動作で彼女の顎を持つと柔らかい唇に自分のを

重ねていた。

それからたっぷりと数秒間は重ねていただろうか、どちらとも無く唇を離す、それから見詰め合っていると、彼女という存在そのものに対する愛おしさが込みあがってくる。

「告白したのが、こんな状況なのはゴメンな」

「確かにね……　ちょっとだけ、贅沢を言ったらもっとロマンチックな状況が良かったかな……」

「う、それはスマン……」

「でも、話してくれる？　どうして、こんな事に参加してたのか、それを」

「ああ……」

まあ、当然の如くだが俺は男子全員が覗きに参加していると言う状況下での告白を謝罪していた。

女の子なら、もっと良い場所で告白されたいと思うのが当たり前だから、ここは俺が謝罪しておくのが筋だろう。

というか、俺、彼女持ちになったんなら、一番良い所に参加できないって事だよなぁ。

なんて考えながら、どうしてこんな騒ぎを起こして、参加してい

たのか。
それの事情も話すのだった。

「……　異端審問会は、異端者を許さない……！」

と言っているバカの存在に気付かなかったのが、痛恨の極みだ。

25話　俺の気持ちとあの娘の気持ち（後書き）

いずれは明日香と翔子が仲良くなったときの話を番外編でやりましょうかね。
どうして翔子が彼女のことをあんなに考えていたのかとか、そういうのを明かしたいですし。

え？　もしも和人がバッドエンドフラグを立てたら？　雄二も巻き込まれて転校させられますよ？
何気に雄二の人生もいろんな意味でピンチだったりしたわけです……

２６話　終戦と……　あまりにも悲惨すぎる結末……（前書き）

今回の話は、最後に少々？　ショッキングなシーンがあります。
苦手な方はご注意を。

２６話　終戦と……　あまりにも悲惨すぎる結末……

バカテスト【近代日本史】
第２６問　次の問いに答えなさい。

『太平洋戦争開戦時においての、日本の連合艦隊司令長官を答えなさい』

姫路　瑞希の答え
【山本　五十六】

坂本　雄二の答え
【山本　五十六】

教師のコメント
正解です。特に言うことはありません、ですが、彼の名前には面白い逸話も残っていますね。彼が生まれたとき父親がちょうど五十六才を迎えたので、五十六（いそろく）、と言う名前になったと言うそうです。

吉井　明久の答え
【山本　５６】

教師のコメント
漢数字で書くようにしましょう。

東城　和人の答え
【古賀　峰一】

教師のコメント
　惜しいですね、それは山本　五十六の次に連合艦隊司令長官に就任した人ですね。彼はマリアナ沖海戦の直前に飛行機事故で、志半ばで亡くなってしまいます。

五反田　弾の答え
【小沢　治三郎】

教師のコメント
　それは最後の連合艦隊司令長官です。

～バカとテストと霊能者～
～第２６話　終戦と……　あまりにも悲惨すぎる結末……～

東城君と別れた僕は一直線の通路をひた走る。
弾に久保君、ムッツリーニに東城君たちが必死の思いで繋いでくれた道なんだ、絶対に無駄になんかするもんか！！
自分の召喚獣と共に走る中で、僕は決意を新たにした。

「待っていたぞ！吉井！」

「鉄人！！」

僕の前に仁王立ちで立ち塞がる人影が現れる。
相変わらずの迫力だよ！！でも、今日は絶対に負けるわけには行かないんだ！！

「鉄人！僕達がたどり着くと良く考えていましたね！！他の人達は楽観視してたのに！！」

「フン！俺は生徒を、特にお前達を過少評価なんぞせんからな！！キサマはバカで阿呆だが、その行動力は並ではないと知っている！！」

「ありがとうございます！それは光栄ですねっと！！」

流石は鉄人だ！僕のことをよく理解してくれているよ。
他の先生や教師部隊もこんな状況であっても、油断や過信と言う感情が見え隠れしていたって言うのに、そう言ったものを全て排除しているというのだから。

鉄人が振りかぶってきた拳を召喚獣に命じて、木刀を使って受け流すようにして避ける。

「だが、その凄まじいまでの行動力は他のことに生かすべきだ！このままでは貴様ら全員が性犯罪者だ！　停学が怖くないのか！！」

「停学が怖くて、こんなことは出来ませんよ！それに！全ての男子が参加しているこの状況なら、僕だけが罰を受けるなんて事はないですし！！」

言葉を続けながらも鉄人の攻撃は止むことがない。
鉄人のいかつい外見からは全く想像ができないほどの、鋭くて凄まじい速度の蹴りが放たれてくる。

それを確認したと同時に僕は屈んで避けて、再び木刀を振りかぶって突撃する。
鉄人は僕の一撃を拳で真正面から受け止めるんだけど、僕の召喚獣の方が吹き飛ばされたぁ！？　やっぱりというか、どういうからだの構造をすれば、こんなことが出来るのさ！？

「それは言い換えれば、他の連中が参加したと言うことを証明できなければ、貴様一人が処分されると言うことだとなぜ気付かん！！」

「それなら、この騒ぎに加担している連中を全てリストアップすることですね！！」

吹き飛ばされたけど壁に上手く着地させて、吹き飛ばされたときの反動さえも利用して鉄人に飛び掛り、二の腕付近に木刀を当てるんだけど、僕の召喚獣は吹き飛ばされこそしなかったけどよろけて地面へと落ちて行く。
その召喚獣へと向けて鉄人は踵落としを掛けてくるけど、僕は召喚獣をバックステップさせて避けると、また鉄人へと向かわせる。

でも、僕の言葉を聞いた鉄人の口元に、獰猛な笑みが浮かびあがる。

「言うじゃないか！ならば、この覗き騒ぎに加担した全ての生徒をリストアップし、全員を処罰するとしよう！！」

「ぐっぁ！」

獰猛な笑みを浮かべた鉄人の拳が、僕の召喚獣に浅くだけどヒットしてしまう。

でも、それだけで僕の召喚獣は吹き飛ばされて壁に叩きつけられて、僕に殴られた時と壁に叩き付けられた時の両方のフィードバックが返ってくる。

「貴様が一人目だ！！」

「くっ……！」

そういって召喚獣へと向けて勢いよく駆け出していく鉄人。やっぱりその戦闘能力は絶大だ、圧倒的といっても良い。

でも！！

「負けられない！負けられないんだぁ！！僕は、ここまで繋いでくれた皆の為にも、この先に待っている理想郷を見るためにも！！」

「もっとマシな理由は無いっ！？」

そう、僕は負けられない！！
ここまで繋いでくれた男子生徒全員の思いを背負っているんだから！！そう、僕らは絶対に女子がいる理想郷を一緒に拝むのだから。
僕の言葉に鉄人が突っ込みを入れてくるけど、そんなものは全く気にならない！

駆けている鉄人の横から赤い髪を持った人影が乱入して、進路を妨害していた。

「そうだよな！負けられないよなぁ！！明久！！」

「雄二！！」

「ぬっ、坂本ぉ……！！」

それは僕の悪友である雄二だった。
霧島さんとの戦いは熾烈を極めたみたいで米神に赤い指の痕があ

る。

でも、こいつが来てくれたんなら、百人力だ！！

「待たせたな明久！」

「遅かったじゃないか雄二！」

「フンッ、翔子は東城に任せてきたからな、証拠も心配はいらんさ！」

それって……　あの霧島さんを？　なんか、東城君に対してシャレにならない位に怒ってた、霧島さんを押し付けてきたってことだよね。

相変わらず外道な奴だ。

でも、東城君には悪いけど、今は助かったよ！

「さてと鉄人、第二ラウンドと行こうか！！」

「吉井、坂本……　良いだろう！！貴様らを処罰の第一号と第二号としてくれる！！」

そして僕達は召喚獣と生身で鉄人と言う強大な敵へとぶつかるのだった。

教師部隊とAクラスを受け持った俺達の状況は男子に有利になり始めている。
二階と三階で起こっていた戦闘が男子の勝利で終結、教師部隊が撤収を指示し始めているからだ。

「くっ！二回の山田君たちも負けたか！？」

「エロ一直線になった男子を甘く見ましたね！！」

「ふん！だが、ここでお前を含めた主力を倒せば済むことだ！！」

俺は戦いながら千冬さんと会話を交わしつつも、周囲の状況を窺っていた。
つい先程一夏を撃破して、無力化した俺は千冬さんとの一騎打ちに縺れ込んでいる。

「やっぱり貴女は天然チートですよ！！」

「貴様にだけは言われたくないわ！！」

『Ｆクラス　五反田　弾　ＶＳ　教育実習生　織斑　千冬
現代国語　２５０点　ＶＳ　１１２点』

千冬さんの召喚獣が太刀を扱うように横凪に振るって来るのを俺は小太刀で受け止めると、蹴りで反撃する。

『Ｆクラス　五反田　弾　ＶＳ　教育実習生　織斑　千冬
現代国語　２５０点　ＶＳ　５３点』

「くっ！」

俺の蹴りで大きく点数を削られて吹き飛ばされた千冬さんの召喚獣は、スパナを手放して床を転がっていく。
起き上がろうとする千冬さんの召喚獣へと向けて、止めをさすべく俺の召喚獣は駆け出していく。

「もらったぁ「させません！！」な、山田先生！？」

「山田先生！」

『『Ｆクラス　五反田　弾　ＶＳ　教育実習生　織斑　千冬　＆ａｍｐ；　教育実習生山田　真耶
現代国語　２５０点　ＶＳ　５３点　＆ａｍｐ；　１７０点』

突然山田先生の召喚獣が現れて、彼女の武器であるＡＫ４７が俺の小太刀を受け止めていたのだ。
咄嗟に俺は召喚獣に命じて、その場を離れさせるのだが、山田先生の召喚獣は流れる動作でＡＫを構えると俺に向けて連射してくる。

「やっぱり射撃の腕はすさまじいですね！！」

「クスッ、どういたしまして！！」

一発の被弾も許してはいないのだが、やはり向こうの世界で射撃の腕で代表に近い位置まで行っただけはある！
全ての射撃が俺への命中と言う概念を捨てて、俺の足止めという目的に絞られているからだ。

おかげで近づけないこと近づけないこと！進もうとすれば足元に頭などを一瞬で銃弾が掠め、迂回し、ジグザグに動いて照準をかく乱しようとすれば、精確な追尾と弾幕によって動きを制限されていく。

反撃の糸口の見えない中で、千冬さんも時折弾幕の援護を受けて突っ込んでくるんだからたまらないよな！

『Ｆクラス　五反田　弾　ＶＳ　教育実習生　織斑　千冬　＆ａｍｐ；　教育実習生山田　真耶
現代国語　１２０点　ＶＳ　５３点　＆ａｍｐ；　１７０点』

「逆転された……！」

さっき千冬さんから受けた袈裟切りの一撃で逆転を許してしまう。
このままじゃあ、また負けてしまう！？

「くそっ！！」

「聞きたいことがある、五反田」

「なんですか？」

逆転を許した状況で、予断を全く許さない状況下、いきなり千冬さんが話しかけてくる。

未だに打ち続けている山田先生から視線を外すことなく、俺は彼女の言葉に答える。

すると千冬さんは、こんな状況下では考えられないことを言って来た。

「どうしてお前は覗きに全力を傾けている？」

「……　二割は覗きたいって理由がありますが、本当の理由もありますがね」

「それは、残りの八割の理由はなんだ？」

「……　言えないっすよ、俺以外の人間のプライバシーもありますからね」

「そうか、やはりな……　私や山田君が風呂に入っていても、覗きに来なかったからもしかしたら……　とは思っていたがな」

「んぇ？」

「なんでもないさ」

それは俺が覗きに全力を傾けていることに対する疑問だった。
まあ、疑問に思うわな、普段の俺であれば間違いなくこんな真似はしないし、皆がやっていても密かに美味しい思いをしようとするだろうし。

それを千冬さんや一夏に山田先生達は知っているから、更に疑問に感じたんだろう。

まあ、明久や雄二たちのプライバシーがあるから言えないんだけどな。
本当の理由ってのは。

でも千冬さんが言っている言葉の途中から、小声にと言うか口元もほとんど動かなくなったから、言葉が判らなかったんだけど何を言っていたんだろうか？
隣にいて聞いていた山田先生は顔を赤くして、両手を頬に当てているし、一夏は不満そうにぷくーっ！と頬を膨らませて見ている。
なんだったんだろ？

まあ、とりあえず。

「ほい」

『Ｆクラス　五反田　弾　ＶＳ　教育実習生　織斑　千冬　＆ａｍｐ；　教育実習生山田　真耶
現代国語　１２０点　ＶＳ　０点　＆ａｍｐ；　０点』

「「なぁ――――――！？！？！？」」

何かを考えていて動きが完全に止まっていた二人の召喚獣に、プスッと止めを刺していた。
この光景を見た二人は絶望と言う感情を貼り付けた表情となり、一夏は微妙なものを見る表情で俺を見ていた。

まあ、とりあえずこの二人が終わったからな、最大の敵と対決している利光はどうなっているんだ。

『Ａクラス　久保　利光　＆ａｍｐ；　Ａ・Ｂクラス男子連合１０名　ＶＳ　学年主任　高橋　洋子
現代国語　１４８点　＆ａｍｐ；Ａ平均　２２０点　Ｂ平均１８０点　ＶＳ　１０１点』

心配要らなさそうだ。
やっぱりＡクラスとＢクラスの物量と利光の実力でもって制圧したようだな。

もうすぐこっちは終わるぞ、和人に明久、雄二、ムッツリーニ…
…　下の制圧を頼むぜ！！

だが、俺はこの時、信じていたはずの一人がこんな状況下で彼女持ちという【勝ち組であり異端者】になってしまったことに、気が付いていなかった。

雄二と協力しての鉄人との激闘が始まって数分、僕達は息も絶え絶えになりながら、鉄人を睨みつけていた。

「ここまでのようだな、吉井、坂本」

「だれが！！」

「ここで終わりになんてさせるもの、かぁ！！」

僕と雄二は立ち上がるんだけど、動きは遅くてとてもじゃないけど戦えるような状況じゃない。

そんな僕らを見た鉄人の表情に余裕が生まれる。

「所詮は下心からくる集中力や忍耐力は、その程度だと言うことだ」

くっ、言いたいことを言ってくれる！！

だけど集中……　っ！！そうか！！

僕は鉄人にいわれた言葉の中から、ある一つの単語から聞いたことで、頭にひらめきが生まれる。

「「そうかぁっ！！」

僕も雄二も同時に体のバネを最大限に使って立ち上がる。

それから自分の顔が不敵な笑みを浮かべるのが分る。

「ほぅ……　お前達、まだやる気なのか、やはり根性だけは一人前と「鉄人」なんだ坂本？」

「アンタは今、重要なことを俺達に教えてくれたぜ」

「ああ、僕達に、こんな重要なことを教えてくれるなんて、流石は先生だよ」

「何を言っている？」

突然様子が変わった僕らに楽しげにではあるけど、疑問も浮かべている鉄人。
だけど、笑っていられるのは、ここまでだぁ！！！

「鉄人、テメエ今自分で俺達に重要なヒントをくれたさ」

「ああ、集中っていう、重要すぎるくらいのヒントをね」

「何を言っている？　貴様ら」

ああ、そうだった。

僕達は何を今まで考えていたんだろうか、雄二が僕に、僕に雄二が合わせて打ち込む場所を変えていたら、鉄人に打ち込まれる場所を読まれて、回避されるの当たり前。
だったらどうすれば良いのか、簡単な話だった。

「今から俺達の攻撃、拳、蹴り……」

「……　木刀の全てを……」

「……」

「「ただの一点！！」」

雄二の言葉に僕は続けて言っていくなか、鉄人は余裕の表れなのか僕達をじっと見つめていた。
最後は僕も雄二の言葉も同時に重なる。

「「アンタの股間に集中させる！！！！」」

「き、貴様らはなんと言う攻撃を思いつくんだ！！？」

「「うおおおおおおおおお！！！！」」

「くっ！！」

鉄人に指をさして宣言した言葉と同時に、雄二と共に僕の召喚獣は駆け出す。
僕たちの行動を見た鉄人は、慌てて自分の股間を守る動きを見せている。

「ハァァァ！！！」

「坂本！キサマ！！」

「僕を忘れてもらったら困りますよ！！？」

「くっ！！」

雄二の正拳突き、回し蹴りに膝蹴り、僕の召喚獣の木刀による突きになぎ払い、肘鉄に蹴り。
これらの全ての攻撃が鉄人の股間を狙って打ち込まれている。

「ここまで執拗に狙って攻撃を仕掛けてくる奴は初めてだ！！」

「悶絶しやがれ！鉄人！」

「そこだぁ！！」

「ぐ、ぬぅ！！」

僕らが執拗に股間を狙っているからか、鉄人はいつの間にか防御に手一杯と言う状況になっていて、さっきまでの余裕が全て消えていた。

攻撃が来ないならば、思う存分に攻撃ができる！！

『明久！』

そう考えたと同時に雄二からのアイコンタクトが来る。

そうだ！本当の狙いは別だ！！

「もらったぁ！！！」

「ぬぅ！？」

「甘いぜ、鉄人！！」

「坂本！？」

僕の召喚獣の攻撃を防御しようとする動作を見せた瞬間、雄二は鉄人の両腕を拘束する。
そして、そんな状況を利用しないと言う理由は無い！！

「だぁらっしゃぁぁぁぁ！！！」

「し、しまっ！ぐぅ！！！？」

下段攻撃に対応する為の腕を雄二に拘束されてしまい、雄二が邪魔になって下段攻撃は出来なくなる。
だけど、それ意外の攻撃ならどうだろうか。

答えは簡単、というかそれしかでない。
そうだ！上に攻撃を仕掛けるんだ！！雄二を踏み台にして後頭部に回った僕の召喚獣は、鉄人の延髄目掛けて木刀を一閃して意識を刈り取っていた。

ズウゥン！という重厚な音を立てて床に倒れ伏す鉄人。
完全に動かなくなったのを確認した僕らの中に喜びと言う感情が満たされる。

「よぉっしゃぁ！！明久ぁ！」

「ああ！！」

満面の笑みを浮かべて僕らはハイタッチをかわし、喜びを分かち合う。

まさか僕らがここまでできるとは思わなかったよ！！本当に鉄人を打倒できるなんて！！

初日の夜からずっと何度も諦めそうになりながら頑張ってきたことが、全て報われたんだ。

諦めないで良かった……！！

「……　無事で良かった」

「よぅ、鉄人の打倒に成功したようだな」

突然聞こえた声に振り向けば、そこにはムッツリーニに弾を含めたFクラスのメンバーに全男子の姿があった。

でも、弾を含めた皆の顔には少なくない疲労の色が見えるから、厳しい戦いを勝ち抜いてきたんだろう。

「ムッツリーニ！」

「弾！それに皆も！！無事だったんだね！？」

『あったりまえだ！！』

『後は理想郷を目指すだけなんだ、当然さ！！』

『それにお前らが二人で鉄人を倒してくれたんだよな！』

『やっぱお前らスゲエよ！！今回のＭＶＰは断然お前らだよな！！』

そういって喜びと言う感情を一身に向けてくれる皆、でも、一人だけ、そう、一人だけ姿の見えない人がいることに気が付いた。

東城君のことだ。

弾とムッツリーニに視線を向けると、彼らが悲しげに視線を逸らしたから、彼は散ってしまったんだろう。

だけど、僕達には散ってしまった彼の分まで理想郷を楽しまなければならない！！

「さあ皆！行くぞ俺達の理想の都に！！」

『おう！！！！！！』

「それにだ、退学の心配は要らない！これだけの人数がいれば特定は不可能だからな！」

女子大浴場へと向かう道すがら、雄二はニヤけた顔でそういっている。

やっぱりコイツも健全な男子だからね、状況が嬉しいんだろう。

え、僕？　もっちろん！嬉しくてたまらないよ！！

そして、僕達は女子風呂に続く扉の前に着いた。

「さあ！心してみようぜ！！これが！俺達の！掴んだ！栄光だぁ！！」

雄二が女子風呂の扉を開けると同時に広がる光景。

それは。

張りのある肌。
しなやかな肢体。
腰まで伸びた白い髪。

と

三つ編みに結わえられ黒く美しい髪。
むっちりとした筋肉質の体。
張りと弾力に充ちた肢体

に

昔の縄文時代の女性のような髪形。
むっちりとしつつも浅黒く健康的な筋肉質の体
触れば多分気持ち良さそうな肢体

の学園長と、見知らぬ男二人がいた。

あ、ああああああ、ああああああ

「ギャアアア

処分通知

文月学園第二学年

全男子生徒

総勢百五十一名

上記の者達全員を一週間の停学処分とする。

文月学園学園長　　藤堂　カヲル

ついムラッと来てやってしまった。

今はそのことを心の底から後悔と反省して、これから先は女性に

対して紳士に生きることを誓います。

とあるＦクラス以外の男子生徒の反省文より抜粋。

「あ、瑞希……」

「美波ちゃん……」

「あの、私一夏ちゃんから聞いちゃったんですけど……」

「うん、私は明日香から聞いたんだけどアキって脅迫されてた上に女子に犯人がいたからあんな行動に出たんだよね……」

「はい……」

「停学がとけたら、アイツに謝ろっか……」

「そう、ですね……」

「でも、さ……」

「……」

「男子全員が登校して来るのかが、分らないわよね……」

「ショックなものを見てしまったのか、皆さんが精神崩壊に近い状況を起こして、救急車が呼ばれましたからね……」

「はい、それは気になりますけど……」

「聞けないわよね」

「はい……」

「あ、後、真犯人と言うかアキたちを脅迫していた女子は捕まった見たいね」

「そうなんですか？」

「ええ、根本が捕まえたらしいわ」

「それは良かったです、今の根本君ならきちんと罰してくれるでしょうし」

「そうね、それも含めて」

「はい、吉井君に謝りましょう！」

なんていう会話が男子のいないＦクラスの教室で行われているのだった。

２６話　終戦と……　あまりにも悲惨すぎる結末……（後書き）

次回、ショッキングなシーンを逃れていた上に勝ち組になった和人に男子の怒りの炎が降り注ぐ！？
かも、しれません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8373o/

～バカとテストと霊能者～

2011年10月11日01時29分発行